

アジア・太平洋戦争期における戦場での読書行為についての研究

早稲田大学教育学研究科 教科教育学専攻

中野 綾子

## 目次

序章 本研究の目的と方法

(1)

第一節 本研究の目的

第二節 先行研究概観と資料状況

第三節 将兵という読者を設定する意義

第四節 学徒兵という読者の受容

第五節 論文構成

## 第一部 戦場での読書行為

(13)

第一章 書物の流通・入手経路にみる戦場での読書行為

はじめに

第一節 戦前外地の出版流通

第二節 日本出版配給株式会社の外進出

第三節 通常販売以外による書物の多様な入手方法

おわりに

第二章 戦時下の慰問出版文化―定着とその役割―

(38)

はじめに

第一節 慰問用書物の組織的発送による定着

第二節 文学者による「前線文庫」活動

第三節 慰問用書物の商品価値

第四節 『陣中倶楽部』と『兵隊』

第五節 戦場における読者層

おわりに

第三章 〈緩やかな動員〉のためのメディア―陸軍発行雑誌『兵隊』をめぐる― (64)  
はじめに

第一節 『兵隊』の読者層

第三節 『兵隊』における「インテリ兵」イメージ

第四節 「兵隊」として書くこと

第五節 兵隊作家モデルとしての火野葦平

第六節 兵隊から作家へ―執筆者の変容―  
おわりに

## 第二部 戦時下、国内の出版統制

第四章 〈緩やかな統制〉としての推薦図書制度―文部省と日本出版文化協会―  
はじめに (77)

第一節 文部省推薦図書制度の成立と拡大

第二節 推薦図書制度への批判

第三節 日本出版文化協会による推薦図書制度

第四節 〈緩やかな統制〉としての「良書」推薦

おわりに

第五章 戦時下学生の読書行為―戦場と読書が結びつくとき―  
はじめに (95)

はじめに

第一節 推薦図書制度という出版統制

第二節 学生読書へのまなざし

第三節 戦場と読書が結びつくとき

第四節 武器としての読書行為

おわりに

第六章 戦時下学生の読書法―木村久夫を例として―  
はじめに (114)

はじめに

第一節 旧制高校生の読書事例として

第二節 推薦図書制度とのかかわり

第三節 出版統制はどう作用したか

第四節 文学表現とのつながり

第五節 大阪陸軍病院への書物持ち込み

おわりに

付・木村久夫文庫蔵書目録 (129)

## 第三部 学徒兵という読者の変容

第七章 「遺稿集文化」を描く―太宰治「散華」論― (140)

はじめに

第一節 「散華」における書く青年

第二節 『新若人』における読み／書きの推奨

第三節 結核から戦場へ

第四節 遺稿を編むことへの違和

おわりに

第八章 堀辰雄ブームの検証―学徒兵の読書行為と愛読者批判の構造―

(156)

はじめに

第一節 堀辰雄ブーム下の出版

第二節 特権的読者としての学徒兵

第三節 堀辰雄愛読者に対する批判力学

おわりに

第九章 学徒兵の読書行為を描く―阿川弘之『雲の墓標』論―

(170)

はじめに

第一節 学徒兵遺稿集の読書統計―敗戦後から五〇年代まで―

第二節 遺稿集に記された読書―『きけわだみつのこえ』と『雲ながるる果てに』―

第三節 吉野次郎と『雲ながるる果てに』の読書の共通点

第四節 吉野次郎の荒廃した読書

第五節 藤倉晶の「反戦的」な読書

おわりに

終章 本研究の成果と課題

(189)

初出一覧

謝辞

## 序章 本研究の目的と方法

### 第一節 本研究の目的

本研究の課題は、アジア・太平洋戦争を中心として、将兵という読者の形成過程を実証的に分析することで、戦場での読書行為のありようを検討し、そのうえで将兵という読者のおよぼした社会的・文化的な影響について考察することである。こうした考察から、戦中戦後における読書の歴史的な変容をとらえていくこととしたい。

戦場では、読書が厳しく禁じられていたというイメージがある。それは、『きけわだつみのこえ』に収録されている手記に顕著にみられるような、軍隊の中で、隠れながら読書をする学徒兵の姿が影響を与えていると言える。本研究ではまず、現状、流布している戦場での読書に対するこうしたイメージとは異なる戦場での読書のありようを、慰問雑誌や出版流通という実証的な側面から明らかにしていくことを目指す。もちろん、戦場のどこでも読書ができたわけではなく、本研究の主眼は、戦場を〈読書空間〉としてとらえることよって、ただ厳密に読書が禁止されていたわけではない、戦場での読書行為をとりまく幅轉した状況を描き出していくところにある。

また、将兵という読者を設定することは、戦地で何が読まれ、それがどのような文学的営為につながっていくのかという、戦争体験の描き方や記録の仕方の問題にも関わる問題である。そのため実証的に読書の状況を明らかにすることで、文学に描かれた兵士たちの読書や遺稿集等によって作り出されてきた戦場での読書についての言説と、実際の読書行為との違いを検証し、その違いの意味を検討することが可能となる。こうした検討を積み重ねることよって、戦後に、なぜ戦場という〈読書空間〉のイメージが固定化されてきたのか、その歴史的な変容の力学についても同時に明らかにしていく。

研究のねらいとしては、第一に、読書・読者研究において、将兵という新たな読者を設定し、戦中／戦後を分断するのではなく、連続したものとして分析する視点を提示すること。第二に、将兵という読者を足がかりとすることで、歴史的・空間的に変容していく読書行為のありかたを視座とした、文学研究の方法を模索するところにある。

具体的に戦地での読書についての実証的な検証を行いつつ、その戦地での読者が、どのように文学において描かれてきたのか、そしてその文学がまたいかに受容されているのか、読者だけではなく、その読者イメージの受容なども含めた分析を行っていくことよって、読者の持つ歴史性を明らかにしていくことにしたい。それは、普遍的なテキストと読者の関係を前提としてきた文学研究の方法を問い直し、読者を立体化して研究していく方法へと文学研究をひらいていくことになるだろう。

そして、文学研究分野だけではなく、歴史学、教育学、図書館学、出版史の分野とも接続する課題ともなるはずである。こうして様々な読者に注目し、読書の歴史を問うということは、その読書行為のありかたを明らかにするだけではなく、文学研究という方法自体を研究の俎上にのせ、文学研究という読書行為の歴史性を明らかにすることにもなる。文学研究とは、それもまた読書行為のひとつのあり方である。文学史を記述する研究者として、自らがどのような読書行為をおこなっているのかを意識しつつ、これまでの文学研究の手法との接続や他領域における研究との関係を考えていくことも、読書の歴史について問ううえで重要な視点である。

## 第二節 先行研究概観と資料状況

本研究と関わる先行研究には、読者・読書研究、および歴史社会学、出版史等に関わるものがある。だが、戦場での読書行為や将兵に向けてつくられた書物を中心の課題として論じているものは多いとは言えない。それは、ひとえに資料の収集が困難な点にあると考えられる。そのために、まずは資料を整理しつつ、研究を進めていくことが必要となる。

将兵という読者の様子を探るために扱う資料として、将兵の手記や日記、個人蔵書の書き込みや聞きとり調査など、フィールドワークによって得た一次史料を欠かすことはできない。本研究でも、第六章において木村久夫という学徒兵の蔵書調査を行っている。

また、将兵が戦場で読んだ雑誌として、慰問雑誌に注目し、当時の出版関係の資料とともに取り上げている。内地から将兵宛に慰問用として発送された雑誌や、陸軍・海軍によって兵士向けにつくられた慰問雑誌など、戦場で読まれた可能性のある雑誌はいくつか存在するが、これまで慰問雑誌が研究の俎上にのせられることは少なかった。それは、国会図書館等での所蔵が少なく、資料にアクセスすることが困難だったことが影響している。今回は出版社の所蔵資料を閲覧する機会にも恵まれ、慰問雑誌の研究に着手することが可能となった。

本研究で言及した主な慰問雑誌の所蔵状況について説明しておきたい。まず、陸軍の要請によって作成された大日本雄弁会講談社による『陣中倶楽部』は、全六五冊が合本形式で講談社に所蔵されている。海軍の慰問雑誌『戦線文庫』は、発行元の興亜日本社を引き継いだ日本出版社の矢崎泰夫氏によって、横浜市立大学学術情報センターに寄贈されている。これは事前に申請を行うことよって閲覧が可能となっている。さらに『戦線文庫』は日本出版社より、三号と五三号が復刻されている<sup>2)</sup>。また両誌とも、日本近代文学館やいくつかの公共施設にその一部が保存されており、閲覧が可能である。

しかしながら『陣中倶楽部』は全号を確認できるものの、残念ながら『戦線文庫』はす

べてが揃っているわけではない。これら陸軍や海軍による慰問雑誌は、出版社の尽力によって保管されていたが、当時出版されていた臨時増刊の慰問雑誌や慰問特集号などは公共図書館等への所蔵も少ない。そのため慰問雑誌の収集はおもに古書店等から入手していくことが必要となる。本研究でも慰問雑誌・慰問書籍は収集の途上であり、現時点ではその一端を明らかにしたにすぎない。いわば本研究は資料的制限から言及されることの少なかつた、戦時下の出版文化・文学状況の側面を明らかにするために、慰問用書物（慰問雑誌・慰問書籍）が有効であることを明らかにし、その資料収集や保存を行っていくことの重要性を指摘するものでもある。

こうした慰問用書物の研究は、端緒についたばかりでまとまった研究としては、二〇一六年に『戦線文庫』についての押田信子『兵士のアイドル』があるのみである。押田は『戦線文庫』のグラビアに掲げられた女性表象を「アイドル」と定義し、その変遷を追うことで、『戦線文庫』の内容を明らかにしている。

また慰問用書物の研究についてはアメリカでの研究状況が参考となる。南北戦争中にはダイムノヴェルが広く読まれたことが知られているが、第一次世界大戦ではより組織的に兵士へ書物供給が行われ、第二次世界大戦にいたると兵士用のペーパーバックとして、小型の「兵隊文庫」(Armed Services Editions)が刊行されるようになる。二〇一四年には、この「兵隊文庫」を丹念に収集したモリー・グプティル・マニングによって、『戦地の図書館』が発表され、戦場へ書物を送る図書館員や軍、出版業界の動きとともに、書物を読む兵士たちの姿が明らかにされ、戦地における読書行為の社会的な影響が論じられている。

### 第三節 将兵と読者を設定する意義

本節では、将兵（学徒兵）という読者を設定する意義について検討していく。また本研究では、戦場での読書を行う主体として、将校と兵士を設定している。将校と兵士では、その読書内容や読書環境も異なってくると思われるが、現時点では明らかな違いが認められる時以外には、その差に分析を加えていない。基本的には兵士に関する分析が本研究の主な部分となっているが、両者の違いを分析するためには、現時点ではまだ資料が少なく、将校と兵士の読書の区別を行うことが困難な状況にあるからである。たとえば、将校のなかでも、前線で指揮に当たる下級将校の読書環境は、兵士に近い可能性があるが、資料によって明らかにすることはできていない。そこで、読書主体としては、将兵という用語を用い、分かる範囲において個別具体的に言及していくこととする。

中野重治が岩波文庫を戦地へ持っていったことを語る次の言葉は、本研究において非常に示唆的なものである。

私は戦争にとられたとき、『日本渡航記』と『ガリア戦記』とを袋に入れて持って行った。そして帰るときにそれをある伍長に贈った。伍長は私に愛用の矢立をくれた。私などはそれですんだ。中国の東北、またその全土、マライからビルマ、南西太平洋の島々、それから海の底までもたずさえられて行った無数の小型本とその持ち主のことをもう一度思い出してみてもいい。日本全国で、友だちや愛人やが、差入れのためにあれこれと、郵送料のことも勘定に入れて小型本を包み包みしていた姿も決して忘れられぬ。そしてそこで、つまりそういう場面で、いろいろの文庫本がそのテキスト批判について比較されるといふようなところまで行けば全くいい。私のせまい経験からいふと、このテキスト批判というところが岩波文庫の信用の一つになっていると思う。

戦地へ書物を持参し、そこで他の将兵へと書物が受け渡される。そして、銃後にいる様々な人々によって多くの書物が、戦地の将兵へと送られていく姿が、中野によって回想されている。そして中野は、内地の人々が将兵という読者へ書物を送る場面、そして戦地で将兵が書物を読むという場面において、その書物を戦地で読むべきかどうかという「テキスト批判」が行われ、それが現在の「岩波文庫の信用」につながっていると述べる。中野は岩波文庫だけに言及しているが、こうした営みを岩波文庫以外の様々な書物に敷衍して考えることもできるだろう。

中野の回想からも分かるように、戦地で書物を読むという行為には、戦地へ書物を送る人々とそこで読む読者の存在が不可欠である。戦地という遠く離れた未知の場所で戦う友人や家族へと書物を送る行為は、そこで読む書物として相応しいものかと問う意識を生む。つまり、戦場での読書行為は、将兵だけの行為ではなく、銃後の人々にも想像され、共有されたものでもある。

そして戦後にいたると、岩波書店の前に『西田幾多郎全集』第一巻を求めて寝ながら一夜を過ごすような、焼跡のなかから書物を求めるために書店へ列をなす人々の姿がみられるようになる。こうした戦後の読書ブームについて、藤井淑禎は、「文化に対する欲求」だけではなく、「もっと切実なものであり、戦後日本が、あるいは日本人が、生き残れるかどうか、ちゃんととした方向に生まれ変わることができるかどうか、といった切実な願い。」があったと述べている。敗戦後、焼跡のなかで書物を求め並ぶ大衆の姿は、戦場で生死の境目にあつて書物を読む将兵の姿とも重なり合う。将兵という読者はこのように戦中から戦後の読書行為の社会的・文化的な変遷を分析する射程を持つものであると本研究ではとらえている。



また将兵は、外地と内地を往来する読者でもある。そのため、双方に流通する書物、植民地へと拡大する出版環境や文壇状況の変化に目を向ける必要がある。近年、読者・読書研究は海外へと視野を広げつつある。岡村敬二による満洲での読書の一連の研究をはじめ、日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ 移民文学・出版文化・収容所』<sup>10</sup>では移民による読書が取り上げられている。さらに、占領期日米間の書物流通や受容について論じた『越境する書物 変容する読書環境のなかで』<sup>11</sup>で和田敦彦は、書物の移動や場所を問うことで読書や読みの歴史を問うリテラシー史を提唱しており、国内外の読書を考える研究は、読書・読者研究の重要なトピックとなっている。

さらに、戦場での将兵の読書という営みに注目する手法は、歴史社会学の分野において、福間良明、野上元、蘭信三、石原俊『戦争社会学の構想 制度・体験・メディア』<sup>12</sup>(二〇一三年)が「戦争と社会との関わりを考察する研究領域」として提唱している。「戦争社会学」とも関わる問題である。執筆者のひとりである野上元は、『戦争体験の社会学 「兵士」という文体』<sup>13</sup>のなかで、戦場を「メディア空間」としてとらえる視点を提示し、兵士が書くということが、復員の問題とどのように関わってきたのかを明らかにしている。また、一ノ瀬俊也『銃後の社会史』<sup>14</sup>における銃後から戦場へ送られた慰問文の研究や復刻、軍事郵便というメディアの社会的な機能を検討した研究など<sup>15</sup>、書物以外による戦場におけるメディア研究は進行している。

先述の野上は戦場を「メディア空間」としてとらえているが、本研究では戦場を永嶺重敏の提唱する〈読書空間〉<sup>16</sup>としてとらえていきたい。永嶺は、メディアの社会的な受容を明らかにするために、「第一に雑誌等の活字メディアの発達」、「普及装置としての多様な流通機構」、「読者の側のメディア受容能力」の三点の分析が有効であるとし、その三つの分析から構成されるメディアの社会的受容の立体空間を〈読者空間〉と定義している<sup>17</sup>。ただ永嶺の提唱だけでは、その読者の受容能力によってどのようにメディアが読者に理解されていたのかについての分析が不足している。

和田敦彦は読者についての研究を、書物が移動して読者に「たどりつくプロセス」と書物を読者が「理解するプロセス」とに分け、二つのプロセスを細分化して検討することが重要であると説いている<sup>18</sup>。そこで本研究では、和田の提唱する読者の歴史を問うためのプロセスを永嶺の三点の分析に導入し、その分析から立ち上がる空間を、〈読書空間〉としてとらえていく。

ただし本研究段階では、現時点における資料的制約から、学徒兵を中心とした知的エリートによる戦場での読書行為が分析の中心となっており、その他の多様な将兵の読書行為についてはその可能性を指摘するにとどまっている。永嶺重敏が「学生読者は近代日本の

読書史において最も重要で、また他の階層に対する影響力の強い読者層である」と指摘するように、学生でもあり将兵でもある学徒兵という存在を通して戦場での読書行為を考へることは、今後戦場と読書の関係性を問うていくうえで重要な視座を与えてくれるだろう。

#### 第四節 学徒兵という読者の受容

つぎに本節では、学徒兵という読者を設定するうえでの問いについて述べていく。また学徒兵は、狭義には学籍のある兵士のみをさすが、本研究では大学や高専の卒業生の若い青年層も含むものとする。

読書は、内に向かう行為であると同時に、どのような本を読んでいるのかということが社会的なメッセージとなる行為でもある。そうした意味で学徒兵による読書行為ほど、読書がパフォーマンスとして受容されてきた例はないだろう。

学徒兵の読書行為は、典型化・単純化されて理解される傾向にある。佐藤卓己も、「今日の私達はあたかも軍隊内で読書が禁止されていたかのごとき一面的なイメージを抱いている<sup>220</sup>」と述べるように、禁止された空間で行われた学徒兵の読書行為は反戦的態度として理解されてきた。ここで問題としていく典型的な学徒兵の読書イメージは、『きけわだつみのこえ』の次のような言説によって大衆に流通していったと言える。ここでは「学生兵にとつて辛かったことの一つは、軍隊内で自由に読書ができないことであり、陸軍では書物をいっさい許されぬ場合が多く、海軍でもある種の本（武士道を説いた『葉隠』のみ携行がゆるされるといふ状況）のなかで、『林尹夫（『わがいのち月明に燃ゆ』）のように国禁の書・レーニン『国家と革命』（ドイツ語版）を敗戦二ヶ月前の軍隊内で「一枚ずつ千切って便所のなかで読み、細かく切り刻んで捨てるかばあいによっては食べてしま」うまでして、自らの思想形成の努力を死の寸前まで続けた学生も存在した<sup>221</sup>」と、戦場での学徒兵の読書行為が語られている。

戦後に刊行された学徒兵の手記にも同様に、「新古今の世界に傾倒して、死ぬまで学問への情熱を持ち続け」「知性を求めて、異常な時代に抗しながらもついに死<sup>222</sup>」んでしまったというセンセーショナルな帯が付けられる。

このように学徒兵の読書行為は、読書の禁止された戦場でも学業への志を忘れなかったという切実な行為であり、それが反戦的態度として受容されてきた。とくに『きけわだつみのこえ』では、読書行為は戦争に対する抵抗を表す神聖な行為として解されており、学徒兵は「戦時下の良心」であるとみなされた<sup>223</sup>。

こうした戦後メディアにおける学徒兵表象の問題については、既に多くのすぐれた研究

がなされているが、これら諸研究において学徒兵による読書行為のイメージはあまり注目されていない<sup>33)</sup>。だが、学徒兵という表象を形作る一要素に学問があり、その学問を成立させるものが読書行為であることから、学徒兵表象を考えるうえで、読書の問題を考えていくことは有益なことだろう。

こうした先行研究のなかで、学徒兵の読書に言及した研究としては、大貫美恵子『ねじ曲げられた桜 美意識と軍国主義<sup>34)</sup>』がある。付録として作成された「特攻隊員四人の読書リスト」は林尹夫、佐々木八郎、中尾武徳、和田稔という学徒兵の個人遺稿集に収録された書物をリスト化したものである。大貫は、特攻隊員の手記の分析を行うなかで、学徒兵の読書内容を思想に影響を与えたものとして重要視し、「迫り来る死に何らかの意味を見出すための手段として<sup>35)</sup>」読書行為をとらえている。そのほか、岡田裕之『日本戦没学生思想<sup>36)</sup>』も、学徒兵の思想分析を行う際に、学徒兵の読書は参照されている。

大貫や岡田の研究は、学徒兵の読書内容を知るうえでは有効である。だが、大貫の著作は特攻隊員における桜の表象についての研究であり、読書行為自体は研究の枠組みからはずれており、資料の提示にとどまっているなど、学徒兵の読書の研究は、その思想を分析するための手立てであり、学徒兵という読者を分析するという本研究の枠組みからは距離がある。

そこで本研究では、第一部、第二部において学徒兵という読者が形成されていく過程を追っていき、学徒兵の読書自体が受容されていく過程を第三部で分析していくことになる。

## 第五節 論文構成

本研究は、次の三部構成をとっている。書物が戦場の読者にいたるまでのプロセスとその書物を将兵が読むプロセス、そしてそこで生まれた読者がひとまとまりの読者のイメージとして広がっていくプロセスという三つの分析を読者研究としてとらえていく。

まず第一部、第二部では、戦場が〈読書空間〉としてどのように成立し、どのような書物が読まれていたのか、そして戦場という〈読書空間〉がいかなる構造を持っていたのかについて考察を行っていく。

第一部はとくに戦場での実際の読書行為に注目した部分となる。第一章では、先の永嶺の提唱する〈読書空間〉分析のための一要素である「普及装置としての多様な流通機構」について、第二章では、「活字メディアの発達」について、第三章では、書物を読者が「理解するプロセス」について考察を行う。戦場という〈読書空間〉を明らかにするために、戦場における書物流通や兵士に向けて作られた慰問用の書物の発達、そして慰問用書物が

兵士にどのようなように受容されていたのかについて考えていく。

第一章「書物の流通・入手経路にみる戦場での読書行為」では、出版業者による戦場への書物（書籍・雑誌）の流通網の発達と戦場での将兵の書物の入手方法について明らかにする。東京堂や大阪屋号書店、一九四〇年以降の日本出版配給株式会社による外地への書物流通状況から、どのようにして戦地に書物が運ばれ、流通範囲が拡大していったのかを確認していく。ただ、戦場に流通する書物は、取次―小売店ルートを伴わない場合が大半である。そのため、将兵の日記や新聞雑誌記事等から、一―通りの戦場での書物の入手経路を明らかにしていき、戦場での読書行為を立体的に考えていくための枠組みを提示していく。

第二章「戦時下の慰問出版文化―定着とその役割―」では、どのようにして書物が慰問品として戦地に送られていくようになったのか、またどのような慰問雑誌が制作されていたのか、具体的に雑誌を挙げながら明らかにしていく。陸軍・海軍や国内の各報国団体等によって兵士用に制作された非売品の慰問雑誌のほかに、内地では通常の刊行形態でありながら、「皇軍慰問特集号」や「慰問号」として、兵士と内地の読者双方を対象とした慰問用の雑誌が刊行されていた。多種多様な慰問雑誌の刊行形態や内容を概観することで、戦時下の慰問雑誌文化が内地で果たした役割を明らかにしていく。

また、なぜこうした慰問雑誌文化が生じたのかについて、陸軍によって制作された慰問雑誌に注目して論じていく。陸軍恤兵部の要請により大日本雄弁会講談社で編集された『陣中倶楽部』と、火野葦平を初代編集長とし陸軍報道部員によって広東で編集・印刷された『兵隊』という二つの雑誌を取り上げる。この二誌は、一九三九年五月一日に揃って刊行されたが、内容には大きな差が認められる。二誌の刊行経緯や誌面構成を分析することで、二誌の読者層や戦場における読書行為の果たした役割について明らかにする。

第三章「緩やかな動員」のためのメディア―陸軍発行雑誌『兵隊』をめぐって―では、『兵隊』における兵士による投稿の様子を分析する。『兵隊』は、兵士のための投稿雑誌であり、戦場での読書行為だけでなく、執筆行為をも推奨する特異な雑誌である。『兵隊』に掲載された投稿作品を分析することで、兵士が自由に読み、そして書く場所を提供しながらも、緩やかに戦争に動員することとなった『兵隊』のメディアとしての特徴を明らかにしていく。

第二部「戦時下、国内の出版文化と読書」では、第一部にて明らかにしてきた戦場での読書行為が、どのようにして可能となったのか、戦時下の読者の受容能力や書物の出版状況を検討する。具体的には、国内における出版統制による出版流通の変化と推薦図書制度

による読書統制から、戦場と読書がいかに結びついていったのか考えていく。戦時下の言論統制は、執筆者や出版社に対する検閲が注目されてきたが、そうした統制だけではなく、出版流通や読書行為に対する制約もまた、一種の統制として機能していく。そうした統制の仕組みが、戦場での読書行為と結びついていくことを明らかにしていきたい。

第四章「〈緩やかな統制〉としての推薦図書制度―文部省と日本出版文化協会―」では、文部省と日本出版文化協会によって行われた推薦図書制度を考察することで、戦時下の出版統制と読書統制が「良書」推薦という〈緩やかな統制〉としての側面を持っていたことを明らかにする。

第五章「戦時下学生の読書行為―戦場と読書が結びつくとき―」では、前章での日本出版文化協会による〈緩やかな統制〉としての推薦図書制度が、戦時下の学生の読書に与えた影響について検証を行っていく。そして、出版業界紙や大学新聞から、一九四三年以降の学徒出陣期の、戦場での学生（学徒兵）の読書に関する記事を考察することで、出版統制のもと戦場と読書が接続していく様子を明らかにしていく。

第六章「戦時下学生の読書法―木村久夫を例として―」では、戦時下の学生の読書のケーススタディとして、B級戦犯としてチャンギー刑務所にて処刑された木村久夫の蔵書を扱っていく。木村久夫の「遺書」はこれまで『きけわだつみのこえ』に掲載されたものとされてきたが、二〇一四年四月二十九日の『東京新聞』によって、もう一つの「遺書」の存在が公表されたことで、これまでの「遺書」が、二つの「遺書」を組み合わせて作成されていたことが明らかになっている。この二つの「遺書」に従い、木村が旧制高校・京都帝国大学時代に購入した四六四冊の蔵書が、現在高知大学へと寄贈されている。蔵書に遺された購入日や購入場所、読後感想から、出版統制下の学生生活から入営直後の陸軍病院での読書の様子を、立体的に再現し、ある学生が戦地へ行くまでの読書の変遷をとらえることを試みる。

第三部「学徒兵という読者の変容」では、第一部や第二部で論じてきたことを受け、「学徒兵という読者」が社会的・文化的にどのように受容されてきたのかを考え、その影響関係について検討する。そのために小説テキストや戦後の読書文化に対し、戦場で読むということや書くということが、どのような影響を与えていたのかについて考察を行う。そのなかで、第一部や第二部において明らかにしてきた戦場の〈読書空間〉における学徒兵の読書行為のイメージが、反戦的態度として現在まで固定化してとらえられてきたことの理由を歴史的に明らかにしていく。

第七章「遺稿集文化」を描く―太宰治『散華』論―」では、学生向けの報国雑誌『新若

人』に掲載された、アッツ島での学徒兵の特攻とその死を描いた太宰治『散華』をとりあげる。戦時下における読み／書く青年の表象に注目して分析することによって、『散華』が夭折した青年の作品を遺稿集として刊行する文化とどのように関わっているのかを明らかにする。また、こうした『散華』の分析が、戦後の学徒兵遺稿集にまつわる改竄などの問題とも関わっていることを考えていく。

第八章「堀辰雄ブームの検証―学徒兵の読書行為と愛読者批判の力学―」では、『きけわだつみのこえ』の刊行とパラレルに起こっていた戦後の堀辰雄ブームについて、学徒兵の読書との関係から考察を行う。学徒兵によく読まれたとされる堀辰雄の作品は、実際にはどのように読まれていたのか、兵士の手記や日記に遺された堀辰雄への言及を分析することで明らかにする。さらに、その学徒兵の読解が、戦後の堀辰雄ブーム下に、第一次戦後派を中心とした堀辰雄周辺の作家たちいかに受容されていたのかについて明らかにしていくことで、戦後の読書ブームにおける堀辰雄評価の問題を考察する。

第九章「学徒兵の読書を描く―阿川弘之『雲の墓標』論―」では阿川弘之『雲の墓標』に描かれた学徒兵の読書行為について考察を行っていく。一九五六年に発表された『雲の墓標』は、『きけわだつみのこえ』によって反戦の象徴として捉えられている学徒兵イメージへの反発として執筆が行われた作品である。そして、懊悩しつつも日本主義的な傾向へと接近していく学徒兵の姿を描いた点が評価されてきた。本章では『雲の墓標』と同様の視点から編集が行われた遺稿集『雲ながるる果てに』（一九五二年）についても取り上げ、『雲の墓標』に描かれた読書行為を、『きけわだつみのこえ』や『雲ながるる果てに』から読み取れる読書行為と比較し、どのような関係のもとに作品内の読書行為が描かれているのか分析していくことで、その批評性を明らかにしていく。

終章「本研究の成果と課題」では、これまでの議論を振り返りながら、戦場の（読書空間）において学徒兵という読者を考察するうえでみつけた課題と、さらに将兵という読者を今後研究していくための課題について述べていく。

ただし今回使用した日記や手記は公開されたものに限られている。現在、未公開の戦時下の日記調査として、聞き取り調査や「女性の日記から学ぶ会」への参加を継続中である。

<sup>2</sup> 『幻の海軍慰問雑誌 戦線文庫』（日本出版社、二〇〇五年七月）

<sup>3</sup> 押田信子『兵士のアイドル 幻の慰問雑誌に見るもうひとつの戦争』（旬報社、二〇一六年六月）

<sup>4</sup> 山口ヨシ子『ダイヤモンドノヴェルのアメリカ 大衆小説の文化史』（彩流社、二〇一三年一月）

<sup>5</sup> Molly Guptill Manning, *When Books Went to War: The Stories That Helped Us Win World War II*, Houghton Mifflin Harcourt, 2014 モリー・グプティル・マニング・松尾恭子訳『戦地の図書館―海を越えた一億四千万冊』（東京創元社、二〇一六年五月）として翻訳書も刊行されている。

<sup>6</sup> 中野重治「岩波文庫と私』『本とつきあう法』（筑摩書房、一九七五年二月）

<sup>7</sup> 佐藤卓己『物語岩波書店百年史2 「教育」の時代』（岩波書店、二〇一三年一〇月）二四三頁。

<sup>8</sup> 藤井淑禎『名作がくれた勇氣 戦後読書ブームと日本人』（平凡社、二〇一二年八月）一一頁。

<sup>9</sup> 岡村敬二『満洲出版史』（吉川弘文館、二〇一二年一二月）、『遺された蔵書』（阿吽社、一九九四年一二月）など。

<sup>10</sup> 日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ 移民文学・出版文化・収容所』（新曜社、二〇一四年二月）

<sup>11</sup> 和田敦彦『越境する書物 変容する読書環境のなかで』（新曜社、二〇一一年八月）

<sup>12</sup> 福岡良明、野上元、蘭信三、石原俊『戦争社会学の構想 制度・体験・メディア』（勉誠出版、二〇一三年七月）

<sup>13</sup> 野上元『戦争体験の社会学―「兵士」という文体』（弘文堂、二〇〇六年二月）

<sup>14</sup> 一ノ瀬俊也『銃後の社会史』（吉川弘文館、二〇〇五年一二月）

<sup>15</sup> 新井勝紘「パーソナル・メディアとしての軍事郵便」『歴史評論 六八二』（校倉書房、二〇〇七年二月）、後藤康行「戦時下における軍事郵便の社会的機能メディアおよびイメージの視点からの考察」『郵政資料館研究紀要 二』（日本郵政郵政資料館、二〇一〇年）

<sup>16</sup> 永嶺重敏「まえがき」『モダン都市の読書空間』（日本エディタースクール出版部、二〇〇一年三月）

<sup>17</sup> 和田敦彦『読書の歴史を問う 書物と読者の近代』（笠間書院、二〇一四年七月）一四〇―二〇頁。

<sup>18</sup> 永嶺重敏『東大生はどんな本を読んできたか』（平凡社、二〇〇七年一〇月）一一頁。

<sup>19</sup> 佐藤卓己『物語岩波書店百年史2 「教育」の時代』前掲注七、一七四頁。

<sup>20</sup> 「注釈」『新版きけわだつみのこえ』（日本戦没学生記念会編、岩波書店、一九九五年一二月）

<sup>21</sup> 和泉あき編『戦争・文学・愛』（三省堂、一九六八年一月）

<sup>22</sup> ただし、こうした学徒兵の読書に対する理解のきっかけとなった『きけわだつみのこえ』は、日本主義的な部分を削除するという編集が行われており、この改変問題は現在でも継

続中である。こうした改変問題についての見解としては、佐藤卓己による議論（前掲注七、一七六～一八一頁）が参考となる。

<sup>23</sup>保阪正康『「きけわだみつのこえ」の戦後史』（文藝春秋、一九九九年一月）、福間良明『「戦争体験」の戦後史 世代・教養・イデオロギー』（中央公論新社、二〇〇九年三月）、成田龍一『「戦争経験」の戦後史 語られた体験／証言／記憶』（岩波書店、二〇一〇年二月）、吉田裕『兵士たちの戦後史』（岩波書店、二〇一一年七月）など、学徒兵が戦後メディアによってどのように表象、構築されてきたのかという問題が盛んに議論されている。

<sup>24</sup>大貫美恵子『ねじ曲げられた桜 美意識と軍国主義』（岩波書店、二〇〇三年五月）大貫はほかに『学徒兵の精神誌』（岩波書店、二〇〇六年二月）でも、学徒兵の読書について言及している。

<sup>25</sup>大貫美恵子『学徒兵の精神誌』前掲注二三、二六頁。

<sup>26</sup>岡田裕之『日本戦没学生思想へわだつみのこえ』を聴く』（法政大学出版局、二〇〇九年七月）



## 第一部 戦場での読書行為

### 第一章 書物の流通・入手経路にみる戦場での読書行為

はじめに

第一部では、戦場という〈読書空間〉を明らかにするために、戦地での書物流通や兵士に向けて作られた慰問用の書物の発達、そしてその慰問用書物の受容について考察を行っていく。

本章では、戦場での読書が行われるために必要不可欠な要素となる戦場への書物（書籍・雑誌）の流通経路と個人による書物の入手方法を明らかにしていく。当たり前のことだが、読む場所や入手方法の違いは読書行為に強い影響を与えている。その読書行為の種類は多岐にわたり、一元化することは到底できない。まずは限られた場所や入手方法を場合分けして考えていき、それを積み重ねていくことが必要だろう。

そこで第一節では、戦前外地へ進出した書店や取次について、第二節では、一九四〇年以降の日本出版配給株式会社による外地への出版流通の状況を明らかにしていく。書店や取次による流通網を確認することによって、どのようにして戦地に書物が運ばれ、いかにして流通範囲が拡大していったのかを、まずは押さえておきたい。

戦局が進行するにつれて、書物の流通範囲も同時に拡大していく。後述するが南方にいたっては、実質的な運営は厳しい状況でありながらも、宣伝出版物や軍用図書を中心に書物流通が継続されていた。こうした出版流通の拡大は、いわば日本帝国の国土拡大の指標であった。

ただ、こうした取次を中心とした出版流通を考えていくだけでは、戦地に流通する多様な書物の流通状況を見逃してしまうおそれがある。なぜなら、戦場に流通する書物は、取次の流通ルートを伴わない場合が大半であったからだ。そのため、第三節では兵士の日記や手記、新聞雑誌記事等から、できる限り用例を調査し、一一通りの戦場における書物の入手経路を明らかにしていく。

将兵が戦場で書物を手に入れるためには、まず取次を介した新刊書店や駐屯地や軍艦内における兵士の日用品の販売所である酒保などで購入するという通常の入手ルートがある。だが実際には、古書店や軍事郵便による郵送、占領地において接収された図書館など様々な書物の入手方法が存在していた。そうした多様な入手ルートには、通常では入手できないような書物を個人的に求める場合だけではなく、不特定多数から無作為に書物が発送されていく場合もあった。とくに慰問品として書物が戦地へ送られていくという流通形態は、

戦時下に特有なものであり、戦場で書物を得るための重要な方法となっていく。

こうした様々な戦場での書物の流通過程を追うことによって、今後戦場での読書を立体的に考えていくための枠組みを提示していきたい。

## 第一節 戦前外地の出版流通

戦前外地への出版流通の状況は、どのようになっていたのだろうか。戦地での書物の入手経路の一つとして、海外で戦前から経営を続けていた、もしくは戦中に伸張していった日本語出版物の販売店である外地書店の存在が挙げられる。

アジア・太平洋戦争勃発以前から営業していた外地書店の出店背景には、外地への出版流通ルートの確立がある。戦前の国内最大取次であった東京堂の社史『東京堂百年の歩み』には、「戦時統制下にあつて、書籍・雑誌が好調をきわめた原因の一つとして、内地出版物の満洲（中国東北部）および中国への活発な進出ぶりをとりあげなければならぬ」と書かれているように、戦前の外地への流通ルートの成立は、戦地への書物流通の発展へとつながっていったのである。

外地の出版流通として本節で扱うのは、アジア・太平洋戦争以前に朝鮮、台湾、樺太、満洲、関東州、中国、南洋など、日本が明治以降に進出していった地域における流通である。東京を中心とした出版流通の制度の発展、それと連携した地方の出版流通の促進、そして更なる発展を求めた出版業者による外地への進出など、書物の外地への流通は、こうした日本の出版流通の版図拡大の外縁部であった。それと同時に書物の外地への流通は、日本によるアジアの植民地化の歩みと軌を一にするものであり、外地へ日本の書物を届ける営みは、拡大していく日本帝国の最前線の場でもあった。

まずは、日露戦争以降の動きについて、簡単に触れておきたい。外地へ出版流通の足掛かりを作った立役者が、取次として活躍した大阪屋号書店の店主浜井松之助である。この大阪屋号書店については、すでにいくつかの優れた研究が存在している<sup>6</sup>。そうした先行研究に負いながら、将兵の読書につながる外地の出版流通の状況を述べていきたい。

大野（大野孫平・元東京堂社長―引用者注） こういった外地に書籍・雑誌の販売網を作った功労者は、なんといっても大阪屋号の浜井松之助さんが第一だろうな。

尼子（尼子揆一・元北隆館取締役―引用者注） 私は北隆館の小僧時代に、浜井さんから直接きいたことがあるんですが、なんでも日露戦争の時軍隊について栄口に上陸し、大連を皮切りに、占領地の要所要所に書店を作っていたのだそうです。これが足場となつて、国運の進展とともに書店数もふえ、外地向け取次として大阪屋号も伸びていっ

たわけでした。「日配」に統合されるまで。朝鮮、満洲、中国の主要地に支店が八、九カ所あった。

取次店主たちの回想で語られているように、大阪屋号書店は、一九〇四年一月に中国・栄口に開業した雑貨商「大阪屋」を前身としている。営業を可能としたのは、栄口に進駐した日本軍の軍政機関である軍政署によって、営業許可証が発行されたからである。その後、一年ほどで博文館の代理店として書店業にも手を広げ、その頃から大阪屋号書店を名乗るようになる。さらに大阪屋号書店は、一九一一年に本店を神田へ、一九二〇年には日本橋へと移転し、取次業を本格的に開始する。とりわけ満洲や朝鮮半島では、その存在感を示し、大連・旅順・奉天・京城・新京などへと支店を広げ販路を拡大していった。満洲をはじめとした多くの日本人の移住、軍人や軍属の読書意欲が、その活発な活動を支えたのである。

ただし大阪屋号書店のみが、外地の取次を一手に引き受けていたわけでもない。雑誌を基本として、東京堂をはじめとする大手取次四社も外地へと販路を拡大させている。東京堂が外地を市場として強く認識し始めたのは、一九三二年の満洲国の誕生以降のことだ。「朝鮮・満洲方面の書店は東京堂の地盤」となり、「満洲においても、ほとんど東京堂の取引先だったから、得意先書店の発展は、当然東京堂の売上げ増加につながった。」といったのである。なかでも意欲のある若い社員たちは、人手の不足する満洲の新興書店へと送られ、そこで働くこととなる。奉天の弘文堂、新京の森野書店、ハルピンの哈爾賓堂、上海・四平路の田中洋行、牡丹江の信泰洋行、上海の内山書店などが、それら書店として挙げられよう。こうした東京堂の進出状況は、一九三九年頃までつづいていく。『東京堂百年の歩み』には、一九三五年に東京堂から哈爾賓堂へ斡旋された、小俣百世（日本出版貿易株式会社元専務）による次のような回想が紹介されている。

実によく売れた。婦人雑誌の新年号が着く時は、トラック二台で駅へ取りに行った。「主婦之友」新年号などは三千部も売れた。なにしろ冬は長くて、娯楽機関も少ない。それに満鉄を中心として、インテリ層が多かったから、高級な文芸書や専門書もよく売れた。「谷崎源氏」や「風と共に去りぬ」、石川達三の「蒼氓」などが印象に残っている。岩波の「八杉露和」、東京堂の「松田和露」の両辞典は、品切れになると、紙がなければ、紙をやるから刷れと軍の命令の出るくらい、現地の必需品であった。売れる本は、一カ所で三十、五十と注文がくる。返品はほとんどなく、あっても一カ月、小さな包が五個か六個に過ぎない。私がハルピン堂に行つてから、店舗は三倍くらい拡張したが、本が

よく売れてしまうので、次の荷が来るのが間に合わない。仕方がないから、上の方の棚を空けるようにしたが、一段空き、二段空き、三段位まで空いてしまう。荷の来るのが待ち遠しかった。

小俣の回想からは、一九三五年ごろの、満洲での書物の販売状況や軍との関係がうかがえる。その後、「戦局が進み、蒋介石政権が奥地重慶に交代し、北支・中支・南支の重要地点が、日本軍の手で維持されるようになると、内地出版物の販路はさらに拡がっていき、東京堂だけではなく「各取次会社は、直接、間接に販売拡張に手を下すようになっていく。東海堂は北京へ、北隆館もまた外地への進出に力を入れていくようになるのだ。北隆館取締役の尼子揆一は「内地で伸びる余地がなくなったものだから、『ひとつ外地に本腰をいれようじゃないか』ということになって」、外地への進出を強めていき、「講談社の絵本」で絵本の扱いを勉強しておいたことが役にたち、満洲での好況につながったと述べる。

戦局が進み、中国大陆へと販路が拡大されていく状況を、東京堂が中国・漢口に出店した長江堂書店の様子を例にみてみたい。長江堂書店は一九三八年の武漢作戦の終了後、一九三九年五月に、軍からの要請を受け、袴田栄を責任者として営業を開始している。袴田が語るによれば、当時よく売れた本は「軍から一括注文の来た新兵教育用の作戦要務令の類、娯楽雑誌、中央公論、改造、文庫本、文学書の類」であり、漢口には「大学卒の兵や技術者も多かった」ことから「工学・経済・宗教書など、堅いものも意外によく売れた」という。売れ筋の本からは、移住してきた日本人だけではなく、兵士個人や軍属など軍全体を対象として商いが成立していたことがわかるだろう。だが、漢口での出店は長くは続かず、翌年の夏には、長江堂書店は小針新助という人物へ譲渡されている。大野孫平（東京堂社長）は、漢口での東京堂の出店について次のように語る。

私は海外には全く期待をかけていなかった。外地というのは日本人が何万と行っていてこそ発展性があるんで、外国人に読ませようと思ってもだめなんですよ。だから東京堂で漢口に店を出す時も、あまり賛成しなかったけれども、大橋達雄君なんかそういう仕事をしたくて仕方がない。新天地の開拓に早く手をつけたいという気持はわかるが、この将来性を見きわめることが先決問題で、これはなかなかむずかしい。それで、私はあの時分まだむりだと思っただけけれども、損をしたって東京堂としてはさほどの問題でもないからと思っただけでもらったところが、果せるかなだめだった。

東京堂が京漢線の北上部隊の要所である漢口から手を引いた理由として考えられるのが、

輸送の不首尾である。先に紹介した小俣百世は、ハルピンでの東京堂の出版流通の正確さを強調していたが<sup>16)</sup>、そうした厳然たる流通機構を可能としていたのは、やはり南満洲鉄道株式会社による鉄道輸送網の整備であった。小俣が哈爾賓店へ入店した一九三五年は、大連からハルピンまで運行区間が延長された年にあたる。一方、漢口までは、陸路ではなく、揚子江からの舟便が主な輸送経路となっていたため、「品物も時機はずれに着き、注文した部隊は移動して、不用になるという始末であった<sup>17)</sup>」。このように、外地へ書物を送る際に輸送ルートや費用は重要な課題となっていた。

外地に書物を送るという営みは、そこにどれだけの需要が見込まれたとしても、その流通網が拡大すれば拡大するほど、当然それだけ送料は割増となる。当初、送料の割増分は外地の小売店が負担しており、圧迫する輸送料は、外地書店の懸案事項となっていた。満洲では、こうした輸送費等の小売店の負担を軽減するために、「外地定価」として割増した定価が定められることもあったが、利用者側から内地価格での販売要求が起るなど、「外地定価」をめぐっていくつかの問題が生じている。こうした外地の販売価格の問題は、渡辺隆宏によって「外地定価問題」と名付けられ、満洲書籍配給株式会社の設立の経緯と合わせて論じられている<sup>18)</sup>。

外地進出の気概と相反する利益追求という課題など、増加していく多様な問題に対処するため、勃興する多数の中小取次の取りまとめとして結成されていったのが、外地の書籍商組合である<sup>19)</sup>。一九二〇年に「全国書籍商組合聯合会」が結成され、既存の大都市組合の連合化が進行すると、同時に地方の書籍組合が組織されていくようになる。その動きに連動した外地でも、一九二〇年に満洲書籍商組合、一九二二年に朝鮮および台湾で書籍商組合、一九二六年には樺太で書籍雑誌商組合が結成されている<sup>20)</sup>。

つづいて一九三五年以降には、さらなる統制体制が整えられ、一九三九年に満洲書籍配給株式会社、同時並行して朝鮮半島でも配給会社が設立される。一元的な配給網の整備を目指した外地での配給会社は、一九四一年に日本と外地全体を含むより大規模な一元的配給網の整備を目指した日本出版配給株式会社（以下、日配）のモデルともなっていた。

本節では、軍の大陸進出とともに出版流通が拡大し、各地で出版業者の組織化が進行していたことを確認してきた。外地での取次の発展は、兵站輸送の整備による書物の輸送網の伸張の過程でもあった。では、満洲・朝鮮・中国から、南方へと進出していくなかで、流通網はどのようにして販路を拡大していくのだろうか。次節からは、日配の外地進出の様子を追っていくこととしたい。

## 第二節 日本出版配給株式会社の外地進出

太平洋戦争開戦の前年、近衛内閣による「大東亜共栄圏構想」により、南方への進出計画が本格化する。真珠湾攻撃による太平洋戦争の開戦とともに、南方作戦は進行し、日本軍はシンガポール、フィリピン、香港、インドネシア、そしてミャンマーへと徐々にその版図を拡大させていった。日配の外地進出状況からは、軍の南進の歩みとともに、出版流通の販路も拡大していくことがわかってくるが、ではその拡大はいかにして行われたのだろうか。本節では、日配の外地への進出状況を明らかにしていく<sup>1)</sup>。また日配の外地進出による、軍隊内での読書との関わりを明確にするために、日配における兵書、軍用図書の扱いについても同時に明らかにしておきたい。

「大東亜共栄圏構想」に対して出版業界は一九四〇年に出版社全体の統制団体である日本出版文化協会（以下、文協）を組織することとなる。文協は用紙統制を主な役割とし、減少する印刷用紙を効率的に配給することが目指されていた。さらに、文協は用紙申請と出版企画の事前審査を同時に行うことで、書物の出版は文協による許可制となっていく。この文協とともに、日本の出版流通の統制を目的として翌年五月に設立されたのが、全国の取次業を統合した日本出版配給株式会社である。日配は、文協とも連動し半官半民の統制団体として組織され、書物流通の一元化を担っていた。多くの取次は日配へと吸収され、日配の出版流通網は、内地だけではなく外地の流通をも担っていくこととなる。

日配開業から五ヶ月ほど、日配の機関誌『出版普及』に「外地送荷に就て<sup>2)</sup>」として、次のような釈明が掲載されている。

「遠隔の皆様方の店頭へ一日も早く御注文品が到着するやうに」と、一同汗塗れになつての働きで仕事もどうやら軌道に乗つて参りました。ところが御承知の通り輸送関係で当所管轄地域は大部分郵送の方法を採らねばならぬ結果、高い運賃の御負担と受荷の手数と破損等の御迷惑をおかけ致した次第でございます。（略）

之の場合集荷、輸送、荷造等の方法を改めねばならぬことも考へられ、それに就ても種々研究を続けてゐる次第であります。

既に御承知の通りガソリンの制限、荷造材料の不足、労力の不足等々の悩みはありますが、然し日配は如何なる場合、どのやうな状態になつても其れに対処するだけの計算と腹はできております。どうか皆様の御理解と御辛抱を特に御願ひ申し上げます。（銀座営業所より）

こうした問題点が浮き彫りになることで、日配は各所での問題解決へと動き出している。その一カ月後の十一月一日には、朝鮮支店の設置が行われ、支店開設準備委員長として

鈴木多三郎（東海堂出身）を任命している。初等教育の就学率が六〇%となったことを受けた、教科書配給を重視した設置であった。大阪屋号書店や現地の他小売店と提携し、朝鮮支店特務運営規程を特別に定め、朝鮮総督府等の指導監督のもと運営が行われた。

つづいて一七日からは、すでに一元的配給を開始していた満洲書籍配給株式会社との協定の話し合いが開始され、翌年一月二〇日に協定契約が交わされる。さらに、一月二九日には、台北市に台湾支店が出店され、準備委員長として奥村郷輔（東京堂出身）が着任、朝鮮支店と同様に台湾支店特務運営規程が定められた。また、すでにあつた台湾図書株式会社や大阪屋号書店と他小売店の共同出資による台湾書籍株式会社は日配に吸収されている<sup>196</sup>。

設立から一年、日配は徐々に外地での流通の一元化を進めていく。こうして外地での配給先である小売店には、日配を通じて書物が配給されるようになり、そこに駐在する将校や兵士へも書物が届いていくことになる。ちょうどこの頃、機関誌『日配通信』には、地方教科書営業所所属の辻田鐵太郎の「兵隊」という詩が『東京日日新聞』から転載されている<sup>200</sup>。出版流通を担う日配職員を「兵隊」に見立てており、出版流通の外地への拡大が、日本帝国の国土拡大というナショナリスティックな欲望と重なっていたことを伝える詩である。

一九四二年八月二日には上海で動きがあつた。初の海外出先機関としての上海出張所の設置である。「当初の計画では汪兆銘政権下の占領地域に対し、日支合弁（中国側の五大書局と提携）の教科書会社を創ってその配給面を日配が担当することを主目的」としていたが、実際には不安定な情勢のために、なかなか進まず、最終的に計画は破綻してしまう。だが大陸への進出のための整備は進み一月に入ると「日配は陸・海軍から正式に交易担当者として指定を受け<sup>201</sup>」、一九四三年には本格的に南方への配給に乗りだしていくことになる。

この時期、日配の南方進出に対する軍の後押しが本格化した背景には、宣伝出版物の効率的な配給を求める趨勢がある。浅野晃は、「現地と書物―ジャワより還りて―<sup>202</sup>」のなかで、日配が本格的に進出する前の、インドネシアやシンガポール、ベトナムのホーチミンなどの南方書店の様子を伝えている。浅野は書店が豊富な場所として、海南島を挙げ、「内地へ来たやうな感じがするほどの」書店があり、海口では「内地の本を売つてゐる店が二三」あるが、博文館の進出によって、雑誌に関しては「相当多くの種類が並んでゐる」ことが報告される。しかしながら、海南島以外の諸地域には、有力な書店はなく小売店が数軒あるのみで、「現地への書物への配給機構の確立は、書物の質の厳選といふことを前提とするといふことを、特に強調して置きたいのである」と締めくくられる。

さらなる配給網の整備のため、日配は軍の指定交易担当に任せられ、南方への配給網の調査や開拓整備を中心に担う「東亜課」を新設することとなる。なによりも、他の地域とは異なり「国策宣伝徹底の必要上、また同意地域に対する出版物普及の重要性に鑑み、当分の間、損益を全く度外視<sup>256</sup>」すると定められたことは、日配による流通網の拡大を強く後押しすることとなる。

また外地での配給整備は、内地での配給方法変更のテストケースとなっていた可能性がある。それが内地に先駆けての外地での売切買切制の導入である。この時期の日配にとつて、出版流通改革の大きな取組みのひとつが売切買切制への移行である。店頭で自由に購入する方法から、『新刊弘報』に掲載される出版目録から注文し購入するという売切買切制の導入は、これまでの購入方法を大きく変更する出来事であった。書籍買切制実施要綱（一九四二年一月九日）によれば、当初は一九四三年四月二日に実施予定であったが、諸処の問題への対応から実際には一九四三年七月二日に全面的に実施されることとなる。

それに先駆け、外地向雑誌では早くも売切制の導入が宣言されていたことが確認できる。一九四三年二月二日付けの「外地向雑誌 売切買切制について<sup>257</sup>」では、「宣伝啓蒙雑誌、創刊又は新扱ひ雑誌第三号までの雑誌については委託扱ひ品とする」こともあるが、「満洲、支那、台湾、朝鮮、樺太、沖縄県、小笠原、南洋群島並ニ海外占領地等船舶輸送地域」にて、一九四三年三月二日には全面的に買切制を実施することが表明されている。

一方で、日配による兵書、軍用図書の配給への取組みも、そうした拡大路線の一環だと言えよう。兵書とは、「軍隊用の教科書類並びにこれに準ずる一般向教練書類」の通称で、のちに軍用図書という名称へ変更されている。これら軍用図書は、特殊な直販ルートを持つため、「軍の指示に従い直接、間接に連隊とか部隊にそれぞれ納本する」場合があるなど、日配の流通一元化達成の課題のひとつとなっていた。日配の記録によれば、「兵書出版の大手は小林川柳堂で、そのシェアは約五〇%、次いで武揚堂、軍人会館出版部、尚兵館の順で、これら数社で九分通りの実績をにぎっていた<sup>258</sup>」という。こうした寡占状態のなかでも、誠文堂新光社の小川菊松は、一九三七年の開戦以降の軍拡に伴う兵士の増員に合わせ、日本兵書出版株式会社を発足し、典範令の翻刻出版や教練書の発行を行うことで利益を上げることに成功している<sup>259</sup>。だがこうした小川の成功は特例であり、寡占が進行する兵書の直販による販売体制を、日配によってすぐに一元化することはできなかった。

日配ではまず一九四一年九月に「今後発売になる新刊軍用図書配給の適性円滑を期す為」に「軍用図書新刊配給希望数調査票」を各書店へ送付、需要の把握につとめている<sup>260</sup>。翌年六月には、軍の指令によって日配経由で配給されることが決定され、兵書の配給が着々と準備されるなかで、八月六日によりやく麹町区飯田町に兵書営業所が開設されている。



その後、一〇月には軍用図書配給要綱が定められ<sup>38</sup>、十一月には兵書営業所から軍用図書営業所へと改称される。売上げは、当初は「版元直売の威力のほうが強く、日配ルートは不評」であったが、「専門係（平賀忠夫ら）が予め重版企画を探知して事前に発注し、現物を確保するようになってからは大いに成績をあげた<sup>39</sup>」という。外地支店の流通整備と軍用図書の流通の一元化、この二つの足取りが揃うことによって、日配による南方進出が本格的に開始されたと言えるだろう。

つぎに具体的に南方進出の様子を追っていききたい。一九四三年三月、日配の協同機関である文協は、国策会社日本出版会へと改組を行う。統制機関としてより一層の販路拡大を目指し南方へ進出するにあたり、南方出張所設置要綱が定められている<sup>40</sup>。出張所は、日本による占領が行われる「占領地区」と占領地以外のベトナムとタイによる「第三国地区」に分けられている。出張所として計一八カ所が計画されていたが、実際には開設できないままの場所も多くあったようである<sup>41</sup>。少し長くなるが、南方での支店開設状況がわかる部分を引用したい。

まず、昭南（シンガポール）支店の開設を決め（ここが本拠地）、ビルマ方面を第一陣とし、つづいてジャワ、スマトラ方面など、主として陸軍司政管下の占領地区から開設が行われた。セレベス地区等の海軍司政下の占領地域は、治安上、航行上の不安から遅れて、九月に入ってようやく出張員の任命が終り、十一月頃になってマカッサルに開設のセレベス出張所に赴任していった<sup>42</sup>。

南方への邦人書店の進出は微々たるものであったが、それでも数軒の書店がシンガポールその他で開業していたので、日配はこれらの取引網を継承するとともに、新たに現地開業を希望する書店を募り、これを軍・官の指定小売店としていっしょに同行し、販売と読書の普及に当らせた<sup>43</sup>。しかし、戦局の推移がかんばしくなく出版物の調達も輸送も意の如く進まなくなつて折角の出張所もその機能を満足に果しえなかった。わずかに昭南支店に対する品送りだけは、月一回位確保することはできたが、その他の出張所に対しては、宣伝刊行物以外の商品は送ることさえできない状況となつて、配給どころではなかった。こうしていたずらに失費をかさねるだけで、結果的には「国策」（戦争）の犠牲になつたといえる。

南方に対する配給は、まず内地において軍政当局の発注に応じて日配（東亜課、のち東亜部）が需要出版物（宣撫用雑誌書籍等）を調達し、取引契約を交わし、納本する形式をとつて代金決済をすませる。輸送手続き、梱包等はすべて日配で行うが、実際の輸送はすべて軍用であるから船積みしてからの責任はない。現地に到着した荷物は出張所

で受取り、軍に直接納入するか、現地書店を通じて販売する。その代金は現地の横浜正金銀行か台湾銀行経由で本店に入金する仕組みになっていた<sup>36)</sup>。

ここで触れられている南方支店の要となった「昭南支店はシンガポール市ロビンソン・ロード街にあり、支店長の田村惇一は佐官待遇、増村倉次、相野谷森次は中尉待遇で」の厚遇であった<sup>35)</sup>。給料は内地の五倍あり、治安も比較的良好で、他の南方支店の多くが潜水艦による攻撃によって、配給が困難となり経営が形骸化するなかで、「シンガポールだけは比較的順調で、二十年の二月頃まで」荷が到着している。だが、一九四四年「五月頃には所員はすべて南方軍二十九軍の司令部に徴用され、宣撫工作に従事」することとなる。さらに、南方職員は「敗戦により軍とともにレンバン島に收容され、翌二十一年の五月になってようやく内地に復員した<sup>36)</sup>」という。

シンガポールなどある程度までは配給可能な場面もあったが、大局的にみれば日配の南方進出は決して順調に行われていない。一元的統制機関として軍と歩みを共にすることで、軍用図書や宣伝出版物などの書物を配給することはできたが、それは利益を度外視したものであり、商業的な成功を収めることはなかった。

また日配機関誌『出版弘報』に掲載された一連のコラム「共栄圏だより」には、南方に散らばる出張所からみた現地の状況が報告されている<sup>37)</sup>。具体的な書物の流通に関する就業報告というよりは、現地の人々や風俗に関する現状報告に近い短文ではあるが、それでもなお継続してコラムを掲載した背景には、南方への書物流通の進出という情報に対する価値の高まりがあったからだと考えられる。

情報局第二部第二課長の古橋才次郎は、「出版兵站線の新しき認識と実践」のなかで、「配給に携る者は思想線の兵站線を預る輸送船団であり自動車隊<sup>38)</sup>」であると語っている。書物が「思想の弾薬」として兵器のメタファーとして描かれたように、書物の流通もまた兵站線を形作るものとして語られていく。実質を伴わない南方への進出は、対外宣伝という要素だけではなく、新たな日本の領土を国内に示すためでもあったのである。

### 第三節 通常販売以外による書物の多様な入手方法

これまで確認してきたように、戦時下の書物取次は、戦況の拡大に伴いその業務の拡大を図ってきた。それは成功裏に終わったとは言いがたく、戦場での読書行為の困難さを物語っている。だが前述したように、取次―小売を経由する流通ルートを辿るだけでは、戦場での書物の流通状況を把握することはできない。本節では、将兵や従軍記者、従軍作家たちによる手記や日記、新聞雑誌記事等から戦場での読書に関する言説を具体的に例示し

番号	入手方法	補足説明
1	書店での新刊購入	個人による直接入手
2	酒保での購入	
3	古書店での購入	
4	植民地図書館での貸出・持出	
5	占領地での入手	
6	軍事郵便による書籍郵送	個人の要望による間接受手
7	病院での持込み	
8	慰問書籍・慰問雑誌の配布	個人から恤兵部を経由して配布
9		出版社、軍事援護団体、図書館等の団体から恤兵部を経由して配布
10	兵士用慰問雑誌の配布	軍の要請により出版社が作成し、恤兵部を経由して兵士に配布
11	兵士用投稿雑誌の配布	軍報道部で作成し、兵士に配布

【図一】戦場での書物入手手段一覧

ながら、他の入手方法を明らかにしていく。それは、取次の流通ルートを進めるだけでは見逃してしまう出版文化のありようを明らかにすることとなるだろう。

これまでにみてきた配給状況からは、日本軍の占領以降、情勢の安定した駐屯地においては、新刊書店や小売店での書物の売買がある程度可能となっていたことがわかる。軍用図書は軍注文による一括集団購入のほか、場合によっては将兵による個人的な購入も可能ではなかった。ここからは個人的に選択して購入できた例をいくつか提示しておきたい。入手方法は、【図一】に記した通りである。図に記した入手方法の番号は、文中の番号に対応している。

一つ目は、書店での新刊購入である(1)。「大日本雄弁会講談社社内通信」には、次のように外地書店における民間人や将兵への雑誌売れ行きの好調ぶりが伝えられている。

皆さんの御繁忙のうちに成る各誌は此方では〇〇には日本堂といふ書店が開店されてその店頭は〇〇一の賑はひを呈してみました。将兵一同の待望久しき雑誌が店頭に現はれたのです。新年号は各誌とも一円均一でしたが、開店初日に売り切れ、補充絶対不可能の盛況、二月号は上海で着荷早々売り切れで駄目、三月号はそれでも相当部数参りましたが、これも二、三日で売り切れました。講談倶楽部、富士は何れも八十銭でした。定価より十銭高法で売つてゐますが値段は第二第三の問題、手に入れる事が先決問題なのです、飛び付く様な思ひとは内地の坊ちゃん、嬢ちゃんばかりではありません。雑誌の有難味、その使命の重大なることを痛感してゐます。講談倶楽部の新年増刊号は部隊で新年号と共に数部購入しましたので新年号の付録と間違へる者が多く、こんな大きな付録がついて一円とは何んと安いだらうなどと云つてゐた兵隊も相当ありました<sup>30)</sup>。

日配の記録によれば、一九四二年度に外地の書店数は、「満洲」一九二(このほか軍酒保一五、鉄道弘済会三二、消費組合四)、「朝鮮」五四九(総合書店は約一二〇)、「蒙疆」一三、「北支」一二四、「中支」五二、「南支」一六、「台湾」一二三であり、外地書店数は増加している<sup>31)</sup>。そのなかで、内地同様

に講談社の雑誌類は数多くの売上げをあげている。

二つ目は、新刊書店と同様の取次からの流通ルートを持つていた兵士の日用品の販売所である酒保からの入手である(2)。設置された場所に限りはあるが、酒保には新聞をはじめ雑誌、書籍が販売され、日用品とともに購入することが可能であった。たとえば『少年倶楽部』を酒保で購入した兵士の喜びの声が、講談社へと次のように伝えられている。

十月初旬より此の地在留邦人経営の酒保ができました。私は酒保の人に日本町には雑誌屋はありますかと聞くところなので、売り切れない中、前以て注文して置いて貰ふやう依頼しておきましたら、十五日の夕刻の事、もうすっかり顔馴染になった酒保の人から『少年倶楽部』が来ましたよ』と待ち焦れてゐた愛誌を手渡しされた時の喜び！！<sup>ニ</sup>

また酒保と共に新聞閲覧所や遊戯所が設置されることもあり、山本有三は駐屯地の娯楽室に向け自著の寄贈を行っている<sup>た。</sup>。

三つ目は古書店での購入である(3)。たとえば、東京大学理学部地理科在学中に入営した中村徳郎(陸軍兵長)は、一九四三年六月二〇日、外出の際に、古本屋で『ゲート、シリレル往復書簡集』(菊池栄一訳、桜井書店)と『文学と文化』(高橋健二著、鮎書房)、『形的自覚』(弘文堂)、『最新世界史年表』(三省堂)を買ったことを記している<sup>た。</sup>。

また、『馬・船・読書―私の戦陣日記』<sup>た。</sup>は、平田守衛が、京都大学大学院在学中の一九四二年二月一日に、幹部候補生として入営したのちの日記を、本人のコメントとともに紹介した著書である。そこには、安慶に向かうまでの船内での様子が綴られているが、船内に持ち込んだ書物や一五日間の南京滞在中に購入した書物が大量に記されている。

さらに、沖田信悦『植民地時代の古本屋たち―樺太・朝鮮・台湾・満洲・中華民国―空白の庶民史』<sup>た。</sup>は、戦時下の古書店の外地進出を追った労作であるが、そこからは新刊書店だけではなく、古書店も外地への流通の重要な一翼を担っていたことがわかる。大島欣二は、一九四二年一月に短期現役軍医となり、軍艦山城に搭乗した際、ある港で緒方富雄『祖国愛と科学愛』を古本の中から見つけている<sup>た。</sup>。新刊書店と古書店が兼ねられていた場合も多く、外地に点在する書店は将兵の貴重な書物入手先となっていた。

四つ目の入手ルートとして挙げられるのが、占領地に存在する図書館である(4)。鶴見俊輔は、一九四三年に海軍嘱託の翻訳官としてインドネシアに駐屯しているが、その際のことを次のように対談で語っている。

鶴見たたとえば、ジャワにとってもいい図書館があったんだ。だけど日本人はほとんど使わない。そのバタビヤ図書館に行くと、ハヴロック・エリスの『性の心理学』(psychology of sex)の全六巻が揃っていた。だからそれを初めから終りまで全部読んだ。日本人であれを借り出して全部読んでいた奴は、私以外いないと思う<sup>34</sup>。

日本語書物ではなく、占領地の図書館で洋書を読むという行為は、翻訳官という立場の鶴見だからこそ可能な特殊な事例ではある。だが、少なからず植民地の図書館という場所が、将兵に対して個人的に書物を入手する場所となりえていたことを伝えている。また、図書館だけではなく占領地にある人家や店舗に残された書物を略取する場合もあった(5)。こうした書物の入手方法は、手記で語られることは少ないが忘れてはならないものである<sup>35</sup>。これまでに、書物がある程度まで選択し、個人的に直接入手する方法について考えてきた。つぎに挙げていくのは、個人で直接入手するのではなく、間接的に入手する方法についてである。

一つ目の方法としては、軍事郵便による書物の郵送である(6)。瀬田萬之助(陸軍少尉)はマニラより内地へ帰還する同僚に託した書簡のなかで「何か宗教の本をお送り願えれば幸甚です<sup>36</sup>」という言葉を記している。こうした軍事郵便による書物の発送は、特殊な事例ではなく、一般に広く流布された方法であった。一九四三年九月七日付け『読売新聞』では「南方向けの郵便 書籍は第四種郵便で送りませう」というコラムが掲載され、書籍を慰問品として積極的に送るよう呼びかけられている。書籍だけではなく、雑誌も同様に送られ、取次ルートでは配給することのできない、将兵の求める書物を、個々に手元に届ける方法として軍事郵便は奨励されていた。

二つ目の入手方法としては、病院での入手が挙げられよう(7)。学徒兵の木村久夫は、一九四三年の入営直後に病氣療養のため大阪陸軍病院に入院している。高知大学に寄贈された木村久夫の蔵書の書き込み調査からは、母や友人に購入してもらった経済関係の学術書や洋書を陸軍病院へ持ち込んでいることが確認できる。この木村久夫の戦時下の蔵書については、第六章で述べていく。

また、個人間の間接的な書物の送付だけではなく、不特定多数の兵士に対して、書物が慰問品として発送される場合もある(8)。個人からの発送は、軍人援護を目的とする組織である恤兵部を通じて、戦地の各部隊へと慰問袋へ入れられ送られている。たとえば、細田寸海子『ある農村少女の戦争日記』に掲載されている当時の日記には、慰問雑誌の荷造りをしたことや慰問の本を郵便で送ったことが記されている<sup>37</sup>。

さらに、個人だけではなく報国団や出版社、各組合、図書館など、大小様々な団体によ

って、慰問品として書籍や雑誌が戦地へ大量に送られることもあった(9)。慰問品としての書物、とくに雑誌については、第二章にて述べていく。

一例として、慰問用の書物発送のなかでも、大規模な岩波文庫の恤兵品としての発送を紹介しておきたい。岩波書店は、一九四〇年に文庫二〇点を各五千部、一九四二年に文庫一〇点を各一万部、計二〇万部を、陸軍の依頼によって恤兵品として供出している。興味深いのは、志賀直哉『小僧の神様』『万暦赤絵』、夏目漱石『虞美人草』永井荷風『おかめ笹』をはじめ、バルザック『知られざる傑作』、ラファイエット夫人『クレージュの奥方』、スタンダール『カストロの尼』などの外国文学までも、陸軍の要請によって戦地に発送されている点だろう<sup>20</sup>。一九四二年にジャワに滞在していた浅野晃は、「兵隊の方へは、恤兵部の方から、岩波文庫などが、大分沢山届いたら良かった。それを、私どもは貸してもらったりした<sup>21</sup>」と語っており、供出された岩波文庫がジャワまで実際に発送されていたことを確認することができる。

こうして内地から送られた慰問品としての書物は、様々な将兵へと届けられていたようだ。岡本太郎は、「ある時、偶然文庫本のチェホフ短編集が恤兵品の中に混っているのを発見した。まだ読書など厳禁された教育中だったが、「こつそりとしのばせて持ち帰った<sup>22</sup>」と記す。詳しくは第二章にて述べていくが、岩波書店だけではなく、軍人援護会や様々な報国団、県の軍人援護団体、また図書館や学校など、各種団体が慰問用に書物を収集し、戦地への寄贈を行っていた。戦地へ書物を送るという行為は、慰問活動のひとつとなっていたのである。

こうした慰問活動が知られるようになると、作家が個人的に慰問用の書物を作成し発送を行ったり、出版社が慰問用に特集を組んだりすることもあった。なかでも、軍の依頼によって兵士用の娯楽慰問雑誌が制作されていたことは珍しい事例と言えるだろう(10)。兵士用の慰問雑誌で長く刊行されていたものは二種類あり、一つは講談社が陸軍からの要請で編集した『陣中倶楽部』、もう一つは、海軍による『戦線文庫』で、菊池寛と関係の深い興亜日本社から発行されている。

軍隊内では読書が禁止されていたというイメージがあるが、個々の隊の状況や軍隊内での地位、または出征地によって読書の可否は様々であり一概に禁止されていたとすることはできない。陸軍や海軍によって制作が行われた『陣中倶楽部』や『戦線文庫』の存在からも、読書を推奨する向きがあったことは確かである。

ここで一九四三年時点での公式な見解として、栗原悦蔵(大本営海軍報道部課長)による「海軍軍人と読書<sup>23</sup>」、谷萩那華雄(大本営陸軍報道部長・陸軍少尉)「陸軍軍人と読書<sup>24</sup>」をみておきたい。二つの随筆では両者とも読書を否定することはない。海軍の栗原は士官

と兵とで読書内容が異なっていることを指摘し、艦内の兵士と占領地の兵士の読書も異ならなければならないとも指摘している。栗原は、将兵の読書を分類し細分化して説明しているが、それは読書が士官の指導力を高め、兵士の士気を高めるといった戦地での読書の有効性をはつきりと認識していたからでもある。

さらに、陸軍の谷萩も戦地での読書の役割を論理的に認識している。とくに、将校は戦術や科学技術の発展に伴う兵器の使用のため、予備知識を学ぶことが必要であると説き、実際に読書によって調査研究することを推奨する。また、占領地を安定して統制し、経済を発展させるために、知識を養う読書が必要であること、一方で固い本ばかりではなく趣味の読書や娯楽ものも必要であるなど、読書の役割が将兵の知識や士気の向上という観点から語られている。両者の戦場での読書に対する言及からは、将兵の読書の実態が、場所や地位、状況にあわせて、具体的に把握されていたことがわかってくる。

軍隊内で陣中新聞が作られていたように、そうした軍の読書に対する考えを如実に明らかにするのが、南支派遣軍報道部によって制作され、兵士によって編集された、兵士の投稿雑誌『兵隊』の存在である(11)。火野葦平を初代編集長に迎えたこの『兵隊』については、第三章にて述べていく。

他にも増加する可能性はあるが、戦場での書物の入手方法はおおそ一通りが考えられよう。大きな分類として、(1)から(8)までは、将兵が個人的に入手する場合に取られる方法である。ただ(7)の病院については、慰問によって書物が配布される場合も多々あり、はつきりと分けられるわけではない。また(9)から(11)は、どれも軍による兵士用出版物の配布であり一つの入手方法としてとらえることもできるが、その内容の多彩さからいくつかに分けて説明を行った。

## おわりに

本章では、外地への取次による出版流通の拡大をはじめとし、そこから逸脱した戦地での書物入手のありようを追ってきた。

戦後、戦場で書物を読むという行為は、戦争を避ける心情や批判意識につながるととらえられてきた。書物流通の販路拡大は、帝国日本の領土拡大の証ではあったが、通常／逸脱という書物の入手経路の枠組みは、戦場での読書に対する戦争への協力／抵抗という認識に単純に対応しているわけではない。通常の取次流通ルートから手にした書物の内容は、戦争に協力的なものに限定されてはならず、反戦的な書物は排除されているにせよ、厳しい出版統制の敷かれる内地にも共通するものである。そして様々な方法で入手された書物もまた反戦的な内容とは限らず、その読書行為が戦争に対する抵抗の意味を持っていたと





境の中で、いかにして読みたい本を入手することができるのか、書き残された多くの記述からは戦場の読書環境の不自由さを嘆く声が聞こえてくる。一方で、これまで読む習慣がなくとも、偶然に慰問品として書物を入手する人々も存在した。そうした偶然性が書物という存在や戦地での読書行為自体を物語化することにつながっていく。とくに学徒兵の日記や手記のなかには、限られた時間や紙面のなかで、書き残すのに相応しい書物と相応しくない書物とに峻別され、硬派な書物や修養的な読書態度が中心的に記される傾向がみられる。こうした記述の偏りを批判するものではもちろんないが、まずは資料上の限界を見つめ、そこからどれだけ排除された出来事があったのかを考えることから始めていきたい。

読書は各々の記憶を参照しつつ行われるものであり、手記や日記に記されているのは、書物に書かれた物語だけではなく、戦地で書物を読むという行為が、それまでの記憶のなかに位置づけられることによって生まれた個人的な物語の数々でもある。戦場と読書の関係性を問うことは、この複雑に絡み合った読書への欲望を丹念に解きほぐす作業だと言える。

『『東京堂百年の歩み』(東京堂、一九九〇年五月)二九二頁。

戸家誠「幻の「大阪屋号書店」のこと」『文献継承 一八号』(金沢文圃閣、二〇一一年四月)、渡辺隆宏「「周辺」の出版流通―満洲書籍配給株式会社設立への道程、大阪屋號書店その他―」『メディア研究』(メディア史研究会、二〇一〇年三月)

橋本求『日本出版販売史』(講談社、一九六四年一月)一一三頁。

日比嘉高は、大阪屋号書店以外の取次の進出を視野に入れた外地出版流通網の発展を総合的に考察する重要性を指摘している。日比嘉高「内地・外地の出版関連主要法令対照年表・稿―戦前外地の書物流通(2)」『跨境―日本語文学研究』高麗大学校日本研究センター、二〇一五年六月)、「朝鮮半島に於ける日本語書店の展開―戦前外地の書物流通(1)」『跨境―日本語文学研究』高麗大学校日本研究センター、二〇一四年六月)、「外地書店を追いかける(3)―台湾・新高堂の誕生2」『文献継承 二四号』(金沢文圃閣、二〇一四年六月)、「外地書店を追いかける(2)―台湾・新高堂の誕生1」『文献継承 二三号』(金沢文圃閣、二〇一三年一〇月)、「外地書店を追いかける―台湾・新高堂以前」『文献継承 二二号』(金沢文圃閣、二〇一三年四月)、「外地書店」とリテラシーのゆくえ―第二次大戦前の組合史・書店史から考える」『日本文学 六二』(日本文学協会、二〇一三年一月)、「書店資料から読む外地の読者―『全国書籍商総覧』(一九三五年)を用いて―五十殿利治『芸術受容者の研究―観者、聴衆、観客、読者の鑑賞行動』(文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、二〇一一年三月)

<sup>5</sup> 『東京堂百年の歩み』前掲注一、二九三頁。

<sup>6</sup> 『東京堂百年の歩み』前掲注一、二九四頁。

<sup>7</sup> 満洲における出版状況については、渡辺隆宏「満洲国における書籍雑誌定価販売の開始―満洲書籍配給株式会社設立後の流れ」『メディア史研究』（メディア史研究会、二〇一四年二月）、「満洲書籍配給株式会社設立の日とその前後」『メディア史研究』（メディア史研究会、二〇一二年二月）、「満配問題―一九三九年、満洲書籍配給株式会社設立をめぐる」『メディア史研究』（メディア史研究会、二〇一二年二月）、「周辺」の出版流通―満洲書籍配給株式会社設立への道程、大阪屋號書店その他」『メディア史研究』（メディア史研究会、二〇一〇年三月）

<sup>8</sup> 『東京堂百年の歩み』前掲注一、二九五頁。

<sup>9</sup> 『日本出版販売史』前掲注三、五〇八頁。

<sup>10</sup> 『東京堂百年の歩み』前掲注一、二九五頁。

<sup>11</sup> 『日本出版販売史』前掲注三、五〇九頁。

<sup>12</sup> 「感心したことは東京堂から送ってくる小荷物で、三〇〇個から八〇〇個も来るが、入日記と照合して見るとピタリ合っていて、一つも間違えていたことがない。さすがに東京堂だと思った。―支払いが請求書が来さえすれば、信用して品物が届かないうちに全額送金した。驚いたことには、たとえ送金が八銭不足していても、電報で八銭足りぬと督促してきた。三十銭の電報料の方が高くつくのだ。当時計算部の満洲主任は上村隆造さんだったと思うが、それほど東京堂は几帳面だった。」と語っている。『東京堂百年の歩み』前掲注一、二九四頁。

<sup>13</sup> 『東京堂百年の歩み』前掲注一、二九五頁。

<sup>14</sup> 前掲注七を参照。

<sup>15</sup> 日比嘉高による外地書店に関する研究では、書籍商組合の結成から外地の書店の広がりが見証されている。「外地書店とリテラシーのゆくえ―第二次世界大戦前の組合史・書店史から考える」『日本文学 六二』（日本文学協会、二〇一三年一月）

<sup>16</sup> 日比嘉高は一九三五年の『全国書籍商総覧』や書店資料から、外地において大手取次だけではなく、中小取次もまた幅広く活躍していたことを明らかにしている。（日比嘉高「書店資料から読む外地の読者―『全国書籍商総覧』（一九三五年）を用いて―五十殿利治『芸術受容者の研究―観者、聴衆、観客、読者の鑑賞行動』（文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、二〇一一年三月）／二〇世紀メディア研究所第九二回研究会「戦前外地の書物流通―取次を中心に」二〇一五年四月二五日）

『日配の南方進出に関する先行研究としては、大久保久雄「戦時下出版物の南方進出について1―日配社史にみる―」『東海大学紀要 課程資格教育センター 八号』(東海大学、一九九八年)の先行研究がある。

<sup>28</sup>「外地送荷に就て」『出版普及 第一巻第七号』(日本出版配給株式会社、一九四一年一月十五日)

<sup>29</sup>庄司徳太郎、清水文吉編著『資料年表日配時代史―現代出版流通の原点』(出版ニュース社、一九八〇年一〇月)二二三―二四頁。

<sup>30</sup>僕たちは荷造りもやる。

発送もやる。

自転車で配達もやる。

時には重役のタバコ買ひなどもやる。

みんな僕達の事を「兵隊」と呼ぶ。

「兵隊」

僕達にふさはしくも理想的な言葉だ。

僕達はすぐ本当の兵隊になる

さあ働かう、いまのうちだ。

働いて非常時を乗り切らう。

僕達「兵隊」の力で。

『日配通信 第一巻第五号』(日本出版配給株式会社、一九四一年九月十五日)

<sup>21</sup>『資料年表日配時代史―現代出版流通の原点』前掲注一九、二七頁。

<sup>22</sup>浅野晃「現地と書物―ジャワより還りて―」『出版普及』(日本出版配給株式会社、一九四二年七月二一日)

<sup>23</sup>『資料年表日配時代史―現代出版流通の原点』前掲注一九、二九頁。

また日配では、一九四二年に以下のような南進への取組みがなされている。「春頃から話題にのぼっていたが、具体化しはじめたのは九月五日に情報局において、南方向宣伝出版物の配給に関する軍官民関係打合せ会が開催されたからである。しかし、遠い占領地向けの出版物の輸送は、軍の統制下にあつて簡単には進まない。日配はまず既成の日本出版貿易株式会社(社長・望月政治)を傘下に吸収して、実質的に日配の貿易部の形にして将来にそなえていた」(前掲注一九、二九頁)。

<sup>24</sup>「外地向雑誌 売切買切制について」『出版普及 第三巻三号』(日本出版配給株式会社、一九四三年二月一日)

<sup>25</sup>『資料年表日配時代史―現代出版流通の原点』前掲注一九、二七頁。

<sup>26</sup>一九四四年には、他の兵書出版社と同様に、企業統合により日本軍用図書株式会社へと併合されている。

<sup>27</sup>「兵書の取扱ひに就て」『出版普及 第一巻六号』（日本出版配給株式会社、一九四一年一〇月一日）

<sup>28</sup>軍用図書配給要綱（一九四二年一〇月八日）

一、軍用図書類ノ配給ハ軍ヨリ該用紙ノ割当ヲ受ケ出版発売セントスルモノニ付テモ凡テ日本出版配給株式会社（以下日配ト略称）ニ於テ之ヲ行フコト

一、日配ハ軍用図書営業所（新設）ニ全軍用図書類ヲ常備且既存配給網ヲ包摂シテ専ラ之カ配給ノ適正円滑ヲ計ルコト

一、日配ハ配給ノ適正円滑化ヲ促進センカタメ本支店及営業所ノ外郭機構トシテ道府県所在地ニ夫々出張所ヲ設ケ地方駐在員ヲ派遣シ適正配給ノ基礎調査並ニ末端配給ノ指導監督ニ当たラスムルコト

一、日配ハ日本出版文化協会（以下文協ト略称）出版物配給調整規程第九条ニヨリ毎月其取扱ニ係ル軍用図書類ノ品名、型、数量ヲ個々出版業者別ニ表示シ之ヲ文協ニ報告スルコト

一、取引ノ細目ニ付テハ日配業務規程ニヨルコト

<sup>29</sup>『資料年表日配時代史―現代出版流通の原点』前掲注一九、二七〜二八頁。

<sup>30</sup>日配南方出張所設置要綱（一九四三年三月）

一、日配南方出張所は軍官の指導監督の下に大東亜共栄圏新文化建設を理想に日本政府の文化政策に則り、共栄圏全域に亘る日本出版物の適正なる普及並に現地出版文化の向上に協力し以つて諸民族の文化的発展に資するを目的とす。

一、南方出張所設置予定地左の如し。

占領地区

1 香港地区

香港

2 馬來地区（マレー）

昭南（シンガポール）

3 スマトラ地区

パレンバン及メダン

4 ジャワ地区

ジャカルタ、スラバヤ

5 ボルネオ地区

クチン及びバンヂェルマシン

6 比律賓地区

マニラ及びダバオ

7 ビルマ地区

ラングーン

8 セレベス地区

マカツサル

9 セラム地区

アンボル

10 ニューギニヤ地区

未定

第三国地区

1 仏印（ベトナム）

河内及西貢（ハノイ及びサイゴン）

2 泰（タイ）

盤谷（バンコク）

註、南方各出張所夫々の管掌範圍細目制定に関しては軍官当局の指示並に現地事情精査の上之を決定するものとす。

一、南方出張所は左の事項を管掌すること

1 現地軍、官との連絡に関する事項

2 防諜、宣伝、宣撫等に関する現地軍、官への協力に関する事項

3 諸般文化的調査に関する事項

4 出版物末端配給機構の整備強化に関する事項

5 末端配給機構に対する出版物の一元配給に関する事項

6 現地事情に応じ現地軍、官への出版物納入に関する事項

7 宣伝、宣撫用刊行物適正配給に関する事項

8 新聞社配給網及之に准ずる配給網との連絡並に之が活用に関する事項

9 現地出版物仕入配給に関する事項

10 現地事情に応じ小売業務に関する事項

11 本項目5、至10に関する一切の取引業務

12 其他当局が必要と認められたる事項及文化工作に必要と認むる事項

一、出版物は取扱方法に依り左の種類に分類し、夫々販売価格を現地軍、官の了解を得て

制定するものとす。

第一種 軍用図書及其他現地軍、官の必需出版物

第二種 一般出版物

第三種 官報、週報、写真週報、内閣印刷局刊行物等及官庁出版物

第四種 教科用図書及之に准ずるもの

第五種 情報局の認むる宣伝、宣撫用刊行物

第六種 現地出版局

第七種 其他

『出版普及 第三卷六号』（日本出版配給株式会社、一九四三年三月一日）

<sup>32</sup>一九四三年に「栗石南方総局長は、セレベス島に赴任する一行と前後して、共栄圏各地の出張所視察に向いた（翌年の春まで）。日配の海外出張所の開設は、翌十九年にかけて一段落するのだが、当初の計画とちがった個所が二、三カ所ある。派遣員は数十名に及んだ」との記載あり。『資料年表日配時代史―現代出版流通の原点』前掲注一九、三六頁〜三八頁。

<sup>33</sup>セレベスでの様子については以下のような記述がある。

「要衝マカッサルにあるセレベス出張所は、通称マカッサル支店と呼んでいた。最初の所長は杉山一太郎という人だが、この人が開設任務を終わって帰国してからは、東条氏が所長となり、同地区の采配をふるっていた。といっても、現品の輸送が思うにまかせぬ事態となっていたので、肝腎の出版物配給業務を満足に行えるはずがなく、仕事らしい仕事などなかった。やれなかった。せいぜい現地軍の宣撫工作に協力したり、本店と情報連絡したりするぐらいのことだったろう。

セレベスは海軍司政区域で、米潜水艦が出没したりして危険度が高かったため、出張所の開設が遅れたのだが、東条氏と共にセレベス行きを命じられた者は竹原政之、上野政雄、加藤弥作、根本金光、千葉三郎、小原七郎の諸君で、このうち千葉、根本、小原の三人をのぞいては、とうとう現地に行かず仕舞いに終わったようだ。」<sup>34</sup> 莊司徳太郎『私家版・日配史―出版業界の戦中・戦後を解明する年代記』（出版ニュース社、一九九五年）九三頁。

<sup>35</sup>同行者は以下の通り。「第一次赴任者達は四月末、軍指定の小売店三越小売部、三省堂（以上昭南）、菊竹金文堂、丸善（以上ジャワ）、仙台の伊藤書店（ラングーン）等の一行とともに出発した。」『資料年表日配時代史―現代出版流通の原点』前掲注一九、三七頁。

<sup>36</sup>『資料年表日配時代史―現代出版流通の原点』前掲注一九、三二〜三二頁。

<sup>37</sup> 莊司徳太郎『私家版・日配史―出版業界の戦中・戦後を解明する年代記』（出版ニュース社、一九九五年）一〇四頁。

<sup>35</sup> 『資料年表日配時代史―現代出版流通の原点』前掲注一九、三六〜三八頁。

<sup>36</sup> 記事は以下の通りである。「共栄圏短信 日配マニラ出張所発／日配メダン出張所発」『新刊弘報 第二六号』（日本出版配給株式会社、一九四四年三月一日）／「共栄圏短信 南方文化の華咲く―日配クチン出張所座談会」『新刊弘報 第二九号』（一九四四年四月一日）／「共栄圏めぐり（一）―昭南の巻」『出版弘報 第三〇号』（一九四四年五月一日）／「共栄圏めぐり（二）―比律賓の巻」『出版弘報 第三一号』（一九四四年五月一日）／「共栄圏めぐり（三） 常緑の島―ジャワ・ジャカルタの巻」『出版弘報 第三二号』（一九四四年五月二一日）／「共栄圏めぐり（四） 湖畔の読者―スマトラ・メダンの巻」『出版弘報 第三三号』（一九四四年六月一日）／「共栄圏めぐり（五） 起ち上るお洒落民俗―スマトラ・バダンの巻」『出版弘報 第三四号』（一九四四年六月一日）／「共栄圏めぐり（六） 油田の郷―スマトラ・バレンバンの巻」『出版弘報 第三五号』（一九四四年六月二一日）／「共栄圏めぐり（七） 古の宝庫は開く―ボルネオクチンの巻」『出版弘報 第三八号』（一九四四年七月二一日）

<sup>37</sup> 古橋才次郎「出版兵站線の新しき認識と実践」『出版普及 第二卷一三号』（日本出版配給株式会社、一九四二年七月一日）

<sup>38</sup> 「陣中だより」『大日本雄弁会講談社社内通信 第八四号』（大日本雄弁会講談社、一九三八年四月一九日）

<sup>40</sup> 『資料年表日配時代史―現代出版流通の原点』前掲注一九、二二二頁。

<sup>41</sup> 「戦線の勇士が我が社の雑誌をどんなに待ち焦がれてゐるか！」『講談社内通信 第四五号』（大日本雄弁会講談社、一九三七年一月二五日）

<sup>42</sup> 寄贈書は『真実一路』『不惜身命』『同志の人々』を二〇部で、これをもとに兵士用の「戦線文庫」の設立が企画されている。「編輯室より」『兵隊 二七号』（南支派遣軍報道部、一九四三年一月一日）

<sup>43</sup> 中村徳郎（一九四三年六月二〇日 福岡県門司市大里御幸町）『新版 きけわだつみのこえ』（岩波書店、一九九五年二月）二二八〜二五三頁。

<sup>44</sup> たとえば、南京到着後はじめて購入した書籍は、河合醉茗『醉茗隨筆』、芹沢光治良『愛と死の記録』である。平田守衛『馬・船・読書―私の戦陣日記』（平田守衛・一九八二年七月）

<sup>45</sup> 沖田信悦『植民地時代の古本屋たち―樺太・朝鮮・台湾・満洲・中華民国―空白の庶民史』（寿郎社、二〇〇七年二月）

<sup>46</sup> 一九四二年九月六日の記述。「ある寄港地の近くの駅前で小さな本屋に御著「祖国愛と科学愛」を見つけたからです。近頃のパンフレットの様な見栄えのしない表装のあの本も、

汚い古本の中にあつたのですぐと目につきました。』『きけわだつみのこえ』（岩波書店、一九八二年七月）九七〜九九頁。

<sup>51</sup>鶴見俊輔、上野千鶴子、小熊英二『戦争が遺したもの』（新曜社、二〇〇四年三月）一九〇〜一九一頁。

<sup>52</sup>松本は、中国・アジアにおいて日本によって略奪された図書の足跡を追うなかで、政府機関だけではなく「私人」によっても図書の略奪が行われていたことを指摘している。松本剛『略奪した文化』（岩波書店、一九九三年五月）六七頁。

<sup>53</sup>瀬田萬之助「一九四四年三月五日付両親宛書簡」前掲注四四、三二七〜三三〇頁。

<sup>54</sup>細田寸海子『ある農村少女の戦争日記』（一草舎出版、二〇〇七年六月）一四三〜一四五頁。細田は、大正一三年生で、実科中等学校を卒業し、戦中に満洲視察団へ参加している。

<sup>55</sup>一九四〇年 岩波文庫二〇点、各五千部

志賀直哉『小僧の神様』『万暦赤絵』、夏目漱石『虞美人草』、徳富健次郎『黒い眼と茶色の目』、徳田秋声『あらくれ』、泉鏡花『注文帳・白鷺』、永井荷風『おかめ笹』。中勘助『銀の匙』、ハドスン『緑の館』、トウエン『王子と乞食』、ウェブスター『あしながおじさん』、トオマ『悪童物語』、バルザック『知られざる傑作』、メリメ『コロンバ』、ドーデー『陽気なタルタラン』、ジオルジュ・サンド『愛の妖精』、フローベール『三つの物語』、プーシキン『大尉の娘』、アラルコン『三角帽子』、スピリ『アルプスの山の娘』

一九四二年 一〇点、各一万部

森鷗外『高瀬舟』、幸田露伴『五重塔』、尾崎紅葉『二人女房』、国木田独步『武蔵野』、島崎藤村『千曲川のスケッチ』、泉鏡花『歌行燈』、パウル・ハイゼ『忘れられた言葉』、ヘッセ『漂泊の魂』、ラファイエット夫人『クレーヴの奥方』、スタンダール『カストロの尼』  
『岩波文庫総目録1927-1987』（岩波書店、一九八七年七月） Ⅲ頁。

<sup>56</sup>浅野晃「現地と書物―ジャワより還りて―」前掲注二二。

<sup>57</sup>岡本太郎は「戦地の読書」『出版ニュース』（出版ニュース社、一九五三年九月）

<sup>58</sup>栗原悦蔵（大本営海軍報道部課長）「海軍軍人と読書」『新刊弘報 第八号』（一九四三年九月一日）

<sup>59</sup>谷萩那華雄（大本営陸軍報道部長・陸軍少尉）「陸軍軍人と読書」『新刊弘報 第一号』（一九四三年一〇月一日）

<sup>60</sup>井上ひさし、小森陽一『座談会昭和文学史 三』（集英社、二〇〇三年一月）七二〜七四頁。井上は戦後、泉貨紙で作られた戦地用荷風本を見たと言っているが、現時点では確認は取れていない。



\*本章における『出版普及』『新刊弘報』『日配通信』の引用は『出版流通メディア資料集 成(二)―戦時日本出版配給機関誌編 第一巻―第一二巻』(金沢文圃閣、二〇一三年五月―二〇一四年五月)の復刻版による。

また『大日本雄弁会講談社社内通信』『講談社内通信』は、講談社にて閲覧させていただいたものである。貴重な出版史料の保管および資料閲覧のご協力に、ここに記すことで感謝の意としたい。

## 第二章 戦時下の慰問出版文化―定着とその役割―

はじめに

戦場での読書に関する研究は、戦時下の出版史や文学史の一面を明らかにすることにつながっていく。第一章では、書物を入手するまでの様々な方法を説明してきたが、そうして入手された書物は、軍用図書、慰問雑誌、慰問書籍、そして新聞など多岐にわたっている。そのなかには兵士に向けて制作された慰問用の書物がある。こうした慰問用書物は戦場で兵士がどのように読書行為を行っていたのかを明らかにするための優れた手がかりとなる。

本章では、アジア・太平洋戦争下において、戦時下における将兵という読者の存在が、内地での慰問出版という出版文化の一形態を形作る契機となったことを明らかにしていきたい。

慰問品としての書物の発送の多くは、最終的に軍人の援護機関である恤兵部を介して行われている。書物が恤兵部にいたるまでには、様々な人々の慰問活動との関わりが浮かび上がってくる。まずは、軍人援護を担った恤兵部を介した各種軍事援護団体等による慰問活動から、書物を戦地へ送るといふ慰問活動が民間でどのように根付いていったのか考察を行っていく。

とくに第二節では、文学者による「前線文庫」の活動を取り上げる。木村毅の提唱した「前線文庫」は文学者による初めての大規模な戦地への書物の発送活動である。なぜこうした活動が行われたのか、第一次世界大戦や第二次世界大戦における諸外国の書物による慰問活動を考察することで、「前線文庫」を企画した木村毅の戦略を考えていく。

さらに第三節では、出版社による慰問雑誌の刊行に注目する。慰問活動と商業活動が接続することで可能となった慰問出版文化の特徴について述べていく。また第四、五節では、慰問雑誌のひとつとして『兵隊』と『陣中倶楽部』の二つの雑誌を取り上げ、その読者層や軍における兵士の教育装置として、戦地での読書が認められていたことを明らかにしていく。

### 第一節 慰問用書物の組織的発送による定着

まずは、慰問品としての書物の発送が、どのような団体や組織によって行われていたのか、発送状況や発送された雑誌を中心に考察を行っていく。慰問品のひとつとして書物、とくに雑誌が浮上してくる背景を考えることで、慰問文化のひとつとして戦場への書物発送のネットワークが根付いて行く過程を確認していきたい。

兵士に対する慰問活動は、陸海兩軍に設置された恤兵部を中心に行われている。恤兵とは、「金銭や品物などを贈って、戦地にいる兵士を慰問すること」で、恤兵部は慰問品の発送だけではなく、遺族の扶養援助や傷痍軍人、帰還兵の援助などを担う組織である<sup>20</sup>。その活動のひとつに慰問品の管理があり、慰問袋の減少や慰問品の内容が問題となっていたことを、恤兵部作成の報告書からうかがうことができる<sup>21</sup>。海軍省恤兵部による慰問袋受理数調査<sup>22</sup>からは、一九三七年一月二月に慰問袋数は一四万八六三一まで増加するものの、翌月から五万五六八三と三分の一に転じ、七月には二万七一五八まで下降をつづけていることがわかる。それに伴い新聞や雑誌で慰問袋の発送が喚起され、慰問文の書き方指導にはじまり、季節のものや玩具、雑誌を送ることが推奨されている。

『家の光』にて行われた帰還兵士の座談会では、慰問品に対する兵士の複雑な心情が述べられている。慰問品は嬉しいものではあるが、玩具はかさばる可能性があり、食べ物は到着までの時間によっては腐敗してしまうなど、不便な状況が嘆かれる。兵士の慰問袋に対する要望はすべてが解消されることはないが、「月遅れの古いものでも大丈夫」で、「いくら来ても喜ばれ」る書物は、内地の発送者が読了後のものを送ることができるという点からも、優れた慰問品として奨励されていくようになる<sup>23</sup>。

慰問品としての書物の重要性を受け、恤兵部は軍事援護団体に向けて慰問袋に入れるべき読物の指導を行っている。送るべきものとして指導されたのは、「余り堅くない肩のこらぬ様な爆笑以て疲れを癒し心を和かならしむる様なユーモア」小説や「一寸の休憩時間にも片付けられる様な短篇の読切小説」、「銃後美談」であった<sup>24</sup>。陸軍省選定の慰問袋に関する標語八種では、「読物は、短編物でユーモアを<sup>25</sup>」が選抜されており、戦闘の合間や駐屯地の警備の余暇に行われる読書に適した書物として、恤兵部では「ユーモア」を重視した読物が好まれていたことがわかる。

慰問用書物の戦地への大規模な発送活動は、後掲の【図一】「書物慰問に関する新聞記事一覧」<sup>26</sup>から、一九四三年の時点で途絶えていたと考えられる。ただし、残されている慰問雑誌や記録からは、小規模な発送は輸送が本格的に困難になっていく一九四四年頃まで継続されていたと推測される<sup>27</sup>。

そもそも、戦地へ向けた書物の発送活動は、アジア・太平洋戦争から始まったわけではない。早くは一九一八年のシベリア出兵の際に、日本図書館協会や満鉄大連図書館による慰問用書物の募集や発送が行われたことがあげられる。その後、日本図書館協会や満鉄図書館は、一九三一年、一九三七年と戦争の開始に伴い慰問用書物の募集・発送を行い、発送総数が数万冊になるほど規模を拡大させていく<sup>28</sup>。しかし、日本図書館協会が慰問品として発送する書物の総数は、一九三八年度に一四一冊（書籍・雑誌合計）と急激な減少

をみせる。書物の發送量の減少原因としては、書物の収集方法が変更され、購入資金募集へと転換したことも関係しているだろうが、それでも購入した新刊書籍は三二〇冊に過ぎない<sup>12</sup>。

図書館による書物發送の急激な減少の理由として、軍人援護団体など他の団体による慰問用書物の募集・發送が増加し、書物の發送が慰問活動として根付いたことよって、發送元が分散した可能性が考えられる。なかでも多くの發送を促した団体として、出征将士新聞雑誌慰問会と称した慰問用の専門団体の成立が挙げられよう。出征将士新聞雑誌慰問会は、一九三九年十二月に徳富猪一郎を会長、鈴木一馬（陸軍中将）、関根郡平（海軍少将）、各新聞社社長を理事に迎え、寄付金の受付、そして新聞や雑誌の寄贈受付と發送を行うことを目的に、鳴り物入りで設立された団体である<sup>13</sup>。

この慰問会は、一九四二年五月末の時点で一四七万八〇七七部を戦地へ送り、一〇万六〇七二円二八銭の寄付金を集めている。また慰問会が寄付者に配布したと考えられる「成績概要書」には、寄贈先部隊として「北、中、南支各派遣部隊、満州派遣軍及仏印等大小部隊、海軍各軍艦及陸戦隊」が明記され、陸海軍双方の戦域に新聞や雑誌が寄贈されていたことがわかる。慰問会への寄付は個人・団体ともに受け、寄付を行う際には、發送先や雑誌・新聞の指定や寄付者名の捺印のもと、慰問会によって各部隊へと送られている。さらに「出征将士新聞雑誌慰問会趣意書」からは、戦場に適した読物として、娯楽小説だけではなく、郷里の雰囲気や出来事などのニュースを伝えるメディアとして、新聞や郷土雑誌などが兵士から必要とされていたことがわかる<sup>14</sup>。また慰問会は、『比島作戦従軍記 星条旗墜ちたり』<sup>15</sup>などの従軍記を執筆した寺下宗孝に依頼し、慰問書籍として『前線慰問笑話短篇集 笑鷲隊員の日記』<sup>16</sup>の刊行にも着手している。

さらに、各県の図書館や市区町村に設立された愛国婦人会や軍人援護会、軍人後援会などの軍事援護活動団体でも、慰問用書物の募集・發送や独自に編集された慰問文集や慰問雑誌の發送が行われるようになる<sup>17</sup>。

たとえば、県の軍人援護会や軍事課では『銃後の大阪』『銃後の埼玉』という名の慰問雑誌が制作されている。現在のところ、横浜、大阪、埼玉、愛媛の四県の慰問雑誌を確認するのみではあるが、これら「銃後の」と名付けられた雑誌シリーズは、他の慰問雑誌よりも比較的多く文学作品が掲載されている点に特徴があり、谷崎潤一郎「港の人々」の再録のほか、井伏鱒二、白井喬二、三上於菟吉、細田源吉などの作品が掲載されている。また、大阪市役所市民局軍事課にて発行された『銃後の大阪』は、第一報や第二報では東区版や北区版など各区の情報部分を変更し、一五種類の雑誌が作成されている。現時点では不明な点も多く、今後その刊行経緯などを探っていく必要がある<sup>18</sup>。

各県の愛国婦人会でも、宮城で雑誌『愛国婦人』（二一〇〇部）、山形で「皇紀貳千六百年郷土たより」（鶴岡市銃後援奉公会）、茨城で雑誌『日の出』、福井で『サンデー毎日』、広島で『愛国婦人』、山口で郷土新聞『防長新聞』『関門日々新聞』などを発送したとの記録が残されている<sup>16)</sup>。

愛国婦人会は、戦死者遺族や傷病兵の救援や慰問などを行う団体として、一九〇一年に奥村五百子を中心として設立され、日本国内と台湾に支部を設け活動が行われている。機関誌『愛国婦人』（二一二号）には、「皇軍慰問号」として「郷土だより」や「慰問文芸」、「漫画紙上演芸慰問隊」（新漫画派集団）といった兵士に向けた読物が掲載され、誌面には「皇軍慰問品に『愛国婦人』を御送り下さい」という言葉とともに、差出人の住所氏名記入欄が設けられ、「陸軍恤兵部」または「海軍恤兵部」への寄贈方法が明記されている。

『愛国婦人』誌面では、戦地への書物発送を求めするため、兵士は銃後からの「たより」を待つており、雑誌は「個人のたよりに書けない程沢山」の銃後の様子を伝えられるものであるから是非とも送って欲しいと述べられている<sup>17)</sup>。実際に「郷土だより」には福井、岩手、東京、熊本と全国各地から戦地の親族へ向けた書簡が掲載されてもいる<sup>18)</sup>。本来の受取人に雑誌が届けられる確率は低いだろうが、多くの慰問雑誌に掲載されている個人宛書簡は、慰問雑誌というメディアによって、不特定多数の兵士の読む「たより」へと変化していったと考えられよう。「読者の声」には、慰問品として『愛国婦人』を受けとった中支派遣軍の兵士からの札状も掲載され、「たより」として慰問雑誌が機能していることを確認できる<sup>19)</sup>。

『愛国婦人』にとどまらず慰問雑誌には、決まって「郷土だより」や「陣中慰問文」といったコーナーが設けられている。戦時下において慰問文は兵士への慰問活動の重要なツールとなっている。慰問文を書くための見本書が続々と刊行され、学校内などで慰問文が盛んに推奨されるのも、多くの兵士が求めていたことに加え、銃後の時局認識を養う意味でもそれが効果的であったからだ。

学校通信用小冊子には、銃後の子どもの言葉を追加掲載することによって、戦地の卒業生へ送付するための慰問用冊子へと変貌をとげている例をみつけることができる<sup>20)</sup>。こうした編集の転換は、学校の冊子だけではなく、宗教団体や警察組織などで作成される冊子にもみられる。そしてこれら冊子には、慰問文だけではなく、「銃後美談」や「川柳」「短歌」「俳句」などの創作も掲載されるようになる<sup>21)</sup>。慰問文は慰問雑誌へと掲載され、発送されることによって、個人的な文章でありながら、兵士という大多数へ向けたものへと変化していき、その延長線上に兵士へ向けた「銃後美談」や小説作品が誕生していく。

学校や各種団体における慰問雑誌の作成は、慰問文の執筆から派生した活動ととらえる

ことができよう。慰問品として書物を送る試みが拡大していく途上に、慰問文の重要性が加わることで、兵士専用メディアを制作するという活動が芽生えていく。慰問としての書物の発送から慰問用の書物の制作開始という流れは、のちに述べる講談社等の出版社にも生じている。こうして慰問用書物の戦地への発送は大衆を巻き込みながら、慰問活動の波のひとつとなっていたのである。

## 第二節 文学者による「前線文庫」活動

本節では、兵士への書物発送の初期に行われた文学者による「前線文庫」活動について考察を行っていく。はじめに第一次世界大戦時の海外における慰問用書物の発送や慰問文庫の設置の様子を確認し、それら活動に影響を受けた木村毅の「前線文庫」の提案に検討を加える。木村の用意周到な時局への目配りによって、戦地の兵士へ書物を送る活動が成功したことを確認していきたい。

E・M・フォースターは、『改造』に掲載された「戦争と読書」のなかで、第一次世界大戦における兵士の読書を次のように振り返る。

戦争とは、たたかふことばかりではない。待つこと——なんにもしないで待つてゐることも戦争である。おそらく、これからのわれわれには読書する時間がたくさんあるだろうと思ふ。これは戦線にゐる兵士だつて、おんなじだ——この前の対戦のときは、塹壕のなかでさかんに本が読まれたものだつた<sup>24)</sup>。

第一次世界大戦における戦争の長期化は、フォースターが述べたように、戦地での兵士の書物需要を生み出すこととなった。アメリカ、イギリスを中心に各地で行われた戦場での読書は、日本へと伝わっていく。

たとえば、日配の広報紙である『出版弘報』では、日本国内での将兵への書物輸送を促進するために、海外での慰問活動がまとめて紹介されている。イギリスで行われたのは、療養所への文学書供給が行われたH・M・ギヤスケルによる「戦争図書館」、組織的な輸送を実施したエドワード・ウォード及びエヴァ・アンストルーサーによる「出征兵図書館」、アルフレッド・T・デイヴィスによる「出征兵教化部」、そしてYMCAによる活動である。

そして、アメリカでは、アメリカ図書館協会による大規模な組織的慰問活動の様子が伝えられる。世界最大の図書館協会であるアメリカ図書館協会は、一九一七年にイギリスやフランスに駐在する将兵へむけて書籍、雑誌の輸送を開始し、その数は一千万冊にもおよんだ。数種類の慰問用の書物募集ポスターが作成され、大々的に寄附が募られていく。

この『出版弘報』での第一次世界大戦下のアメリカとイギリスにおける書物慰問活動の様子を紹介する記事は、その内容の共通性から、山積みの本を抱えた兵士を描いたインパクトのあるポスターを表紙に据えたセオドア・ウェズリー・コッホ『戦地の書物（一九一九年）』や、アメリカ図書館協会によって作成された戦地の書物発送に関する報告書等を参照していると考えられる<sup>256</sup>。

書物による国際的な慰問活動に触発され、日本において一九三七年七月七日のアジア・太平洋戦争開始以降、兵士という読者の問題をいち早く前景化したのが、文学者の木村毅である。戦場への書物発送の必要性を説いた記事「前線文庫を送れ」は、従軍記者として上海に出発する前に書き起こされ、八月二〇日、二一日の二日にわたって『東京日日新聞』の夕刊に掲載されている。木村は第一次世界大戦時にハンブルグ市内にあったドイツ文豪記念財団によって行われた書物の寄付活動である「塹壕文庫」を参考に、「前線文庫<sup>257</sup>」企画を提唱する。そして具体案として、「各文学者から自著三冊乃至五冊」、「出版書肆からは百冊乃至五百冊の寄贈」を求め、文芸家協会の会長「菊池寛氏が一肌ぬぎ、講談社、新潮社、中央公論社、岩波書店、東京堂などの責任者」が協力すれば、「最小限度の費用で、直ちにまとまる」との考えを示していく。

その結果、早くも九月三日には文芸家協会理事会で木村の案が承認され、各文学者や新聞社、出版社による宣伝・協力のもと三ヶ月で一萬二千冊を戦地へ発送することとなった。具体的には、「菊池寛、長谷川伸、岡本綺堂、辰野九堂、林芙美子、山崎斌<sup>258</sup>」ほか、二三人の作家が各々の小説を百冊程寄贈し、「千数百冊がたちどころに」集まる成果となる。さらに「誠文堂新光社の六百冊、双雅房、文体堂の百冊、川柳研究社の五十冊<sup>259</sup>」など、出版社からも寄贈が行われ、一文学者の提唱が、大きな慰問活動のきっかけとなったのである。提案からわずかな期間での実現は、木村の戦場での読書に対する具体的かつ現実的な提案が、功を奏した結果と言えよう。実現に向けて木村は、陸海軍の協力体制や選書方法、兵士の読書欲求の明確化、文学者の思想問題など、戦場へ書物を送るうえの問題に検討を加えていく。

まず、「読書の制限がある」軍隊に書物を送るための方法として、「予め鑑選者」として「文壇で兵の経験ある人」を任命し、「出版著作目録にマークをして、そのみの寄贈を受け」付けることで選定問題の解消を目指す。実際の具体的な選書方法は不明だが、陸海軍を通じて発送が行われたことから考えても、協力体制が敷かれていたことが予想される。

しかし制約をはっきりと意識しながらも、木村の要望した書物は、恤兵部が提案する娯楽やユーモア読物に収まることはなかった。木村は戦場にする「書物の程度は三十冊一組の中、二十冊までは通俗のもので」いいが、その他「文学書以外に数学、科学、宗教の書物もあつた方がいゝし、支那に関する地理書」を送ることも良いと述べる。それは、教育

機会の増加により、日本兵の文化水準が上昇し読書の欲求が増加していること、また戦地で木村が「あたりまへなら読みはしなかつたであらう本まで読んだ」経験をもとに、「書物の選択は決して兵の現在の嗜好に媚び、迎合する必要は些とも無い」と考えたからであった<sup>280</sup>。実際の発送リストを確認することはできないが、木村の発言からは発送された書物が恤兵部の求めるユーモア読物にとどまっていなかったことがわかる。

なにより、木村が「前線文庫」実現の「根本問題」として、文学者の思想的立場の問題を挙げ、「思想的立場はどうあらうと、前線で百三十度の炎熱下に敵と戦つてゐる兵への感謝と同情は同じでなければならぬ」と指摘したことは、多くの協力者が集まるきっかけとなつたのではないか。「前線文庫」は、開戦に伴う慰問活動の要請に戸惑う文学者や出版社が、執筆や出版活動によつて直接的に戦争に協力する意志を示すことなく、間接的に協力を果すための代替となり得たのである。

さらに書物を兵士へ送るといふ行為は、「兵への感謝と同情」を示すだけでなく、国際的な政治運動としての意味をはらんでいた。アメリカでは第一次世界大戦時の兵士への書物の輸送と同時に、捕虜収容所へと書物が送られている。一九一九年に出版されたセオドア・ウェズリー・コッホ『戦地の書物』<sup>281</sup>では、読書によつて多くの捕虜が、監視下にある精神的抑圧から逃れ、心理的かつ学力的に「成長」していく例が幾通りにもわたって紹介されている。また、一九三三年のナチスによる焚書は衝撃をもつて受け止められ、連合国では書物保存や兵士への書物発送活動が盛んとなつていく。一九三四年の春には、H・G・ウェルズによつてパリに「焚書図書館」が設立され、ナチスによつて禁止された書物の保管活動も始動している<sup>300</sup>。

木村の提案時期とは前後するが、その後の国際的な書物によるパワーポリティクスが良くなる例として、一九四一年以降のアメリカ図書館協会による兵士への書物の募集活動が、レーガンの「焚書で本は殺せない (Books cannot be killed by fire.)」というスローガンのもと大々的に開始されたことも挙げられよう。

このような世界的な兵士への書物供給の動きやナチスの焚書に対する批判を考えたとき、木村毅が意識的にアメリカやイギリスにおける書物慰問への言及を避け、ドイツにおける「前線文庫」の活動を参考として掲げたことは想像に難くない。木村毅の軍部への用意周到な目配りによつて「前線文庫」は開始されたのである。

だが、文芸家協会自体はその後書物による慰問活動よりも、従軍協力や文芸銃後運動に活動の中心を移し、直接的に人物が移動することに強い意味が見出されていく。ただし文学者のなかには書物を戦地へ送ることに対して、より強い意義を見出していく作家も存在した。山本有三は、広東の兵隊用娯楽室へ自著を寄贈し、長谷川伸は兵士用豆本の制作を



開始している<sup>32)</sup>。また長谷川時雨を中心とした輝ク部隊によって行われた現地慰問や慰問文集、雑誌の作成は、規模も大きく軍の主導によってなされたものであった。このように文学者の書物による慰問活動は、確かに継続して行われていく。

さらに「前線文庫」の登場は、文学者の創作意識に影響を与えることにもなった。岡本かの子や伊藤整は「前線文庫」へ送るための選書を通して、自らの小説が戦場で読むべき書物として適しているのかという問題に向き合うこととなった。その結果、岡本は書物の選出に悩みつづけ、さらに伊藤整は執筆内容への違和を感じ、創作活動に困難が生じていることを告白している<sup>33)</sup>。兵士という読者が可視化されたことによる創作意識の変化は、岡本かの子や伊藤整だけではなく、今同時代の文学者に与えた問題としても考えていくことができるだろう。

### 第三節 慰問用書物の商品価値

戦時下の出版好況において、慰問用書物、とりわけ雑誌は重要な役割を果たしてきたと考えられる。本節では、出版社が書物を戦地へ送るということに対してどのような反応を示してきたのかを追うことで、慰問雑誌の出版背景やその商品価値を明らかにしていきたい。

前節で引用したE・M・フォースターは、第一次世界大戦について「こんどの戦争は、「本にとつてはありがたい戦争」だと、あるひとの言つたのを聞いたことがある<sup>34)</sup>」というある人物の言葉を引用する。「ありがたい」の意味は定められていないが、読書行為への希求や読者数の増加など、戦時下に質・量ともに書物需要が高まったことを伝える言葉であろう。非売品の慰問用書籍や雑誌が作成され、募集活動によって集められた書物が戦地へと送られていたことをこれまでに確認してきたが、本節ではさらに戦場という〈読書空間〉における将兵という読者によって引き起こされた慰問用書物文化について考察していきたい。

多くの出版社のなかで、慰問としての出版活動をいち早く重視し始めたのは、大日本雄弁会講談社である。講談社の社内通信では、一九三七年七月三十一日に『キング』夏の増刊号が内地の人々に兵士の慰問用として人気となっていることが報告されている<sup>35)</sup>。そして、一九三七年一〇月の社内通信では、「戦線に読まれる我が社の雑誌」と題して、木村毅、吉川英治、報知新聞記者が、『キング』や『講談倶楽部』などの雑誌が戦場の兵士に盛んに読まれていることを具体的な体験談とともに大々的に紹介する。これらの従軍記事以降、社内通信では毎号のように戦地での読書を伝える記事が掲載されていく。

社内通信において戦地にある書物は、どのように伝えられていたのだろうか。記事の変

	台湾	朝鮮半島	満州	中国
昭和5年	100	100	100	100
昭和11年	145	152	282	84
昭和12年	158	172	323	92
昭和13年	152	168	345	214

【図二】「外地」講談社雑誌売上げ伸び率  
\* 中国のみ昭和8年を基準としている。

昭和8年10月号	100
昭和11年10月号	96
昭和12年10月号	35
昭和13年10月号	350
昭和14年3月号	500

【図三】中国における講談社雑誌販売部数変化率

遷と特徴を追っておきたい。一九三七年一月には、盧溝橋事件からはじまる戦争によって、「雑誌輸送は一時中絶されて居」たが、戦況が落ち着いて来たことにより、上海居留地での雑誌売上げが好転し、今月号の娯楽物などの雑誌を送付するよう本社営業部へ依頼の電報が届いたことが報告されている。さらに北京や天津などでも、一度落ちた売上げが浮上する可能性を考え、「今後は本社としては雑誌書籍のみならず

彼地に向く適当な商品を研究調査し、その販路を開拓することも考へてよい事ではないかと思ふ」と外地での雑誌販路の拡大への意志を営業部が表明している<sup>370</sup>。

その後、一九三九年には先の記事の通り、外地での雑誌販売の拡大が営業部から報告されるようになる。「雑誌は大陸に伸びる」（五二号）では、台湾、満州、中国、朝鮮半島での雑誌売上げの伸び率が示され【図二】、次号では中国（上海、天津、北京）での雑誌販売部数の向上が経年変化で明らかにされる【図三】<sup>370</sup>。こうした雑誌

売上げの伸張を支えたのが、第一章にて述べた取次網の発展であり、外地書店の新たな開店であった。

社内通信の「陣中だより」と称された特集には、出征した社員による現地での講談社の雑誌流通に関する報告が多数掲載されている。伏字となっている地名もあるが、講談社の雑誌が流通していると示された場所は天津、済南、徐州などの北部から、武漢、上海、南部の広東まで中国大陸の全域にわたり、台湾や朝鮮半島の龍山陸軍病院からの報告もある。報告での言及がとくに多い雑誌は、やはり『キング』であり、付録の地図を称える兵士からの手紙などが紹介され、慰問品としての有効性がたびたび強調される。

社内通信で、外地書店の状況が事細かに知らされていることは貴重な証言だと言えよう。一九三八年四月には、日本堂という書店が開店した際に、定価より十銭高いにもかかわらず、『講談倶楽部』『富士』は将兵によって数日で売り切れてしまったことが伝えられてい<sup>370</sup>。

翌年には、出征した社員によって、徐州や漢口など北部・中部での書店開店の様子が伝えられ、また二〇〇人ほどの居留者がいる北部の都市にある文化堂書店では、二〇〇人余りの定期購読者がいるという読者状況が報告されている<sup>370</sup>。さらに社内通信では、漢口

堂書店（漢口市中山路百五十四号）店主の安保信太郎が、開店第一日の状況を、取次の大東館支配人に伝える、次のような書簡が紹介されている。

拜啓 二月八日、小店開店の状況を御知らせ致します。一昨日特務部の許可を願ひまして上海からの荷物を日清汽船会社から受けとり本日堂々開店しました。朝七時半頃店を開くと同時に、あの賑やかなキング講談倶楽部、富士、婦人倶楽部等貴店から送つて戴きました幟を表の舗道にお祭の様に立てました。すると忽ち海軍、陸軍の兵隊様がどやどやと二、三十人押しかけて来ましてキングだ、富士だ、講談だ、次から次へと買つて下さいます。かくしてとう／＼午後四時頃までお客様が引きつゞき押しかけまして朝飯を食べる事もできずに、本当にキリ／＼舞で開店第一日を午後九時にしまひました。御送本願つた中のキング、現代、雄辯、全部たつた一日で売切れました。

明日は富士の増刊を売る考へです。漢口では本屋専門店は私方一軒で兵隊様方にとつても喜ばれ、どし／＼本店から取寄せて下さいよ、参月号も必ず買ひに来ますよといふ有難いお言葉を残して帰へられます。私もこのお客様方の御希望に副ふやうに一意専心奮闘努力する考へで御座います。元は開店一日の情況お知らせ労々と貴店の御発展をお祈りし今後とも宜しく願ひ申し上げます。 安保信太郎

大東館支配人様 外御一同様 侍史（営業堀江）

	愛屋書店	興文堂書店	合計
キング	700	150	850
富士	500	40	540
講談倶楽部	500	40	540
婦人倶楽部	200	50	250
少年倶楽部	50	15	65
少女倶楽部	50	15	65
幼年倶楽部	50	15	65
雄辯	50	15	65
現代	50	15	65
	2150	355	2505

【図四】 済南における講談社雑誌別売り上げ率

将兵に対して、講談社の雑誌がどれほど人気を博していたか、その興奮が文面からうかがえよう。さらに同時期の済南での書店状況を伝える出征した社員からの報告もある。報告されているのは、愛屋書店（済南二大馬路）と前年七月に開店したばかりの興文堂書店についてである。愛屋書店店主は一九一四年に済南へ移住し、二七歳でありながら済南書店組合の役員を務め、店内には一三四年に講談社から贈られた感謝状が掲げられていたという。社員の板橋五郎丸は、二店の販売部数を調査し【図四】、その傾向を「子供物や婦人物が割合に少いのは、居留民にまだ落着が無いため、内地から家族を呼んでゐない」といった店主の声を紹介して分析している。

こうした社内通信の記事からは、一九三九年の時点において、兵士でありながら出版社の社員として、戦地で

の営業活動を報告するという講談社独自の特徴を見出すことができる。「去る三月二十七日、徐州〇〇へ連絡の途次、『キング』の幟を見ましてなつかしく存じ、済南にて二時間の列車沫時間を利用して、歩兵軍曹は講談社員に早変わりして」という報告が象徴するように、「陣中日より」という形の社員報告は、外地での営業報告のような役割を果している。現に社内通信は、慰問品として雑誌が發送される際に同封され、戦地へ散らばる兵士に社員へと送られてもいる。こうした仕組みは、講談社という大規模な組織を持った出版社だからこそのできたことであろうが、兵士として出征する社員が、そのまま出版社の商圏の拡大へと貢献し、出版社の販売方針へ少くない影響を与えていたということがわかってくるのである。

感激と興奮を伝える戦場の読者からの声に対し、講談社は一九三七年には陸海軍病院へ約五万三千冊の雑誌・単行本等を送り、一九三九年には前線へ約一〇万冊、陸海軍病院へ約五万冊を送るなど、恤兵部を通じた慰問活動に従事している。だが講談社は書物を直接慰問として送る活動よりも、国内で慰問用として雑誌を販売することに尽力し、慰問用書物によって商業的利益をより一層得ることを目指していった。

そのために新聞紙上では『キング』『講談倶楽部』『富士』が慰問品に一番喜ばれるという広告が掲載され、外地地図や「戦線銃後笑の慰問隊」などの慰問用小冊子が付録されるようになる。佐藤卓己が「皇軍慰問面白大会」や「皇軍慰問演芸大会」などの慰問向けの編集が『キング』でなされていることを指摘しているように、誌面内容も前線／銃後どちらでも読むことができる内容へと手が加えられていく。さらに、一九四三年一月月号の『富士』と『講談倶楽部』では「前線慰安奉仕特大号」と銘打たれた慰問特集号が組み、表紙には「此の雑誌は必ず前線へお送りください」と呼びかけられるまでにいたる。

書物の慰問品としての役割に商品価値を見出したのは、講談社だけではない。主婦之友社や中央公論社、文芸春秋社等では臨時増刊という形で前線／銃後で読める雑誌を刊行し、『サンデー毎日』や『週刊朝日』といった週刊誌は戦地へ送るよう推奨されている。一九三九年一月二五日の『東京朝日新聞』には、取次の栗田書店が『皇軍慰問図書目録』の広告を掲載させているように、慰問用書物が出版物の種類として認識されていることがわかる。さらに、一九三七年一月二月には、慰問用出版の急激な増加に対して雑誌協会へ用紙調整のため「臨時増刊制限」の要望が提出されるなど、出版社が慰問品としての書物を数多く出版していたことがうかがえる。



こうした臨時増刊による出版にとどまらず、慰問用の専門雑誌が創刊されてもいる。一九四一年九月に山下祝朗編集のもと、や



『純慰問雑誌 やまと創刊号』

まと出版社から創刊された『やまと』は、純慰問雑誌と銘打たれ、ユーモア読物や講談、慰問談などを掲載した雑誌である。この雑誌は小売店ではなく、全国各地の百貨店の慰問品売場を売捌所として販売されており、雑誌が慰問品のひとつとして定着していたことがうかがえよう。



『戦線文庫 七二号』

特殊な事例を挙げれば、戦地専用の慰問雑誌が形を変えて国内で流通することもある。海軍の要望によって制作された慰問雑誌『戦線文庫』（興亜日本社）は、戦地版に加え、表紙や内容に変更を施した「銃後読物」版を販売し、「十五、六万部」を売り上げている。『戦線文庫』は、

三萬五千部では  
足りません  
貫下も是非この  
一冊を慰問袋へ

發行と同時に、三萬五千部を陸海軍當局へ献納し、大變喜んで戴きましたが、とてもこれだけでは、出征戦士諸君の手には行渡りません。「兵隊さん有難う」の真心籠めて作った雑誌です。是非この一冊を、貫下の手で戦地へお送り下さい。兵隊さんのポケットへ入る大きさ、気楽な読物揃いです。

(只今發賣中)  
特價五十錢 強固三冊  
振替東京一七六〇三番  
文藝春秋社發行

グラビアに掲載される原節子や高峰秀子などの「アイドル」表象の変遷が押田信子によって研究されているように、娯楽色の強い雑誌であった<sup>46)</sup>。

そのうえ、『戦線文庫』は、雑誌『につぼん』として内容を修正し刊行されたこともあった。『戦線文庫』の編集者大島敬司の同級生渡辺登喜雄（名古屋新聞社）は、『戦線文庫』の表紙を変更し、口絵写真を名古屋中心に変え、「娯楽読物のなかの海軍色の濃いものは省いて」、「ローカルのものを加える」ことで、『につぼん』を刊行したと語っている。それは、「労せず」「原稿料などの節約もできて、すばらしい大衆誌ができると」考えたからであった<sup>47)</sup>。『戦線文庫』の「銃後読物」版と『につぼん』の関係は現時点では不明だが、慰問雑誌に乗じた極めて商業主義的な出版活動だと言えよう。

当時の慰問雑誌に対する発言において、菊池寛の『オール

読物』臨時増刊『皇軍慰問全集』の「発刊の挨拶」は、戦争開始以降の出版業界での慰問雑誌の隆盛とその重要性をよく伝えている。

雑誌を経営編輯する者は、その雑誌を通じて、各位の労苦をねぎらふことが、最も適し

い仕事だと思つた。普通号の編輯に当つてもさうした心構へが動いてゐない訳ではないが、さうした心構へのみで編輯したのが、この**皇軍慰問全集**である。戦場の伴たるべく、長陣の消閑読物たるべきあらゆる注意をした積りである。携帯の便を計つて版も小さくした。又皇軍慰問に名を籍りて、利益を計るべきではないと思つたので、発刊と同時に**三万五千部を陸海軍に献納した**。読者各位も、本社の微意を諒として、**一本を購入し、慰問袋に入れて下さることを切望する。**(太字原文ママ)

ここで菊池は慰問雑誌による利益を否定しているが、それは広告上の戦略と言えよう。なぜなら、文芸春秋は先の『戦線文庫』の刊行を通じて、特別に「用紙の配給」が行われ、「松本市にある海軍の印刷所の使用」が認められているからである<sup>99</sup>。海軍省から『戦線文庫』刊行の請負を依頼された菊池は、『モダン日本』編集部の矢崎寧之と大島敬司に興亜日本社を興させ、『戦線文庫』の刊行を任せることとした。用紙特配はこうした菊池の慰問雑誌事業に対する見返りだったのである。

また、用紙特配は『戦線文庫』だけではなく『陣中倶楽部』にも行われて、一九四三年には慰問用として**娯楽雑誌五誌**(『富士』、『日の出』、『講談倶楽部』、『文芸読物』、『講談雑誌』)に日本出版会による用紙特配が行われたことが発表されている<sup>100</sup>。

こうして戦場に読者がいるということをきっかけとして、大衆雑誌、総合雑誌だけではなく、婦人雑誌や青年雑誌、宗教雑誌、郷土雑誌、文芸雑誌などの分野で慰問用としての雑誌が刊行されていく<sup>101</sup>。出版業界における戦争参加のひとつのあり方として、慰問雑誌が注目されていくのである。すでに一九三四年四月から岩波文庫の帯紙に「慰問袋に岩波文庫」の標語が掲載されていたほか、前章で述べた陸軍恤兵部による一九四〇年と一九四二年の二回にわたる計二〇万部の岩波文庫の恤兵品としての提出も、そうした協力のひとつの現れであったと言えよう<sup>102</sup>。

戦場では確かにある種の読書が禁止されたり、読書自体が不可能な状況があったりしたことは事実である。恤兵部による一般市民への慰問用の書物募集も、一節にて述べたように大衆ものやユーモアものに限られている。

だがこれまでに確認してきたように、実際に送られた書物には、恤兵部の方針とは異なる傾向をいくつも見出すことができる。佐藤幸治は「支那事変の戦線でも子細に調べるならば殆ど凡ゆる種類の書物が読まれてゐるであらう<sup>103</sup>」と語っているが、戦場における(読書空間)には、こうして様々な書物が流通し、読まれる可能性があった。次節では、戦場に流通していた二つの雑誌を取り上げることで、軍において戦場での読書がどのように考えられていたのかについて考察していく。

#### 第四節 『陣中俱樂部』と『兵隊』

本節で取り上げるのは、『陣中俱樂部』と『へいたい』（八号より『兵隊』）という陸軍から発行された雑誌である。両誌とも一九三九年五月一日に刊行され、中国大陸前線地域に流通し、恤兵金によって賄われたという共通点がある。だがその一方で雑誌の成立や内容には異なる点が多い。本節では先行研究を参照しつつ、戦場での読書行為が禁止されるのではなく、兵士の教育のために許されてきたことを明らかにしていく<sup>14)</sup>。

まず両誌の成り立ちを簡単に示しておきたい【図五】。『陣中俱樂部』は、一九三九年二月に陸軍が講談社に慰問雑誌の編集委託を要請したことに始まる。翌月に委託が決定する

	陣中俱樂部	兵隊
刊行時期	昭和6年頃『恤兵』創刊	
	1939/02/21 陸軍恤兵部から講談社へ依頼	
	1939/03/07 編集正式決定	
	1939/05/01 『陣中俱樂部』42号 刊行	1939/05/01 『へいたい』1号 刊行
		8号『兵隊』へ変更
終刊	1944/11 109号	1944/05 39号
編集長	初代 尾張真之介／1940～ 木村喜市	初代～9号 火野葦平
発行	陸軍恤兵部	南支派遣軍報道部
編集	大日本雄弁会講談社	雑誌兵隊編集室
刊行頻度	月刊	月2回から、13号で月刊へ移行
運営	当初から恤兵金で運営	19430101(27号)で、恤兵金での発行を公表
販売	非売品	非売品(残部を10銭で販売)
流通	国内で印刷し中国前線地域へ輸送	広東で印刷し中国前線地域で配布

【図五】『陣中俱樂部』『兵隊』の概要

と、早くも五月一日には、それまでに講談社にて制作されていた雑誌『恤兵』を引き継ぐかたちで、四二号を創刊号とし『陣中俱樂部』が刊行される。刊行頻度は月刊、一九四四年一月の一〇六号が現在確認されている最終刊となる。編集は講談社、発行元は陸軍恤兵部である。予算は、編集費として三千元、原稿料は毎月千円となっていた。掲載作品には、講談社内その他雑誌で未掲載のままとなっていた作品に手を入れたものもある。また、用紙不足と統制によって、一般の雑誌の頁数が減少する状況に反して、『陣中俱樂部』は二百頁程度を一定して保っている。しかし、戦争末期には輸送状況の悪化から、印刷を行っても前線への発送が困難になっていったと伝えられている<sup>15)</sup>。

一方『兵隊』は、前年に芥川賞を受賞した火野葦平が編集長に就任し、広東にある南支派遣軍報道部で、編集が行われている。馬淵逸雄報道部長の斡旋により報道部へ転属した火野は、一〇月の広東作戦従軍後、編集に参加したと推測できる<sup>16)</sup>。

『兵隊』は、兵士による編集、広東での印刷に加え、兵士の投稿を募ったところに特徴がある。当初は月二回の刊行だったが、のちに月刊化し、戦況による休刊を挟みながら一九四四年五月の三九

号までが確認されている。

つぎに、二誌の誌面内容を確認したい。『陣中倶楽部』は、巻頭には女性のカラー写真を配し、二色刷りの漫画やコラムが並ぶ華やかな誌面である。なかでも巻頭にしばしば掲載された「陣中慰問オール演芸面白デパート」特集では、頁をデパートのフロアに例え、様々な催しものように落語や漫画やゲーム、クイズ、誌上紙芝居といった記事が並ぶ。他には、映画や川柳、相撲などのコラム、従軍作家を中心とした慰問記事や恤兵部作成の「銃後の赤誠」と称した献金美談、郷土日より、さらには時事問題の解説や兵士としての心構えを説いた記事などが掲載されている。とくに娯楽読物は掲載本数も多く、誰もが読めるように総ルビで読切短篇小説、講談、落語などが掲載されている。角書きをあげるだけでも、諧謔小説、時代小説、実話小説、評判落語、捕物帖、明朗小説、現代小説、偉人伝記、人傑小説、逸話物語、映画物語、ユーモア・コントなど多岐にわたる<sup>17)</sup>。

こうした作品群には、邦枝完二「攘夷夜話<sup>18)</sup>」のように、時代小説に描かれる戦いを読者（兵士）のいる戦場のアナロジとして描く作品や「慰問団の来る日<sup>19)</sup>」のように戦地の状況を描いたものもあるが、直接的に戦闘場面を描くものは少ない。それに対し陸軍恤兵部による「銃後の赤誠」記事のような、銃後での献金や子供による美談を描いたものは数多く掲載されている。

また現代小説では、戦争を境に変化する人々の状況や感情が描かれ、とくに諏訪三郎「勇士村に還る」、鹿島孝二「帰還の春」のような帰還兵を描いた作品が多いのが特徴的である<sup>20)</sup>。なかでも、短篇中心の『陣中倶楽部』で「特別長編読切」と銘打たれた大林清「帰還兵」は、慰問文を送った女性をめぐる恋愛模様が展開されている。こうした帰還兵を描いた作品は、戦地で読む兵士に帰還後の生活を想像させる役割を担っていたと言える。記事にも、「傷痕軍人結婚相談所を訪ねて<sup>21)</sup>」（特派記者）や「第二の戦に備ふる傷痕の勇士誌上座談会<sup>22)</sup>」など、より具体的に帰還後の兵士の様子が伝えられていく。

『陣中倶楽部』の小説のなかでも、探偵小説やスパイ小説は『兵隊』の方には掲載されることのない独自のジャンルである。「スパイ小説 秘密通信<sup>23)</sup>」は、刑事となった帰還勇



『陣中倶楽部 八一号』



『兵隊 三七号』



士が、美人タイピストによるスパイ事件を解決する小説であるが、同号には陸軍少佐による「戦地に躍るスパイ」が掲載され、より巧妙なスパイ問題についての注意が促される。コラムを小説と並列することによって、スパイ問題を読物として楽しんだ後に、現実のスパイ問題に関心を向けさせる仕組みとなっている。さらに「スパイ小説 悪夢」では、作者の野澤純自身が、「一篇の小説に過ぎない、と思つてゐる以上の、巧妙な、巧妙にして油断ならざる事実が、この世の中には、ざらにある（傍点ママ）」と「前書」で述べているように、スパイ小説は現実のスパイ問題を考え、学ぶための足掛かりとなっている。読者のひとりである友松圓諦が、「戦場は修養の道場である」と述べているように、スパイ小説を娯楽として享受しつつ、現実のスパイ問題にも向き合うという学習の役割を『陣中倶楽部』は担っている。いわば、『陣中倶楽部』は『キング』で謳われた「おもしろくてためになる」娯楽と修養を併せもった慰問雑誌であると言える。

その一方で『兵隊』は、漫画や口絵写真も掲載されるものの、誌面には『陣中倶楽部』ほどの華やかさは感じられない。むしろその目的は、多様な文章を兵士に投稿するよう求め、読書だけでなく、兵士が書くことを推進する点にある。『兵隊』が求めたのは、短歌、俳句、川柳のみならず、詩、漫画、写真、短文、小説、宣撫の苦心談、ユーモア物語、中国人との交流談、実戦記、陣中日記、論文である。『陣中倶楽部』や『戦線文庫』でも、短詩型文学や感想など短文投稿は募られているが、兵士による小説投稿は『兵隊』に特徴的なものだ。さらに、兵隊文芸賞が設けられ、投稿作は巧拙の評価が下されることにもなる。

誌面には「兵隊」は兵隊の赤裸々な表情を余す所なく描き、語り、教えてゐる修養雑誌「<sup>19</sup>」といった投稿が寄せられ、読書や執筆時間を確保できることが、時間を有効利用することができる優れた兵士の証左であるという発想がうかがえる。こうして「兵隊の兵隊による兵隊のための雑誌」として、『兵隊』は、戦場で書くことや読むことを、優秀な兵士の行為として価値つけていく。

また、兵士のリテラシー向上という点で二誌に共通するのが、陣中文芸や兵隊文芸と称された兵士の川柳や俳句、和歌などの短詩型文学の投稿である。『陣中倶楽部』では、古く『恤兵』の時代から陣中文芸として兵士からの投稿が促され、『陣中倶楽部』創刊以降では、三号にわたって丁寧な川柳、和歌、俳句の作り方を指導する特集が組まれている。『兵隊』でも短詩型文芸は数多く掲載され、最終的にアンソロジー『兵隊の祝祭』が刊行される。

ただし、二誌とも戦場での出来事を文章化させる効果的な営みとして、短詩型文芸を推奨している点では同じだが、『陣中倶楽部』と『兵隊』では編集側の抱く投稿者像が異なっている。たとえば、『陣中倶楽部』では、「歌といふものは、決してむづかしいものではなく、誰にでも易しく詠めるもの」で、「故郷への好いお土産、自分には懐しい回想のメモに」

なると説明されていることからわかるように、投稿者として想定されているのは、初めて句を詠む兵士である。できる限り多くの兵士が、短詩型文学に親しめるように、簡単に上手く歌を詠む方法について丁寧な説明が行われている。

一方、『兵隊』では『陣中倶楽部』のように、初歩的な詠み方を指導することはない。むしろ、掲載句に対する兵隊同士の議論が展開されたり、短歌会が開催されていることが伝えられたりしている。さらに、選者が「全投句者の内には初心者もあり、又格段の上達者もあつて一行に行かない」ことから、「己むを得ず中間を取つて」いると述べるように、投稿作は選別され、順位づけられることで掲載が決定されている。それ対し、『陣中倶楽部』の四三号「陣中芸募集」では、「到着順により適宜」掲載することが示されている。

短詩型文学は、『陣中倶楽部』では初心者が戦地での出来事や感情を文章化させる営みとしてとらえられ、『兵隊』ではより良い表現を目指す行為としてとらえられている。こうした短詩型文学への対応の違いからは、次節で述べていく読者層の違いが見えてくるが、『陣中倶楽部』や『兵隊』ともに、短詩型文学による兵士のリテラシー向上という教育的役割は共通していたと言えよう。

## 第五節 戦場における読者層

前節では慰問雑誌が、兵士の教育としての役割を果たしていたことを確認してきたが、なぜ『陣中倶楽部』と『兵隊』の二誌が戦場に必要とされたのだろうか。二つの慰問雑誌を検討することで、慰問雑誌が戦場で読者とどのような関係性を作り上げていたのか明らかにしたい。

恤兵部のユーモア読物をという要望に合う娯楽と修養を兼ね備えた『陣中倶楽部』に対して、『兵隊』は『陣中倶楽部』よりも難しい表現や内容のものが多い。編集後記では、「余りに文芸的な、若くは文学的な傾向に偏し過ぎ、只単に兵隊の中の一部の文芸愛好者や、高い教養や文章が一定の水準に達したのみ<sup>33</sup>」を読者対象とする傾向があつたと述べられている。火野葦平を編集長とし、九州文学同人を編集部員に迎えたことをはじめ、兵隊文芸賞を設置するなど、文学的作品の投稿が『兵隊』では精力的に募られていたのである。

たとえば『兵隊』には、従軍記だけではなく陸軍病院での傷痍兵の死を描いた「入院の記録」や入営前の出来事を描く「旗」、中国兵や中国人との交流を描いた「或一等兵の死」など実際の体験を範に取った作品も多い。さらに、短篇投稿小説が数多く掲載されている田崎良男は、その投稿作の一つである「白い花」という作品のなかで、港を出発する兵士へ、女性が前線の塹壕のなかで読んで欲しいと横光利一の『家族会議』を託す場面を描い

でもいる<sup>70)</sup>。

このように娯乐的、修養的な大衆層向けの『陣中倶楽部』と文学的、教養的な知識階級層向けの『兵隊』という二誌の傾向からは、軍が兵士という読者を一面的にとらえるのではなく、リテラシーによって細分化してとらえていたことがうかがえる。

そうした軍の認識に影響を与えたのが、第二章でも触れた第一次世界大戦での海外における戦場での読書体験についての情報だろう。講談社による『精神弾薬の威力 欧州大戦と雑誌読物の調査』（一九三八年二月二〇日、非売品）は、第一次大戦時のアメリカやイギリスの戦場での読書調査報告書であり、前線、病院など場所による兵士の読書欲求の変化、さらには階層やリテラシーの差による読書欲求の相違などが調査され、「世界大戦に於ては、戦線にあつても、病院にあつても、雑誌と書籍とは平時の幾倍も強く受容され、欲求された」と結論づけられている。

報告に鑑みれば、講談社は兵士に「大衆的読物が最も歓迎され、愛読された」ことに価値を見出しており、それが『陣中倶楽部』や『キング』の慰問雑誌としての発送へとつながったと考えられる。そして、『兵隊』は「もう少し硬いもの」を好む「教育があり、今まで読書しつづけて来た」読者のものとして位置づけることができる。前述した出征将士新聞雑誌慰問会がアメリカの活動を参考とし、木村毅がドイツの慰問活動を参考としたことから、戦場での読書に対する意識は、海外との競争意識のなかで誕生したものであると考えられる。

とくに『兵隊』では、イギリスの慰問図書の様子や、新聞で慰問図書に「大戦に取材した小説や上つ調子の冒険小説は有害無益である」と報じられたことに疑問を呈する意見、捕虜となった中国兵が『兵隊』を読む日本兵を賞賛したといった記事が掲載されている。『兵隊』誌面で他国に類のない雑誌であることを強調することは、高度なリテラシーを持つ日本兵イメージを『兵隊』読者へと宣伝するためでもあったと考えられよう<sup>71)</sup>。

ただここで注意しておきたいのは、『兵隊』はリテラシーの高い兵士だけではなく、書物に触れることの少ない読者にも開かれていた点である。各部隊に一冊ずつ配布された『兵隊』は、交代で共有しながら読まれ、教科書にする部隊もあった。それは『陣中倶楽部』でも同様で、先に述べた佐藤幸治や木村毅は戦場がこれまでに読むことのなかった書物との出会いの場ともなることを指摘している。二誌は大衆的なものから教養的なものへと段階的に内容を構成しながら、読者層を区切ることなく、戦場という〈読書空間〉のなかで新しい読書体験に巡り会う場として設定されていたのである。

最後に、方向性の異なる二誌が、相互に影響しあう関係にあった可能性を示しておきたい。『陣中倶楽部』をはじめ、娯楽雑誌の輸送が困難になってきた一九四四年に、『兵隊』

は片岡鉄兵の恋愛小説「明日ある女」<sup>23</sup>（再録）の連載開始を皮切りに、大衆小説の掲載を本格的に開始する<sup>24</sup>。同時に、どのような作品が読みたいかなどのアンケートも行われ、新しい誌面展開への意気込みが感じられる。ただし大衆的傾向に流れるだけではなく、兵隊投稿作品の掲載も継続されている<sup>25</sup>。こうした『兵隊』の誌面変化は、戦場での娯楽雑誌の減少によって、戦地で刊行していた『兵隊』に、その役割が集約した結果とみることができらるだろう。

## おわりに

本章では、慰問品としての書物について、発送方法や国内出版における位置づけについて検討を行ってきた。吉田裕は日本の軍隊教育が、敗戦後一〇年を経ても高い評価を維持していた背景として、「良兵良民」というスローガンが示すように、多くの国民が軍隊を、「国民教育の完成機関」として認識していたことを指摘している<sup>26</sup>。また陸軍中尉で『中央公論』の編集長をつとめた佐藤観次郎は『陣中の読書』という書のなかで、戦場での読書の意義を「凡ゆる修養と興味と娯楽とを与へてくれる」<sup>27</sup>所にあるとしている。

つまり、戦場での読書は、慰安や娯楽という目的だけでなく、優れた国民となるための軍隊教育装置としての役割を前景化させることで成立していたと言える。そうした読書装置としての背景には、第一次世界大戦中に海外で行われていた戦場での読書の情報が日本へと伝わっていたことがあった。とはいえ、戦場での読書を子細にみていけば、こうした軍隊教育の役割からの逸脱もみることができるだろう。軍の思惑と戦地で戦う兵士に対する銃後の人々の心情、そして出版資本主義、そして戦地で戦う兵士という読者、これらが複雑に結びつくところに慰問出版文化は成立しているのである。

戦場での読書には、書物が作られ、送られていく営みを欠かすことはできない。それについては、様々な出版社による慰問雑誌の例を示してきたが、失われた資料も多く、未だその総体を掴めたいと言いがたい。これまで収集、調査を行った慰問雑誌・書籍に加え、今後も資料の収集を通して、戦時下の慰問雑誌文化とその流通について調査を継続する必要がある。

また、戦場における読書空間は兵士という読者がより細やかな読者階層を構成しながらも、階層を横断した読書を行う可能性のある場所でもあった。それは、兵士の教育を促した側面もあったかもしれない。だが、この戦場という（読書空間）は検閲や思想統制の場でもある。そうした自由と統制を兼ね備えた両義的な空間としての戦場の読書については次章にて具体的に検討していきたい。

【図一】書物慰問に関する新聞記事一覧

タイトル

日付	新聞	朝／夕	何面	検索語	内容
19370403	朝日	夕刊	3面	慰問と雑誌	頼母いゝ東京兵 慰問品は雑誌、手紙がよし 十川部隊長の音信
19370718	朝日	朝刊	3面	慰問と読物	銃箸／陣中慰問読物
19370917	朝日	朝刊	6面	慰問と新聞	冬に向つての慰問品 何が一番喜ばれるでしょう
19370918	朝日	朝刊	11面	慰問と書物	“前線文庫”を贈る
19370924	朝日	朝刊	4面	慰問と新聞	陣中新聞 3万册
19371021	朝日	朝刊	2面	慰問と新聞	ニューズ縮刷版／ピル街の慰問袋
19371014	朝日	朝刊	11面	慰問と書籍	陣営将士遺族に甲斐金贈る 銃後の恤兵舎から
19371206	読売	朝刊	9面	慰問	【時高と銃後の女性・特集ニューズ】郷土新聞を発刊
19371227	朝日	朝刊	11面	慰問と読物	“豆本”慰問ヒット 派の作家が思ひ付きの六千部(長谷川伸)
19371229	読売	朝刊	9面	慰問	【時高と銃後の女性・特集ニューズ】慰問文パツクリット
19380126	朝日	朝刊	6面	慰問と雑誌	家庭／戦艦をあびて 慰問婦人の座談会 私達は何を感じたか？(7)／慰問品の詮議 新聞・雑誌に甘いもの大歓迎
19380130	朝日	夕刊	2面	慰問と新聞	“知りたけいば銃後” 戦艦はニューズ飢饉
19380327	朝日	朝刊	10面	慰問と新聞	床し・長期慰問の一女性 第一線の勇士達へ心尽しの贈物 感謝の的“新聞の小母さん”
19380326	朝日	朝刊	1面	慰問と読物	文芸春秋社「オール読物臨時増刊 皇軍慰問全集」(広告)
19380327	読売	夕刊	3面	慰問と雑誌	オール読物臨時増刊 皇軍慰問全集(広告)
19380328	朝日	朝刊	3面	慰問と読物	文芸春秋社「オール読物臨時増刊 皇軍慰問全集」(広告)
19380330	読売	朝刊	12面	慰問と雑誌	オール読物臨時増刊 皇軍慰問全集(広告)
19380330	朝日	朝刊	10面	慰問と読物	文芸春秋社「オール読物臨時増刊 皇軍慰問全集」(広告)
19380421	読売	朝刊	9面	慰問	【時高と銃後の女性・特集ニューズ】 回報慰問号
19380515	朝日	朝刊	6面	慰問	“故郷の便り慰問文集”
19380623	朝日	朝刊	10面	慰問と新聞	美しい警官の友情 新聞慰問のおれに朝鮮紙幣 銀翼献金に絡る佳話
19380703	朝日	朝刊	11面	慰問と文庫	記念日の文庫省
19380707	朝日	朝刊	11面	慰問と文庫	けふを記念日
19380713	朝日	朝刊	10面	慰問と新聞	うれしい慰問品 戦艦の手紙と本紙を交かさず
19380811	朝日	朝刊	10面	慰問と新聞	一少女の真心 慰問品の手紙と本紙を交かさず
19380820	朝日	朝刊	10面	慰問と新聞	たやさぬ慰問袋 戦艦にニューズ送る四家族
19380826	朝日	朝刊	10面	慰問と新聞	童心こもる慰問袋 ベツの戦士へ力強い激励
19380831	朝日	朝刊	6面	慰問と新聞	銃後の激励と感謝 慰問袋を持つ将兵(上)／「数が減った」とは情けない
19380902	朝日	朝刊	6面	慰問と新聞	慰問袋を送るには(下)／〇〇部隊じゃ届きません
19380903	朝日	朝刊	10面	慰問と新聞	女性の真心に勇士達も泣く 銃後の激励と新聞紙
19380912	朝日	朝刊	7面	慰問と新聞	日記抄／徳永直
19380922	朝日	朝刊	11面	慰問と雑誌	なるべく慰問袋で慰問文の同封お忘れないうよう 恤兵品取扱の改正
19381003	読売	朝刊	7面	慰問	陣中慰問は“よみうり” 名監督と特務兵
19381118	朝日	朝刊	10面	慰問と新聞	東京版／廬山から徳安まで(G)／新聞は大もて ニューズと兵隊さん 趣味／白衣の勇士達が求めるは“真実味” 招待するにも演芸慰問にも、この心入れが肝要
19381222	朝日	夕刊	3面	慰問と新聞	歳末に贈みる(5)／皇軍将士への慰問品
19381231	朝日	朝刊	6面	慰問と読物	歳末に贈みる(5)／皇軍将士への慰問品
19390120	読売	朝刊	1面	慰問と図書	皇軍慰問図書目録 栗田書店(広告)
19390125	朝日	朝刊	1面	慰問と図書	皇軍慰問図書目録 栗田書店(広告)
19390227	朝日	朝刊	11面	慰問と書籍	義勇軍に書籍慰問(長谷川時雨)
19390607	朝日	朝刊	10面	慰問と新聞	東京版／陸軍勇士へ新聞慰問一家を挙げて楽しい日課 ここにも銃後の美談
19391015	朝日	朝刊	11面	慰問	勇士らに慰問文集
19391108	朝日	夕刊	3面	慰問と新聞	東京版／兵隊さんへ新聞慰問 喜ぶ野戦病院 部隊長から感謝状
19391123	朝日	朝刊	6面	慰問と文庫	“輝く部隊”を総動員して 文筆慰問の豪華版
19391205	読売	朝刊	7面	慰問と雑誌	新聞雑誌慰問会生る
19391205	朝日	朝刊	11面	慰問と雑誌	戦地へ新聞雑誌を
19391216	読売	朝刊	5面	慰問と文庫	【銃後の日曜日】“輝く部隊”の慰問文庫 長谷川時雨
19391227	読売	朝刊	7面	慰問と雑誌	“輝く部隊”慰問文集
19400218	朝日	朝刊	9面	慰問と新聞	出征将兵感謝慰問運動／主催 大日本連合女子青年団 後援 軍事保護院 朝日新聞社
19400303	朝日	朝刊	7面	慰問と新聞	きょうから9日まで 出征将兵感謝慰問運動 主催 大日本連合女子青年団 後援 軍事保護院 朝日新聞社
19400705	朝日	朝刊	5面	慰問と雑誌	援 軍事保護院 朝日新聞社
19401030	読売	夕刊	2面	慰問と書籍	家庭／妻愛記念日に送る慰問品は何か良いか
19400110	朝日	朝刊	7面	慰問	お年玉に文庫本 前線へ送る二五万册
19410110	読売	朝刊	3面	慰問と書籍	女流作家の慰問文集
19421004	読売	夕刊	2面	慰問と書籍	海の勇士慰問文集
19421004	読売	朝刊	3面	慰問と書籍	海軍 右側通行 慰問品について
19420705	朝日	朝刊	4面	慰問と図書	銃箸 右側通行 慰問品について
19420808	読売	朝刊	4面	慰問と雑誌	銃後から前線の兵隊さんへ 可憐い真心を盛って 記念日に送る図書や慰問文
19421004	朝日	朝刊	3面	慰問と雑誌	銃後から前線の兵隊さんへ 雑誌や小説類を送りましょう
19421202	朝日	朝刊	3面	慰問	前線の勇士へ 古雑誌や小説を送りましょう
19421204	読売	朝刊	3面	慰問と書籍	士気昂揚に大音楽会 慰問に体育に記念行事全部出揃ふ
19430509	読売	朝刊	3面	慰問と書籍	戦没将兵の墓地清掃
19430623	朝日	夕刊	2面	慰問	豆戦士へ 慈愛の慰問 日婦が“1日お母さん”
19430718	読売	朝刊	3面	慰問	前線へ“慰問奇射” 明かに強い隣組便りを送ろう
19430822	読売	夕刊	2面	慰問と書籍	前線へ郷土色慰問／東京
19430908	読売	夕刊	2面	慰問と書籍	前線勇士へ慰問書籍1万册
19430908	読売	朝刊	4面	慰問と雑誌	新刊三万册の贈物 白衣勇士や軍人遺家族を慰問
19431011	朝日	夕刊	2面	慰問	【紙上親切課】雑誌を前線へ と
19431009	読売	朝刊	3面	慰問と書籍	一万册 援護強化へ女学校起つ
19431011	朝日	夕刊	2面	慰問	講談本を大歓迎 兵隊さんが喜ぶ慰問袋の心得

<sup>1</sup> 『日本国語大辞典 第二版』（小学館、二〇〇〇年十二月～二〇〇二年一月）

<sup>2</sup> 浅沼吉太郎 「陸軍恤兵部の業務に就いて」『陣中倶楽部』（大日本雄弁会講談社、一九四一年四月）

<sup>3</sup> 「陸軍恤兵金品取扱手続第一条」『支那事变恤兵概観』（陸軍恤兵部、一九三八年）

<sup>4</sup> 「銃後の激励と感謝 慰問袋を待つ将兵（上）」『東京朝日新聞』（一九三八年八月三十一日、朝刊六面）

<sup>5</sup> 「帰還勇士に聞く慰問文と慰問袋の体験座談会」『家の光』（家の光協会、一九四二年一月）

<sup>6</sup> 「慰問募集に関する件、昭和一四年四月二七日」『支那事变銃後援雑誌 第三編』（北海道庁、一九四三年一月）一ノ瀬俊也編『昭和期「銃後」関係資料集成 第五卷』（六花出版、二〇一三年五月）を参照。

<sup>7</sup> 「慰問用の唱歌集の最終頁に記載されている。『皇軍慰問 銃後と戦線を結ぶ娯楽全集』（戦地の友社、一九四三年八月）

<sup>8</sup> 『読売新聞』『東京朝日新聞』から、慰問および書物・書籍・雑誌・文庫・図書・雑誌をキーワードに検索したの中から内容と合致したものを選択して作成している。

<sup>9</sup> 寺下宗孝『前線慰問笑話短篇集 笑驚隊員の日記』は、慰問書籍として一九四四年四月に刊行されている。また『陣中倶楽部』も一九四四年頃までは国内から発送を行っていたことを編集者の石田一郎が証言している。石田一郎、大濱徹也、鈴木正夫 「兵隊の投稿雑誌『兵隊』をめぐって」『刀水 六号』（刀水書房、二〇〇二年五月）

<sup>10</sup> 満鉄図書館によって慰問活動が行われている。「移民地慰問図書館募集」『書香 九二号』（満鉄大連図書館、一九三七年二月一〇日）、「移民地慰問図書 発送の経過」『書香 九五号』（満鉄大連図書館、一九三七年五月一〇日）

<sup>11</sup> 日本図書館協会による慰問活動については、村上美代治「戦時体制を支えた図書館活動」『図書館雑誌 八六卷八号』（日本図書館協会、一九九二年八月）を参照。

<sup>12</sup> 「出征将士新聞雑誌慰問会発会式」『出版年鑑』（東京堂、一九四〇年八月）、「戦地へ新聞雑誌を」『東京朝日新聞』（一九三九年二月五日、朝刊一面）「新聞雑誌慰問会生る」『読売新聞』（一九三九年二月五日、朝刊七面）。

<sup>13</sup> 出征将士新聞雑誌慰問会の概要、発送量、活動内容については、中野所有の「出征将士新聞雑誌慰問会趣意書」「寄附申込書」「感謝状」を参照した。

<sup>14</sup> 寺下宗孝『比島作戦従軍記 星条旗墜ちたり』（揚子江社、一九四三年六月）、奥付に「著者寺下辰夫」と表記があるが、「寺下宗孝」の間違いだと考えられる。

<sup>15</sup> 寺下宗孝『前線慰問笑話短篇集 笑驚隊員の日記』（新聞通信社、一九四四年四月）  
<sup>16</sup> 図書館での一例を挙げておく。新潟県立図書館では、一九三七年一月に「皇軍慰問図書雑誌寄付募集」が行われ、二ヶ月後まで発送が行われ、一九三八年六月に「傷病兵慰問図書雑誌募集」のなかで、どのような書物が良いか議論が行われている。『新潟県中央図書館報 四〇六、一一、一二、一五号』（新潟県立図書館、一九三七年二月一五日〜一九三八年一〇月一五日）

<sup>17</sup> 現在確認している「銃後の」と名付けられた慰問雑誌シリーズには、谷崎潤一郎「港の人々」「銃後の横浜」（横浜市出動軍人後援会、一九三八年八月）、三上於菟吉「暗夜白刃行」細田源吉「奔流とならん」「銃後の埼玉」（軍人援護会埼玉支部、一九四〇年二月）、白井喬二「慮外の白刃」「銃後の埼玉」（軍人援護会埼玉支部、一九四一年一月）、井伏鱒二「マライ人の赤んぼ」「銃後の大阪」（大阪市役所市民局軍事課、一九四四年八月）などが掲載されている。

<sup>18</sup> 愛国婦人会による戦地への書物慰問については、守田佳子「シリーズ④・4 愛国婦人会戦時下愛国婦人会の軍事講演活動（2）」（太陽書房、二〇一三年六月）一二二〜二〇四頁を参照。

<sup>19</sup> 『愛国婦人 一一二号』（愛国婦人会、一九四〇年七月）三七頁。

<sup>20</sup> 『愛国婦人 一一二号』前掲注一九、四〜五頁。

<sup>21</sup> 『愛国婦人 一一二号』前掲注一九、三六頁。

<sup>22</sup> 『学校卜家庭低学年編 皇軍慰問号』（徳島県女子師範学校附属小学校小野文雄・篠原次郎、一九三九年三月）、『新堅 第二七号 皇軍慰問号』（金沢市新堅町尋常小学校、一九三八年三月）、『福岡県教育 五五巻 皇軍慰問号臨時号』（福島県教育会、一九三九年一月）、『ふぢをか 第六号 奉祝紀元二六〇一年皇軍慰問号』（藤岡尋常高等小学校、一九四一年三月）など。

<sup>23</sup> 『旭之友 一〇三号 出征警友慰問第二号』（警察協会長野支部、一九三八年二月）、『宗像 一六二号 皇軍慰問号』（宗像会本部、一九四三年八月）など。

<sup>24</sup> E・M・フォースタ「戦争と読書」『改造』（改造社、一九四〇年一月一日）

<sup>25</sup> Theodore Wesley Koch, *Books in the war: the romance of library war service*, Boston, Houghton Mifflin company, 1919

<sup>26</sup> 木村が「前線文庫」へと名前を変更したのは、戦争が短期で終結すると考え、塹壕ではなく「軍艦と野戦病院」で読まれることを想定したからである。

<sup>27</sup> 「II 資料 I 彙報 自昭和十二年一月至昭和十三年十二月」『文芸年鑑 昭和十三年版昭和

十四年版』(文芸家協会編、第一書房、一九三九年一〇月) 九六頁。『文芸年鑑 昭和十三年版 昭和十四年版』(文泉堂出版、一九七九年九月) による復刻を参照。

<sup>28</sup> 木村は「前線文庫寸感」『改造』(改造社、一九三七年一月)で、慰問に適した書物として、自らの『旅順攻囲軍』『乃木將軍』などの戦争物、櫻井忠温『肉弾』『銃後』、水野廣徳『この一戦』、レンガード少尉『剣と恋』、プリボーイ『日本海海戦』、ツイイス『日本海海戦』など日露戦記を挙げる。また、山本実彦『支那』『蒙古』など「地理、風俗、人文研究」に役立つものや、武藤貞一『日支事変と次に来るもの』『世界戦争はもう始まつてゐる』など時事関連物、小説では吉川英治を挙げ、寺田寅彦、内田百鬼園の随筆も推薦している。

<sup>29</sup> Books in the war; the romance of library war service 前掲注二五。

<sup>30</sup> Molly Guphill Manning, When Books Went to War: The Stories That Helped Us Win World War II, Mariner Books, 2014. 翻訳書として、モリー・グプティル・マニング、松尾恭子訳『戦地の図書館 海を越えた一億四千万冊』(東京創元社、二〇一六年五月)が刊行されている。

<sup>31</sup> 「豆本」慰問ヒット 涙の作家が思ひ付きの六千部『東京朝日新聞』(一九三七年一月二七日、朝刊一面)、『兵隊 二七号』(南支派遣軍報道部、一九四三年一月)の「編集後記」にて、山本有三が「真実一路」「不惜身命」「同志の人々」を寄贈したと報告されている。

<sup>32</sup> 岡本かの子「征地に書籍を贈るに就て」、伊藤整「前線にゐる友へ」『文芸』(改造社、一九三七年一月)

<sup>33</sup> E・M・フォースタ「戦争と読書」前掲注二四。

<sup>34</sup> 講談社の所蔵する戦前の社内通信は以下の通りである。『講談社内通信』(第一〜五〇号、一九三三年一〇月〜一九三八年五月)、『大日本雄弁会講談社 社内通信』(第五一〜一〇九号、一九三八年八月〜一九四四年二月)。おおよそ月刊で発行され、編集・発行人は川村新次郎である。「短篇ニュース 皇軍慰問に『キング』」『大日本雄弁会講談社 社内通信 四二号』(大日本雄弁会講談社、一九三七年七月三一日)

<sup>35</sup> 「上海方面では雑誌が引張帆」『大日本雄弁会講談社社内通信 四五号』(大日本雄弁会講談社、一九三七年一月二五日)

<sup>36</sup> 「雑誌は大陸に伸びる」『大日本雄弁会講談社社内通信 五二号』(一九三九年二月二八日)「支那本土へ支那本土へ!!! 雑誌の飛躍的大発展時代来る」『大日本雄弁会講談社社内通信 五三号』(一九三九年四月二八日)。図二、図三ともに、記事内の言及を参考に作成している。図一の中国の基準値は昭和五年ではなく、昭和八年のものとなっている。



- <sup>37</sup> 「陣中だよりその二」『大日本雄弁会講談社社内通信 四八号』（一九三八年四月一九日）
- <sup>38</sup> 「漢口の盛況」「漢口新聞の漫画」「占領地域の肅正」『大日本雄弁会講談社社内通信 五六号』（一九三九年七月一九日）「陣中だより 本社の雑誌、レコードの進出目覚し」『大日本雄弁会講談社社内通信 五九号』（一九三九年一〇月二〇日）
- <sup>39</sup> 「支那本土へ支那本土へ！！ 雑誌の飛躍的大発展時代来る」『大日本雄弁会講談社社内通信 五三号』（一九三九年四月二八日）
- <sup>40</sup> 「本社の雑誌が断然優勢 済南書店の調査 板橋五郎丸氏の通信」『大日本雄弁会講談社社内通信 五四号』（一九三九年五月二七日）
- <sup>41</sup> 「陸海軍へ野間社長より慰問品を寄贈」『大日本雄弁会講談社社内通信 四五号』（一九三七年一月二五日）、「雑誌書籍を寄贈して皇軍を慰問」『大日本雄弁会講談社社内通信 五一号』（一九三九年一月三一日）
- <sup>42</sup> 「付録 戦線銃後笑の慰問隊」『講談倶楽部』（大日本雄弁会講談社、一九三八年一二月五日）
- <sup>43</sup> 佐藤卓己『キングの時代』（岩波書店、二〇〇二年九月）三一〇頁。
- <sup>44</sup> 「皇軍慰問図書目録」『東京朝日新聞』（一九三九年一月二五日）朝刊一面）
- <sup>45</sup> 「臨時増刊制限 雑誌協会へ要望」『読売新聞』（一九三七年一月二四日、朝刊三面）
- <sup>46</sup> 押田信子『兵士のアイドル 幻の慰問雑誌に見るもうひとつの戦争』（旬報社、二〇一六年六月）
- <sup>47</sup> 渡辺登喜雄「雑誌「にっぽん」「落伍記者」（企画出版社、一九六七年一月）八九～九一頁、矢崎泰久『口きかんわが心の菊池寛』（飛鳥新社、二〇〇三年四月）二〇五～二一〇頁。
- <sup>48</sup> 「広告」『読売新聞』（一九三八年三月二三日、朝刊三面）
- <sup>49</sup> 矢崎泰久『口きかんわが心の菊池寛』前掲書四七、二〇五～二一〇頁。
- <sup>50</sup> 「太る娯楽雑誌一 月号」『東京朝日新聞』（一九四三年九月二二日、朝刊三面）
- <sup>51</sup> 学校慰問文集などについては、一ノ瀬俊也編『近代日本軍隊教育・生活マニュアル資料集成 昭和編 全七巻』（柏書房、二〇一〇年二月）、『編集復刻版 昭和期「銃後」関係資料集成 全九巻』（六花出版、二〇一二年一月～二〇一三年一月）を参照。
- <sup>52</sup> 佐藤卓己『物語岩波書店百年史 2』（岩波書店、二〇一三年一〇月）一六八頁。「岩波文庫について」『岩波文庫総目録 1927・1987』（岩波書店、一九三七年七月）
- <sup>53</sup> 佐藤幸治「戦線の読書について」『帝国大学新聞』（帝国大学新聞社、一九四二年二月九日）、『帝国大学新聞』（不二出版、一九八四年四月～一九八五年二月）の復刻を参照。

<sup>51</sup> 『陣中倶楽部』は、竹添敦子「山本周五郎と『陣中倶楽部』」『三重法経 一一〇』（三重短期大学法経学会、一九九八年一月）で山本周五郎収録作品が紹介され、押田信子「長谷川時雨と慰問雑誌『陣中倶楽部』輝ク部隊慰問文集を中心にして」『国際文化研究紀要 一八』（横浜市立大学大学院国際総合科学研究科国際文化研究専攻、二〇一二年三月）が、輝ク部隊との関係について論じている。『兵隊』は、金井景子「『前線』と『銃後』ジェンダー編成をめぐる――投稿雑誌『兵隊』とリーフレット『輝ク』を中心に」『岩波講座3 アジア・太平洋戦争 動員・抵抗・翼賛』（岩波書店、二〇〇六年一月）、菅野貴子「雑誌『兵隊』にみられるジェンダー思想」『文化表象を読む』（お茶の水女子大学21世紀COEプログラムジェンダー研究のフロンティア、二〇〇八年三月）など、戦時下のジェンダーを焦点に論じられてきたほか、掛野剛史「書く兵隊・戦う兵隊―火野葦平と雑誌『兵隊』」『アジア遊学』（勉誠出版、二〇一三年八月）で、火野葦平が『兵隊』から受けた影響について論じられている。

<sup>52</sup> 『講談社の歩んだ五十年 昭和編』（講談社、一九五九年一月）四三六―四三九頁。

<sup>53</sup> 火野葦平は九号で編集長を退くが、火野の意向によって編集に九州文学同人が参加し、寄稿も定期的に行われるなど、火野の影響は継続していたと考えられる。

<sup>54</sup> 例として創刊号に掲載された「特別読切傑作小説」「新作落語漫才傑作集」のタイトルを記載する。加藤武雄「現代小説 三吉帰る」、甲賀三郎「探偵小説 殺人画像」、下村悦夫「時代小説 女装の剣士」、南達彦「諧謔小説 つけ髭の説」、大倉桃郎「時代小説 彫金浅妻船」、小泉長三「時代小説 源太栗毛」、悟道軒圓玉「痛快講談 豪勇澁川伴五郎」、西尾魯山「名作講談 妙の浦捕物」、坂東太郎「大岡政談 五貫文裁き」、春風亭柳條「落語 三々九度」、桂右女助「落語 長屋の献金」、アザブラブ・アザブ伸「漫才 圓滿第一課」、ヤジロー・キタハチ「漫才 僕の結婚」。

<sup>55</sup> 邦枝完二「攘夷夜話」『陣中倶楽部 四八号』（一九三九年一月一日）

<sup>56</sup> 橋爪健「慰問団の来る日」『陣中倶楽部 五五号』（一九四〇年六月一日）

<sup>57</sup> 諏訪三郎「勇士村に還る」『陣中倶楽部 五一号』（一九四〇年二月一日）、鹿島孝二「帰還の春」『陣中倶楽部 五四号』（一九四〇年五月一日）

<sup>58</sup> 特派記者「傷痕軍人結婚相談所を訪ねて」『陣中倶楽部 四七号』（一九三九年一月一日）

<sup>59</sup> 第二の戦に備ふる傷痕の勇士誌上座談会『陣中倶楽部 五四号』（一九四〇年五月一日）

<sup>60</sup> 小山勝清「スパイ小説 秘密通信」『陣中倶楽部 五三号』（一九四〇年四月一日）

<sup>61</sup> 陸軍憲兵少佐 白浜宏「戦地に躍るスパイ」『陣中倶楽部 五三号』（一九四〇年四月一日）

<sup>91</sup> 野澤純 「スパイ小説 悪夢」『陣中倶楽部 六四号』（一九四〇年三月一日）

<sup>92</sup> 友松圓諦 「戦場は修養の道場である」『陣中倶楽部 六一号』（一九四〇年十二月一日）

<sup>93</sup> 佐藤正彦 「兵隊談話室」『兵隊 三七号』（一九四四年四月二〇日）

<sup>94</sup> 雑誌兵隊編集室編『兵隊の祝祭 南支軍詩歌集』（南支派遣軍報道部、一九四三年一月）

<sup>95</sup> 「編集室から」『兵隊 一一号』（一九三八年一月一日）

<sup>96</sup> 古友雅男 「入院の記録」『兵隊 二八号』（一九四三年三月一日）、村重武一 「旗」『兵隊 二九号』（一九四三年五月一日）、名村稔 「或一等兵の死」『兵隊 三一号』（一九四三年八月二〇日）、一刀剣二 「鍋蓋戦記」『兵隊 三四号』（一九四三年十二月一日）、田崎良男 「白い花」『兵隊 二〇号』（一九四一年六月一〇日）

<sup>97</sup> 「イギリス前線図書」 「前線へ送る本」『兵隊 一三号』（一九四〇年三月一日）、「へいたい」支那兵隊を駭かす『兵隊 八号』（一九三九年九月一五日）

<sup>98</sup> 片岡鉄兵 「明日ある女」『兵隊 三三―三九号』（一九四三年一月三日―一九四四年五月二〇日）

<sup>99</sup> 石田一郎、大濱徹也、鈴木正夫 「兵隊の投稿雑誌『兵隊』をめぐる」『兵隊』（刀水書房、二〇〇四年七月）では、軍から娯楽的作品を増やせとの指摘があったことを明らかにしている。また、一九四〇年以降、『兵隊』は菊池寛や従軍作家のコラムなどの掲載を徐々に増加させているが、誌面の中心は兵隊の投稿作品であった。

<sup>100</sup> 鈴木文雄 「拾遺宋公館」『兵隊 三八号』（一九四四年四月二〇日）など。

<sup>101</sup> 吉田裕 『日本の軍隊』（岩波書店、二〇〇二年十二月）五―七頁。

<sup>102</sup> 佐藤観次郎 『陣中の読書』（新興亜社、一九四四年四月）三―一七頁。

\*本章における『兵隊』の引用は『兵隊』（刀水書房、二〇〇四年七月）の復刻版による。また『大日本雄弁会講談社社内通信』『講談社内通信』『陣中倶楽部』は、講談社にて閲覧させていただいたものである。貴重な出版史料の保管および資料閲覧のご協力に、ここに記すことで感謝とこえたい。

### 第三章 〈緩やかな動員〉のためのメディア―陸軍発行雑誌『兵隊』をめぐる―

はじめに

本章では、前章にてとりあげた雑誌『兵隊』が、具体的にどのような兵士（読者）に向けて、いかなる兵士像を表現していたのかを考察する。そして、この雑誌が兵士にとっての書くこと、読むことの実践とどう結びついてきたかを考えていく。それは同時に、読み／書く「インテリ兵」の意識を戦争へと取り込むメディアとして雑誌『兵隊』をとらえることともなる。

前章では、大衆的・修養的な内容を持つ『陣中倶楽部』と文学的・教養的な内容をもつ『兵隊』を、大衆層と知識階級層を主な読者層として分かちつつも、相互の連関のなかにあった雑誌としてとらえてきた。本章ではこうした『兵隊』における読者を「インテリ兵」と称して考察を進めていく。旧制高校文化に代表される学歴エリートの中核とする教養主義文化圏やその周辺に属するリテラシーを持つ兵士、そしてそこに参入しようとする高度ナリテラシーを持つ兵士を「インテリ兵」としてとらえていく。

大濱徹也は『兵隊』を、「兵隊が思い思いの世界を書くこと、描くことで、人間たる私を発見する器となり、長期持久戦下の戦場を生きぬく力を養わんとした世界」であり、その世界は「戦地の生の声を記録する」「自由な空間」であると好意的に評価している。また、金井景子はこうした共有の場がのちに兵士の積極的な戦争参加へつながったとの見解を示す<sup>90</sup>。兵士を戦争に取り込んでいくという「意識の動員」に、兵士間で回し読みされ共有される場を作る媒体として、『兵隊』が関わっていたことは、大いに検証されるべきだろう。

これら先行研究に対し本章が問題とするのは次のような点である。一つは『兵隊』の読者層に対する分析が不十分であることだ。これまでの先行研究では、「盧溝橋事件以後、急遽大増員された大衆層の男たち」（前出金井）が、『兵隊』の読者層として想定されてきた。大濱は「ある種の教養主義の色香がただよって」いることを指摘しているものの、具体的な考察までは至っていない。そこで、第一節では前章にて『陣中倶楽部』との比較から明らかにした雑誌の読者層を視野に入れながら分析を行っていく。

次に問題とするのは、兵士による雑誌の共有によって、兵士の意識をどのように戦争に積極的なものへと変化させたのかという検証が不十分な点である。金井論文は火野の言説分析を中心とし、大濱論文は「兵士が書くこと」が大まかなアナロジーで説明されており、具体的な分析に欠けている。そこで第二節以降では、『兵隊』において想定された読者層イメージがどのようにして兵士の読み／書く行為と接続し、兵士を戦争へ取り込むことにな

ったのかを、検閲や編集サイドの問題も含めて考察を重ねていく。

先に結論を述べれば、『兵隊』では二つの「インテリ兵」イメージが示されている。一連の考察を通して、『兵隊』では強固な思想統制や検閲よりも、修養主義や投稿制度による〈緩やかな動員〉こそが、「インテリ兵」を戦争へ取り込む仕組みであったことを明らかにしていきたい。

### 第一節 『兵隊』の読者層

前章では、中国戦線における陸軍発行慰問雑誌は、大衆層をメインとした『陣中倶楽部』から、散文を積極的に投稿するような「インテリ兵」を射程に収めた『兵隊』まで、その読者層はグラデーションのように構成されていたことを指摘してきた。同地域に兵士が読む雑誌が二誌存在した理由も読者層の違いによるものと考えられる。では、なぜこのように読者層をとらえることとなったのか。まずは『兵隊』創刊当時の知識階級層の兵士を取り巻く状況から明らかにしていきたい。

一九三八年の『兵隊』や『陣中倶楽部』の創刊は、金井や大濱が指摘するように、盧溝橋事件以降の兵士の大量増員の時期に合致する。増員に伴い知識階級の兵士をどのように戦争へ積極的な方向へ変化させていくのかという「意識の動員」問題が浮上するが、その問題への対応の一つとして「インテリ兵」の描かれ方が、次にみるように変化していくのである。

奥野他見男『大学出の兵隊さん』は、一九二八年に発売されたベストセラーである。この作品は学歴を自慢する法学士の兵士を主人公とし、軍隊を揶揄するユーモア小説となっており、「大学出の兵隊」は嘲笑の対象として描かれる。

だが、一九三八年一月の「大学出の兵隊」による陣中座談会になると、彼らを笑いの対象とする表現は見当たらない。新聞紙上には、未完成の博士論文を戦場へ持参し、戦場で加筆して理学博士号を得た兵士を賛美する記事が掲載され、「インテリ兵」を勇士として扱う記事が目につくようになる<sup>33</sup>。新聞だけではなく、小説でも『従軍記インテリ部隊』<sup>34</sup>では、「インテリ必ずしもひよろひよろとして神経の針のやうな痩せ男とのみは限らぬ」と「インテリ部隊」を擁護する。そして、「兵隊の強さといふものは、畢竟精神力の問題であるから、徹底した理解と優れた判断をもつものが弱くあり得ない」と賞賛の言葉をつづける。こうした戦場での「インテリ兵」を賞揚する傾向は、陣中手記の刊行に接続する。岩波文庫を収集していたとして注目された太田慶一『太田伍長の日記』が刊行されたのも一九四〇年のことである。

このように日中戦争開始以降は、新聞や小説において「インテリ兵」が優れているとい

うイメージが作り出されていく時期にあたる。太田慶一の日記刊行も「岩波書店の「インテリ兵士の理念型」創出のイベント」であったことが指摘されているように、戦場で博士論文を完成させたり、岩波文庫を読んだりなど、戦場での読書行為や執筆行為は「インテリ兵」の知的側面を象徴する行為として強調されていく。

第一章にて述べたように、一〇万部もの岩波文庫が、陸軍恤兵部によって慰問用に二回にわたって戦地に送られているが、送られた文庫は、日本文学と海外文学が中心であったことが知られており、「インテリ兵」としての「文芸愛好者」が対象とされていることがうかがえる。このように「インテリ兵」を優秀な兵士として描き出すと同時に、戦場で「インテリ兵」向けに書物の配給が行われており、戦場で読み／書く兵士に向けられた『兵隊』はこの延長線上に位置づけられるのである。

次節からは、今までに述べてきたような高度なリテラシーを持つ兵士を戦争へと取り込んでいくメディアとして『兵隊』がどのような働きをしていたのか明らかにしていきたい。

### 第三節 『兵隊』における「インテリ兵」イメージ

本節では、まず『兵隊』での『ドイツ戦没学生の手紙』を中心とした編集サイドの言説から、誌面での「インテリ兵」イメージを考察していく。またそのイメージが、兵隊が書くことや読むことと、どのように結びついていたのかについて検討する。

『兵隊』における「インテリ兵」イメージの形成を分析するうえで、重要であるのは、精神修養という考え方と投稿雑誌という形態である。『兵隊』はこれらの方法に加え、投稿された兵士の文章を検閲することで、「自己犠牲を神聖化する兵隊イメージ」を形作っていたと言える。

前節でも述べてきた「インテリ兵」イメージの転換点として、もう一つ『ドイツ戦没学生の手紙』の出版を挙げることができる。『兵隊』には「第一次世界大戦に参加した「ドイツ戦没学生の手紙」(一〇号)」という記事が掲載されており、「インテリ兵」がどのように描かれていたのか考察する手がかりとなる。『ドイツ戦没学生の手紙』は、フライブルク大学教授ヴィトコップが第一次世界大戦に従軍した学生の手記をまとめた書簡集である。日本ではドイツ語教科書として尾崎賢三郎編『戦地消息』、成瀬無極編『塹壕より故郷へ』<sup>10</sup>が使用され、一九三八年一月に岩波新書から高橋健二による日本語訳が刊行される<sup>11</sup>。

高橋版は、「古典的価値」を標榜する岩波文庫に対し、「現代的教養」を身につけるための書物として企画された岩波新書の配本第一回の一冊でもあった。さらに、この高橋版は『きけわだつみのこえ』の編集に参照された書として知られ、反戦の書ととらえられてきた。

高橋はこの書を「明日しれぬ戦場にあつて、彼ら学生が精神に関することに如何に深く思

ひをひそめてゐるかは、悲壮な戦闘の記述に劣らず、感動的である」と高く評価する。

この高橋版で、戦場での読書を推奨する「まえがき」が添えられていたことは注意すべきだろう。高橋は「開戦当時、ドイツの本屋では、ゲーテのファウストや、ニイチェのツアラツストラヤ、ヘルダーリンの詩など、第一義的な文学書が盛に売れたという事実は、「戦時中ドイツ文学は塹壕で最も真剣に読まれた」という文学史家の言葉を裏書するものである」と述べ、ドイツ学生にもその様子がうかがえることを指摘する。高橋版では、文学が好まれる空間としての戦場と、それを読む教養ある兵士たちが描き出されており、『兵隊』での紹介もこうした編集方針が関係していたと考えられる。

『兵隊』には、高橋版から七名のドイツ学生の手記が引用されている。まず目を引くのは、「僕は戦争を非常に悲しむべきこと、思つてゐます。今度も巧妙な外交によつて戦争を避けることが出来た筈だ」と戦争批判が書かれていることである。こうした批判は検閲での削除対象となる可能性が高いが、なぜ免れているのだろうか。

その理由として考えられるのは、戦争で「重大なのは犠牲的精神であり、軍隊への忠実さを求める内容が強調されている点である。記事最後のヴァルター・アンプロゼリの手記では、塹壕の中でフランス兵に榴弾を投げようとするも、ドイツ兵が前に現れたため投げられず自死した兵士に対し、「賛歌すべき英雄的行為」と表現した箇所のみが抜粋される。いわば戦争という総体を批判することは可能だが、個々の兵士が戦うこと、それ自体を批判することはできないのが『兵隊』における検閲のラインと言えよう。こうして戦争を敵との直接的な戦闘ではなく、犠牲となる自己に焦点を当てて描いたところに『兵隊』に掲載された『ドイツ戦没学生の手紙』紹介記事の特徴があり、問題もある。

では、自己犠牲を神聖化する兵隊イメージが展開される一方で、読むことや書くことをめぐる言説はどのように展開され、そのイメージと接続したのだろうか。結論から言えば、検閲や投稿の問題と関連しながら、書く行為や読む行為によつて犠牲的行いを賞揚する兵隊イメージを強化する方向に進んだと言える。

創刊号には刊行目的として、「戦友互に心境を吐露し、紙上に心の友を求め、或は励まし、或は慰め、以て精神修養の一助たらしめると共に、愈々強固なる団結を結成する」（安藤軍司令官「発刊を祝して」）ことが挙げられる。『兵隊』読者の投稿を支えていたのは「精神修養」を主眼とする修養主義や人格主義であり、投稿欄には、「偉業益々発展思想善導精神修養知識の増進に寄与せられんことを」と『兵隊』が人格や知識を養う修養に役立つことを伝える投稿が多くみられる。このように『兵隊』では、戦場で書物を読むことが精神的な成長へとつながることが推奨されており、これまで読むことや書くことに親しんでいた層だけでなく、今まで書き慣れない読者へも積極的な投稿を促していた。こうした『兵

隊』の投稿について、大濱は「自由な空間」であったと述べ、編集員の石田一郎も後年に自由で強制はなかったと語っている<sup>30</sup>。だが強制の有無に関わらず、戦場において個人による自主規制が存在しなかったとは考えられないだろう。

加えて「従軍記者の活用について」<sup>31</sup>では、報道資料として「陣中美談、佳話」「スケッチ、漫画、詩歌」等を報道部に送るよう呼びかけ、送られた記事は「報道部で検閲するのであるから資料の提供を躊躇する必要はない」と注意される。また掲載作は『写真週報』への転載やラジオ放送に使用されており、その選定の段階において、検閲は行われていると考えられる<sup>32</sup>。先の記事中には、「郷土や特定の新聞」ではなく、「公表を憚る事項を新聞記者に知得せられた場合」は報道部へ連絡するように注意が促されており、投稿により兵士の声を直接集めることは、戦地での「公表を憚る」事態が外部にもれる可能性を排除するためであったと推察される。

投稿制度は一見開かれているようにみえるが、その内容は自由ではなく、むしろ投稿者にとつては、検閲による削除を回避しようとする心理が働いたことは想像に難くない。それは掲載に相応しいコードを探しながら読む行為へとつながり、模倣することで投稿作が画一化されていくことにもなる。さらに『兵隊』は部隊内で数冊配布され、それが共有されていたり、教科書として使用する部隊もあつたりしたことも、こうした傾向に拍車をかけたと言えよう。

さらに二六号からは、兵隊文芸賞が創設され、入賞者の講評、賞品授与が開始される。選考基準は「純一さと、逞しい生命力の充溢、貴重なる体験の感動的高まりに於いて表現された素朴な様式」<sup>33</sup>であり、「最も実感が溢れ魅力があり、真実性があつて読者の興味を惹く力」がある文学だと定義される。文芸賞の設置は「純粋」で「逞しい」「兵隊文芸」という規範を強化することに結びついただろう。「不死身上等兵」<sup>34</sup>等の戦争英雄譚や犠牲となつた兵士を描いた「写真帖」<sup>35</sup>などに、「兵隊文芸」で求められた「純粋」で「逞しく」自己犠牲を顧みない典型的な兵士像を見出すことができる。

『兵隊』では、「精神修養」として読むことによつて『兵隊』誌面で示される「模範的」な兵士イメージが受容され、書くことによつてそのイメージを再生産しつづけることへとつながっていった。また、それは戦場での検閲と隣り合わせの出来事でもあつたのである。

#### 第四節 「兵隊」とつて書くこと

しかし、前節で述べてきたような典型的な投稿者だけが『兵隊』の読者であつたわけではない。むしろ、『兵隊』の投稿作からは戦場における「インテリ兵」の「意識の動員」に関して、より複雑な手続きがとられていたことが予測できる。本節以降では、『兵隊』にお



けるもう一つの兵隊イメージについて考えていく。

それは前節の「兵士として身を立てる」という物語に近接していて明確に分かれているわけではない。だが、編集者への任命方法やいくつかの投稿作からは「兵隊作家として身を立てること」が戦場で兵士として生きるための物語として想像され得たことがわかる。『兵隊』には、戦場だけではなく、銃後での作家活動へつながる道が用意されており、そのために「兵隊作家として身を立てること」を目指す兵士によつて多様な作品が投稿されていくのである。

そもそも『兵隊』読者は、前線にいる兵士だけではない。誌面では「一般からも将兵の陣中労作を銃後国民にも紹介して欲しいと云ふ注文が殺到<sup>66</sup>。」と伝えられ、編集部では帰還兵や内地文学者にも郵送し、読後は兵士自身が軍事郵便で内地へ送るよう呼びかけられている。こうして『兵隊』は前線兵士の言葉を、銃後に伝えることのできる特別なメディアとして成長していく。

さらに『兵隊』の編集者は編集のみではなく、陣中新聞や『写真週報』等に執筆することもあり、編集者は火野によるスカウトや優れた投稿者の中から選出されていた。初期編集者の池田亨は、報道部への配属を周囲の兵士から「羨望」されたと振り返る<sup>67</sup>。そして下田徳幸は投稿者から編集者へと転身を遂げる。下田のために火野は広東から「〇里離れた大和市」まで来訪し、部隊長と直接交渉を行ったが、その編集部員時代を下田は「毎日顔を突き合わせながら仕事をして来た期日は全く夢のやう」と語る<sup>68</sup>。火野は九号で編集から退くが、残された編集者には火野も同人として参加する『九州文学』同人も多く、山辺道夫、風木雲太郎（貞島米親）、安田貞雄、峰絢一郎などがいた。火野も『九州文学』にて、「広東報道部に一緒にゐた池田亨、下田徳幸、山辺道夫、貞島米親、安田貞雄の諸君も大いに期待される<sup>69</sup>。」と述べるように、九州にいる地方文学者たちが戦時下に広東に集結し、中央文壇に進出しようという意気込みすら感じられるものであった。編集室には文学を志すある種の特権的な場が作られていたのである。

のちの『九州文学』で、下田は火野の斡旋によつて作家となる道が開けていたことを、次のように語る。下田や山辺は編集室のある報道部で火野を取り囲み、小林秀雄の評論や火野に対する批評について話し合い、「文学の低調さに就いて」論じあっていた。さらに、「あまり出来のよくない」「作品（小説、詩歌、ルポルタージュ）を、兵隊が」「編集室に持つて来」ても、火野は「何時も心よくそれを受取り、どんなものでも最後まで読んで、親切な感想を述べ」たり、良ければ出版社へ「出来る限りの紹介」を行ったという。いわば『兵隊』は第二の火野葦平となるべく作家を目指す場所であり、火野も「兵隊の中から、一人でも才能と素質のある作家を発見することを何よりの楽しみとして<sup>70</sup>」いたという。

このように『兵隊』では、作家を目指す兵隊たちが投稿者となることで、兵士の戦闘経験を正面から描くのではなく、あえて戦場から焦点をずらした空間を描くことにつながっていく。たとえば入院中の妄想や恐怖を、死んでいく兵士の描写と対比させながら描いた「入院の記録」<sup>22</sup>や徐州郊外の日本語学校を描いた「追憶」(高津政一、二七号)、兵士の状況を妹に知らせる形式で書かれた「妹に答ふ」<sup>23</sup>や「めがね」<sup>24</sup>、「入隊前夜」(栗原陽一、二七号)など、召集前を振り返った作品がある。一方で「豚」(古友雅男、三〇号)を捕まえるための争いや「鍋蓋」で軒を止めようとする「鍋蓋戦記」<sup>25</sup>など戦場を戯画化した作品もみられる。さらに、兵士以外を創作の主体とする物語も多く「姑娘の日記」(山本健一、二七号)や、「花」<sup>26</sup>のように中国人女性の立場から日本兵との交流が描かれる。これらには植民地意識や女性観に問題がある作品もあるが、兵士が自らの戦場体験以外を物語化していく機会となっていたことは確かである。

また例に挙げた掲載作の中には既成作家の作品を模した傾向がみられる。つまり、高度ナリテラシーを持つ一部の投稿者たちは、それまでの読書経験や『兵隊』以外の戦場に流通する書物を参照できたがゆえに、「兵隊文芸」の表明する兵士イメージの体现された戦記とは異なる視点を提示することとなったのである。こうした掲載小説の傾向を生み出していった要因については、次節で考察していく。

## 第五節 兵隊作家モデルとしての火野葦平

掲載数の多さから考えても、前節で述べたような投稿作は『兵隊』が求めていたものだと言える。こうした投稿作品の多様性を保持しながら進化した点に、「インテリ兵」を戦争に取り込むメディアとしての『兵隊』の特徴がある。本節では、「兵隊作家として身を立てる」ことを目指す兵士たちの『兵隊』への投稿を後押しした火野の役割について考察する。掛野剛史は、火野が『兵隊』投稿者を「書く兵隊」として意識したことが、火野の作品執筆を支えたことを指摘しているが<sup>27</sup>、本節では視点を換え、投稿者にとって火野が兵隊作家のモデルとして受け入れられていたことを明らかにする。そして、報道部にも火野を兵隊作家のモデルとする目論見があったことを指摘したい。

掛野も紹介した三浦北春による「書かざる葦平」<sup>28</sup>は、火野のように書くことを目指す兵隊を伝える興味深い一挿話である。主人公は三浦の分身である文学好きな「H一等兵」で手帖を広げぼんやりする姿を曹長から「葦平に似て居る」と指摘され、葦平と呼ばれるようになる。その結果、彼は何かを書こうと苦心するのだが、結局「終日ペンを握り天を仰いで、嘆息している」という筋だ。

物語内だけでなく投稿作には火野作品を模倣したものも多くみられ、すでに一号から、

兵隊三部作『麦と兵隊』『花と兵隊』『土と兵隊』を模倣した「馬と兵隊」(小方実)がある。兵隊ともう一つのをタイトルに掲げ、クローズアップして叙述する火野のスタイルは、投稿者の良き見本となっていたようだ。その後も「馬と兵隊」(妻崎実吉、三号)、「老婆と兵隊」(福田福一、一一号)、「煙草と兵隊」(古川克巳、一四号)などタイトルを模倣し、兵隊との関係性が描き出されている。なかには戦争による環境変化を「戦争と変革」と題して「火野先生の小説にでもなる題材だ」(津村古兵、九号)と述べる兵隊までも現れる。兵隊ともう一つの対象を描くだけでなく、戦争にまつわる物事を書くこと自体が「火野先生の小説」であると感ぜられているのである。

さらに、火野の『怪談宋公館』に描かれた伝説を実地調査し、怪談の種明かしをする鈴木文雄「拾遺宋公館」<sup>32</sup>のような火野葦平の愛読者向けの小説が掲載されることもあった。筆者の鈴木は、火野の作品を読んで宋公館へ怪談の確認にくる兵士のために書いており、火野作品の戦地での影響力の高さを示している。また、火野を範にする作品は絵にも及び『土と兵隊』に酷似した泥濘の場面が「支那兵の土と兵隊」(八号)として描かれる。このように火野葦平の作品群は、兵士の創作の様々な側面で影響を与えていたことがわかってくる。

馬淵逸雄が「戦う将兵と同じ気持になって、戦った経験のある作家が欲しかった」<sup>33</sup>と任命理由を語るように、そもそも火野を初代編集長としたのは、書く兵隊の手本とするためであった。そこには、「軍人として戦場を踏んだものでなければ、あゝした偉大な又は異常な世界は本当に書ける筈がない」<sup>34</sup>という「戦争文学」に対する馬淵の考えがある。そのなかには、投稿者から第二の火野として活躍する兵隊作家を探す目論見もあっただろう。思惑通り、火野が『兵隊』読者たちに対し強い求心力を持っていたことはこれまでにみた通りである。

さらに、兵隊作家として注目を浴びてきた兵士が、帰還により書けなくなったことが伝えられたことも、他の兵隊作家ではなく、火野の兵隊作家モデルとしての存在を強化したといえる。上田廣は「戦地より帰りて」(一一号)で今後の「文学生活」への不安を露わにするが、それは「文学生活」を可能とした戦場から離れたためであった。「才能のない作家は才能の外で生きなければならない」のに、「平凡な一鉄道従業員」では、「生活の文学的対象に命をかけることが出来」ないと上田は戸惑う。兵隊作家の帰還後の違和感は度々吐露され、こうした声は兵士たちに戦場にいる間に書くべきだとの意識をもたらし、何よりも火野葦平こそが兵隊作家モデルとして相応しいという意識を強くしただろう。

『兵隊』には「兵隊作家として身を立てよう」とする兵士が集まり、第二の火野葦平への道が開かれ、報道部もまた火野葦平を編集長に据え、兵隊作家のモデルとなるべきだと

考えていた。だからこそ、『兵隊』には、「兵隊文芸」の枠から外れていくような作品が掲載され、それは読み、書く兵隊が戦争へ参加する意義づけにもなったのである。

## 第六節 兵隊から作家へ―執筆者の変容―

しかし、『兵隊』から火野葦平を継ぐ兵隊作家は誕生せず、むしろ徐々に従軍作家を中心とした内地の文学者の執筆が増加していく。本節では、『兵隊』において投稿者としての兵隊から作家へと、編集サイドの視点が変化した背景を明らかにする。それは、編集部の思想統制の強化と文学者による兵隊作家批判と関連している。『兵隊』において、「兵隊作家として身を立てる」道が閉ざされていくまでの経緯を追っていきたい。

まずは、兵士から作家へと『兵隊』執筆者が変化する時期を、編集サイドの変化と照らしあわせながら確認していく。一九四一年一〇月に編集サイドに大きな変化が起こる。東条英機との齟齬による馬淵逸雄報道部長の退任である<sup>35</sup>。火野を報道部に呼び寄せ、兵隊作家を重用した馬淵の転出は投稿者の雑誌内での地位に影響を与えたと考えられよう。退任直後の二三号（一九四一年一二月）から『兵隊』は戦況の悪化により休刊しているため、継続した変化を追うことはできない。だが、半年後の一九四二年五月の復刊を境に火野葦平や帰還作家だけではなく、高村光太郎、尾崎一雄、坪田譲治、海野十三、獅子文六、北原武夫、長谷川伸、舟橋聖一、谷川徹三、片岡鉄兵が執筆者に名を連ねるようになる。投稿作も戦況の安定により一旦増加しているが、掲載順序や編集後記からは編集部が文学者を重視していることがうかがえる。そして、後年には投稿数も減少してしまう。

さらに、兵士から作家へと執筆者が移行する一九四二年九月ごろ、編集部内で思想調査が行われたことが陸軍史料から判明する。「大陸及南方方面渡航左翼要注意者二関スル件報告」<sup>36</sup>には、下田徳幸の編集部着任以降、左翼要注意者として動向が監視されつづけ、「部内ヨリ左翼関係分子ヲ免除スヘキ」との方針から解雇が決定されたこと、大阪朝日新聞社記者として帰還する旨が記されている。

編集部内において思想統制が強化されたことは、『兵隊』編集部から唯一刊行された詩集『兵隊の祝祭 南支軍詩歌集』（一九四三年）からも予測することが可能である。この詩集は本来、九号で兵隊文芸書として散文も含めて刊行が予告されていたが、その後内容を短詩型文学のみに縮小することで一九四三年に発売されている。そのため第四節にて述べたような兵隊による様々な小説作品は収録されておらず、この詩集に掲載された詩については、坪井秀人によって「全体に月並みな国体イデオロギーが浸透して」<sup>37</sup>いると指摘がされている。このように『兵隊の祝祭』は、火野のような兵隊作家として投稿者たちが世に出る道が大きく狭められた証でもあった。

兵隊作家に対する視線が厳しくなったのは、編集サイドだけの問題ではない。この時期、内地文壇では兵隊作家を批判する声が挙がっている。一九四〇年以降「出版新体制」が築かれ、統制の手綱が強められていくと、兵隊文学を含む戦争関連書物の飽和状態に対し、不満の声が一部の文学者からあがってくる。

これまでに火野葦平は兵隊文学の擁護者であり、戦後も兵士に寄り添う態度をとっていたことを検証してきた。だが一九四三年の座談会で、火野は戦争文学を「素人文学」と呼び、「最近私などのところにもいろいろな原稿を送って来たりするのがあまって、すぐ有名になつて、作家に成れる——といふやうな簡単な考を有つ軽薄な向きが非常に増えた」と述べる。そして、「自分の体験を書いたものがすぐ本になつたり、戦地で何かして来た体験を書くとすぐ本になつたり、そんなことがしばらくあつたので、簡単に出版が出来ると思へている<sup>33</sup>」と批判する。この発言はまさに『兵隊』投稿者たちへの批判ととれよう。

火野だけではなく、川端康成も「ルポルタージュ」は「ほんとうの文学ではない<sup>34</sup>」と指摘する。そして「本当の兵隊さんの中から第二の火野葦平<sup>35</sup>」が現れてはいないと述べ、寺崎浩によって「兵隊といふものと、作家といふものは両立しない<sup>36</sup>」とさえ述べられるようになる。『兵隊』は積極的に内地に送られ、その評判を伝えていたことから、文壇側の批判を敏感に察知し、兵隊作家モデルである火野の変化は、兵隊作家に対する対応を一層厳しいものとしただろう。

一九四三年の二九号には、これまで許容されてきた多様な兵隊作家としてのありかたを否定するように、「われ／＼の希ひは、同胞一億のいだく、あのまぶしいばかりに理念化された立派な「兵隊」に、身を寄せ近づくことだ」との巻頭言が掲げられる。このように、太平洋戦争開始以降、編集サイドの変化と共に兵隊作家が徐々に後景に退いていく。戦況の悪化によって、「兵隊作家として身を立てる」という兵隊たちが想像しえた道も閉ざされていったのである。

## おわりに

本章では、『兵隊』における「インテリ兵」による読書・執筆行為を考察し、『兵隊』が精神修養と投稿という制度によって、「インテリ兵」を戦争に取り込むメディアとして成立していたことを明らかにしてきた。それは、強固な検閲を繰り返す方法ではなく、強制力を伴わない〈緩やかな動員〉となっていた所に特徴がある。

〈緩やかな動員〉は『兵隊』誌面で、「インテリ兵」に向け「兵士として身を立てる方法」と「兵隊作家として身を立てる方法」という二つの兵士イメージが提示されたことによって促進されたと言える。前者は自己犠牲を神聖化する兵士イメージとして受容され、

兵士の「意識の動員」へとつながり、後者は火野葦平を兵隊作家モデルとして提示することで、書き、読む兵士として戦うことが認められ、戦争参加への意義づけが行われたのである。「兵士」としてのアイデンティティだけではなく、「兵隊作家」としてのそれを選択する余地を残していたところに、「インテリ兵」を取り込むメディアとしての『兵隊』の特性がある。だが、「インテリ兵」たちによる投稿がつけられたにも関わらず、編集部は内地作家の重用を開始する。それは、兵隊作家として生きる道が断たれ、犠牲的で理想的な兵士のみが求められる空間の到来でもあった。

本章で述べてきた戦場における教養的で自己修練を目的とした読書行為による〈緩やかな動員〉には、戦時下の学生の読書が、推薦図書制度によって緩やかに統制が進んでいく様子との共通点が認められる。こうした国内における推薦図書制度によって、読書行為が統制されていくことについては、次章にて考察していくこととしたい。

<sup>1</sup> 大濱徹也「解題 兵隊の眼」『兵隊』（刀水書房、二〇〇四年七月）一〇二頁。

<sup>2</sup> 金井景子「前線」と「銃後」ジェンダー編成をめぐる――投稿雑誌『兵隊』とリーフレット『輝ク』を中心に」『岩波講座3 アジア・太平洋戦争 動員・抵抗・翼賛』（岩波書店、二〇〇六年一月）九一～一二〇頁。

<sup>3</sup> 奥野他見男『大学出の兵隊さん』（玉井清文堂、一九二八年九月）

<sup>4</sup> 「僕らは大学出の兵隊」『東京朝日新聞』（一九三八年一月二十九日、夕刊二面）

<sup>5</sup> 「陣中で理博インテリ上等兵に快報」『東京朝日新聞』（一九四〇年二月三〇日、朝刊二面）

<sup>6</sup> 池田源治『従軍記インテリ部隊』（中央公論社、一九四〇年四月）

<sup>7</sup> 佐藤卓己『物語岩波書店百年史2』（岩波書店、二〇一三年一〇月）

<sup>8</sup> 詳しくは、第一章注五〇を参照。

<sup>9</sup> 尾崎賢三郎編『戦地消息』（南山堂書店、一九三四年一二月）

<sup>10</sup> 成瀬無極編『塹壕より故郷へ』（春陽堂、一九三五年八月）

<sup>11</sup> 高橋版は、『ドイツ戦没学生の手紙』一九二八年に増補された版ではなく、一九三三年のヒトラー政権時の普及版を原書とし、普及版の愛国主義を受け、反戦的言辞や独仏学徒兵の交歓シーンを省略している。『物語岩波書店百年史2』前掲注七、一八〇、一八一頁。

<sup>12</sup> 花田政治郎『兵隊 三号』（南支派遣軍報道部、一九三九年六月一五日）

<sup>13</sup> 石田一郎、大濱徹也、鈴木正夫「兵隊の投稿雑誌『兵隊』をめぐる」『刀水 6』（刀水書房、二〇〇二年五月）

- 14 「従軍記者の活用について」『兵隊 一六号』（南支派遣軍報道部、一九四一年一月一日）
- 15 「全支の兵隊が作った「写真週報」（一七号）など。南支戦線から銃後へのラジオ放送では編集部の協力の下、朗読や演奏、放送劇が「兵隊文芸の夕」として放送された（三〇号）。
- 16 兵隊文芸募集記事『兵隊 二五号』（南支派遣軍報道部、一九四二年九月）
- 17 田中久「不死身上等兵」『兵隊 二七号』（南支派遣軍報道部、一九四三年一月一日）
- 18 矢野正俊「写真帖」『兵隊 三〇号』（南支派遣軍報道部、一九四三年七月一日）
- 19 「編集後記」『兵隊 六号』（南支派遣軍報道部、一九三九年八月一日）
- 20 池田亨「兵隊出発の回顧」『兵隊 三〇号』前掲注一八。
- 21 下田徳幸「火野葦平の思ひ出」『九州文学』（九州文学社、一九三八年三月）
- 22 火野葦平「雑談」『九州文学』（九州文学社、一九四〇年三月）
- 23 下田徳幸「火野葦平の思ひ出」『九州文学』前掲注二一。
- 24 古友雅男「入院の記録」『兵隊 二八号』（南支派遣軍報道部、一九四三年三月）
- 25 鈴木文雄「妹に答ふ」『兵隊 三五号』（南支派遣軍報道部、一九四四年一月一〇日）
- 26 隅田三平「めがね」『兵隊 三五号』（南支派遣軍報道部、一九四四年一月）
- 27 一刀剣二「鍋蓋戦記」『兵隊 三四号』（南支派遣軍報道部、一九四三年一二月）
- 28 渡邊孝昌「花」『兵隊 二八号』（南支派遣軍報道部、一九四三年三月）
- 29 掛野剛史「書く兵隊・戦う兵隊―火野葦平と雑誌『兵隊』（『アジア遊学 一六七』（勉誠出版、二〇一三年八月）一七二―一八二頁）。
- 30 三浦北春「書かざる葦平」『兵隊 一四号』（南支派遣軍報道部、一九四〇年四月）
- 31 福田福一「老婆と兵隊」『兵隊 一一号』（南支派遣軍報道部、一九四〇年一月）
- 32 鈴木文雄「拾遺宋公館」『兵隊 三八号』（南支派遣軍報道部、一九四四年四月）
- 33 西村楽天、馬淵逸雄、火野葦平「名作『麦と兵隊』の出来るまで」『東海人』（静岡県文化協会、一九五三年九月）三四―三九頁。
- 34 馬淵逸雄『報道戦線』（改造社、一九四一年八月）
- 35 西岡香織『報道戦線から見た「日中戦争」』（芙蓉書房出版、一九九九年六月）二七二―二七七頁。
- 36 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C01000681200` 一九四二年九月一四日、「大陸及南方方面渡航左翼要注意者に関する件」（防衛庁防衛研究所）
- 37 坪井秀人『声の祝祭』（名古屋大学出版会、一九九七年八月）二六七頁。

<sup>38</sup> 志賀直哉、武者小路実篤、岩田豊雄、火野葦平「文学、その他」『改造』（改造社、一九四三年四月）

<sup>39</sup> 川端康成「日本文学の現実」『新潮』（新潮社、一九四三年一月）

<sup>40</sup> 「文芸時観」『新潮』（新潮社、一九四三年一月）

<sup>41</sup> 寺崎浩「作家精神と軍人精神」『新潮』（新潮社、一九四三年五月）

\*本章における『兵隊』の引用は『兵隊』（刀水書房、二〇〇四年七月）の復刻版による。また『陣中倶楽部』は、講談社にて閲覧させていただいたものである。貴重な出版史料の保管および資料閲覧のご協力に、ここに記すことで感謝とかえたい。



## 第二部 戦時下、国内の出版統制と読書

### 第四章 〈緩やかな統制〉としての推薦図書制度―文部省と日本出版文化協会―

はじめに

第一部では、戦場における書物の流通や慰問用書物の隆盛、そして慰問雑誌の受容について考察することで、戦場という〈読書空間〉の一端を明らかにしてきた。つづく第二部では、戦時下の出版統制と読書の関係を考察していくことで、内地において戦場と読書がどのようにして結びついたのかを問い直していく。第一部で明らかにしてきた戦場という〈読書空間〉を支える読書のありようを、内地における推薦図書制度や学生の読書から具体的に明らかにしていきたい。

第三章では雑誌『兵隊』の兵士（読者）に対する統制の様子を〈緩やかな動員〉として分析を行ってきたが、厳しく取り締まるのではなく、ある程度の「自由」があるなかで、緩やかに統制されていくという同様の仕組みを戦時下の推薦図書制度にも見出すことができる。まず本章では、戦場と内地の読書行為の連続性を明らかにする端緒として、推薦図書制度を取り上げ、その仕組みを考察する。そして第五章では学生の読書行為に注目することで、戦場と読書が結びついていく過程について述べることにする。

文部省をはじめ日本図書館協会や日本出版文化協会（のち日本出版会へ改組）など、様々な組織によって継続的に行われていた推薦図書制度は、「良書」を推薦するという方法を採用することで、教育的役割と個人的な読書に対する統制を推進してきた。本章で推薦図書制度を〈緩やかな統制〉と呼ぶのは、読書に対する統制が「推薦」や「指導」といった、強制力を伴わない「消極的」な思想統制政策として考えられてきたことに起因している。

一方で、読書統制の対極として物理的な図書の廃棄や言葉の削除を伴う検閲や発禁は「積極的」な思想統制と考えられ、これまでに多くの研究が進められてきた。しかし、思想統制は「積極的」であることが必ずしも効果的なわけではない。たしかに検閲や発禁は、物理的制裁だけではなく、制度の存在そのものが人々を抑制し、自己検閲を誘発した。その反面、書物は発禁という烙印を押されることで、かえってその市場価値が高められることもあった。

推薦図書制度という〈緩やかな統制〉に注目するのも、一見「消極的」政策でありながらも、それが効果的な思想統制としての役割を果たした可能性を、日本出版文化協会の開始した推薦図書制度に見出すことができるからだ。「良書」を読むという呼びかけは、ただ指定した書物を読ませるといった効果に加えて、「良書」を読むという読書行為自体の価値

をも発信する。本章で問題とするのは、そうした推薦図書制度が思想統制として機能する場合である。

まずは、推薦図書制度の基礎を作った文部省の推薦図書制度の成立過程から、文部省による推薦図書制度が「積極的」な思想統制政策とはなり得なかったことを明らかにしていきたい。明治から昭和初期までに、社会情勢や文化変容に伴い、推薦図書制度は成熟し拡大していく。隆盛する文部省の推薦図書制度に異を唱えたのが、戸坂潤をはじめとした知識人たちである。後述する戸坂の言説や当時の読書論からは、文部省教学局による推薦図書制度の抱えていた課題が逆説的に明らかになる。そして、文部省の推薦図書制度の問題点を発展的に解消し、推薦図書制度の持つ「緩やかな統制」としての機能を活かし、「積極的」な思想統制へと転じたのが日本出版文化協会による推薦図書制度であった。本章では、推薦図書制度の「緩やかな統制」の仕組みを考察することによって、戦時下の「指導」や「推薦」という、可視化されにくい統制の側面を描き出していきたい。

## 第一節 文部省推薦図書制度の成立と拡大

社会や文化の変容とともに、推薦図書制度についての法整備は着々と進行してきた。まずは推薦図書制度確立までの文部省の動きを辿ることで、一九四二年の国民読書運動に至るまでの推薦図書制度の拡大について明らかにしておきたい。それまでの文部省による推薦図書制度は、どれほど「積極的」な思想統制としての意味を持っていたのだろうか。

日露戦争を契機として、社会教育への関心が強まると、文部省は読書行為を社会教育政策のひとつとして認識していく。一九〇八年に文部大臣に就任し、社会教育の振興に励んだ小松原英太郎は、「通俗講演会・通俗図書館・通俗博物館等の設置」を「積極的」な社会教育政策と位置づけている。この小松原の取り組みのひとつとして設置された通俗教育調査委員会によって、一九一一年一〇月一〇日に制定されたのが、政府による「良書」選定のはじまりとされる通俗図書審査規定である<sup>30</sup>。通俗図書審査規定は、「通俗教育ノ趣旨ニ適スルモノ」を選び、「通俗教育上ノ参考」とすることを目的としていた<sup>31</sup>。

「良書」推薦制度の開始期の注意点として、小松原が内務省の行う「発禁」を「消極的」な社会教育政策ととらえ、文部省の教育指導を「積極的」な政策ととらえていたことがあげられよう。文部省主導で社会政策を推進していくための方便とも考えられるが、「良書」を認定し推奨するという行為が、その制度の始まりにおいて、「健全な社会風紀」に影響を持ちうる政策として、訴求力があつたことを示している。

さらに、第一次世界大戦後に行われた社会教育政策の強化によって、一九二一年には通俗教育から社会教育へと名称が変更され、一九二九年には文部省内に社会教育局が設立さ

れていく。推薦図書制度に関わる変化としては、一九一九年の臨時教育会議において「教育ノ効果ヲ完カラシムヘキ一般施設ニ関スル建議」（建議二号）が可決され、「国民思想ノ帰嚮ヲ一ニ」統一するため、「良書ノ刊行ヲ奨励シ出版物ノ取締ニ付厳密ノ注意ヲ怠ラサルヘキコト」が提示されたことが注目される。この建議により、「良書」刊行による言論・出版統制が改めて確認されたのである。

建議を受け、通俗図書審査規定が改められると、一九二六年一月九日には図書認定規程（省令二号）によって、条文の整備が進められる。さらに、図書認定規定は一九三〇年に図書推薦規程（省令二二号）となり、推薦する図書として「社会教育ニ裨益アリト認めラル」ものを推薦、奨励することを明確にする。こうした推薦図書制度の変化は、先に述べたような社会教育政策の強化により、文部省へと社会教育行政が一元化されることで、社会教育に読書を利用するという方針が強められたことが背景にある。

また、こうした制度の変化は推薦図書の読者対象が、社会主義者や学生だけではなく、社会一般に拡大されていく過程でもあった。この時期、文部省の「良書」認定は、一九二八年専門学務局学生課、一九二九年学生部調査課、一九三四年には、社会一般への思想対策を担う思想局調査課へと移管されていく。かたして、一九三七年に思想局が廃止されると、「思想情報の収集調査、教員の再教育、日本文化の講義・印刷物の刊行頒布、良書推薦、及び学会の開催まで思想・文化の統制・善導に関する広範な業務を担当」する外局として設置された教学局普及課へ、推薦図書の認定機関は移る。推薦図書制度が戦時下の思想統制のひとつとして、「国体の本義に基づく日本文化の創造発展・教学の刷新」へとその目的を新たにするのも、この時期からである。

推薦図書制度の目的の一般化は、学校や図書館行政に影響を与えていく。たとえば、一九三八年には「図書ノ推薦及紹介ニ関スル通牒」として、教学局から各学校、地方長官へ、推薦図書の校友会雑誌への記載や図書館や寄宿舎への備え付けが指導される。また、一九三九年七月には、社会教育長名による「文部省推薦図書ノ周知徹底方ニ関スル件」（発社二三三号）が発せられ、「新ニ児童図書ノ推薦ノ方途ヲ講ジ」「凡ユル読書層ニ対シ」、推薦図書制度の強化・改革が図られることとなる。

推薦図書制度が拡大されるなか、推薦図書の決定はどのように行われたのだろうか。一九四〇年の段階では、推薦の過程は四つの段階に分けられている。まず、文部省の当該部署によって（一）調査用図書として「一般向図書」「児童向図書」「依頼図書」が毎月取揃えられる。次に、（二）二五名からなる調査会が開催され、図書の内容、推薦理由、読者層を明記した調査書が作成される。そして、（三）四一名からなる委員会にて審議が行われ、満場一致に至ったものが推薦図書として決定される。決められた推薦図書は、（四）官報、

週報、毎日曜夜七時ニュース後の府県広報ラジオ、新聞、雑誌、ポスター等など様々な媒体で発表される。さらに、認定された図書には、「推薦」「紹介」「選定」と三段階が設けられている<sup>100</sup>。

こうした推薦制度の確立とは裏腹に、推薦図書の浸透は芳しくない状況がつづいていたようである。推薦図書と発禁図書のうち思想上重要なものをまとめた『文部省推薦並教学局選奨図書思想関係発禁図書一覧』（教学局、一九四二年）は、推薦図書の設置の重要性や発禁図書の排除の徹底を各学校に周知させるために作成された小冊子である。その作成趣旨には、推薦図書は「既ニ各学校図書館ニ於テ」「学徒ノ読書指導ニ」使用されつつあるが、「優良図書ニ対スル積極的推奨ノ意図（傍点引用者）」が各学校図書館に理解されておらず、「備付サエモ未ダ十全ナラザル」ことが伝えられている。さらに学校図書館で「発売頒布禁止処分」の図書が閲覧できてしまう実情が報告されている。文部省による推薦図書制度の目的は、このように読書によって国民を教化していくことにあつたと言える。

戦前の文部省についての研究を行う荻野富士夫は、一九三九年二月一日付『東京朝日新聞』にて、教学局が「大学教授の著書の検討とか学生思想の取締りなどといふ消極面に力が注がれ」「思想局時代の空気が脱け切ら<sup>101</sup>」ないことが、批判されていることを挙げ、「創設から一年半ほど教学局が期待外れという評価はすでに定着していた<sup>102</sup>」と述べている。そうした教学局の失敗の原因とされたのが、「消極的」な推薦図書制度であつた。それは推薦図書制度が、新しい目的として設定された「国体の本義」に基づく日本文化の振興としての機能を果たさず、旧来の社会主義思想や学生に対する思想統制としての役割に、いまだ拘泥していたことを示していた。そして、教学局の不振がささやかれ始めたところに、日本出版文化協会（以下、文協）による推薦が開始されるようになるのである<sup>103</sup>。

## 第二節 推薦図書制度への批判

戦時下の推薦図書制度は文部省の専売特許であつたわけではない。日本図書館協会は一九三一年から推薦図書を発表を行い、その他にも推薦図書を発表する団体は後を絶たなかつた。しかし、知名度や影響力の点で文部省と比較し得るのは、文協及びその改組団体の日本出版会の推薦図書制度に限られる。そして、「消極的」政策と揶揄された推薦図書制度による思想統制が、「積極的」政策へ転じるのもこの文協の推薦図書制度をきっかけとしている。

まず本節では、文部省の推薦図書制度に対する当時の文化人たちからの批判の声を明らかにしておきたい。なぜなら後述するように、文協の推薦図書制度は、その批判を発展的に解消していったからである。戸坂潤や河合栄治郎などによって戦時下に連綿と議論され

てきた読書論には、文部省的な「良書」に対する批判精神が底流し、言論・出版統制への対抗策が提示されていたと考えられる。

一九三七年に戸坂潤は執筆禁止となり、河合栄治郎の『ファシズム批判』等の著作は翌年二月に発禁となる。そうした思想弾圧のなかで刊行されたのが、一九三八年一二月の河合栄治郎編『学生と読書』（日本評論社）と一九三八年一月の戸坂潤『読書法』（三笠書房）だ。

『学生と読書』は、「学生叢書」のひとつとして刊行され、多くの学生読者を獲得したことで知られる。河合は序文で「事変の重要性を認識」していることを強調した上で、だからこそ「祖国の為に起つ」には、学生生活に一層邁進することだとの考えを明らかにし、「学生叢書」は此の時局に於て、当にその意義を失はないのみならず、却て一層その意義を加へた」と述べている。そして、学生がすべきこととは学問であり、読書の意義は自らの学問を通じて「自己成長」を遂げることであると論じる<sup>10</sup>。こうした教養主義の立場から思想統制に対抗するための読書論に加えて、「ブック・レビュー」の文化批評としての役割を重視したのが、戸坂潤である。

戸坂の『読書論』序文には、「ブック・レビュー」は、単なる「紹介・案内・広告・推薦」ではなく、「もつと広く深い」文化的批評の役目を担うものだとの考えが明らかにされる。さらに、「ブック・レビュー」は、「良書推薦という意味でもない」こと、「万人必読の良書をえりすぐって評論するというような、第一公式の礼服用に及んだものではない」ことが強調され、「読書の自由」が提案される。

では、戸坂の「ブック・レビュー」は、どのような点を重視していたのだろうか。文化批評としての「ブック・レビュー」を突き詰めるなかで、戸坂は「思想の表現物」としての図書と「ジャーナリズムの商品」として「印刷や装幀という物質的条件を含」んだ本という二つの側面を重視していく。書物は「内容」と「外的要因」という二面から成立しているが、「この二面は必ずしもうまくソリの合ったものではない」ことから、その二面性を論じていくことが必要となる。

また、森銑三も推薦図書制度の弊害に加え、出版業者の営利目的の出版事業を批判するなかで、「出版文化を向上せしめるためには、書評」が重要であり、「推薦図書に対しても、忌憚のない批評が加えられるべき」で、「異色のある書物で推薦に洩れたものなどをも大いに認め」るべきだと、戸坂と同様の見解を明らかにしている。

このように推薦図書制度に対しては、自らが選択した「良書」を読むことを提唱すること、そして出版文化の向上には、単なる紹介や推薦ではなく、「内容」と「外的要因」という二つの側面からの批評が不可欠であるという反応が寄せられていた。次節で述べるよう

に文協の推薦図書制度の特徴は、文部省が読書教育による国民の向上を目指していたこととは異なり、書物の「内容」と「外的要因」の差を埋めていくことで、出版文化の向上を進め、「良書」を増加させようとした点にある。

さらに戸坂は、「半国権的・半官半民的」団体による「自由」の創出が統制に接続することを危険視してもいた。それは戸坂の「統制は自由の抑圧ではなくて、却つて或る特定の自由を他の不利有害な自由から護ることによつて、結果に於ておのづから之を実現することになる」という考え方が根底にある。戸坂のこの指摘は、教育局の日本文化中央連盟に対して行われたもので、文協との関連をうかがうことはできない。

しかし、「半官半民的」団体である文協による読書統制は、「国防国家建設」の目的から出版文化の向上を目指すことで、「或る特定の自由を他の不利有害な自由から護ること」となり、推薦図書制度に対する様々な反応に対する解決策を提示していくことになった。次節では、こうした文協の推薦図書制度について考察していくことで、「緩やかな統制」としての推薦図書制度のはらむ問題を明らかにしていきたい。

### 第三節 日本出版文化協会による推薦図書制度

本節では文協の成立経緯から、推薦図書制度による読書統制のあり方を考察することで、推薦図書制度がどのように「積極的」思想統制政策として機能し、「緩やかな統制」となっていくのかを明らかにしたい。

一九四〇年以降は「出版新体制」とも呼ばれ、出版文化に大きな変容のあつた時期にあたる。文協は、一九四一年一月に政府指導のもと出版社を集めた統制団体として創設され、出版企画の事前審査、出版用紙の割当、そして推薦図書の選奨（第一回一九四一年一月〜第一七回一九四四年三月）を行っている。出版企画の「内容」の審査基準を推薦図書で示し、事前審査を行い、その「内容」によつて「外的要因」である用紙配当の割り当てを操作することで「文協で認められたものだけが出版を許され<sup>21)</sup>る状況を確立したのである。こうして文協の推薦図書制度は、文部省とは異なり、用紙配当の基準としての役割を持つために、「推薦」という強制力のない行為でありながら、一定の規制力を保持した「積極的」統制手段となった。

文協は、一九四一年九月三〇日の理事会において、日本出版文化協会図書推薦規定、日本出版文化協会図書推薦委員会規程を可決し、一〇月一日に情報局総裁の承認を経て推薦図書制度を開始している。同時に日本出版文化協会図書推薦事業要綱も定められ、具体的な運営が決定された<sup>22)</sup>。「要綱」は、管見の限り関連機関誌への掲載もなく、資料的裏付けがとれていないため、文協機関誌『出版文化』等の記事から、第一回の推薦図書選出の

様子を迫うことで選定過程を追っていきたい。

推薦図書の決定は、文協に納本された図書や企画届を基にし、推薦委員会による会議によって選出する方法がとられている<sup>200</sup>。一月一日に行われた第一回推薦図書発表までには、期間中（九月一〇日から一〇月九日）に発行届と共に納本された図書から候補七八件が選出され、第一回調査報告会（一〇月二〇日）にて五四件が可決、更に一〇月三〇日東日会館会議室にて行われた委員会にて、最終的に二八件が推薦可決となっている。

委員会には、出版文化協会による推薦委員の他、鈴木庫三をはじめとする情報局関係者五名、厚生省、文部省等関係者が参加し、司会は図書推薦委員長である飯島幡司専務理事（朝日出版局長）が務めている<sup>200</sup>。一九四二年文協第二回通常総会では、協会幹部に対する不信任案が所属する出版社から提出・可決されるという「文協事件」によって、推薦図書表彰式が中止されることもあった。推薦委員の在職期限は一年（重任は可）で、第一回の四五人から徐々に増加し、第二五回の発表時には八二人にのぼる。第一回では、四五人中二一人が帝国大学教授であり、その後も委員は帝国大学教授が半数を占めている<sup>200</sup>。

文協の推薦図書制度は、情報局関係者が委員会に参加していることから、政府との連携のなかで決定されていたことがわかるが、それにも関わらず読者や出版関係者からは文部省と文協の二つの推薦図書制度をめぐって混乱が生じている。出版関係者のなかからは、「文協が推薦を始めてから文部省と対立的に視られ<sup>201</sup>」、「文部省の方が何かにつけ虐待されつゝある如く見られる<sup>202</sup>」という声があがり、大規模な制度が、「文部省と文教推薦と二本立てになつて居ること<sup>203</sup>」に対して批判が生じているのである。こうした批判に対し、文協は「別個の立場から推薦図書を選定してゐるのであるから、その両者が全く一致するといふことは考へられない<sup>204</sup>」と批判の声に応えている。

実際にどの程度推薦図書の重複があつたのか、冊数を比較しておきたい。文協が一七回までに発表した推薦図書の冊数は三四五点、発表毎に一二から三五冊まで推薦数に開きがある。文協の推薦図書のうち、文部省によって推薦も行われている書籍は全部で七三冊、全体で約二一%の重なりがあることがわかる【図一】。重複図書は、児童図書から一般図書（文学・経済・政治・科学・数学）など、内容も読者層も多岐にわたっている。たしかに重複する図書が二割あることから、推薦図書の時によっては同じ推薦図書が目立つ可能性も考えられるが、文部省と文協の推薦図書が全く同じであるというわけではない。

では、どのように二つの推薦図書は異なっているのだろうか。まずは中田邦造が、文部省と文協の推薦図書に対して、「文部省は国民の為に十部、文化協会は出版界の為に三十部を<sup>205</sup>」推薦しているのであり、推薦数や目的が異なっているとの解説を加えていることが挙げられるだろう。文部省は、国民のための推薦図書であり、文協はあくまで出版業界に

むけての推薦図書なのである。

つぎに二つの推薦図書制度の相違点としてあげられるのが、推薦図書の入手のしやすさの問題である。文部省の推薦図書は、文協の推薦図書に比べ、同じ本でも推薦時期に二、三ヶ月の遅れがある。そのため、文部省の推薦図書が発表されるころには、売り切れてしまっていることも少なくない。文協は、第四回の発表から推薦図書の発表時期を、当初の一日から一〇日へ変更している。文協はこの一〇日間で、推薦図書の増刷を行い、確実に購入できるよう調整を行っている<sup>300</sup>。また文協の第一回推薦図書発表後には、東京書籍雑誌小売商業組合、日本出版配給株式会社、推薦図書発行元、百貨店組合などによって、推薦図書の普及のための宣伝及び配給に関する懇談会が開かれてもいる<sup>301</sup>。文協の推薦図書は、配給を担う日本出版配給株式会社と連携することによって、文部省の推薦図書よりも、文協の推薦図書が読者の手に届きやすくなるよう配慮がなされていたのである。

また、推薦図書の配給方法だけではなく、推薦図書に対する考え方において、文協と文部省の推薦図書の相違点を挙げるができる。文協が小売店に配布した推薦図書目録は、発表毎に発行され、内容紹介を中心として、文協による無記名記事、推薦委員及び評論家等の原稿や読者の感想が掲載されていることから、文協の目指す推薦図書の特徴をみることができる。ここでは読者層の問題、装幀や「内容」の改善のための議論についてみていくことで、文協の推薦図書制度の特徴を明らかにしていきたい。

まず文協の推薦図書は、「高度国防国家建設といふ切実なる国家要請に合致する」、「他に見るが如き限られた範囲のものではなく、注意深く眼を国民各層に馳せ、各層の性格を深く認識しつつ選び出された良書<sup>302</sup>」であることが示されている。文協では、一般、教養、専門、青年、児童と文部省よりも読者層を細かく設定し、広報に週報、ラジオ、新聞、映画などを使用することで、学生や大学教授向けと批判された文部省との区別を明確にしている<sup>303</sup>。

また初期の文部省推薦図書には『マルクス主義批判<sup>304</sup>』等の明らかに社会主義思想の統制を目的とする書名が散見されるが、文協の推薦図書には含まれていない。なかでも、読者層別に分類することで、勤労学生や産業戦士と呼ばれ、新しい読者として台頭してきていた「あまり学歴もなく、しかも古典に親しみたいと思つてゐるもの<sup>305</sup>」にとって、「要領よく、しかもあまり通俗的でなく、相当教養の得られる程度の本<sup>306</sup>」が数多く選奨されたことは、文部省と異なる点である。

次に、文協の推薦図書の特徴の一つとして挙げることができるのは、書物の「内容」だけではなく、金銭や広告、装幀などの「外的要因」などを総体的に改善するという、出版文化全体の「健全化」に対する熱意をもっていたことである。目録には「推薦委員列伝」



と称したコラムが連載され、委員の紹介と推薦図書への抱負が語られている。その中で、東畑精一（第一二回より委員に就任）は「発行部数と価値を混同するな<sup>33</sup>」と述べ、「凡書・悪書もまた非常な売れ行きを示し」、「赤本類似の大衆小説類が、依然として刊行され、而も勤労者にむさぼり読まれてゐるといふ事実<sup>34</sup>」の改善を目指し、推薦図書の普及を図ろうとしている。また、大熊信行（第一〇回より委員に就任）は「一冊の小説は文学そのものではなくて、文学および書冊といふ一種の工芸の総合物」であるから、「書物にたいして支払われる代価は、たゞちに文学への代価ではない<sup>35</sup>」と強調する。

こうした発言を受け、文協の推薦図書の決定条件として、「内容」と「外的要因」（装幀、製本、印刷、価格等）が合致したものが要求されるようになる。読者投稿では、「推薦図書は内容は勿論であるがその外見体裁も推薦に値する大切な一要件」、「推薦の条件として内容は論外、書物の美的質的、条件と同時に、予想される読者に対する価格の条件も一考して戴き度い<sup>36</sup>」との声が多く掲載されるようになる。また、当時大政翼賛会文化部副部長であった日比野士郎も「書物について<sup>37</sup>」のなかで、優れた「内容」の図書は、装幀、製本、印刷がしっかりしていると語る。「内容」だけではなく、装幀や発行部数などの出版文化全体の「健全化」への注力こそ、文協独自の視点であった。

本節では、日本出版文化協会による推薦図書制度が、文部省の推薦図書制度とどのような点で異なっているのかということ明らかにしてきた。文部省の推薦図書制度が、学生の指導から、徐々に国民全体の指導へとその目的を拡大していくのに対して、文協の推薦図書制度は、出版文化を「健全化」するために行われた。「健全化」は、「内容」だけではなく、日本出版配給株式会社とも連動して配給を円滑に進め、読者層別の推薦を強化し、さらに装丁や印刷など「外的要因」にも注力したものであった。

#### 第四節 〈緩やかな統制〉としての「良書」推薦

本節では、前節で明らかにしてきた文協の推薦図書制度がどのようにして〈緩やかな統制〉として機能していくのかについて明らかにしていきたい。

文協は先に述べたように出版文化の「健全化」を目指していたが、戦時下の国家建設という目的に収まる範囲において、文化的向上が目指されたのであり、それは与えられた「自由」だったと言えるだろう。実際には出版文化の「健全化」という限られた「自由」のなかで「推薦図書が、出版新体制のシムボルとして、国民の書架を充たしてゆく」ことで、「読者の心にたくましい思想の実を結んで、新しく強健な日本人を形成する<sup>38</sup>」ことが目指されていたのである。そうした「自由」のなかで要請されるのが「内容」の指導の問題である。最後に、文協側が推薦図書の枠組みを「良書」を読むこととして提示し、出版文

化の「健全化」という視点を導入することで、推薦図書に反発的だった層を取り込んでいく過程を考察していきたい。

まずは、文協の推薦図書の「内容」について、GHQ没収図書と推薦図書の関連に触れる形で検討しておきたい。GHQは一九四六年三月一七日から一九四八年四月一五日にかけ全四八回にわたる「宣伝用刊行物の没収」を行っていく。一九四九年三月三十一日に内部資料として作成された「文部省社会教育局文化課編集『連合国総司令部から没収を命ぜられた宣伝用刊行物総目録（五十音順）』（文部省版）」には、当時没収された七一・一九点の書籍が掲載されている<sup>36</sup>。書店や流通網から排除されることとなったのは、日中戦争開始以降に刊行された時局関連の比較的学術的な傾向を有した書籍である。文協による推薦図書のうちGHQによって没収された書籍は、全部で三二冊（推薦総数三四五冊）になり、推薦図書の約九%となる【図二】<sup>36</sup>。約一割の重複という結果は、文協の推薦図書が、「準国家機関として内容のすぐれた」といっても時局向のものが多いが「出版物<sup>37</sup>」であるという戦後の評価をある程度裏付けられるものと考えられよう。また岩波書店が文協の推薦図書のなかで一番数の多い出版社であることから、文協の推薦図書制度において、「修養」や「教養」を身につけるための「良書」を読むことが推奨されていたことがわかるだろう。

これまでに文協の推薦図書の傾向を簡単にみてきたが、文協では推薦図書を読むことだけでなく、「良書」を読むという読者に対する態度自体が、出版文化の「健全化」として推奨されていくところに大きな特徴があった。とくに書物の装幀や製本などの向上を目指すという視点は、推薦図書の選定側との関係が薄いようにみえる「愛書家」<sup>38</sup>たちを推薦図書制度へと引き込むこととなる。

推薦図書目録には、恩地幸四郎による書物の美しさを求めるコラム「読書・観書・愛書<sup>39</sup>」や、齊藤昌三による「蔵書票<sup>40</sup>」の普及を行うことで、戦時下の出版文化の向上を目指す発言が掲載されている。こうした恩地らの発言は、戦前・戦後と一貫しており、戦争と無関係なものにみえる。だが、出版文化の成長を目指して行われた文協の推薦図書制度が「緩やかな統制」として機能していたことから考えるならば、変化がないことにこそ問題があると考えるべきだろう。

さらに文協による推薦図書制度は、「一体、良書とはどんなものをいふのか」と自問自答すること自体を出版文化の「健全化」のひとつとして位置づけることによって、推薦図書制度に批判的な姿勢をとっていた学生や知識人を推薦図書制度のなかに取り込むことに成功したと言える。

文協では、基本的には、文協の推薦図書を薦めたうえでではあるが、「たゞこれは飽くまでも一つの標準」であり、「その他にも良書は少くない<sup>41</sup>」から「不幸にして推薦図書になら

なかつたものでも、良書はどん／＼読んで頂きたい<sup>15)</sup>と、推薦図書以外の「良書」を読むことも推奨しており、「良書」に対する柔軟な思考がうかがえる。推薦図書目録に掲載されているコラム「推薦委員列伝」も、各推薦委員によって独自の「良書」に対する考え方が提示される場でもあり、文協においては「良書」は多様なものとして示されている。

そうした文協の「良書」への態度は、知識人たちによって読書に関する議論が行われるきっかけとなった。『帝国大学新聞』や『早稲田大学新聞』などの大学新聞では、一九四二年ごろに「読書論」や「良書」についての議論が活発化している。木村亀二は、「読書の意志」というコラムの中で読むべき本を考えるなかで、「良書を読まねばならぬ」と述べるが、「良書とは何かといふと実に六ヶしい」と自問自答している。そして木村は最終的に、「多読、濫読を避け、選択された書物を精読すること」や「書物の奴隷となつたり、単純な享受的態度に陥ることなく、どこまでも批判精神を強力に働かし、独創的思索の修練を積むこと<sup>16)</sup>」といった、「修養」「教養」的な読書方法を挙げていく。

さらに村上駿介は、『早稲田大学新聞』に掲載された記事のなかで、「支那事変が起こると支那に関するきわもの出版が横行し、大東亜戦争が勃発して南方に戦火が拡大すると狼狽して南方の紹介ものが奔流する」ことから、「悪書」や「凡書」に対する「出版指導の強化」を提唱し、暫定的に「良書」を意味づけようとしている<sup>17)</sup>。また、自らも思想弾圧にあっていた矢内原忠雄は、「大学生ともある者は、之ら推薦制にあまり頼ることなく、自ら判断して良書を選択することが必要である」と述べる<sup>18)</sup>。

このように文協の推薦図書制度は、出版文化の向上が目指されたものであったため、推薦図書に対する規定は緩やかで、知識層に対しては「時局もの」や「南方もの」などの「悪書」を批判する余地を残し、「良書」について議論することが可能であった。こうした文協の活動を、出版文化の向上としてある一定の評価を与えることはできる。しかしながら、文協は自らの推薦図書を出版業者に対する出版基準として提示し、審査を行ったうえで、用紙の配給を定めていたのであり、「自由」な選択の場としての市場は、実際には文協による統制の範囲内にある。文協の推薦図書制度とは、「自由」な選択であるかのように錯覚させてしまう構造をもった〈緩やかな統制〉なのである。

文協は推薦図書以外にも「良書」があることを認めたが、それは「何が良書であるかは、文化、いひかへれば国家や民族の当面した客観情勢が決定すること<sup>19)</sup>」だと考えていたからであった。「良書」が環境によって決定されるものでありながらも、そうした「良書」を読むことそれ自体を疑わない構造は、どの時代、どの場所においても延命しつづけることだろう。

おわりに

本章では、文部省と日本出版文化協会による推薦図書制度について比較を行い、「良書」推薦の手法を検討することによって、〈緩やかな統制〉としていかに機能してきたのかを明らかにしてきた。とくに、日本出版文化協会による推薦図書制度は、「良書」についての議論を活発にさせながらも、実際には用紙統制を行うことで統制を意識させることなく、あるべき「良書」を内面化させる構造を持っていたと言える。

導入当初は「消極的」政策であった読書政策は、文協による「良書」推薦によって、強制的ではないが、戦時下の思想統制の一つとして緩やかに人びとの読書傾向に抑制を与えてきたと言える。さらに、こうした〈緩やかな統制〉がより明らかになった場所が、次章にて論じる戦時下の学生による読書の場でもあった。そして戦時下学生の読書行為は、戦場での読書へと結びつき、その延長線上に第三章にて述べてきた『兵隊』の読者として想定された「インテリ兵」たちの姿が重なる。

最後にその後の出版をとりまく状況について述べておきたい。文協は、一九四三年の出版事業令の公布によって、統制団体である日本出版会へと改組される。主要な事業は文協からそのまま引き継がれ、推薦図書制度も継続されていた。さらに新たに企業整備本部が設置され、出版社の統廃合や雑誌の整理が行われていくなど、より厳しい統制が行われていく。そのうえ、一九四三年七月二日には、書物不足による売切買切制への移行により、書籍は予約注文による購入となる。それは日本出版配給株式会社機関誌である『新刊弘報』に掲載された新刊レビューを見ながら欲しい書物を選ぶということであり、まさに統制機関認定済の推薦図書から書物を注文する時代の到来でもあった。

また文協は、一九四三年一月の目録のなかで「皇軍慰問書籍百万冊献納運動」の様子を伝え、南方前線にて戦う兵士からの推薦図書の感想を掲載してもいる。戦場での読書にも、「良書」を読むという推薦図書の意識は浸透していったのである。こうして文協の推薦図書は、国内だけではなく戦場においても読むべき「良書」となっていた。

作者	タイトル	出版社
平尾道雄	海援隊始末記	大道書房
西晋一郎、小糸夏次郎	礼の意義と構造	叡傍書房
肥後和男	宮座の研究	弘文堂
塚原健二郎	佐久間象山の生涯	学富社
高村光太郎	美について	道統社
穂積重遠	結婚訓	中央公論社
大町文衛	日本昆虫記	朝日新聞社
高津彦次	蒙疆漫筆	河出書房
浜田青陵	考古学入門	大阪創元社
奈街三郎文、藤沢龍雄画	コガモノタビ	博文館
与田準一詩、龍田要吉画	山のご里のご	博文館
窪田文雄	南洋の子供たち	東亜堂
寺尾新	海の実験室	中央公論社
根岸草笛	寒踐季節保育所	山雅房
中谷宇吉郎	雷の話	岩波書店
ウオジユバン、目黒眞澄訳	乃木	創元社
赤沼三郎	菅沼貞風	博文館
金丸精哉	瀋州の四季	博文館
中山伊知郎	戦争経済の理論	日本評論社
下村寅太郎	科学史の哲学	弘文堂書房
服部静夫	少国民理科豆の一生	正芽社
有馬宏	トノネルを握る話	岩波書店
宮地直一	神祇史大系	明治書院
松田寿男	漠北と南海	四海書房
玖村敏雄	吉田松陰の思想と教育	岩波書店
柳田敏男	ごども風土記	朝日新聞社
板垣与一	政治経済学の方法	日本評論社
桐原徳晃	戦時労務管理(労務管理全書第一巻)	東洋書館
下村湖人	佐藤信淵	大日本雄弁会講談社
木村毅	大山元帥	富山房
山田徳兵衛	日本人形史	相模書房
関野克	日本住宅小史	東洋書館
鈴木舜一	勤労文化	河出書房
高木貞治	近世数学史談	協和書房
岡不舜一	工場の四季	文藝春秋社
根岸信	松下村塾の指導者	朝日新聞社
高坂正顕	華僑雑記	岩波書店
高宮晋	民族の哲学	有斐閣
中村清二	企業集中論	河出書房
片山昌造	物理実験者の心得(科学新書83)	帝國教育会出版部
クライン、秋元寿恵夫訳	明け行く支那	第一書房
和田民治	熱帯農業の体験	大日本雄弁会講談社
山田浩	潮村少年記	弘学社
橋本進吉	古代国語の音韻に就いて	日本評論社
佐々木正制	米国外交上の諸主義	東洋書館
北原白秋	朝ノ幼稚園	帝國教育会出版部
飛田多喜雄	国の子の家庭教育	新潮社
石田幹之助	欧米に於ける支那研究	創元社
瀧田要吉	山ノオモチヤ	博文館
杉浦保吉	南の魚・北の魚	大日本雄弁会講談社
石原忍	日本人の眼(改訂版)	叡傍書房
ナルチス、長嶋礼訳	マンチルの生涯	創元社
牧村進、辻村泰男	傷痍軍人労務輔導	東洋書館
大宮昇	石炭を生む山	学習社
和田亀治	陸軍魂	東水社
高山岩男	世界史の哲学	岩波書店
齋藤茂吉	伊藤左千夫	中央公論社
南種康博	日本工業史	中央公論社
木村小舟	少年文学史(明治篇上・下)	地人書館
望月茂	佐久良東雄	童話春秋社
三宅正太郎	裁判の書	大日本雄弁会講談社
古川晴雄、高島春男	南の動物	牧野書店
丹羽文雄	海戦	光風館
山岡荘八	海底戦記	中央公論社
江馬三枝子	飛驒の女たち	第一公論社
桑田忠親	干利休	三國書房
上田廣、金親清	鉄道守備隊	青磁社
永井威三郎	日本の米	金の星社
岩田豊雄	海軍	大日本雄弁会講談社
T・ウエーエ、福迫勇雄訳	蜂園の乙女	朝日新聞社
アンダーソン、松崎寿和訳	黄土地帯	柏葉書院
		座右室刊行会

【図一】日本出版文化協会推薦図書における文部省推薦図書との重複図書一覧

作者	タイトル	出版社
馬淵逸雄	報道戦線	改造社
宮本武之輔	科学技術の新体制	中央公論社
西晋一郎、小糸夏次郎	礼の意義と構造	畝傍書房
小山武	日本の海軍	アルス
高津彦次	蒙疆漫筆	河出書房
宮本守雄	勝利への道	朝日新聞社
牧野栄三	産業戦士の教養	桑文社
木場敬天	陸戦隊宣撫記	清水書房
孫田秀春編	日本国家科学大系(法律学・2)	実業之日本社
権田保之助	ナチス厚生団(KDF)	栗田書店
梁瀬春雄	東宮大佐伝	新紘社
佐藤武夫	満州農業再編成の研究	生活社
鈴木舜一	工場の四季	協和書房
山田秀蔵	ビルマ読本	宝雲社
永田清	財政学の展開	日本評論社
板澤武雄	南方圏文化史講話	盛林堂書店
花野富蔵	ホセ・リサール伝	西村書店
小林碧	南方圏の資源 第一巻 マレー篇	日光書院
井出季和太	華僑	六興商会出版部
中村吉蔵	伊藤博文	大日本雄弁会講談社
飯田彬	半島の子ら	第一出版協会
和田亀治	陸軍魂	東水社
浜田隼雄	南方移民村	海洋文化社
野中俊雄	陸軍落下傘部隊	童話春秋社
上原訓蔵	標準上原マレー語(全四巻)	晴南社
深沢幹蔵	アリユーシヤン襲撃戦記	大和書房
望月茂	佐久良東雄	大日本雄弁会講談社
西川平吉	国体の話	出来島書店
山岡荘八	海底戦記	第一公論社
多忠龍	雅楽	六興商会出版部
海後勝雄	東亜民族教育論	朝倉書店
満鉄調査部編	北支那の農業と経済(上・下)	日本評論社

【図二】日本出版文化協会推薦図書におけるGHQ接收図書との重複図書一覧

初期の文部省の推薦図書制度については、岡崎沙織「戦前文部省による図書推薦事業の展開 第I期1930年9月～1939年6月」『大谷大学国語教育研究 第一号』(大谷大学国語教育学会、二〇一四年二月)、「創設当初の文部省図書推薦制度に関する研究 推薦図書および図書概要の検討を通して」『人間形成と文化』(奈良女子大学、二〇一〇年三月)が詳しい。

<sup>2</sup>「第二章」『日本近代教育百年史 第一巻』(国立教育研究所、一九七三年一月)

<sup>3</sup>『文部省認定済通俗図書目録』(文部省普通学務局、一九一四年七月)年月日は「序」の記載による。

<sup>4</sup>文部省『学制百二十年史』(ぎょうせい、一九九二年九月)九三頁。

<sup>5</sup>『思想指導に関する良書選奨』(文部省思想局編、教学局、一九八三年三月)

<sup>9</sup>『教学局時報』（教学局、一九三九年二月）、「昭和一三年文部省例規類纂」『文部省例規類纂 第七卷』（大空社、一九三七年二月）九八〜一〇〇頁。

<sup>7</sup>『昭和一四年文部省例規類纂』『文部省例規類纂 第七卷』前掲注六、六九頁。

<sup>8</sup>『日本近代教育百年史 第八卷』（国立教育研究所、一九七四年三月）八四頁。

<sup>9</sup>「一般向図書」として内務省に納本された図書（月約一九〇〇冊）から七〇冊程度。「児童向図書」として内務省の納本図書（月約一〇〇冊）から五〇冊程度。さらに「依頼図書」として、出版社から推薦を依頼された図書月約二五冊（一般二〇冊、児童五冊）の合計一四五冊が毎月取揃えられた。

<sup>10</sup>『文部省の図書推薦機構』『図書館雑誌』（日本図書館協会、一九四〇年一〇月）四七二頁。

<sup>11</sup>「今度は教学局刷新」『東京朝日新聞』（一九三九年二月一日、朝刊一一面）

<sup>12</sup>荻野富士夫『戦前文部省の治安機能』（校倉書房、二〇〇七年七月）二〇七〜二一二頁。

<sup>13</sup>その後、外局としての教学局は、一九四二年一月一日に、行政簡素化のため文部省学局へと移管されることとなる。そして、一九四二年から文部省は「読書指導」を視野に入れた社会教育に本格的に参入し始める。とくに中田邦造によって石川県で始められていた読書指導は、図書館の相対的な発展を目指す図書館側と国家の思想統制の思惑とが合致することによって、全国的な国民読書運動へと接続していった。同年には文部省と日本図書館協会との協力によって『読書会指導要綱』が作成され、国民の読書統制のために読書会を組織していくことが明確にされている。こうした読書運動は、文部省と図書館を中心にして行われただけではなく、大政翼賛会文化部における読書運動など様々な組織へと波及し、隣組や職場などの組織単位で文庫が設置され、読書会が組織され、読書指導が行われた。この読書会運動によって、文部省の読書指導は言論統制機関として「積極的」政策に転じたと言える。日本出版文化協会による推薦図書事業は、教学局（外局）の不振期に開始されており、戦時下の読書統制の隙間を埋める役割を果たしたと考えられる。

<sup>14</sup>河合栄治郎「読書の意義」『学生と読書』（河合栄治郎編、日本評論社、一九三八年一月）一〜四一頁。

<sup>15</sup>森銑三「十一 良書の推薦」「十二 書評」『書物』（森銑三・柴田宵曲、白揚社、一九四四年三月）三二〜四〇頁。

<sup>16</sup>戸坂潤「文化統制現象の分析」『現代唯物論講話』（白揚社、一九三六年一月）三一七〜三二四頁。

<sup>17</sup>吉田則昭『戦時統制とジャーナリズム』（昭和堂、二〇一〇年六月）一八六頁。

<sup>18</sup>「図書推薦事業開始十一月一日第一回発表」『出版文化 第六号』（日本出版文化協会、一九四一年一月一日）

19 「良書推薦事業の開始と新刊納本に就て」『出版文化 第五号』（日本出版文化協会、一九四一年一〇月一日）、「図書推薦と企画届記入上の注意」『出版文化 第六号』前掲注一八。

20 「図書推薦委員と第一回推薦図書」『出版文化 第七号』（日本出版文化協会、一九四一年一月一日）推薦委員の決定は、推薦委員会規程第三条にて、「委員ハ常務理事、出版文化委員及学識経験者ニ付情報局総裁ノ承認ヲ経テ会長之ヲ委嘱ス」と定められている。

21 推薦委員は、第一部から第一一部の種類別に決定されている。本章では、例として第一回の推薦委員のみ記す。

第一部（皇室、哲学、宗教、教育）…山形武夫、高坂正彰、和辻哲郎、吉田熊次、伏見猛彌  
第二部（歴史、地誌）…和田清、今井登志喜、板澤武雄

第三部（国家、社会）…田中耕太郎、高柳賢三、我妻栄、戸川貞三、木村龜二  
第四部（経済、商業）…土方成美、中山伊知郎、赤松要、高橋誠一郎

第五部（理、工、農、医）…仁科芳雄、小倉金之助、菅井準一、富塚清、井上隆根、藤島亥治郎、東畑精一、緒方富雄、斎藤茂吉、暉峻義等

第六部（文学）…岸田國士、斎藤龍太郎、大佛次郎、辰野隆、斎藤茂吉、久松潜一、谷川徹三  
三

第七部（語学）…辰野隆

第八部（美術、演劇、映画）…谷川徹三、上泉秀信

第九部（厚生）…暉峻義等、上泉秀信

第一〇部（青少年）…戸田貞三、暉峻義等

第一一部（児童）…小川未明、村岡花子、牛島義友、藤島亥治郎

22 「推薦図書ポスター文部文協双方同一待遇」『出版同盟新聞』（出版同盟新聞社、一九四二年七月一四日）

23 「出版時評 推薦図書同一待遇」『出版同盟新聞』（出版同盟新聞社、一九四二年七月一日）

24 矢内原忠雄「読書の選択」『帝国大学新聞』（帝国大学新聞社、一九四二年一月三〇日）

25 「社団法人日本出版文化協会 第十四回推薦図書発表に際して」『日本出版文化協会推薦図書目録（第十四回）十二月分』（日本出版配給株式会社、一九四二年一月二二日）

26 「日本出版文化協会推薦図書の第一回発表を機会に」『図書館雑誌 第三五卷一 一号』（日本図書館協会、一九四一年一月）

27 「推薦図書発表期日変更」『出版文化 第一三三号』（日本出版文化協会、一九四二年二月一日）

28 「推薦図書配給に関する懇談会開かる」『出版文化 第八号』（日本出版文化協会、一九四



一年一月十五日)

<sup>29</sup> 「日本出版文化協会第一回推薦図書発表」『日本出版文化協会推薦図書目録(第一回) 一月分』(日本出版配給株式会社、一九四一年一月十五日)

<sup>30</sup> 「月に四十冊 出版協会で良書を推薦」『東京朝日新聞』(一九四一年一月七日、朝刊三面)

<sup>31</sup> 思想問題研究会編『マルクス主義批判』(社会教育会、一九三一年八月)

<sup>32</sup> 山司太一(京都市)「推薦図書「万葉集講話」を読んで」『日本出版文化協会推薦図書目録(第七回) 五月分』(日本出版配給株式会社、一九四二年六月二日)

<sup>33</sup> 東畑精一「発行部数と価値を混同するな」『日本出版文化協会推薦図書目録(第十五回) 一月分』(日本出版配給株式会社、一九四三年一月一日)

<sup>34</sup> 赤木健介「文化建設と読書術」『日本出版文化協会推薦図書目録(第十五回) 一月分』(日本出版配給株式会社、一九四三年一月一日)

<sup>35</sup> 大熊信行「書物の解剖学」『日本出版文化協会推薦図書目録(第七回) 五月分』(日本出版配給株式会社、一九四二年六月二日)

<sup>36</sup> 加藤青子(東京都中野区大和市)『彫刻の美』を読む』『日本出版文化協会推薦図書目録(第十一回) 九月分』(日本出版配給株式会社、一九四二年九月二日)、加藤青子(東京市中野区大和町三二番地)『法隆寺』について』『日本出版文化協会推薦図書目録(第十三回) 十一月分』(日本出版配給株式会社、一九四二年十一月二日)、西澤吉男(日本橋区浜町)「続二郎物語を読む」『日本出版文化協会推薦図書目録(第十五回) 一月分』(日本出版配給株式会社、一九四三年一月一日)など。

<sup>37</sup> 日比野士郎「書物について」『日本出版文化協会推薦図書目録(第十六回) 二月分』(日本出版配給株式会社、一九四三年一月三〇日)

<sup>38</sup> 「第七回推薦図書を送るに際して」『日本出版文化協会推薦図書目録(第七回) 五月分』(日本出版配給株式会社、一九四二年六月二日)

<sup>39</sup> 『総目録GHQに没収された本』(澤龍編、サワズ出版、二〇〇五年九月)を参照。

<sup>40</sup> また、文協と同期間の文部省の推薦図書のうち、GHQに没収された図書は二四冊(推薦総数二五四冊、集計期間…一九四一年一月～一九四三年三月)であり、文協と同じ約九%となっている。没収図書には「児童図書」はほぼ含まれておらず、「一般図書」や「青年図書」などに重複が多くみられる。文部省、文協に同程度の割合で没収図書が含まれている点については、今後GHQ没収図書との内容比較も含め、推薦図書という「良書」の「内容」が戦時下においていかなる意味をもっていたのか考える必要がある。

<sup>41</sup> 福島鑄郎「日本出版文化協会」推薦図書について』『戦時推薦図書目録』(金沢文圃閣、

二〇一一年五月)

<sup>42</sup> 恩地幸四郎「読書・観書・愛書」『日本出版文化協会推薦図書目録(第十三回)十一月分』(日本出版配給株式会社、一九四二年一月二二日)

<sup>43</sup> 齊藤昌三「蔵書票」『日本出版文化協会推薦図書目録(第九回)七月分』(日本出版配給株式会社、一九四二年七月二二日)

<sup>44</sup> 「第十四回推薦図書発表に際して」『日本出版文化協会推薦図書目録(第十四回)十二月分』(日本出版配給株式会社、一九四二年二月二二日)

<sup>45</sup> 「第十三回推薦図書目録作成に当つて」『日本出版文化協会推薦図書目録(第十三回)十一月分』(日本出版配給株式会社、一九四二年一月二二日)

<sup>46</sup> 木村亀二「読書の意志」『帝国大学新聞』(帝国大学新聞社、一九四二年一月三〇日)

<sup>47</sup> 村上駿介「出版指導の強化」『早稲田大学新聞』(早稲田大学新聞会、一九四二年一月一六日)

<sup>48</sup> 矢内原忠雄「読書の選択」前掲注二四。

<sup>49</sup> 「第六回推薦図書発表に際して」『日本出版文化協会推薦図書目録(第六回)四月分』(日本出版配給株式会社、一九四二年四月二二日)

\*本章における『出版文化』の引用は『戦時占領期出版関係史料集2 出版文化第一巻』(金沢文圃閣、二〇〇三年一月二二日)、『出版同盟新聞』の引用は『出版同盟新聞』(新文化通信社、二〇〇一年一月二二日)、『日本出版文化協会推薦図書目録』の引用は『戦時推薦図書目録』(金沢文圃閣、二〇一一年五月)、『帝国大学新聞』の引用は『帝国大学新聞』(不二出版、一九八四年四月〜一九八五年二月)、『早稲田大学新聞』の引用は『早稲田大学新聞』(早稲田大学新聞会、一九六八年)による。

はじめに

本章では、戦時下の学生の読書行為を多様な資料体をもとに分析することで、読書に関する言説のなかに、いかにして戦場という要素が結びついていったのかを明らかにしていく。前章では、日本出版文化協会による推薦図書制度の「指導」や「推薦」が、〈緩やかな統制〉の仕組みとなっていく過程を明らかにしてきた。本章はそうした〈緩やかな統制〉が、学生の読書に及ぶことによって、戦場での読書を推奨するようになるまでの過程を追っていく。近い将来に召集される可能性のある学生の読書行為を分析していくことは、兵士の、とくに学徒兵の読書行為の重層性を明らかにしていくうえでの重要な手がかりを提示してくれることになるだろう。

序章でも述べたが、学徒兵の読書行為については、典型化・単純化されてとらえられる傾向にある。とくに『きけわだつみのこえ』では、読書は戦争に対する抵抗を表す行為であり、学徒兵は「戦時下の良心」であるとみなされた。だが、第二章にて述べたように、戦場での読書行為は兵士の教育の役割を担っていたことから、戦場での読書行為を一面的に解釈することはできないだろう。

なぜなら戦場における読書行為は、一般化された普遍的なものとしてとらえることは不可能だからだ。第一章にて述べてきたように、戦場で書物入手する手段や場所は幾通りにも存在する。学徒兵の読書は戦場でどのように行われていたのか、さらに読書に対してどのような意識を持ち、その読書行為は社会においてどのような意義を持っていたのか。このような学徒兵と読書の問題を問い直していくことで、典型化された学徒兵の読書を複数化していき、さらに近代における読書の枠組みの再考察をおこなっていく必要がある。

本章では以下、具体的に次のように論じていく。まず、前章で論じてきた文部省や日本出版文化協会によって推進された推薦図書制度を通して、戦時下に望まれていた読書を明らかにし、その中で学生の位置づけを明確にする。推薦図書制度によって、新聞では新しい読者階層の誕生や読書意識が報道されるようになっていくが、その時に学生の読書はどのようなとらえられていたのかを明らかにしておくことがねらいである。

次に大学新聞や出版業界紙において、戦時下の学生による読書行為や戦場での読書行為が、どのように伝えられているのかを明らかにしていく。このような戦時下学生の読書行為の分析からは、戦後に表象されてきた単純化された学徒兵の読書とは異質な複数の読書イメージの可能性が明らかになってくる。

さらに第四節では、文化人に対して行われた、学徒兵は戦場でどのような読書を行うべ

きかというアンケートに寄せられた回答を分析することによって、戦場へと読書が結びついていくなかで、戦場での読書行為が、戦争のための武器としてとらえられていることを示していく。

一連の考察から、学生メディアにおいて戦場と読書が結びついたときに生じていた複数の戦場での読書行為に対するイメージが、戦後になると一転して反戦的な態度としてとらえられていったことを明らかにしたい。

### 第一節 推薦図書制度という出版統制

出版業界は一九四〇年の大政翼賛会の発足、日本出版文化協会の設立などによって「出版新体制」を迎えると、様々な情報規制や出版統制が展開されていく。出版統制を背景とした書物環境の変化は、書物を受容する読者の読書意識に変動をもたらすことになる。この時期、新聞紙上では「凡ての商品におけるのと同様、今買っておかねば永久に手に入らぬのではないか」といふ懸念が、多くの人々をして恐らく終生不要とする如き書物にまで手を出させてゐる」と書物需要の高まりが伝えられている。

まず本節では、推薦図書制度という出版統制によって、読者階層が変化していることについて明らかにしていきたい。

これまでの戦時下の読者状況については、大衆雑誌や総合雑誌などの雑誌読者や一般紙などの分析を通じた「読書の大衆化」を論点にした言及が主であった。とくに『キング』は、「読書の大衆化」と「大衆の国民化」を担ったことで、初の階層横断的な雑誌となり驚異的な販売部数を誇っていく。本節では、このような雑誌読者ではなく推薦図書制度に注目していくことで、出版統制下の読書について考察していく。推薦図書制度は、この時期の『キング』と同様に「読書の大衆化」を目指すものだと言えるだろう。だが、日本出版文化協会（以下、文協）の行った推薦図書制度の言説からは、「読書の大衆化」だけではな戦時下の読者状況をうかがうことができるのである。

前章にて詳しく論じた文協は、政府指導のもと出版社を集めた統制団体として一九四一年一月に（一）出版企画の事前審査、（二）出版用紙の割当、（三）配給指導を執り行う団体として創設された。これは「文協で認められたものだけが出版を許され」、印刷から配給までが文協という一団体によって統制される「出版新体制」に移行することを意味している。

推薦図書の目的は『『国防国家の確立』並びに『新日本文化の建設』』であり、「日本出版文化協会の推薦図書は他に見るが如き限られた範囲のものではなく、注意深く眼を国民各層に馳せ、各層の性格を深く認識しつゝ選り出された良書であ」と定められる。「特

に価値高く表彰に値するものを三、四冊選んで「表彰図書」とし週報、ラジオ、新聞、映画を通じて書名と推薦の理由を広く発表」するなど、より優れた書物を出版した著者や出版社に対しては、紀元節や明治節などに表彰を行うこともあった。

出版社が推薦図書へ注目していたことを示すのが、推薦図書用マーク公募イベントである。半月という短い募集期間ながら東京日日新聞社など一二二点もの応募があり、さらには偽の推薦図書マークの使用が横行するなど、推薦図書であることが売上げに影響を与えていたことを推測することができる。文協の推薦図書には、総数三二八点のうち、上位三社として岩波書店が二三点、大日本雄弁会講談社が一点、創元社一〇点というように、岩波書店が群を抜いて多いという特徴があげられる。

またこの時期、出版社向け業界紙の『書店文化』では、推薦図書や特別用紙割当の行なわれた書籍の企画名や内容詳細を掲載することで紙面を構成している。用紙配給の減少が死活問題となる出版社にとって、推薦図書の企画内容は真似すべき「良書」となる。そのため推薦図書制度は、読者統制でありながら出版社への優れた出版統制ともなる。

このような文協の推薦図書制度は以下に挙げる三点によって、他の推薦団体による推薦図書制度よりも大きな影響力を持っていたと言える。まず一点目は、文協が用紙配給を担っていたことである。二点目は、日本出版配給会社と協同することで、流通を一元的に管理することができた点にある。三点目は、読者層別の推薦を行ったことである。

推薦図書制度は、先に文部省、日本図書館協会など数箇所で行われていたが、文協の推薦図書は第一部「一般向」第二部「教養向」第三部「専門向」第四部「青年向」第五部「児童向」と読者層別に発表した点に特徴があった。それまでは一般的な推薦図書や出版関連の記事が目立っていたが、文協の推薦図書制度が開始されると読者層別の図書記事がよく見られるようになる【図一】。さらに、「この時期、国民階層の「読書」実態調査はかなり広汎に行なわれ」ており、文協の広報紙である『日本読書新聞』に頻繁にその調査結果が掲載されている。そのなかで、文協の出版企画届には著者による読者層欄の記入が義務化されており、読者層は出版統制のなかで強く意識されていくのである。

【図一】に示した記事のタイトルには、「勤労青年」「産業戦士」「女子産業戦士」などの新たな読書階層が示されている。さらに、文協から推薦図書制度を引き継いだ日本出版会における読者層は「幼児」「少国民」「青年一般」「工場青年」「農村青年」「学生生徒」「家庭婦人」「教養」「専門」「国民一般」の一〇種類へと大きく増加する。また、山梨あやによってケーススタディとして長野県における戦時下の読書指導が調査されているように、

【図二】に挙げた当時の図書館関連の新聞記事からは、図書館の整備が進み、職場や疎開地、町内会で文庫や読書会が設置され、読者階層ごとの小さな読書運動が広まっていたこ

日付	新聞	タイトル
19421117	朝日	図書館へ新刊書
19430223	読売	[用水槽] 混雑時の読書
19430228	朝日	読書に耽る 容体変化無し
19430420	読売	職場や学校単位に読書会を作ろう 本の読めぬ悩みも解消
19430520	読売	読書指導者を養成 農村には回覧制 書籍不足に図書館活用
19430530	読売	[郷土色] 町会文庫で“読書常会”開く
19430603	読売	[隣組生活を行く] 3 隣組文庫 少国民に楽しい集い(連載)
19430914	読売	集団的な読書へ 輪読会、創作会など指導 産業戦士へ配付される図書群
19431015	読売	図書館を一丸 新に貸出文庫や目録交換などで 都私立仲よく新発足
19431101	朝日	国民座右銘/(11月1日) 図書祭 とにかく平日なぐさみのように読書すべし 福田行誠
19431211	読売	町会ごとに 図書館 大阪で好評の町会文庫
19440422	朝日	決戦時報/最近の読書界 職場や隣組に読書会 有閑出版を追放 増産戦士と技術者へ重点配合
19440811	朝日	班組織の読書会 疎開学童に直ぐ役立つ書物を
19440824	朝日	雑誌を優先配給 出版会から疎開学童へ贈物

【図二】 読書会・図書館・文庫等関連記事

とがわかる。先にも述べたようにこの時期の読者状況は、雑誌読者に注目すること、「読書の大衆化」が論じられてきた。推薦図書という行為もまた、『キング』の読者同様に「読書の大衆化」を目論むものではある。だが、文協の行った読者層別の推薦図書は、「読書の大衆化」だけではなく、新たな「読者階層の自覚」を促していく。階層別に何を読むべきかを規定していく推薦図書制度の言説にさらされることで、むしろ読者は読書する主体として、自覚的な階層分化を起こしていくことになるのである。

日付	新聞	タイトル
19420402	読売	よき家庭教育に父の協力が必要 子供の知的向上をはかれ
19420608	読売	次代の皇国民を育てる母の教養書 文部省が選んだ読書指標
19420616	朝日	家庭/無理強いするな 刺戟を与えて導け 子供を読書好きにする秘訣
19420702	朝日	家庭/旺盛な娘の知識慾 読書の利用が大きい 女子産業戦士の厚生施設
19420906	読売	新刊書 利用度の高い団体に優先配給 まず小売店の需要調査
19421014	読売	[我等何を読むべきか] 1 政治/津久井竜雄(連載)
19421023	朝日	鉄箒/教員と読書 参宮旅行について
19421102	読売	[女性読物] われ等何を読むべきか/羽仁説子
19421110	読売	[医学と栄養] 我等何を読むべきか/竹村文祥
19421206	朝日	「少年文学史」記念会
19421220	読売	戦盲勇士 常闇の世界にめぐる明るい新春 点字万葉を完成 銃後の協力に感激
19421230	読売	[勤労青少年に何を与えるか] 中 勤労文化/産報厚生部参事・志賀健次郎
19421231	読売	[勤労青少年に何を与えるか] 下 修養書に再検討/産報厚生部参事・志賀健次郎
19430209	朝日	家庭科学/読書の時 電灯の高さ
19430227	読売	子供の読み物 市の児童読物調査会推薦のもの
19430511	朝日	勤労文化(読書)/朗読文学の価値/波多野完治
19430613	読売	ビルマ 青年層へ大東亜叢書の出版計画
19430624	読売	東亜のヨイコへ絵本
19430831	読売	[産業戦士と読書・青少年を中心として] 上/三輪寿壮
19430901	読売	[産業戦士と読書] 中/三輪寿壮
19430902	読売	[産業戦士と読書] 下 講談の効用について/三輪寿壮
19440118	読売	[生活と反省]=中 教養と生活の力/高橋健二
19440203	朝日	勤労青年に心の糧
19440526	読売	若い人々を毒す戦争前の卑俗な読物 読書慾をいかに正しく導くか

【図一】 読者別の図書紹介記事

## 第二節 学生読書へのまなざし

本節では、学生側のメディアである大学新聞の言説を分析することで、学生読者への読書統制の実態を明らかにしていく。

今回参照したのは「出版新体制」に入った一九四〇年からの『帝国大学新聞』、『三田新聞』、『早稲田大学新聞』の三紙である。大学新聞は、創刊から学生の自主的な活動に任されてきた。『帝国大学新聞』を例にすれば、学生及びOBが編集を担当し、一部二〇銭程で販売し広告費を取るなど、大学から金銭的に独立した体制をとることで、内容面での独自性を保持することが可能であった。帝国大学生以外の学生も購読者となり、昭和一〇年代には一〇万部の販売部数を数える<sup>13</sup>。大学新聞はこのような特徴から、当時の学生が好んでいた総合雑誌『改造』、『中央公論』、『文芸春秋』よりも、学生の読書に対するより密着した声を聞くことができるメディアだと言えよう。

推薦図書制度における学生の指導について考えると、初期の文協の推薦図書制度において、他の読者階層ほど学生の読書指導は重視されていないようである。文協の推薦図書の読者層のなかで大別するならば、学生読者は「教養向」「専門向」に分類されるだろうが、実際に推薦項目に「学生」が追加されるのは日本出版会に移行してからのことである。『東京朝日新聞』、『読売新聞』、『東京日日新聞』の三紙では学生の読書記事はほとんど見られず<sup>14</sup>、『日本読書新聞』でも学生に費やされる紙面は他読者階層に比べて少ない。なぜ学生読者への指導は少なかったのだろうか。この問いに答えるためにまずは、「学生」という読者もまた「読者階層の自覚」を強くしていることを大学新聞の言説から確認しておきたい。

推薦制は、物が物だけに商工省のスフ制袴の検定のやうには公平にも周到にも行はれ難いであらう。推薦図書の中に良書があるであらうが、凡書もなきにしもあらざるべく、況や吞舟の大魚は網を逸すといふこともあるから、少くとも大学生ともある者は、之ら推薦制にあまり頼ることなく、自ら判断して良書を選択することが必要である<sup>15</sup>。

この頃は万葉の評釈や武士道の話や海軍のことなど書けば、いくらでも売れて一もうけができるからといふやうなものも遠慮して欲しい。何でも西洋はいかんと言ひ、日本のものを褒めるに限るといふ見え透いて方便的な口吻のも困る(略)一説には、あれは産業戦士の為の本なのだといふ。即ち今日全く新しく現はれた読書階級をねらつた本だといふことである。そしてそれは非常に多数の人口と巨大な購買力とを含む階級なのだとい

このように一般紙と異なり大学新聞では、推薦図書制度と時局向けや産業戦士のための書物が批判される。「自分達の読書の足場を失はない<sup>15)</sup>」ようにすべきだと新居格が表明するように大学新聞は、推薦図書制度を意識しながらも迎合することなく、自らに適した書物思考することで推薦図書批評の場として機能し、「良書」追究を主な議題としていく。ここに前章にて論じた〈緩やかな統制〉としての「良書」の推薦が機能していく契機がある。

大学新聞では、多くの執筆者によってそれぞれの「良書」が述べられるが、大筋の内容として差が認められないのが、この「良書」議論の特徴である。福原麟太郎は、産業戦士のための図書を批判し、「近頃出版される本で五年十年の後に再び復刻される本」がないであろうと説き、「支那に関するきわもの出版（傍点ママ）」、「南方の紹介ものが奔流する」ことを嘆き、「この出版界の欠陥を救ふものは、高等教育、大学教育にまつ外はない<sup>16)</sup>」と述べる。このように大学新聞というメディアでは、「悪書」を指摘することで相対的に「良書」を浮かび上がらせ、学生は自らの「良書」を選ぶべきだと示していく。

さらに『帝国大学新聞』の読書特集号でも、「良書の決定は甚だ困難である」と述べられ、読書の姿勢を問われれば、「多読、濫読を避け、選択された書物を精読すること、又、書物の奴隷となつたり、単純な享受的態度に陥ることなく、どこまでも批判精神を強力に働かし、独創的思索の修練を積むことの必要であること<sup>17)</sup>」と、多読ではなく精読することで人格を陶冶することが目指される。

このような傾向は、『帝国大学新聞』の左傾化を危険視していた日本主義的傾向をもつ東大精神科学研究会による雑誌『学生生活』の読書観にも通底している<sup>18)</sup>。そこでは「書を読むに、学の志を以てするは大益なり。読書を以て学と為るは、則ち玩物喪志の徒なり」と山鹿素行の言葉が引用され、読書の形骸化が警告されている<sup>19)</sup>。

こうした大学のメディアにおける「良書」の議論は、「良書」自体の決定が不可能であることを明らかにし、そして推薦図書制度による「良書」が時局のなかで作られたものであることを示すこととなる。

戦時下に形成されていく勤労青年や産業戦士などの新しい読者階層は、短期的知識を養うことが読書の目的であり、その知識欲を担ったのが『キング』や文協の推薦図書であった。一方学生は直接的な読書内容の指導は行いにくく、『帝国大学新聞』と『京都大学新聞』が統合されて『大学新聞』となった他は廃止となり、『学生生活』も圧力がかけられるなど、読書統制は団体への圧力として顕在化していく。最終的に、学生読者に対する指導の高まりは、学徒出陣期まで待たなくてはならない。

学生の読書指導の少なさの理由としては、産業戦士や勤労青年という新たな読者階層に



比べて学生数が少ないことや指導が困難であることなどの要因が考えられるが、ここでは学生の読書方法にその要因を見ていきたい。

先に述べた大学新聞における読書は精神的な側面が重視され、自らを律するための行為であり、人格の発展を目指す教養主義的な読書方法だと言える。戦時下において教養主義はマルクス主義が排除されることによって、ふたたび学生の読書傾向の最大公約数的なものとなっていた<sup>35)</sup>。また『帝国大学新聞』や『学生生活』の引用から見えてきたように、人格を陶冶するための教養主義的な読書行為は、思想に関わらず学生間で共有されている。

学生メディアからうかがえる限り、推薦図書制度に接した学生は、学生という読書階層の自覚のもと教養主義的な読書を行うことで、その読書態度自体には、政府による読書指導を必要としない読者であったのではないか。それは、学生にとつてどのような書物もまずは自己の陶冶のために読まれていたからである。本節にてみてきたように、学生の兵役が免除されていた時点では、まだ学生読書と戦場との結びつきは露骨にはあらわれていない。

### 第三節 戦場と読書が結びつくとき

だが、戦争が長期化していくにつれて推薦図書制度の言説は変質し、学生と戦場とが結びついていく。その中で学生メディアにおける戦場での読書行為に関する記事からは、冒頭で示した典型化、単純化された学徒兵の読書ではない、複数の読書イメージの可能性を見出すことができる。

ではどのような変質を起こしていくのか。『出版同盟新聞』の記事では、「我が邦の新聞と出版業の発達跡を尋ねて見ると、殆んど戦争に依つて発達して来たと云つても過言でない」と述べられるように、戦争のたびに発展を遂げた出版業界は、太平洋戦争の開始以降、戦争の長期化によって「普通に行かぬことが明かにな<sup>36)</sup>」っていく。その結果、「之まで日本の出版物は量に於て世界の第三位とか云はれたやがて質に於て第一位となる日も遠くはなからう」と出版物の量ではなく、質を発展させていくことが、出版業界のなかで目指されるようになり、「出版物が向上したと同様に、吾々日本人のすべても亦質的に向上してゆく<sup>37)</sup>」と、出版物と日本の発展が同等に述べられるようになる。

つまり、太平洋戦争の開始以前までは、量が重視され新読者層へ向けた書物の推薦が文協によって行われていたが、長期戦となると「日本人」の「質的向上」が目指され、書物の質に重点が置かれていくのである。一九四二年に、文協は日本読書新聞以外に『読書圏』という高級書評誌の創刊を進めていたことがわかっており、それもこうした出版物の量から質への変化を裏付けるものとなるだろう<sup>38)</sup>。実際の『読書圏』は現在未確認ではあるが、

文協がより質の高い読者に向けた書評紙を計画していたことは間違いない。

このように推薦図書に関する言説は、量から質へと変質し、それまで質の高い読書求めていた教養主義的な学生読書へと推薦図書制度側の関心が高まっていく。そして、そこに戦場という要素が具体的な読書の場として入り込んでくることになる。

次に挙げるのは計七六名の文化人が「戦陣に学徒は如何なる書を携行すべきか」【図三】（後掲）というアンケートに回答したものである<sup>26</sup>。学生に戦場で読んで欲しいと「望まれていた読書」とはどのようなものだろうか。

やはり万葉集や古事記など、統計的には日本の古典作品を挙げる声が多いが、個別にみれば一般紙や文協による推薦図書制度では挙げられることの少なかった翻訳書や文学書が目につく。回答者には、吉田精一、亀井勝一郎や三木清、保田與重郎、菊池寛や北原武夫などの顔ぶれが揃い、学者、文学者が戦場での読書行為をどのように考えていたのかがわかる。

また、福原麟太郎が「本は戦線へ出てあるといふ説もある。日本人は読書家だから戦場でも盛んに本が読まれるに相違ない。（略）ともかくさうだとすると、日本の本は支那中にばらまかれてゐる<sup>27</sup>」と述べるように、大学新聞では国内での書物不足に対して、戦場での盛んな読書が語られている。

戦線は活字に飢えてゐる。どんなものでも与へれば読ませることが出来るとも云はれる。「岩波文庫の何であるかを知らなかつた人々がニイチエを読み、モンテエニユに興味をひかれ、死ぬ迄努力を積み重ねる気持になつたり」もするのである。支那事變の戦線でも仔細に調べるならば殆ど凡ゆる種類の書物が読まれてゐるであらう。（略）先づ内容的に云へば肩の凝らぬ軽い読物が一般に喜ばれる。「キング」「日の出」「週刊朝日」や「サンデー毎日」の特別号など、内地では殆ど読むことのなかつた人々も戦線では相当読んでゐる。映画雑誌や写真週報、アサヒグラフなども此の中に入るであらう。併し戦線はまた死生の境である。死に直面して安心を求め、戦争、人生等に関し深い省察を求めて来るのも自然の勢である。「葉隠」「アミエルの日記」また西田哲学のやうな相当難しいものまでが読まれもするのである<sup>28</sup>。

これは佐藤幸治の一九四一年復員後の執筆記事である。佐藤は三高教員ののち、京都大学教授に就任した心理学者であつた。この記事からは、先に挙げたアンケートの書物だけではなく、気楽な娯楽読物が好まれることが伝えられ、さらには読書階層を超えて『キング』から『アミエルの日記』などの文芸書など、あらゆる種類の書物が読まれていたことがわ

かる。だが、そのような自由な読書が戦場で確実に許されている訳ではない。「初めて軍隊に入る人のためには更に広く軍隊に於ける読書の問題を通観せぬ限り相当の誤解を起す恐れ」があると注意を喚起しながら、佐藤は次のようにも語る。

軍人、特に幹部たるに恥ぢない裁量を養ひ技能を練るためには、数多い典札範やその参考書などの綿密な研究が必要であつてそれだけでも寧日は無いのである。教育期間に於ては暫く一般の書籍や雑誌などは第二義的となされざるを得ない<sup>27)</sup>。

『早稲田大学新聞』でもまた「典範令は兵に直接必要なる事項を読め<sup>28)</sup>」というように、「兵書」を読むことを薦める帰還後の学徒兵の言葉が紹介されている。大学新聞では雑誌や文芸書だけではなく、兵士としての実践的な読書も伝えられていく。

これまでに、長期戦による推薦図書と言説の変質によって戦場と読書が結びついていくなかでの学生メディアによる戦場の読書行為言説を示してきた。これらの言説からは、冒頭で示したような単純化、典型化した学徒兵の読書行為ではない、戦場における複数の読書イメージの断片が見出せるのである。

#### 第四節 武器としての読書行為

前節までに、学生がどのようにして戦場への読書へと結びついていたのかについて明らかにしてきた。戦後には戦場で読書を行うことは、戦争に対する忌避感を示し、批判的な態度であるにとらえられる傾向にある。しかし本節では、学徒兵へと読書を推薦する推薦者たちの言説を追うことで、戦時下、内地において戦場での読書行為が、戦争に対する忌避感の表明ではなく、戦争への協力的態度としてとらえられていることを明らかにしていきたい。

とりあげるのは、前節で挙げた『三田新聞』の「学徒出陣特集号」のアンケート「戦陣に如何なる書を携行すべきか」の回答である<sup>29)</sup>。一九四三年に学徒出陣は本格化し、一月二日には神宮外苑では学徒出陣壮行大会が開催される。このような状況のなか、『三田新聞』では「学徒出陣特集号」が企画されることとなる。出版社の統合が行われ、「出版新体制」のもと一元化されていく流れのなかで、大学新聞もまた徐々に統制されていき、『三田新聞』は一九四四年には休刊を余儀なくされていく。いわば、一九四三年の学徒出陣期に発行された「学徒出陣特集号」は、従来の自由な気風と徐々に深まる弾圧との過渡期に生じたものであると言えよう。

そして、その企画の一つとして実行されたのが「戦陣に如何なる書を携行すべきか」と



宮本三郎「書を読む兵士」

いう質問を各界文化人に回答してもらおうというアンケートであった。アンケートは葉書にて行われ、到着順に七六名分の氏名、役職、回答が一面に一五段組で掲載されている。前節では、このアンケートを「学生と戦場とが結びついた」時に起こった言説の表出として位置づけてきたが、編集部の企画意図は、推薦図書という行為によって学問の戦場での有効性を示すことであつたと考えられる。

アンケート中央には、画家の宮本三郎による「書を読む兵士」と題された挿絵と「兵士の通訳」という短文が配されているほか、編集部によるアンケート総評と回答者に対する謝辞が掲載されている。宮本三郎は挿絵に「戦場に置いても学問がチャンと生かされてゆくこと」と、「武力の後にはやはり学問が彼（比島兵―引用者注）と我との心をしつかり結んでゆくであらうこと」を感じて、戦場で「書を読む兵士」の挿絵を描いている。つまり、この記事において、戦場での読書行為は、戦場で役立つ学問を養うものとして必要なものであり、そして占領のための血を流さない武器としてとらえられているのである。

具体的な執筆者やアンケート回答結果の傾向はどうだろうか。回答者には、慶応義塾大学関係者が多いが、その他大学教授から文芸、映画評論家なども多い。女性では唯一作詞家、詩人の江間章子が回答しているのみである。全体的な傾向としては、編集部による総評で「数的な結果を簡単に記してみると」『万葉集』（斉藤茂吉著『万葉秀歌』を含む）は

流石日本古典の粹たるにふさはしく断然他を  
圧して二十五、次いで同じく誇るべき古典た  
る『古事記』の九、更に『芭蕉俳句集』八が  
挙げられているのは興味深い」と述べるよう  
に、日本古典がその中心を占める。万葉集が  
実際には二〇名にしか推薦されていないこと  
ろを、上下分冊を重複して数えることで二五  
名とするなど、日本古典を強調する傾向があ  
るのは確かである。

だが、個別のアンケートという性質上、  
個々の回答からは、編集部の意図から逸脱し  
ていくものが見受けられる。一覧からわかる  
ように、日本古典が推薦される一方で、西洋  
の書物を推す声も数多くみられる。具体的な  
書名タイトルは【図四】（後掲）を参照して貰  
いたい。特徴的な推薦書なしの回答欄につ

いてみておきたい。推薦書なしの回答者は、亀井勝一郎、藤井敬三（慶応義塾大学経済学部教授）、谷村豊太郎（慶応義塾大学工学部長）、江間章子の四人である。「書物などさつぱりあきらめて」（亀井）や「軍隊生活に充分の余暇があると思へない」（藤井）「本などは必要なもの」（江間）といった回答は、現在からみれば戦争協力的な言説として受け取れるだろう。

しかし、戦場で学のある学徒兵が戦力として重要な存在であり、学徒兵による戦場での読書行為が、占領のための血を流さない武器となりうるのだという企画意図に照らし合わせるならば、推薦書なしという意見は、学徒兵の武器として機能する読書行為への否定を表すことにもなる。

戦争が武力だけではなく文化戦争となったとき、戦場での読書行為は血を流さない武器として機能する場合もありえたのだが、戦後には一転して戦場での読書行為は学徒兵の武器としての意味を失っていき、むしろ反戦的態度を示す行為としての意味が大きくなっていくのである。

## おわりに

日本出版文化協会の推薦図書に関する言及を分析していくと、はじめは学生に対する推薦図書はあまりなされていなかったことがわかる。だが戦争が長期化していくにつれて、書物の出版量から書物の質へと言説の内容が変質し、文化戦争の様相を呈していくと、それまで質の高い読書を求めていた教養主義的な学生読書への関心が高まっていき、戦場という要素が具体的な読書の場として設定されていくことになった。

本章では、推薦図書制度のなかで、戦場と学生の読書行為が結びついていくまでを考察するなかで、戦場における様々な書物のあり方が明らかになってきた。

とくに戦場での読書行為は、戦場における血を流さない武器としても認識されていた。書物の情報が「精神弾薬」の役目を持ち、プロパガンダが行われたように、書物を読むという行為自体が、武器として考えられていたのである。戦後、戦場での読書行為は、反戦の意をあらわす行為として捉えられるようになり、戦時下のこうした様々な戦場での読書行為イメージは失われてしまったと言えるだろう。こうした変容のあり方については第三部にて述べていくこととしたい。

まずは次章にて、学徒兵木村久夫の遺した蔵書から、戦時下の学生の読書体験を立体化させることで、これまで明らかにしてきた読書統制や出版統制が一学生にどのような影響を与えていたのか、またはそうした影響からの逸脱はあるのかという点を具体的に明らかにしていくこととしたい。

書籍名または作家名	冊数	前原光雄(戦争法)	1	カーライル(英雄崇拜論)	1		
万葉集	20	柳宗彰(不動智)	1	トライチケ(独逸戦争史)	1		
古事記	7	金井章次(満蒙行政瑣談)	1	ヒルテイー(眠られぬ夜のために)	1		
松尾芭蕉(奥の細道、芭蕉俳句集、芭蕉七部集、芭蕉全集)	7	十返舎 一九(東海道中膝栗毛)	1	セシル・ブロック(英人の見た海軍兵学校)	1		
聖書(旧約聖書・新約聖書)	6	池田孝次郎、柴田宵曲、森銃三(日本人の笑)	1	アラン(精神と情熱とに関する八十一宣)	1		
明治天皇御製集	6	渡邊幾治郎(明治天皇の聖徳)	1	ボードレール	1		
論語	5	楠正成(遺言状)	1	ヴェルレーヌ	1		
岡倉天心(東洋の理想、茶の本、東洋の目覚め)	4	牧野伸顕(松濤閑談)	1	ブレーク	1		
葉隠	3	山田 済斎(西郷南洲遺訓)	1	ギリシア悲劇	1		
道元(学道用心集、正法眼蔵)	3	岩井大慧(掌中大西年表)	1	ホメロス	1		
ニイチェ(ツアラトストラスく語りき)	3	田口卯吉(日本開化小史)	1	シモニデス	1		
プラトン(パイドン)	3	安岡正篤(世界の旅)	1	カトウルルス	1		
吉田松蔭(書簡集、講孟余話)	3	宮島幹之助(熱帯生活の常識)	1	キケロ	1		
語学書(袖珍和英辞典)	3	大串兎代夫(日本国家論)	1	マルチン・ルター書簡集	1		
福澤諭吉(福翁自伝、福澤諭吉選集)	2	蒲原有明	1	マハーバーラタ	1		
パスカル(瞑想録)	2	伊藤左千夫	1	E.udet(Mein Fliegerleben)	1		
ゲーテ(詩集、ヴェルヘルムマイステル)	2	今昔物語	1	K.V.Richthofen(Mein Kriegstagebuch)	1		
本居宣長(うひ山ふみ、直毘霊)	2	新葉和歌集	1	M.V.Richthofen(Der rote Kampfflieger)	1		
杉田玄白(蘭学事始)	2	太平記	1	Rikly(Flieger Funker Kanoniere)	1		
夏目漱石(こころ)	2	日本書紀	1	W.Bley,Volk(flieg dn wieder!)	1		
鈴木大拙(禅と日本文化)	2	延喜式祝詞	1				
大川周明(米英東亜侵略史、日本的言行)	2	神皇正統記	1	図三 「戦陣に学徒は如何なる書を携行すべきか」アンケート一覽(『三田新聞』1943.11.25)			
歎異抄	2	謡曲集	1				
島木赤彦	2	唐詩選	1				
戦陣訓	2	孟子	1	* 個別のアンケート回答結果から書籍名ごとに集計を行い、同一作家のものは著者名の後にタイトルを括弧で示した。			
愛国百人一首	2	荘子	1				
白隠(遠羅天釜)	1	ドーソン(蒙古史)	1				
大道寺友山(武道初心集)	1	デュマ(岩窟王)	1	* 一位の万葉集は、三田新聞編集部の紹介文では全二五冊とカウントしていたが、上下分冊を二冊分としてカウントしていたため、本表では一冊分としてカウントしている。			
林麟(百万人の生理学)	1	トルストイ(戦争と平和)	1				
竹内時男(百万人の科学)	1	ヴェルギリウス(アエネイェス)	1				
竹内叔雄(竹)	1	ポートウェイ(現代の軍事科学)	1				
川田順(幕末愛国歌)	1	ユークリッド(幾何学)	1				
足立 大進(禅林句集)	1	クラウゼヴィッツ(戦争論)	1				
		プルターク(英雄伝)	1				

【図四】凡例（章末に提示）

・本資料は一九四三年十一月二五日発行、『三田新聞』第五三七号「戦陣に学徒は如何なる書を携行すべきか」のアンケートをリスト化したものである。

・書籍タイトルは原則として本文に従った。また、著者名については記載されている範囲をカッコで示した。

・基本的には本文記載の書籍タイトルを抜き出してリスト化を行った。タイトルではなく書籍内容による回答に関しては、コメント欄に抜粋したコメントを翻刻している。

・明らかな誤字・脱字は適宜訂正した。

・原則として、旧漢字・異体字は新字体に改め、旧仮名遣いについてはそのままとした。

<sup>1</sup> 「社説 書物不足の問題」『読売報知新聞』（一九四三年八月一七日、朝刊二面）

<sup>2</sup> 佐藤卓巳『キングの時代』（岩波書店、二〇〇二年九月）三四九～三七二頁。

<sup>3</sup> 吉田則昭『戦時統制とジャーナリズム』（昭和堂、二〇一〇年六月）一八六頁。

<sup>4</sup> 『日本出版文化協会推薦図書目録（第一回）十一月分』（日本出版配給株式会社、一九四一年一月一〇日）

<sup>5</sup> 月に四十冊 出版協会で良書を推薦」『東京朝日新聞』（一九四一年一〇月七日、朝刊三面）

<sup>6</sup> 「第六号」「第八号」『出版文化』（日本出版文化協会、一九四一年一〇月一五日、一二月一日）

<sup>7</sup> 集計期間は第一回から第一六回までである。福島鏗郎「『日本出版文化協会』推薦図書について」『戦時推薦図書目録』（福島鏗郎編、金沢文圃閣、二〇一一年五月）を参照。

<sup>8</sup> 香内三郎・定村忠士「解説」『日本読書新聞 別冊』（不二出版、一九八八年二月）

<sup>9</sup> 当時の発行部数は約七万二千部で、書店や出版関係者、読書家が主な購読者である。

<sup>10</sup> 山梨あや「第四章 戦時下における読書指導の展開―長野県を中心として」『近代日本における読書と社会教育』（法政大学出版局、二〇一一年二月）一七〇～二〇九頁。

<sup>11</sup> 殿木圭一「『帝国大学新聞』の歴史」『帝国大学新聞』（不二出版、一九八六年七月）

<sup>12</sup> 成瀬無極「学生と読書」『東京朝日新聞』（一九四二年五月四日、朝刊四面）、「学生の書籍難」『東京朝日新聞』（一九四三年一月二三日、夕刊一面）

<sup>13</sup> 矢内原忠雄「読書の選択」『帝国大学新聞』（帝国大学新聞社、一九四二年一月三〇日）

<sup>14</sup> 福原麟太郎「出版注文帖」『三田新聞』（三田新聞学会、一九四三年二月一〇日）

<sup>15</sup> 新居格「戦時下の読書論 効果的読書法」『早稲田大学新聞』（早稲田大学新聞会、一九

四二年二月二五日)

<sup>15</sup> 村上駿介「出版指導の強化」『三田新聞』(三田新聞学会、一九四二年一月一六日)

<sup>17</sup> 木村亀二「読書の意志」『帝国大学新聞』(帝国大学新聞社、一九四二年一月一六日)

<sup>18</sup> 推薦図書制度の影響は日本主義的教養を持つ学生に対しても、マルクスの教養を持つ学生にも同様に作用していたと言える。日本主義的教養とは、「国家全体生活への没入を目的とした修練に進」むもので、「国家(忠義)なき人格主義的教養主義」は乗り越えるべきものであると定義されている。竹内洋「はじめに」『日本主義的教養の時代 大学批判の古層』(竹内洋・佐藤卓己編、柏書房、二〇〇六年二月)

<sup>19</sup> 「読書」『学生生活 第二巻第二号』(東大文化科学研究会、一九三九年二月)

<sup>20</sup> 竹内洋『教養主義の没落』(中央公論新社、二〇〇三年七月) 五七〜五九頁。

<sup>21</sup> 「出版時評 大東亜戦争と出版業」『出版同盟新聞』(出版同盟新聞社、一九四二年一月二日)

<sup>22</sup> 「出版時評 物資不足と反省」『出版同盟新聞』(出版同盟新聞社、一九四二年四月二二日)

<sup>23</sup> 「読書圏」創刊」『出版同盟新聞』(出版同盟新聞社、一九四二年一月三日)

<sup>24</sup> 「戦陣に如何なる書を携行すべきか」『三田新聞 五三七号』(三田新聞学会、一九四三年一月二五日) この学徒出陣特集には従来の学生編集者ではなく、学内統制機関の報国団による編集だという指摘が存在する。「座談会 戦中・戦後の『三田新聞』を語る」『近代日本研究 第一三巻』(慶応義塾福澤研究センター、一九九七年三月)

<sup>25</sup> 福原麟太郎「出版注文帖」『三田新聞』(三田新聞学会、一九四三年一月一〇日)

<sup>26</sup> 佐藤幸治「戦線の読書について」『帝国大学新聞』(帝国大学新聞社、一九四二年二月九日)

<sup>27</sup> 佐藤幸治「倥傯の間に何を讀む?」『帝国大学新聞』(帝国大学新聞社、一九四二年九月二五日)

<sup>28</sup> 「先輩学徒兵より後進学徒に望む」『早稲田大学新聞』(早稲田大学新聞会、一九四三年五月五日)

<sup>29</sup> 「戦陣に如何なる書を携行すべきか」『三田新聞 五三七号』前掲注二五。『三田新聞』は、一九一七年〜一九七一年まで、不二出版から復刻版として刊行されているが、五三七号は欠号となっており復刻されていない。だが、大学新聞という学生に向けて編集された限定的なメディアにおける学徒出陣特集という点において、「学徒出陣特集号」には貴重な資料が数多く含まれている。なお現在、復刻版刊行ののちに収集された欠号のいくつかは慶応



義塾大学メディアセンターにてマイクロフィルムとして閲覧することが可能となっており、本章で扱う「学徒出陣特集号」は全ページではないが、その大半をマイクロフィルムで閲覧することが可能である。

\*本章における『日本出版文化協会推薦図書目録』の引用は『戦時推薦図書目録』（金沢文圃閣、二〇一一年五月）、『出版文化』の引用は、『戦時占領期出版関係史料集2 出版文化 第一巻』（金沢文圃閣、二〇〇三年十二月）、『帝国大学新聞』の引用は『帝国大学新聞』（不二出版、一九八四年四月～一九八五年二月）、『早稲田大学新聞』の引用は『早稲田大学新聞』（早稲田大学新聞会、一九六八年）、『三田新聞』の引用は、『三田新聞』（不二出版、一九八七年五月～一九八八年二月）、『出版同盟新聞』の引用は、『出版同盟新聞』（新文化通信社、二〇〇一年十二月）、『新日本文学』の引用は、『新日本文学』（第三書館、一九九三年五月）による。

【図四】「戦陣に学徒は如何なる書を携行すべきか」アンケート一覧

番号	名前	役職	推薦書籍	コメント
1	吉光義彦	上智大教授	「論語」／「旧約聖書」／「エイネス」(ヴェルギリウス)／「マハーバーラタ」	外に出来たら外国語のポケット事典一冊と詩集一冊、何れも外地出陣を予想してのことです。勉強を続けて下さい。凡て祖国のためです。
2	佐藤信衛	哲学者	「学道用心集」(道元)／「遠羅天釜」(白隠)／「東洋の目ざめ」(岡倉天心)	
3	伊藤吉之助	東大文学部教授	「万葉集」	
4	松村武雄	文博	「古事記」／「万葉集」／「芭蕉俳句集」	
5	本多顕彰	法大教授	「歎異抄」	
6	鬼頭英一	立大教授	「古事記」	
7	古川哲史	東商大講師	「葉隠」／「武道初心集」／「歎異抄」／「パイドン」(プラトン)	
8	加茂儀一	文化史家	「万葉集」	
9	竹内時雄	理博	「百万人の生理学」(林諫)／「百万人の科学」(竹内時男)／「竹」(竹内叔雄)	
10	岡 不可止	哲学者	「吉田松蔭書簡集」／「講孟余話」／「幕末愛国歌」(川田順)	尚ほ他に志士の詩歌集遺文集を撰ぶなら、影山正治氏や浅野晃氏の編著のものを推薦したい。
11	比屋根安定	青山学院教授	「新約聖書」	
12	杉村楚人冠	文芸家	「禪林句集」	
13	浅野晃	文芸評論家	「古事記」／「万葉集」／「明治天皇御集」／「奥の細道」／「東洋の理想」(岡倉天心)	
14	戒能通孝	中大講師	「幾何学」(ユークリッド)	
15	亀井勝一郎	文芸評論家		私の気持としては、軍隊に入る際には、一冊も本など携行せぬ方がよいのではないかと考へております。軍隊には農民も商人も其他あらゆる層の人がゐます。無学文盲の人達であつても、その中に伍して決して学生知識人ぶることなく、上官の命令のまゝに訓練をうけ、軍人に賜りたる勅諭を身読するのがまづ第一と思はれます。書物などさつぱりあきらめて軍隊そのものに身を委ねるのが一番いいのではないか、最上の書物の精髓は軍隊そのものの中に生きてゐる筈だ、私はさう考へております。
16	玖村敏雄	広島高師教授	「正法眼蔵随聞記」(懷奘)／「万葉秀歌」／「吉田松蔭書簡集」	
17	峯村光郎	義塾法学部教授	「明治天皇御製集」／「戦争論 上・下」(クラウゼヴィツ)／「福澤選集」(福沢諭吉)／「戦陣訓」	

18	矢崎弾	文芸評論家		折角の御訪ねながら私には適当な答が出ぬのです。月並なものならいふまでもないことです。また出陣学徒に携行をすゝめる書物などとなるとその選択に自信がもてず、また私底の折を考へなどします。たゞ自己の信念と要求にしたがひ、手に入るものをもつといふことが私には最もふさはしいと思ひます。また専門の追求を最後までつゞけるか、きまぐれの娯楽など読書に求めぬ事、或ひは、深淵をはらむ古典に自己省察を求めぬか。もし私ならその場合『パスカル瞑想録』を携へたい。その他思ひつくもの多いが、ともかく、血の決戦に向ふまへ、まつ心魂の闘争、決戦があくまで己に忠にたゞかはれねばならぬと思ふ。心魂のたゞかひなく、謙虚なる人間に返らずでは現実の決戦はおぼつかない。真の闘志と実績はその謙虚な人間の沈潜と心魂の闘ひを貫く事によつてはじまるだらう。
19	秋山謙蔵	國學院大教授	「明治天皇御製集」	
20	今泉孝太郎	義塾法学部教授	「戦争法」(前原光雄)	
21	吉田精一	拓大教授	「芭蕉七部集」/「万葉集」	
22	川合貞一	文博、義塾文学部教授		前世界大戦には独逸軍人の背囊中には聖書とニイテヒが入つてゐたといふことだが、今次はどうであらうか。そはとにかく聖書やニイテヒは我々日本人にはふさはしからざるものである。日本軍人の背囊には君国に殉ずる精神気魄を養ふべき戦陣訓や愛国百人一首の入つて居るべきは云ふまでもないことであるが、戦の場に在つても日々明治天皇御集を拝誦して大東亜の国民としての天空海淵の気宇を養ふようにしたいものである。
23	大室貞一郎	東大学生主事	「不動智」(柳宗彰)	
24	石原謙	東京女子大学長	「新約聖書」/「ブルターケ英雄伝」/「カーライル英雄崇拜論」/「独逸戦争史」(トライチケ)/「マルチン・ルター書簡集、説教集」/「眠られぬ夜のために」(ヒルティエ)	
25	三木清	哲學家	「唐詩選」	
26	天野貞祐	文博、京大文学部教授	「論語」	
27	長田新	文博、広島文理大教授	「ツアラトストラス語りき」(ニーテヒ)/「万葉集」	
28	西谷啓治	京大文学部教授	「西郷南洲遺訓」	
29	保田與重郎	文芸評論家	「古事記」/「延喜式祝詞」	
30	菅井準一	科学評論家	「うひ山ふみ」(本居宣長)/「蘭学事始」(杉田玄白)	
31	松野喜内	義塾予科講師		塾員金井医博が満州に猛烈に大活躍出来し原動力の一つは支那語の勉強であつた。愚息が中・南支に出陣して陣中より要求せし書物も支那語であつた。仏印へ進駐せし時には仏語の初歩を要求されて送本した。スマトラ方面進出の折にはマライ語の本を送りました。出陣学と各位には言葉の武器たる此の種の携帯書を第一に薦める。
32	宮島幹之助	医博、義塾医学部教授	「英人の見た海軍兵学校」(セシル・ブロック)/「滿蒙行政瑣談」(金井章次)	
33	飯島正	映画評論家	「万葉集」	
34	渡辺一夫	東大文学部助教授	「膝栗毛」/「聖書」	

35	清澤冽	外交評論家		私の周囲を見渡して、生死の巷に出入して僕を離さないやうな書籍が無いのを自ら恥ぢます。たゞ考へますのに学徒の携行する書物は、その専門と、その信仰によつて異なるのではないでせうか。仏教信者は経典、キリスト教徒は聖書といったやうに。慶應義塾関係者は福澤諭吉翁の日清戦争頃の烈々たる愛国的筆陣のものがいゝかも知れません。一つのお願ひはどこに行つても、その歴史と、国情と、特殊性を研究していただきたい。兵務に服しながら、しかし何か一つのもの研究に興味と、お土産を発見していただきたいと思ふ。
36	板垣鷹穂	義塾文学部講師	「Mein Fliegerlebn」(E.udet)／「Mein Kriegstagebuch」(K.V.Richthofen)／「Der rote Kampfflieger」(M.V.Richthofen)／「Flieger Funker Kanoniere」(Rikly)／「flieg dn wieder!」(W.Bley.Volk)	
37	菊池寛	作家	「万葉集」／「今昔物語集」	
38	池田亀鑑	東大文学部助教授	「新葉和歌集」／「太平記」	
39	遊部久蔵	東亜研究所員	「蘭学事始」(杉田玄白)	
40	北原武夫	作家	「論語」／「精神と情熱とに関する八十一章」(アラン、小林秀雄訳)／「芭蕉全集」	
41	厨川文夫	義塾文学部助教授	「日本人の笑」(池田孝次郎、柴田宵曲、森銃三)	
42	福良俊之	東京新聞経済部長	「明治天皇の聖徳」(渡辺幾治郎)	
43	木村素衛	京大文学部教授	「正法眼蔵」(道元)／「楠木正成遺言状」	
44	畑功	義塾文学部教授	「松濤閑談」(牧野伸顕)	
45	松澤武雄	東大理学部教授		学生にすゝめる本の件、唯今適当なものが思ひあたりません。兎に角今迄学んだ事柄を実際の経験に照らして磨きをかけることが一番大切と存じます。(注)編集部注として、ローマ字表記であった旨が明記されている。
46	森本治吉	二松学舎教授	「万葉集」	
47	小林澄兄	文博、義塾文学部長	「新訓万葉集上・下巻」(佐佐木信綱編)	
48	吹田順助	文博、東商大教授	「万葉集」／「芭蕉句集」／漱石の小説	
49	間崎万里	義塾文学部教授	「掌中大西年表」(岩井大慧)／「袖珍和英辞典」	
50	藤林敬三	義塾経済学部教授		軍隊生活に充分読書の余暇があると思へない。従つてその間に書物でも見たいと思ふならば、他から本をすゝめられるよりは、自分でこの本と思うものを極く少数持つて行かれるがよい。唯だこの場合に、相当時日を要しても、また幾回でも繰り返して読み得るやうなものを先づ自ら選択されるがよい
51	尾佐竹猛	明治文化史研究家	「福翁自伝」	
52	有竹修二	東朝論説委員	「蒙古史」(ドーソン)	
53	向井潤吉	書家	「古事記」	
54	袋一平	映画評論家	「戦争と平和」(トルストイ)／「岩窟王」(黒岩涙香)	
55	小島政二郎	作家	「葉隠」	
56	福原麟太郎	東京文理大教授	「万葉集」	
57	藤田徳太郎	浦和高校教授	「明治天皇御製集」／「古事記」	
58	能勢朝次	東京文理大教授	「万葉集」／「禅と日本文化」(鈴木大拙)／「茶の本」(岡倉天心)	

59	野村兼太郎	経博、義塾経済学部長	「日本書紀」/「古事記」/「神皇正統記」/「論語」/「孟子」/「新旧約聖書」/「プラトー対話篇」	
60	鈴木信太郎	東大文学部教授		各学徒の専攻科目の専門書を一冊以上は携行してもらひたく存じます。その他には何もお薦めしません。
61	桑木或雄	理博	「ゲーテとの対話」(エッセルマン)/「謡曲集」	
62	津村秀夫	映画評論家	「日本開化小史」(田口卯吉)/「心」(夏目漱石)/「東邦の理想」(岡倉天心)/「島木赤彦歌集」/「伊藤左千夫歌集」/「ツアラウトウストラ」(ニイチェ)	
63	谷村豊太郎	義塾工学部長		折角の御申越ながら差当り良書と申すもの考へつかず候
64	高石真五郎	毎日新聞社会長	「万葉集」	
65	呉茂一	日大教授	「万葉集」/「論語」/「莊子」/「ゲーテ詩集」/「ツアラウトウストラ」(ニイチェ)/「ボードレーン詩集」/「ヴェルレーヌ詩集」/「ブレーク詩集」/ギリシア悲劇/ホメロス/シモニデス/カトウルクス/キケロ/プラトン/オイディポディアカレオレスティア/ヒツポリコトス	
66	江間章子	詩人		拝復 学徒出陣まことに感激の至りでございます。お問合せの携行をおすゝめいたしたい本は考へましても心に浮んで参りません。学徒出陣に際し本などは必要はないものと存ぜられます。本が必要な場合には、きつと心の奥にある過去に読まれたものが意義深く浮んでくるものと存ぜられます。簡単ながら右おこたへまで。
67	北島多一	医博、義塾医学部長	「世界の旅」(安岡正篤)/「熱帯生活の知識」(宮島幹之助)	
68	今村武雄	東京商工経済会理事	「米英東亜侵略史」(大川周明)/「日本の言行」(大川周明)/「新訓万葉集」/「日本国家論」(大串兎代夫)	
69	吉田洋一	北大教授	「万葉集」/「パンセ」(パスカル)	
70	山田孝雄	文博、神宮皇學館大学長	「直毘靈」(本居宣長)	
71	山内義雄	早大文学部教授	「明治天皇御集」/「万葉集」/「島木赤彦歌集」/「有明詩集」/「奥の細道」/「芭蕉俳文集」	
72	奥村信太郎	毎日新聞社長	「愛国百人一首」	
73	會田軍太夫	物理学校教授		栄えある出陣に際して、法文科系と理工化系の学徒で携行して欲しい本は自ら違ふかと考へられますが、わたくしはむしろ、この際既存の知識と科学精神を發揮して、兵器ごとに新兵器を如何に効果的に使ひこなすかといふ技術を研究することと、外地にあつてはその土地の人情、風俗、人文地理資源等を可能な範囲で詳しく探查されることをおねがひしたい。
74	寺尾新	理博	「葉隠」/「禪と日本文化」(鈴木大拙)	
75	小泉信三	経博、義塾塾長	「万葉秀歌」	
76	中谷宇吉郎	理博、北大教授		軽い点を考慮に入れて岩波文庫をすすめたいのですが、その中推薦したい本は到底入手困難と思ひますので一々書きあげても無駄かと存じます。気の毒ですが仕方ありません。

## 第六章 戦時下学生の読書法―木村久夫を例として―

はじめに

本章は、戦時下学生の読書法のケーススタディとして、『新版きけわだつみのこえ』に手記が収録される木村久夫の読書の足跡を明らかにするものである。前章までに、戦時下の推薦図書制度による読書統制について明らかにすることで、学生の読書がどのように出版統制の影響を受けていたのかについて考察を重ねてきたが、本章では、これまでの論を一人の学生の読書行為から、具体的に検証していくものとなる。

高知大学総合情報センター（図書館）には、木村久夫の蔵書（木村文庫）が收藏されている。木村久夫の蔵書四六四冊（和書四五三冊 洋書一一冊）が、木村の母斐野によって一九七四年に寄贈され、木村文庫となって現在まで保管されたものである。蔵書には、木村による書き込みが数多くなされ、感想や購入書店、購入日時がある程度までわかるようになっていている。本章末には、木村文庫蔵書目録を付している。

まずは寄贈経緯について確認しておきたい。木村久夫は、一九一八年四月九日生まれの大阪府吹田市出身。一九四二年、高知高等学校（現高知大学）を卒業し、京都帝国大学経済学部に入學。同年一〇月に大阪中部第二三部隊に入營する。一九四三年九月にはインド洋カーニコバル島に配属され、通訳官として終戦を迎えるが、直前に起きたスパイ事件に關係した容疑で戦犯として捕らえられ、一九四六年五月二三日にシンガポールのチャンギ刑務所にて死去している。このチャンギ刑務所で木村は田辺元の『哲学通論』を手にし、余白に手記を記していたことが知られている。その余白の手記は、次のように始まる。

死の数日前偶然に此の書を手に入れた。死ぬ迄にもう一度之を読んで死に赴こうと考えた。四年前私の書齋で一読した時のことを思い出し乍ら。コンクリートの寝台の上で、遙かな古郷、我が来し方を想い乍ら、死の影を浴び乍ら、数日後には断頭台の露と消ゆる身ではあるが、私の熱情は矢張り学の途にあつた事を最後にもう一度想い出すのである。

鉛筆の線は私が引いたものである。（略）

此の書に向っていると何処からともなく湧き出ずる楽しさがある。明日は絞首台の露と消ゆるやも知れない身であり乍ら、尽きざる興味にひきつけられて、本書の三回目の読書に取り掛る。昭和二十一年四月二十二日<sup>20</sup>。

この手記が世間の耳目を集めたのは、高知高等学校時代の木村の恩師・塩尻公明による「或

る遺書について」(一九四八年)での紹介をきっかけとしている。その後木村の手記は、『新版 きけわだつみのこえ』(一九九五年)へ掲載されていたが、二〇一四年四月二十九日の『東京新聞』『中日新聞』による報道によって、『きけわだつみのこえ』の掲載部分が木村の遺した二つの遺書を加工したものであったことが広く知られることとなった。現在では『哲学通論』に書き込まれた手記ともう一通の遺書、それぞれの全文が公開されている<sup>4)</sup>。

この二つの遺書にはどちらも木村が自分自身の蔵書に言及した部分がみられる。まず、『哲学通論』に書かれた遺書には「私の蔵書はすべて、恩師塩尻先生の指示により処分してくれ。私の考えとしては高等学校へ寄贈するのが最も有効なのではないかと考える」との言葉がつづられ、もう一つの家族宛の遺書には次のように書かれている。

私が出征する時に言い遺してきたように、私の蔵書は全部塩尻先生の手を通じて高等学校に寄贈してくれ。学校の図書が完備されていないことは私がつとに痛感していたところであった。私の図書の寄贈によってかなりの補備ができるものと信ずる。若き社会学者の輩出のため少しなりとも尽すところあらば、私の希望は満たされる。(ただし孝子(妹―引用者注)の婿に当たる人がやはり経済学者として一生を志す人ならば、もちろんその人のため必要ならば蔵書の全部を捧げて良い)

こうした木村の意向によって、蔵書は高知大学へと寄贈されることとなった。木村文庫に収蔵されている書籍の購入日はおよそ一九三八年から一九四三年七月までの約五年間、高知高等学校から入営し、カーニバル島に配属される直前までのものであり、経済関係の古典、研究書が大半を占めている。こうした書物の傾向は、木村が塩尻との出会いをきっかけとして、高等学校時代から経済学を志していたことが背景にある。高知高等学校時代には、学友会誌に論文として「転換期に立つ経済学―政治経済学論争に際して―」を掲載することもあった。

蔵書目録からは、経済学をはじめとし、社会科学や哲学など多様な領域を体系的に学んでいこうとする学生時代の木村の姿が浮かび上がってくる。ただし、木村の蔵書には、書物への書き込みからおそらく読んでいたと考えられる文学書が含まれておらず、経済書関連の学術書や教養書を選別して寄贈したと考えられる<sup>5)</sup>。

次節からは、旧制高校生の読書事例としてその特徴をとらえ、第四・五章にて論じてきた推薦図書運動や出版統制との関連、そして文学的な読書とのつながりを蔵書構成や書籍の書き込みから明らかにしていくこととする。

## 第一節 旧制高校生の読書事例として

木村文庫の特徴は、蔵書の大半に購入日や購入場所、購入目的、感想などがわかる書き込みが遺されている点であろう。こうした書き込みによって、学生時代の木村久夫の辿った戦時下の読書のある程度まで追うことが可能となる。それは、旧制高校、京都帝国大生の読書文化を考察するうえでの重要な資料となる。まずは高校入学以前の読書について簡単に触れておきたい。

兄がよく本を読んでいるのを見ました。どんな本を読んでいたかわかりませんが、雑誌は『中央公論』と『改造』と『日本評論』の三冊を毎月届けて貰っていました。また毎月一卷ずつ一年間で一二巻になる『法華経講座』という叢書を東京から取り寄せて熱心に読んでいたのは憶えております。

中学時代の木村は『中央公論』と『改造』といった学生の定番雑誌を定期購読していた。ほかに『法華経講座』を読んでいたことが目につくが、それは家が法華宗であったことに由来している。その後、豊中中学校から高知高等学校へと入学した木村は五年間にわたって高知で過ごすこととなった。

中学時代の雑誌購読や木村文庫の蔵書目録からもうかがえるように、木村の読書体験は教養主義的な読書行為との重なりがみえる。昭和一〇年代は旧制高校において教養主義的な読書の揺り戻しが起こっていた時期にあたるが、木村の通う旧制高知高等学校でも、その傾向は同様であった。

旧制高知高等学校への入学後、一年間の入寮が義務づけられる南溟寮には、一九二七年の図書室開設計画によって、翌年に南溟文庫が設置されている。その寮誌『南溟』<sup>10</sup>には南溟文庫に和辻哲郎や長塚節『土』、小川正子『小鳥の春』、北条民雄『いのちの初夜』、エーヴ・キュリー『キュリー夫人伝』、ルナル『にんじん』、谷川徹三『日本人の心』などが購入されたことが記されている。なかでも河合栄治郎『学生と読書』には、「学生シリーズ中最も多く売れたもの。我々の読書に何等かの指示と反省を与へてくれる点があるであらう」といった紹介がなされており、人気であったことがわかる。

『学生と読書』は河合栄治郎による「学生叢書」（一九三六〜一九四一年）の一冊であり、木村文庫には、五冊の「学生叢書」が所蔵されている。木村は、一九四〇年七月に『学生に与ふ』、一九四一年七月に『学生と歴史』、一九四一年九月に『学生と日本』、一九四二年七月に『学生と科学』と定期的に「学生叢書」を購入している。木村も多くの旧制高校生と同様に「学生叢書」の愛読者であったようだ。『学生と読書』について見てみよう。



書物には、傍線が引かれ、巻末におかれた書物リストには、既読書の確認かもしくは購入の検討をしていたのかと思しきチェックがつけられている。『学生と読書』序文には以下のような記述がある。

事変が第二に入り時局の重大性が益々加はるに従つて、学生諸君も亦怒濤の脚下に渦巻くのを覚えるであらう。(略)次代の日本は今までとは異なる重き負担を諸君の双肩に置くであらう。之を負担しうるか否かは、一に現在の学生生活をいかに送るかに係つてゐる。「学生叢書」は此の時局に於て、当にその意義を失わないのみならず、却て一層その意義を加へたと思ふ。

ここで明らかにされているのは、「学生叢書」が「事変」、つまり一九三七年に始まる日中戦争と決して無関係ではないということである。戦時下における教養主義的な読書行為の復活は、まさに変化していく情勢に対応したものであった。社会科学に興味を抱いていた木村はその収録論文である戸田武雄「読書の回顧(社会科学)―金と本とは借りるなかれ―」の次のような箇所傍線を引いている。

主観によつて書物を選び主観によつて読むものは遂に彼自身を超越してゆくことはできないであらう。書物を友とすると云つた生やさしいことで、ひとは本が読めるものでも歴史がわかるものでもない。そこには一つの批判、ウェーバー的な闘ひの精神がなくてはならない。<sup>12</sup>

社会科学の立場から、相手の意図ではなく、自分の意図を遂行するために批判的な読書行為が必要とされていることが強調される部分であるが、こうした批判的な読書方法は木村の蔵書の多くの書き込みに見出すことが可能である。

木村文庫に所蔵されている学生叢書と同種の教養書に天野貞祐の『学生に与ふる書<sup>13</sup>』がある。その中に納められた「読書論」はヒルティやショーペンハウエル、ラスキンの読書論を原型として学生に対して読書の方法を論じたものである。以下、いくつか木村の傍線部を挙げてみよう。

二回読んで初めて本は読んだといへる、一回はざつと通読し、二回目は徹底的にしかし恐らくは部分的に読めばよいのである。既に言つたやうに考へながら読むことが必要である。

一般教養書でくり返してしかも気分に向いた時に読むやうな書籍は自分で所有するのが適当である。その為に払う犠牲は根本的な知識を得ることによつて償はれて餘りあるといはねばならぬ。

先に挙げた『学生と読書』のなかのタイトルにも「金と本とは借りるなかれ」という副題が付いていたように、書籍を購入し、再読によつて批判的に読むことが目指されていたと言える。とくに二つ目の引用文は、読書法として天野が挙げた三点の注意点のうち、「良書を熟読し、しかのみならずくり返して読まねばならぬ、というのが第三のそして最も重要な規則である」という点についての説明として記された部分にあたる。ここに記された「良書」を読む行為こそ、木村だけではなく戦時下の読書法として奨励された読書法であった。

次節からは、日本出版文化協会の行った用紙統制と推薦図書制度との関わりの中でその読書法を考察していきたい。

## 第二節 推薦図書制度とのかかわり

木村文庫の蔵書の大半が購入された一九四〇年代前半は、出版流通の変動が起こった時期にあたる。第四・五章にて述べてきたように、一九四二年の日本出版文化協会（以下、文協）、日本出版配給会社の設立によつて、書物の流通ルートは一元化され、「出版新体制」が築かれることで統制の手綱は強められていく。文協は、こうした流通の管理と共に用紙配給も担い、その割当のために出版審査が行われる。さらに、図書の推薦事業が始められ、それは国策会社として日本出版会に改組された後も継続された。そのような変動期に、地方学生としての木村久夫の読書はいかに行われたのだろうか。

第一回推薦図書の目録発表に際しての挨拶では「日本出版文化協会の推薦図書は他に見るが如き限られた範囲のものではなく、注意深く眼を国民各層に馳せ、各層の性格を深く認識しつつ選び出された良書である」とことが強調されている。こうした推薦運動は文協にとどまらず、図書館や婦人会、隣組での読書会として広まっていき、大衆への読書の普及が図られた。とくに良書の推薦は、学生を初めとした知識人にとつても話題性のある事柄であり、大学新聞などで特集が組まれていった。高知高等学校でも学内誌『高知高等学校報国団報』誌上にて、良書推薦および読書指導が行われている。そのなかで、木村の恩師である塩尻は、以下のように読書論を語っている。

此頃の自分は余りにも読書しないので良書の推薦は気がひける。また現在の自分にとつ

ては何を読むべきかよりも如何に読むべきかといふことの方が主たる関心事である。それ故、茲には読書の勇気を鼓舞する読書論として自分により印象を与へた読書論に就いて述べる。自分の最も楽しく読んだ読書論は、精読の価値に就いて述べてゐる谷川徹三氏「私は思ふ」(中央公論社)の中の「食物としての書物」。何と云つても健全な読書論は天野貞祐氏「学生に与ふる書」(岩波新書)の「読書論」。今日に於て三読すべき読書論はヒルテイ「幸福論」(岩波文庫)の「時間を得る法」。古典的なる読書論で翻訳されてゐるものにはラスキン「胡麻と百合」(岩波文庫)石川湧訳フアーゲ「読書術」(春秋社)がある<sup>15)</sup>。

塩尻の示した読書案内には、木村の読んでいた『学生に与ふる書』が挙げられている。それだけではなく、その読書論の原型となったヒルテイやラスキンの読書論を挙げ「何を読むべきかよりも如何に読むべきかといふことの方が主たる関心事」であると述べているように、木村の読書法と重なるところが多い。木村は師である塩尻の読書法に倣っていたようである。

どのようにして読むかということが問題となる背景には、同校教員の森敬三が同雑誌で語るように、「精読主義と併行して多読主義も実行されなければならない。然るに多読主義は往々濫読的傾向に流れ易いから常に良書の選定に意を用ゐ、全一種類、大同小異のものを濫読したり、屑紙に読書精力を濫費したりしないやうに努めなければならない。」<sup>16)</sup>といふような意識が強く働いていたからだと考えられよう。

木村の蔵書にも、「実に良書であつた。(略)再読の要と価値あるを痛感する<sup>17)</sup>」や「然し著者の洞察の遠大なるは其の構想力と共に驚く可きであり再読必須の良書である。」<sup>18)</sup>といった書き込みが度々見られる。とくに「マーシャルの経済学入門と聴きて私は直ぐ購入したのであつたが、読み始めるや実に稚々たる物で、大収穫を目標せる今日、之に拘はつてゐるでは不利と考へ中途にして一度打ち切りぬ。」<sup>19)</sup>という感想があるように、「良書」であるか否かという問題は読書の重要な要因となっている。

そうした木村の「良書」意識を強く感じるのが、「投下労働」として読書時間を計測し、記述した点だろう。読了までに費やした時間を「労働」ととらえることで、その書物内容が時間を費やすだけの価値があるのか否か、悪化する戦時下の状況のなかで見定めようとする意識が働いていたかのようにみえる。

戦時下、文協による読書推薦の方法は徐々に学徒兵への読書推薦へとつながっていく。第五章にて述べたように、『三田新聞』紙上には学徒兵への読書推薦記事が大々的に掲載され、「良書」を読まなければいけないという教養主義の勤勉な読書方法は、その枠組みだけ

を換骨奪胎することで、戦時下の思想統制のための読書方法として採用されていく。南溟文庫も一九四一年に昔の娯楽書や大衆文庫の処分を行っているが<sup>23</sup>、それは学徒出陣に際した学生への思想統制のひとつの表れとして見ることもできるだろう。木村文庫に遺された「良書」への意識は、学生をいかにして動員するのかという問題とも結びついているのである。

### 第三節 出版統制はどう作用したか

文協による用紙割当のための出版内容の事前審査が、思想統制の役割を担っていたように、推薦図書制度も（緩やかな統制）の役割を担っていた。国家による良書推薦は一九三〇年に文部省の推薦図書制度として、学生のマルクス主義への傾倒に歯止めをかけるために開始されており、木村はその文部省の推薦図書となった『マルクス主義批判』<sup>24</sup>を読み、読後後記を遺している。だがマルクス批判書だけではなく、木村の蔵書にはマルクス関係の書物も保管されている。木村文庫の蔵書のもうひとつの特徴として、蔵書の購入場所の書き込みだけではなく、購入した古書店シールが遺されている点が挙げられるが、そこからは出版統制のなかで、いかにして自分の読みたい「良書」を手に入れていったのかを知ることができる。

高知高等学校時代に木村はその蔵書のほとんどを古書店で購入しており、新刊書店は現在も経営を続ける日新館のみである。こうした傾向には、左翼出版物の購入と高知という場所という二つの要素が働いていたとみることができる。

「昭和十二年暮から十三年春にかけての日本無産党或は労農派等の人民戦線事件の検挙取締以来」、左翼出版物が「新規に出版されるものは殆ど無かった<sup>25</sup>」うえに、一九四〇年には左翼出版物の発売頒布禁止・差し押さえ処分が内務省警保局によって実施され、この時期に左翼出版物を入手することは困難を極めていた。

だが、木村の蔵書には高島素之訳のマルクス『資本論』やカウツキー『マルクス資本論解説』をはじめ左翼関係書籍が多く收藏されている。改造版『マルクス・エンゲルス全集』、マルクス『経済学批判』、レーニン『帝国主義論』、石浜知行『マルクス伝』など左翼出版物の多くは高知高等学校前にあった池上書店で購入されたものである。古典堂書店、一方堂書店、有文堂書店、平凡堂、玉成堂などの高知県内の古書店でも書物は購入されているが、池上書店での購入冊数が一七冊ととくに多い。

高知の古書店事情を記した「高知古書籍商五十年略覚書<sup>26</sup>」によれば、昭和初期に池上書店と一方堂書店（岡本一方堂）が開店、一九三三から三五年にかけて、仕事にあぶれた文学青年たちの開業によって高知の古書店は増加している。木村が通った古書店もこのと

きに開業された店が多い。とくに、木村が高知に訪れた一九三八年ごろの「業界は手堅い結び付きがあり、相互の啓蒙に役立つ」時期にあたり、高知の古書業も好調だったようである。ただし、書物自体の流通量はやはり少なかったようで、「或る古本屋で二円の本が他では四円と二倍になるから啞然とする」といった声も高校生からはあがっている。

高知の古書店業の発展は長くはつづかず、一九四三年には「特高警察の命令で店頭の小会科学書を供出し」、二年後には池上書店、弘文堂を遺して、他の店は空襲で灰燼に帰してしまう。木村の高知時代の古書購入は、高知の古書業界の短い隆盛に支えられていたと言えるだろう。

何より木村の古書店での購入を後押しした要因に、地方による配給の差が挙げられる。日配の集計した一九四一年七月から翌年六月までの一年間の書籍地方別販売金額からは、四国地方が一・八%で最下位であり、なかでも高知は四国で三番目の販売額となっている<sup>256</sup>。販売額が少なければ、畢竟その地の配本は減少することになるだろう。

木村文庫に納められた『法律哲学』<sup>257</sup>には、日新館から木村が注文したエドウィン・キヤナン『富』の原書の版元品切れを知らせる一通のはがきが挟み込まれている。木村は高知では結局新刊で『富』を手に入れることができず、古書店でも入手することは叶わなかった。ようやく入手するのは、その後京都帝国大学へ入学を果たしたときであり、その見返しには「昭和十七年四月二十日 帝大百万遍側書店にて 荒勝君と共に待望の書を手にして 直ちに訳翻に着手す決意なり」との書き込みがされている。

こうして京都に移ってからの木村は、堰を切ったかのように丸善や朝日会館といった大型書店で社会科学、経済学関連の新刊を頻繁に購入していく。「数理経済学研究の一資料として洛北白川の一室にて 昭和十七年六月」と書かれた栗村雄吉『価格の一般理論』のように、洛北白川の自室で読むための書物が、新刊書店だけではなく白楊社、河原町通、百万遍通、丸太町通にある様々な古書店で購入された。手記がしたためられた『哲学通論』を読んだのも、この時である。遺書には「数年前、私が未だ若き学徒の一人として社会科学の基本原理への欲求の盛んなりし時、その一助として、この田辺氏の名著を手にしたことがあった。何分有名な難しい本であったので、非常な労苦をして読んだ事を憶えている。そのある時は洛北白川の一書齋であった」と当時のことが回想されている。

#### 第四節 文学表現とのつながり

つぎに、木村はどのような文学に接していたのか見ていくこととする。先にあげた塩尻の「読書論」の最後には次のような一文が付されている。

読書人以外の専門家の修練に関する記述の中には最上の読書論よりもなほ読書への精進を刺激して止まないものがある。自分の繰返し読んであきないものは、武者小路実篤氏「宮本武蔵の一面」と谷崎潤一郎氏「芸に就いて」とである。

塩尻は武者小路実篤や谷崎潤一郎らの作品に触れることで「読書への精進」が刺激されたと語っているが、木村久夫にとっては何がそうした存在となり得たのだろうか。

木村文庫の数ある蔵書の中でも特徴的な書き込みは、土屋喬雄『日本資本主義史上の指導者たち』の裏見返しに「猪野々にて」詠われた「時折にめくる頁の音にしも吾おののきぬ山しづかなり」（一九四一年八月一七日）の歌である。木村は経済学だけではなく、歌への興味も尽きることはなく遺書には数首の短歌が詠われている。見返しに書き込まれた歌の背景には、木村が学生のころに愛読した歌人吉井勇の姿がある<sup>300</sup>。蔵書のひとつ『英国経済史要』には、吉井の歌を写した原稿用紙が挟まれてもいる。

木村がたびたび通った高知県香美市香北町にある猪野々は、吉井勇が妻の徳子の関与した不良華族事件をきっかけとして隠遁生活を送った猪野沢温泉の溪鬼荘がある場所である。高等学校時代、吉井勇への傾倒から勇の逗留した猪野沢温泉にて勉学に励んでいたのだ。溪鬼荘に遺された当時の貴重な宿帳からは、木村の猪野沢温泉来訪を知ることができる<sup>300</sup>。

木村久夫の猪野沢温泉逗留期間

一九四〇年七月二六日～八月二九日（同行者…千頭純一、八月一九日まで）

一九四一年三月一九日～四月五日

一九四一年七月三〇日～帰りは不明（同行者…橋尚道、八月九日まで）

一九四二年八月二三日～八月二四日



木村久夫自筆の宿帳

とくに一九四二年の来訪は、一〇月に入営を控え、二日間という短い期間にわずかでも猪野々の人々へ挨拶に訪れたものと考えられよう。また、三度目の逗留の帰宅日は判明していないが、木村文庫にはちょうどこの逗留の時に読んだものが数多く含まれている。マシアル『経済学入門』は、日新館にて一九四一年六月一七日に購入し、

七月三〇日に宿泊してから二日後の八月一日に猪野々にて読了している。また、オットマール・シュパン『現代経済学の危機』には「日新館書店にて猪野々より帰りし日」と一九四一年九月に書かれていることから、木村は七月末から九月まで猪野々に滞在していたことも判明する。日新館は高知市内に現存する書店であり、猪野々から帰る際に市内で購入されたものだろう。

さらに、木村の論文が掲載された『南溟報会誌』には、「猪野々山居」と題された数首の短歌も掲載されている。「盛夏八月、吾思ふことありて物部の川の上流、猪野々の里に籠りぬ。人を避け、我を想い、我を考え、生命を顧みること二〇日余り、言葉足らざれども、短歌を以って表はすこととしぬ。此処にその歌屑を集む昭和一六年八月 高校三年最後の年」と記されていることから、この短歌も三度目の猪野々逗留時に書かれたものであり、文庫の見返しに記されたものと同時期に詠われたものだろう。

こうして蔵書の書き込みからは、経済学の勉強の合間を縫うように歌を詠みながら思索を重ねていく、木村の旧制高校生としての姿が浮かび上がってくる。また、「物語 物部川」と題した自伝的小説の存在が恩師の八波直則によって紹介されているように、木村の読書の背景には文学との緊密な関係が想像される。その自伝小説には、猪野々での生活、家族や友人、そして読書の日々が描かれている。

しかしながら、木村文庫にはこうした木村の文学への嗜好を感じさせる書物はあまり遺されていない。それはおそらく、「若き社会学者の輩出に少しでも尽」くしたいと述べた遺書によって選別され収蔵されたことにあると思われる。

#### 第五節 大阪陸軍病院への書物持ち込み

これまでに見てきたような読書との関わりを経て、木村は京都帝国大学への入学から半年後、一九四二年一〇月一日に陸軍大阪中部第二三隊へと配属されることになる。だが入営直後から病気療養のため、一年近く大阪陸軍病院に入院していたことが判明している。蔵書に遺された書き込みからはこの入院時の読書の様子をわずかながらうかがうことができる。

入院中、木村は外出の日に自分で大阪丸善や古書店で書物を購入して持ち込んだほか、友人である荒勝巖（元水産庁長官）に頼んで大阪陸軍病院まで書物を差し入れて貰っている。

持ち込まれた書物は確認できる限りで二一冊、そのなかには洋書も多く、いくつかには陸軍の私物許可の押印がなされている。購入された書物は、政治経済学に関するもので、クヌート・ヴィクセルやジョン・ヒックスの原書もみられる。なかでも、南方へ派遣され

る直前に購入されたのが、『国家と経済』を刊行し、国家主義的な経済学を牽引してきた難波田春夫『戦力増強の理論』であった。木村による購入記録には次のような記述がなされる。

昭和十八年六月丸善にて。難波田氏の旧書を偲びつつ

昭和十八年九月十三日夜半 南方出征の前夜に当りて之を読む。半途にして止むと雖も矢張り著者らしき感銘を与へてくれた。今の私には多大の疑問を抱かせるものを持つ。

感銘をうけつつも、「多大の疑問を抱かせる」その疑問とは、何に対する疑問であったのか。経済学理論における学問的な疑問か、果して難波田の学問の方向性に対する疑問であったのか。その書物の書き込みから木村の疑問の意図を探ることは難しい。木村は、入営後の入院によって兵士となりつつも、経済学の勉強を継続する環境を整えていたが、その全てを読むことは叶わなかった。妹の孝子は兄の当時の様子を次のように語る。

兄は兵隊になってからも、「帰ってきたら読む。しかし本はもうなくなる」と言って、外出日に母とどこかで落ち合い、古本屋を巡って本を買い込み、母が持って帰ってくるということが度々でした<sup>316</sup>。

このように、木村は様々な手立てを奉じることで書物へ接続する機会を持ち続けていた。高知高等学校が発行していた『報国団報』の出陣者壮行式激励会特集には帰還した先輩学生によって「入隊より予備士校終了までは軍事書以外の読書は殆どできない。予備士校修了し見習士官任官後は心掛次第で幾らでも読書は可能だ<sup>317</sup>」といった兵士の読書環境が知らされている。兵士の階級により読書環境が異なっていることが体験談として伝えられているように、兵士となって読書ができるかどうかということは、学生にとって重要なこととなっていたのである。そして木村の入営後の病院での読書もまた、兵士として読書を行う学徒兵の姿へと重なっていく。

## おわりに

本章では、木村久夫という学生の旧制高校生時代から京都帝国大学経済学部、そして大阪陸軍病院での読書の遍歴を辿ってきた。

高校時代の木村は、旧制高校生の教養的読書圏のなかで、河合栄治郎の「学生叢書」からその読書の足掛かりを得ていた。筒井清忠は、河合栄治郎による学生叢書が教養主義を



マニュアル化したことを指摘しているが、木村もまたこうしたマニュアルの手順を踏み、学問への足掛かりを得た学生のひとりであったと言えよう。また、第四・五章で論じてきた「良書」を読むという読書法は、木村だけではなく、南溟寮でも共有され、旧制高校の学校内での推薦図書制度との連続性を見出すことができる。

退院直後の一九四三年九月に、木村はインド洋カーニコバル島へ南方派遣軍の一人として向かっていく。多数のインド人の処刑が行われた島民のスパイ問題に通訳官として関わっていた木村は、軍事裁判にかけられ、一九四六年五月二三日にシンガポールにて死刑となる。そこで、木村は田辺元『哲学通論』を読み、その余白に遺書をつづる。そこには次のような言葉がある。

私はこの書を十分に理解することが出来る。学問より離れて既に四年、その今日に於いてもなお難解を以て著名な本書をさしたる困難もなしに読み得る今の私の頭脳を我乍ら有難く思うと共に、過去における私の学的生活の精進を振り返って楽しく味あるものと我乍ら喜ぶのである。

このように木村久夫によって行われた刑務所での読書は、戦場においてもそれまでの読書行為を持続させていたひとつの典型的な例として見出すことができる。そうしたひとりの学徒兵の読書のありようを、高知大学に遺る木村文庫の蔵書たちは物語っている。

ただし高知高等学生時代には、都市部における読書環境とは異なる側面があったことも確認しておきたい。この時期、中央においても書物の減少は嘆かれているが、そのなかでもとくに木村の住む高知への配給量は減少しており、それがかえって古書店での購入へと木村を誘うことになる。そのなかでも、マルクス関係書を多く購入した池上書店は、同好の士が集まる場所でもあった。また猪野々という場所も、吉井勇の歌との出会いの場所でもある。「学生叢書」のようなマニュアルによって教養主義的な読書圏への参入を強めていた木村であるが、それだけではなく地域との関係性において木村の読書は形作られている。それは京都帝国大学へ進むと、これまで手に入れることができなかった経済学関連の学術書の購入が急激に増加し、教養主義的な読書への沈潜傾向が強まっていることも関連しているだろう。

本章では、木村文庫に遺された蔵書から、学生が出版統制下にどのような読書を行っていたのかを析出し、そこにひとつの学徒兵の読書行為の典型を見出すこととなった。

だが木村文庫には、木村が所持していたはずの文学関係の書物が所蔵されていない。そのため学術書と教養書が蔵書の中心構成となっており、今回のような結果が導き出され

たと考えられる。木村が好んでいた吉井勇などの書物を見ることが叶うのならば、木村のこうした教養的な読書の枠組みから逸脱するような読書行為も見出せる可能性がある。

付・木村文庫蔵書目録（章末に提示）

〔付記〕本章に収録している木村文庫蔵書目録は高知大学総合情報センターの田所千峰子氏による目録を参考に中野が追加で整理を行ったものである。

なお、HP (<http://www.lib.kochi-u.ac.jp/library/chuokan/siryospecial/kimura.html>)にて田所氏作成の目録の閲覧が可能である。

また、古書店の情報や書物への書き込みなどの補足情報を追加した蔵書目録は、下記HP ([https://researchmap.jp/index.php?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=multidatabase\\_view\\_main\\_init&multidatabase\\_id=27539&block\\_id=2061708#\\_2061708](https://researchmap.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=multidatabase_view_main_init&multidatabase_id=27539&block_id=2061708#_2061708))にて公開中である。

<sup>1</sup> 寄贈以降に木村久夫についての関連書籍が二冊追加されているため高知大学図書館の目録では計四六六冊となっている。だが、本章では木村久夫の蔵書を判別しやすくするためにその二冊をリストからは除外している。

<sup>2</sup> 中谷彪『塩尻公明と戦没学徒木村久夫―或る遺書について』の考察』（大学教育出版、二〇一四年七月）一四六頁を参照。

<sup>3</sup> 塩尻公明「或る遺書について」『新潮』（新潮社、一九四八年六月）

<sup>4</sup> 加古陽治『真実の「わだつみ」学徒兵木村久夫の二通の遺書』（東京新聞、二〇一四年八月）また、前掲注二の中谷によっても、その全文が公開されている。

<sup>5</sup> 木村久夫「転換期に立つ経済学―政治経済学論争に際して―」『南溟報国会誌 第一号』（一九四一年一二月）

<sup>6</sup> 聞き取り調査等から、文学書は八波直則氏の元へ寄贈されたのではないかという推測もできるのだが、八波氏もすでに鬼籍にはいり確認はできていない。

<sup>7</sup> 「木村久夫さんご遺族（義郎、孝子さん夫妻）に聴く」『わだつみのこえ 第一一五号』（日本戦没学生記念会、二〇〇一年一月）

<sup>8</sup> 永嶺重敏『東大生はどんな本を読んできたか 本郷・駒場の読書生活一三〇年』（平凡社、二〇〇七年一〇月）一四二～一四四頁。

<sup>9</sup> 高知高等学校南溟寮編『南溟寮略史』（高知高等学校南溟寮、一九四二年一月）

<sup>10</sup> 『南溟 五一号』（高知高等学校南溟寮、一九三九年六月）。高知大学総合情報センター

にて所蔵。

<sup>10</sup> 河合栄治郎編『学生と読書』（日本評論社、一九三八年一二月）

<sup>11</sup> その他、本書には遺書が書き込まれた田辺元『哲学通論』についての次のような言及箇所は傍線が付されている。「唯物弁証法は科学的なる現実分析の方法であつて哲学の方法ではない旨を述べられた田辺元氏の『哲学通論』に負ふのであり、またこれによつてわたしや宗教が歴史の世界に働くべき場所とも云ふべきものを教へられた。「信仰は精神であつて、常識は方法である。而うして常識は信仰を実行するための唯一の方法である」（内村鑑三）。『哲学通論』もこのことを教へてゐるやうに思はれる。」

<sup>12</sup> 天野貞祐『学生に与ふる書』（岩波書店、一九三九年八月）

<sup>13</sup> 「日本出版文化協会第一回推薦図書発表」『日本出版文化協会推薦図書目録（第一回）十一月分』（日本出版配給株式会社、一九四一年一月一五日）。

<sup>14</sup> 塩尻公明「読書論に就いて」『高知高等学校報国団報 三号』（高知高等学校報国団、一九四三年三月）

<sup>15</sup> 森敬三「読書法雑感」『高知高等学校報国団報 三号』（高知高等学校報国団、一九四三年三月）

<sup>16</sup> 肥後和男『日本国家思想』への書き込み。

<sup>17</sup> ウェルナー・ゾムバルト『高度資本主義』への書き込み。

<sup>18</sup> マーシアル『経済学入門』への書き込み。

<sup>19</sup> 高知高等学校南溟寮編『南溟寮略史』（高知高等学校南溟寮、一九四二年一月）

<sup>20</sup> 思想問題研究会編『マルクス主義批判』（社会教育会、一九三一年二月）

<sup>21</sup> 「左翼出版物禁止処分に関する説明要旨 昭和一五年七月」『マス・メディア統制2』（みすず書房、一九七五年一〇月）

<sup>22</sup> 吉永進（吉永平凡堂主人）による「高知古書籍商五十年略覚書」。戦後に創設された高知県古書籍商組合による機関誌『月報』に収録されていたものであるが、現在その所在は不明である。本稿に使用したものはその一部コピーを吉岡義一氏から提供していただいたものである。なお、高知県古書籍商組合による『月報』については松本有弘「高知古書店史話稿（1）プロローグと高知県古書籍商組合の『月報』その1」『月刊土佐』（和田書房、一九八四年九月）に詳しい。

<sup>23</sup> 高嶋善郎（文一甲一）「高校生活展望車」『南溟寮報』（高知高等学校南溟寮、一九三八年五月）

<sup>24</sup> 日配調査部「日配 一年間の書籍地方別販売金額」『資料年表日配時代史』（出版ニュー

ス社、一九八〇年一〇月)

<sup>26</sup> 高柳賢三『法律哲学』(日本評論社、一九二八年九月)

<sup>27</sup> 土屋喬雄『日本資本主義史上の指導者たち』(岩波書店、一九三九年一〇月)

<sup>28</sup> 細川光洋「明日」への祈り 吉井勇と木村久夫の歌』『高知新聞』(二〇一一年五月二三日)

<sup>29</sup> 本位田祥男『英国経済史要』(日本評論社、一九三八年六月)

<sup>30</sup> 戦後、火事により猪野沢温泉は焼けてしまっているが、木村自筆部分の宿帳は偶然にも焼け残っている。女将の今戸道子氏の御協力によって、貴重な宿帳の閲覧が可能となった。

<sup>31</sup> マーシアル『経済学入門』(日本評論新社、一九四一年五月)

<sup>32</sup> オットマール・シュパン『現代経済学の危機』(三笠書房、一九四〇年一月)

<sup>33</sup> 八波直則「塩尻先生と戦没学徒木村久夫君―未刊未発表の小説『物部川』の紹介―」『南溟五号』(高知高等学校南溟寮、一九七八年)。小説の概要については、前掲注二(中谷書に詳しい)。

<sup>34</sup> 「木村久夫さんご遺族(義郎、孝子さん夫妻)に聴く」、前掲注六。

<sup>35</sup> 玉寄長和「帰還断想」『報国団報 四号』(一九四四年二月)

<sup>36</sup> 筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』(岩波書店、二〇〇九年一二月) 八五頁。

\*本章の『日本出版文化協会推薦図書目録』の引用は『戦時推薦図書目録』(金沢文圃閣、二〇一一年五月)による。

本章の執筆にあたり、インタビュー及び資料の提供等、多大なご協力を頂いた高知大学総合情報センターの田所千峰子氏、高知大学研究国際部学術情報課の澤田明美氏、吉岡義一氏、今戸道子氏には改めて感謝いたします。

書籍名	執筆者	執筆者補足	出版社	刊行年月日	書籍情報補足
娼館の諸形式	ミュラー・リヤー	木下史郎	岩波書店	1934	岩波文庫
富に関する省察	チュルゴオ	永田清訳	岩波書店	1934.11	岩波文庫
ジャン・クリストフ	ロマン・ローラン	豊島与志雄	岩波書店	1935.3-1936.1	岩波文庫、1巻
法と国家	レオン・デュギー	梶真琴	岩波書店	1935.9	岩波文庫
世界観の研究	テイルタイ	山本英一	岩波書店	1935.9	岩波文庫
経済学試論集	ミル	末永茂喜	岩波書店	1936.5	岩波文庫
富の理論の数学的原理に関する研究	クールノー	中山伊知郎	岩波書店	1936.6	岩波文庫
職業としての学問	マックス・ウェーバー	尾高邦雄	岩波書店	1936	岩波文庫
社会科学方法論	マックス・ウェーバー	恒藤森校閲、富永祐治、立野保男共訳	岩波書店	1936	岩波文庫
経済学原理	マルサス	吉田秀夫	岩波書店	1937.9	岩波文庫、上巻
経済学原理	マルサス	吉田秀夫	岩波書店	1937.9	岩波文庫、下巻
社会再組織の科学的基礎	コント	飛沢謙一	岩波書店	1937	岩波文庫
カントとマルクス	フォアレンダー	井原紘	岩波書店	1937-1938	岩波文庫、上巻
カントとマルクス	フォアレンダー	井原紘	岩波書店	1937-1938	岩波文庫、下巻
国家経済学講義要綱：歴史的方法に據る	ロッシアー	山田雄三	岩波書店	1938	岩波文庫
文化科学と自然科学	リッケルト	佐竹哲雄、豊川昇	岩波書店	1939.2	岩波文庫
サイキス・タスク：俗信と社会制度	フレイザー	永橋卓介	岩波書店	1939.6	岩波文庫
経済学の方法に関する研究	カール・メンガー	福井孝治、吉田昇三	岩波書店	1939.7	岩波文庫
強国論	ランケ	相原信作	岩波書店	1940.1	岩波文庫
芸術経済論	ラスキン	西本正美	岩波書店	1927.12	岩波文庫
国富論	アダム・スミス	大内兵衛	岩波書店	1940.9-1944.11	岩波文庫、1巻
国富論	アダム・スミス	大内兵衛	岩波書店	1940.9-1944.11	岩波文庫、2巻
国富論	アダム・スミス	大内兵衛	岩波書店	1940.9-1944.11	岩波文庫、2巻
国富論	アダム・スミス	大内兵衛	岩波書店	1940.9-1944.11	岩波文庫、3巻
ドイツ国民に告ぐ	フィヒテ	大津康、佐藤通次改訳	岩波書店	1940.3	岩波文庫
ローマ人盛衰原因論	モンテスキュー	大岩誠	岩波書店	1941.5	岩波文庫
地代論	ロードベルトウス	山口正香	岩波書店	1928.3	岩波文庫
宗教生活の原初形態	デュルケム	吉野清人	岩波書店	1941-1942	岩波文庫、上巻
経済学及課税之原理	リカード	小泉信三	岩波書店	1933	岩波文庫
外国貿易によるイギリスの財宝	トーマス・マン	張漢裕	岩波書店	1942.7	岩波文庫
リカードのマルサスへの手紙	ボナア編	中野正	岩波書店	1942-1943	岩波文庫、上巻
マルクス・エンゲルス伝	リアザノフ	長谷部文雄	岩波書店	1928.8	岩波文庫
労働者綱領	ラッサール	小泉信三	岩波書店	1928.1	岩波文庫
ミル自伝	ジョン・ステュアート・ミル	西本正美	岩波書店	1928.12-1929.3	岩波文庫
婦人論	ベーベル	草間平作	岩波書店	1929.3	岩波文庫、下巻
近代民主政治	ブライス	松山武	岩波書店	1929.6-	岩波文庫、1巻
近代民主政治	ブライス	松山武	岩波書店	1929.6-	岩波文庫、2巻
近代民主政治	ブライス	松山武	岩波書店	1929.6-	岩波文庫、3巻
近代民主政治	ブライス	松山武	岩波書店	1929.6-	岩波文庫、4巻
ドイツ・イデオロギー	マルクス、エンゲルス	リヤザノフ編／三木清訳	岩波書店	1930.7	岩波文庫
道徳の経済的基礎	シュタウティンガー	草間平作	岩波書店	1931.3	岩波文庫
経済学入門	ローザルクセンブルグ	佐野文夫	岩波書店	1933.2	岩波文庫
暴力論	ソレル	木下半治	岩波書店	1933.6-1933.11	岩波文庫、上巻
暴力論	ソレル	木下半治	岩波書店	1933.6-1933.11	岩波文庫、下巻
経済表	ケネー	増井幸雄、戸田正雄	岩波書店	1933.11	岩波文庫
世界文化史概観	ウェルズ	長谷部文雄	岩波書店	1939	岩波文庫、上巻
支那思想と日本	津田左右吉		岩波書店	1938	岩波新書
野口英世	小泉丹		岩波書店	1939	岩波新書
学生に与ふる書	天野貞祐		岩波書店	1939	岩波新書
戦争とふたりの婦人	山本有三		岩波書店	1939	岩波新書
日本資本主義史上の指導者たち	土屋喬雄		岩波書店	1939	岩波新書
日本文化の問題	西田幾多郎		岩波書店	1940	岩波新書
アメリカ発展史	ファランド	名原廣三郎、高木八尺	岩波書店	1941	岩波新書、上巻
アメリカ発展史	ファランド	名原廣三郎、高木八尺	岩波書店	1941	岩波新書、下巻
哲学概論	紀平正義		岩波書店	1925	改訂版
哲学概説：高等教育	得能文、高階順治		東洋図書	1932	増訂版
国富論	アダム・スミス	青野季吉	春秋社	1928-1929	世界大思想全集、上巻
国富論	アダム・スミス	青野季吉	春秋社	1928-1929	世界大思想全集、下巻

政治的正義	ゴッドウイン	加藤一夫	春秋社	1930.9	世界大思想全集、17巻
人口論	トマス・ロバート・マルサス	神永文三	春秋社	1927	世界大思想全集、18巻
英国社会主義史	マックス・ベエヤア	加田哲二	春秋社	1929	世界大思想全集第2期、1巻
英国社会主義史	マックス・ベエヤア	加田哲二	春秋社	1929	世界大思想全集第2期、1巻 2巻
経済学批判、賃労働及資本、価値価格及び利潤 / 空想的科学的社会主义 / 帝國主義論	マルクス / エンゲルス / レーニン	安倍浩 / 安倍浩 / 青野季吉	春秋社	1928.1	世界大思想全集、30巻
無政府主義思想史 / マルクス説の崩壊	ネットラウ / ソレル	新居格 / 百瀬二郎	春秋社	1930	世界大思想全集、35巻
マルクス主義の国家観、カントとマルクス主義	マックス・アドラー	井原紘	春秋社	1931.6	世界大思想全集、42巻
マルキシズムの改造 / マルキシズム修正の駁論	ベルンシュタイン / カウツキー	松下芳男 / 山川均	春秋社	1928	世界大思想全集、47巻
法の精神 / 君主論	モンテスキウ / マキアヴェッリー	木村幹 / 橋田東登	春秋社	1928.12	世界大思想全集、5巻
経済と社会、社会科学方法論 / 現代の国家と社会	シュバン / フィアカント	向井篁一 / 谷藤重吉	春秋社	1931	世界大思想全集、60巻
共同社会と利益社会 : 其他	トエンニース	鈴木晃	春秋社	1933.9	世界大思想全集、73巻
反マルクス論	カール・ムース	草間平作	春秋社	1933.12-1934.2.	世界大思想全集、上巻
共同村の歴史(下)、経済学の第一原理	シャル・ジード / ソムバルト	八太舟三 / 鈴木晃	春秋社	1933.11	世界大思想全集、86巻
反マルクス論	カール・ムース	草間平作	春秋社	1933.12-1934.2.	世界大思想全集、下巻
教養としての哲学	竹内富子編		三笠書房	1939	哲学教養講座、1巻
現代の哲学	竹内富子編		三笠書房	1939.4	哲学教養講座、2巻
世界観	竹内富子編		三笠書房	1939.5	哲学教養講座、3巻
社会	竹内富子編		三笠書房	1939.6	哲学教養講座、4巻
歴史	竹内富子編		三笠書房	1939	哲学教養講座、5巻
文化	竹内富子編		三笠書房	1939	哲学教養講座、6巻
政治思想	神田豊穂		春秋社	1928.3	大思想エンサイクロペディア、17巻
人間のボリスの形成	山内得立		弘文堂書房	1939.2	教養文庫、1巻
論理学概説	永野芳夫		中和書院	1942.11	再訂増補13版
文化類型学	高山岩男		弘文堂書房	1939.2	
教養と文化の基礎	田中耕太郎		岩波書店	1937.6	
日本主義文化宣言	倉田百三		人文書院	1939.11	
日本国家思想	肥後和男		弘文堂書房	1939.2	教養文庫
体系と展相	山内得立		弘文堂書房	1937.2	
存在の現象形態	山内得立		岩波書店	1930.11	
意識の問題	西田幾多郎		岩波書店	1920.1	
知と行	紀平正美		弘文堂書房	1938.12	
道理への意志	天野貞祐		岩波書店	1940.1	
西洋近世哲学史	安倍能成		岩波書店	1929	改訂版、哲学叢書、第10編
西洋古代中世哲学史	安倍能成		岩波書店	1929	改訂版、哲学叢書、第5編
全体の立場	高橋里美		岩波書店	1932.7	
学徒の使命	フヒテ	山本健	弘文堂	1939.7	
ヘーゲル哲学概説	レイバアン	陶山秀	大蔵書房	1936.6	
ヘーゲル哲学と弁証法	田辺元		岩波書店	1932.1	
大論理学	ヘーゲル	鈴木權三郎	岩波書店	1932	ヘーゲル全集、上巻
大論理学	ヘーゲル	鈴木權三郎	岩波書店	1932	ヘーゲル全集、中巻
唯心論と唯物論	フオイエールバッハ	関根悦郎、国互一	共生閣	1931	
哲学の貧困	カール・マルクス	浅野晃	弘文堂	1926.4	マルキシズム叢書、第2冊
東洋倫理	西晋一郎		岩波書店	1934.4	岩波全書、20巻
歴史的世界：現象学的試論	高坂正顕		岩波書店	1937.1	
歴史哲学：民族史観への基礎的予備概念	齋藤昶		高陽書院	1938.3	新鋭哲学叢書、3巻
歴史哲学と政治哲学	高坂正顕		弘文堂書房	1939.3	教養文庫、3巻
ランケと世界史学	鈴木成高		弘文堂書房	1939.12	教養文庫、37巻
学生と歴史	河合栄治郎編		日本評論社	1940.5	
社会史	加田哲二		東洋経済新報社	1940.6	現代日本文明史、11巻
政治史	巖山政道		東洋経済新報社	1940.7	現代日本文明史、2巻

財政史	土方成美		東洋経済新報社	1940.11	現代日本文明史、6巻
農村史	小野武夫		東洋経済新報社	1941.4	現代日本文明史、9巻
日本開化小史	田口卯吉		改造社	1929.2	改造文庫、第1部第22篇
日本文化史序説	西田直二郎		改造社	1932.2	
学生と日本	河合栄治郎編		日本評論社	1940.8	
日欧通交史	幸田成友		岩波書店	1942.6	
Bolshevism at a deadlock	Karl Kautsky	B. Pritchard	G. Allen & Unwin	1931	
マルチン・ルッター	本位田祥男		三省堂	1934	社会科学の建設者人と学説叢書
わが生涯	トロツキー	青野季吉	改造社	1937	改造文庫、第1部、下巻
マルクス伝	石浜知行		改造社	1931.12	偉人伝全集、6巻
The life of William Ewart Gladstone	Herbert Woodfield Paul.		Thomas Nelson	19—	
現代世界通信	清沢冽		中央公論社	1938	
新独逸国家大系	二荒芳徳編纂代表		日本評論社	1939-1941	新独逸国家大系、政治篇1、1巻
経済政策	二荒芳徳編纂代表		日本評論社	1940.2	新独逸国家大系、10巻
社会政策・労働政策	二荒芳徳編纂代表		日本評論社	1939.9	新独逸国家大系、11巻
財政・金融	二荒芳徳編纂代表		日本評論社	1940.3	新独逸国家大系、12巻
教育・文化	二荒芳徳編纂代表		日本評論社	1939.12	新独逸国家大系、政治篇2、2巻
国法的基礎・国防軍	二荒芳徳編纂代表		日本評論社	1939	新独逸国家大系、政治篇3、3巻
ナチスの政治組織	二荒芳徳編纂代表		日本評論社	1940.9	新独逸国家大系、政治篇4、4巻
民法・強制執行	二荒芳徳編纂代表		日本評論社	1939.11	新独逸国家大系、法律篇1、5巻
商法・経済法・社会保険	二荒芳徳編纂代表		日本評論社	1940.8	新独逸国家大系、法律篇2、6巻
刑法・民事訴訟法・労働法	二荒芳徳編纂代表		日本評論社	1940.12	新独逸国家大系、法律篇3、7巻
行政法・家族及び遺産法	二荒芳徳編纂代表		日本評論社	1941.2	新独逸国家大系、法律篇4、8巻
経済の構成	二荒芳徳編纂代表		日本評論社	1939.8	新独逸国家大系、経済篇1、9巻
民族耐乏	高田保馬		甲鳥書林	1942.11	
独逸社会政策思想史	大河内一男		日本評論社	1936.2	
マルクス歴史・社会・国家学説	ハインリッヒ・クノウ	河野密	平凡社	1928.7	社会思想全集、22巻
唯物論と経験批判論	ニコライ・レーニン	山川均	平凡社	1928.1	社会思想全集、9巻
社会主義の発展：空想的から科学的へ	フリードリッヒ・エンゲルス	堀利彦	改造社	1929	改造文庫、第1部第10篇
組織論	レーニン	鈴木厚	改造社	1929	改造文庫、第1部第39篇
第一インタナショナル史	ステークロフ	内垣謙三	改造社	1933.1	改造文庫
レーニン主義の基礎	スターリン	野沢考平	改造社	1932.12	改造文庫、第1部第104篇
無産政党論	蠟山政道編著		日本評論社	1930	現代政治学全集、11巻
社会組織と社会革命に関する若干の考察	河上肇		弘文堂書房	1922.12	
エルフルト綱領解説	カール・カウツキー	三輪壽社	改造社	1930.9	改造文庫、第1部第105篇
シュバンの全体主義哲学	ハンス・レーベル	風見謙次郎	理想社	1941.6	
立上る政治家	馬場恒香		中央公論社	1937	
大日本政治思想史			大日本政治思想史刊行会	1939	下巻
独逸第三帝国の理論：公益優先と利子奴隷制打破	G.フェーダー	高山洋吉	栗田書店	1941.9	新世界観輯系、3巻
我が闘争	ヒットラー	室伏高信	第一書房	1940	戦時体制版
国家構造論	尾高朝雄		岩波書店	1936.12	京城帝國大学法学会叢刊、3巻
国家論	作田莊一		弘文堂書房	1940	論叢集、1巻
国家權威の研究	大串兎代夫		高陽書院	1941	
国家法人説の崩壊：天皇主權説	佐治謙讓		日本評論社	1935.12	
日本学としての日本国家学	佐治謙讓		第一書房	1938.9	

憲法政治の理論と実際	馬場鏐一		清水書店	1925.11	公民叢書、第1編
新体制の理論：政治・経済・文化・東 亜の新原理	谷口吉彦		千倉書房	1940.11	
国家論	フランチ・オッペンハイ マー	広島定吉	改造社	1929.2	改造文庫、第1部 第20 篇
日本憲政史	尾佐竹猛		日本評論 社	1930.6	現代政治学全集、6巻
新体制の指導原理：我国家に基く現 代の革新	石川興二		有斐閣	1940.11	
現代人物評論	馬場恒吾		中央公論 社	1930.9	
経済学	孫田秀春責任編輯		実業之日 本社	1942.2-1944.1	日本国家科学大系、3巻
経済学	孫田秀春責任編輯		実業之日 本社	1942.2-1944.1	日本国家科学大系、3巻
法律学	孫田秀春責任編輯		実業之日 本社	1941.12- 1943.10.	日本国家科学大系、2巻
法律学	孫田秀春責任編輯		実業之日 本社	1941.12- 1943.10.	日本国家科学大系、2巻
議会政治論	馬場恒吾		中央公論 社	1933.3	
日本政党論	永井亨		日本評論 社	1927.12	
現代の政党	高橋清吾		日本評論 社	1930	現代政治学全集、10巻
有階級論	ソーンタイン・ウェブレ ン	大野信三	而立社	1924.5	社会科学大系、11巻
世界の変局と日本の世界政策	嶺山政道		巖松堂書 店	1938.9	
法律哲学原理	高柳賢三		岩波書店	1929.11	
法律哲学	高柳賢三		日本評論 社	1928.9	社会科学叢書、第5編
法学入門	末弘巖太郎		日本評論 社	1934.4	
日本憲法制定史講	渡辺幾治郎		千倉書房	1939.7	再版
逐条帝国憲法講義	清水滄		松華堂書 店	1932.8	
帝国憲法論：全	市村光憲		有斐閣	1924	訂正改版
民法総則	田島順		弘文堂書 房	1938.5	
経済の道	作田荘一		弘文堂書 房	1941.4	論説集、2巻
民族と経済	高田保馬		有斐閣	1940-1943	第1集
経済学研究の菜	東京商科大学一橋新 聞部編		三省堂	1940.6	改訂版
経済学一般理論	中山伊知郎		日本評論 社	1939	新経済学全集、1巻
西洋経済史	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1940	新経済学全集、10巻
産業経済学	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1940	新経済学全集、11巻
経済政策総論	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1940	新経済学全集、12巻
経済政策各論	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1940	新経済学全集、13巻
経済政策各論	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1940	新経済学全集、14巻
経営学及会計学	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1941	新経済学全集、17巻
経営学及会計学	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1941	新経済学全集、18巻
銀行及金融論	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1941	新経済学全集、19巻
経済学特殊理論	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1939	新経済学全集、2巻
貨幣論	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1940	新経済学全集、20巻
経済学特殊理論	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1939	新経済学全集、3巻
経済思潮史概論	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1940	新経済学全集、4巻
経済学発達史	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1940	新経済学全集、5巻
経済学発達史	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1940	新経済学全集、6巻
現代経済学説	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1940	新経済学全集、8巻
日本経済史	中山伊知郎、東畑精 一共編		日本評論 社	1940	新経済学全集、9巻



世界恐慌と国際政治の危機	有沢廣巳、阿部勇共		改造社	1931	経済学全集、別巻
資本論体系	向坂逸郎		改造社	1931	経済学全集、12巻上巻
恐慌学説	谷口吉彦		改造社	1932	経済学全集、14巻
経済学大綱	河上肇		改造社	1928	経済学全集、1巻
経済学前史	高橋誠一郎		改造社	1929	経済学全集、23巻
経済学説の発展	マルクス / 河西太一郎		改造社	1929	経済学全集、26巻
経済学説の発展	マルクス / 河西太一郎		改造社	1929	経済学全集、27巻
日本社会経済史	本庄栄治郎		改造社	1928.12	経済学全集、30巻
日本経済史	高橋亀吉		改造社	1930	経済学全集、31巻
唯物史観経済史	山川均		改造社	1929	経済学全集、32巻
産業革命史	上田貞次郎		改造社	1930	経済学全集、39巻
現代日本経済の研究	河津蓮		改造社	1929.9-1930.5	経済学全集、41巻
現代日本経済の研究	河津蓮		改造社	1929.9-1930.5	経済学全集、42巻
経済学の基礎理論	高田保馬、高垣寅次郎、中山伊知郎		改造社	1932	経済学全集、5巻
経済学特殊理論	内池廉吉		改造社	1929	経済学全集、6巻
マルクス主義経済学の基礎理論	河上肇		改造社	1929	経済学全集、8巻
経済哲学	二本保幾、杉村広蔵		改造社	1933	経済学全集、9巻
経済社会学の根本問題：経済社会学者としてのスミスとリスト	高島善哉		日本評論社	1941	
理論経済学の基本問題：経済発展の過程と弾力性概念	杉本栄一		日本評論社	1939.6	
経済原論：資本主義の構造並に運動の理論	田辺忠男		明善社	1935	1巻
経済原論	山崎寛次郎		有斐閣	1938.3	全訂改版、改訂8版
純粋経済学	中山伊知郎著		岩波書店	1933.12	岩波全書、7
国民経済学原理	メンガー	安井琢磨	日本評論社	1937	
総説・生産の理論	高田保馬		岩波書店	1929.11	経済学新講、1巻
生産・流通の機構	波多野鼎		日本評論社	1943.8	経済講話、2巻
金融・投資	波多野鼎		日本評論社	1942.8	経済講話、第3巻
価値及価格論		高島素之、安倍浩	而立社	1924.6-1924.8	経済学説体系、1、上巻
価値及価格論		高島素之、安倍浩	而立社	1924.6-1924.8	経済学説体系、1、下巻
貢銀論		高島素之、安倍浩	而立社	1923.6	経済学説体系、2
経済哲学	戸田武雄		三笠書房	1941-1942	世界大思想全集
理論経済学認識論	楠井隆三		有斐閣	1939.9	
現代経済学の危機	オットマール・シュパン	戸田武雄	三笠書房	1940.1	現代思想新書、10巻
経済法則の論理的性質	左右田喜一郎	勝本鼎一	岩波書店	1923.4	
経済と道徳	田島錦治		有斐閣	1927.4	7版
経済学の領域及方法	ケーンズ	浜田恒一	春秋社	1937.4	春秋文庫、第三部 98巻
経済学方法史	杉村廣蔵		理想社	1938.6	
経済の数理：経済静態の数学理論	中山伊知郎、久武雅夫		考へ方研究社	1941	改訂新版
経済学研究のための基礎数学	寺尾琢磨		慶応出版社	1939.6	
経済統計学	寺尾琢磨		ダイヤモンド社	1940	入門経済学、4巻
数理経済学研究	中山伊知郎		日本評論社	1937.11	
経済学に応用された数学	ザワズキー	寺尾琢磨	日本評論社	1942.4	数理経済学叢書
経済思想史隨筆	高橋誠一郎		理想社	1940.6	
経済学史	田沼征		ダイヤモンド社	1940	入門経済学、2巻
経済学史	高橋誠一郎		日本評論社	1929.9	現代経済学全集、7巻
近世の経済思想	本庄栄治郎		日本評論社	1931.10-1938.12	近世日本の研究、正編
日本経済学への道	土方成美		日本評論社	1938.11	
明治初期社会経済思想史	加田哲二		岩波書店	1937.6	
徳川時代の社会経済思想概論	野村兼太郎		日本評論社	1934.1	新経済全集、31巻
経済学説史	シャルル・ジイド、シャルル・リスト	富川貞一郎	東京堂	1940	上巻 9版
経済学説史	シャルル・ジイド、シャルル・リスト	富川貞一郎	東京堂	1940	下巻 7版
経済学史概要	舞出長五郎		岩波書店	1937.11	上巻

精神科学的経済学の基礎問題：国 民主義経済学の基本的研究	石川興二		弘文堂書 房	1934	改訂版
西洋経済学者の話	加田哲二		廣成書房	1942	
独逸経済学の道	E.ウイスケマン、H. リュッケ編	金子弘	日本評論 社	1943.5	
米国経済学の史的発展	古屋美貞		内外出版 印刷	1932.6	
富	エドウィン・キャナン	伊藤眞雄	弘文堂書 房	1935.9	9版
スミス経済学の生成と発展	大道安次郎		日本評論 社	1940.11	
An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations	Adam Smith	Edwin Cannan /Max Lerner	The Modern library		The modern library of the world's best books
リカードゥ研究	チェイコフ・エイチ・ホ ランダー	山下英夫	有斐閣	1941.3	経済学名著翻訳叢書、9 巻
Principles of political economy : with some of their applications to social philosophy	John Stuart Mill	Sir W.J. Aslev	Longmans 、 Green	1929	
経済学原理	ジョン・スチュアート・ ミル	戸田正雄	春秋社	1939.1-1939.5	1巻
経済学原理	ジョン・スチュアート・ ミル	戸田正雄	春秋社	1939.1-1939.5	2巻
経済学原理	ジョン・スチュアート・ ミル	戸田正雄	春秋社	1939.1-1939.5	3巻
経済学原理	ジョン・スチュアート・ ミル	戸田正雄	春秋社	1939.1-1939.5	4巻
経済学原理	ジョン・スチュアート・ ミル	戸田正雄	春秋社	1939.1-1939.5	4巻
政治経済学新原理	シスモンチ	山口茂、菅 間正朔	廣成書房	1942.1	
李氏経済論 全	フレデリック・リスト	富田鐵之助校 閲、大島貞 益訳	渡辺書店	1889	
三つの経済学：経済学の歴史と体系	ヴェルナー・ゾムバル ト	小島昌太郎	雄風館書 房	1933.5	
政治経済学の方法	板垣与一		日本評論 社	1942.2	
国民経済学研究	白杉庄一郎		弘文堂書 房	1939	
計画経済の神話	ゴットル	金子弘、利根 川東洋	理想社	1942	
封鎖商業国家論	フィヒテ	出口勇蔵	弘文堂書 房	1938.8	
経済と社会	福井孝治		日本評論 社	1939.9	
生としての経済	福井孝治		甲文堂書 店	1936.5	最近経済問題叢書
民族・国家・経済・法律	フリードリッヒ・フォン・ ゴットル=オットリエン フェルト	金子弘	白揚社	1942	増補訂正版
国民経済学体系	フリードリッヒ・リスト	谷口吉彦、正 木一夫	改造社	1940.9-12	改造文庫、上巻
国民経済学体系	フリードリッヒ・リスト	谷口吉彦、正 木一夫	改造社	1940.9-12	改造文庫、下巻
ドイツ人の政治的経済的国民統一： 政治経済学上の遺書	フリードリッヒ・リスト	正木一夫	改造社	1941.5	改造文庫、第1部 第196 篇
マルクス資本論解説	カール・カウツキー	高島素之	大鐘閣	1920	
マルクス経済学	高島素之		日本評論 社	1929.8	現代経済学全集、4巻
マルクス経済学	高島素之		日本評論 社	1929.8	現代経済学全集、4巻
マルクス主義批判	思想問題研究会編		社会教育 会	1931.2	
経済学批判の方法論	福本和夫		白揚社	1926	
資本蓄積再論：垂流はマルクス説か ら何を作り出したか	ローザ・ルクセンブル グ	宗道太	同人社	1928.4	普及版、社会問題叢書
マルクス=エンゲルス全集	マルクス/エンゲルス		改造社	1928-1935	12巻
資本論	カール・マルクス	河上肇、宮川 実	改造社	1931.5	
第二貧乏物語	河上肇		改造社	1930.11	
労働価値説の擁護	ヒルファディング	塚本三吉	改造社	1930.1	改造文庫、第1部 第65 篇
資本論	カール・マルクス	高島素之	改造社	1927.10- 1928.4	第1巻第1冊
資本論	カール・マルクス	高島素之	改造社	1927.10- 1928.4	第1巻第2冊
資本論	カール・マルクス	高島素之	改造社	1927.10- 1928.4	第2巻

資本論	カール・マルクス	高畠素之	改造社	1927.10- 1928.4	第3巻上
資本論	カール・マルクス	高畠素之	改造社	1927.10- 1928.4	第3巻下
均衡理論と資本理論	中山伊知郎		岩波書店	1938.9	
経済学原論	W.S.ジェボンス	小田勇二	有斐閣	1922.2	
本邦貨幣制度改正論	ア.アモン	楠井隆三	日本評論社	1932	現代経済学全集、27巻
経済発展の理論：企業者利潤・資本・信用・利子及び景気の回転に関する一研究	シュムペーター	中山伊知郎、東畑精一	岩波書店	1938.7	2刷
理論経済学の本質と主要内容	シュムペーター	木村健康、安井琢麿	日本評論社	1936.2	
Value and capital: an inquiry into some fundamental principles of economic theory	J.R. Hicks		実業之日 本社	1942	
Principles of economics	Alfred Marshall		Macmillan	1898	1巻
雇用・利子及び貨幣の一般理論	ケインズ	鹽野谷九十九	洋経済新報社	1941	
経済学原理	マーシャル	大塚金之助	改造社	1928	第1分冊
経済学原理	マーシャル	大塚金之助	改造社	1928	第2分冊
経済学原理	マーシャル	大塚金之助	改造社	1928	第3分冊
経済学原理	マーシャル	大塚金之助	改造社	1928	第4分冊
経済学入門	マーシャル	戸田正雄	日本評論社、 新書	1941	
経済学原理	マーシャル	大塚金之助	改造社	1925.4- 1926.11	4巻
マーシャル経済学選集	マーシャル	杉本栄一	日本評論社	1940.10	経済学名著選集、第1輯
厚生経済学	中山伊知郎		甲文堂書店	1941.8	増訂3版
発展過程の均衡分析：発展を含む経済均衡の性質に関する一研究	中山伊知郎		岩波書店	1939	
産業貿易論	アルフレッド・マーシャル	佐原貞臣	東京堂文館	1923.3	
経済学説と政治的要素	ミュルダール	山田雄三	日本評論社	1942	経済学名著選集、第3輯
Lectures on political economy	Knut Wicksell	E. Classen/ Lionel Robbins	Jitsugyo no Nippon Sha	1942	vol. 1
Lectures on political economy	Knut Wicksell	E. Classen/ Lionel Robbins	Jitsugyo no Nippon Sha	1942	vol. 2
勢力説論集	高田保馬		日本評論社	1941.12	理論経済学叢書、16巻
流通経済の貨幣的機構：正統派経済学を中心とする一般物価水準の理論的研究	山口茂		巖松堂書店	1940.11	第三版、改訂版
マルクス価値説の終焉	パウエルク	神永文三	新潮社	1927.11	マルクス思想叢書、12巻
労働価値説の吟味	高田保馬		日本評論社	1931	理論経済学叢書、第1編
マルクス価値論の排撃	土方成美		日本評論社	1927.8	
価格の一般理論	栗村雄吉		日本評論社	1941	理論経済学叢書、13篇
価格と独占	高田保馬		千倉書房	1929.3	経済学研究、2巻
価格の理論	岸本誠二郎		日本評論社	1940.4	
独占価格の理論	栗村雄吉		日本評論社	1939	理論経済学叢書、10篇
分配論	キャナン	渡辺一郎	聚芳閣	1926.10	
新利子論研究	高田保馬		岩波書店	1940.7	
フィッシャー利子論	フィッシャー	氣賀勳重、氣賀健二	岩波書店	1935.10	
利子学説史	高木暢哉		日本評論社	1942.10	
経済原論	小泉信三		日本評論社	1937.2	
第二経済学概論	高田保馬		日本評論社	1941.11	理論経済学叢書、15巻
第二経済学概論解説	高田保馬		出版社不明	1942	
経済学概論	高田保馬		日本評論社	1938.4	理論経済学叢書、8篇
経済原論	高田保馬		日本評論社	1933	理論経済学叢書、3編
経済学総論	土方成美		日本評論社	1928.9	現代経済学全集、1巻

経済学入門	波多野鼎		日本評論社	1940.2	
経済学入門	波多野鼎		日本評論社	1937.11	改訂
経済講話	波多野鼎		日本評論社	1938.5	
経済講話	波多野鼎		日本評論社	1938.5	
新経済学原論	北沢新次郎		同文書院	1940.10	
生活経済学研究	宮田喜代蔵		日本評論社	1938	
国民経済学講義	クヌート・ウィックセル	堀経夫、三谷友吉	高陽書院	1938.6-1939.3	理論の部、1巻
国民経済学講義	クヌート・ウィックセル	堀経夫、三谷友吉	高陽書院	1938.6-1939.3	理論の部、2巻
国家と経済	難波田春夫		日本評論社	1938.11	国家と経済、1巻
古典に於ける国家と経済	難波田春夫		日本評論社	1938.7	国家と経済、第2巻
我が国の古典に於ける国家と経済	難波田春夫		日本評論社	1939.9	国家と経済、3巻
現代日本経済の基礎構造	難波田春夫		日本評論社	1941.9	国家と経済、4巻
経済科学の構造	柏祐賢		弘文堂書房	1943.1	
経済本質論	大熊信行		日本評論社	1941.9	配分原理、1巻
経済学原論	シャルル・ジイド	飯島暢司	東京宝文館	1923.5	修正6版
経済と勢力	高田保馬		日本評論社	1936.11	理論経済学叢書、4巻
経済学の展望	戸田武雄		国際書房	1942.12	
人倫と経済	島芳夫		弘文堂書房	1942.12	
経済原論	アーヴィング・フィッシャー	喜多村利雄	大同書院	1934.3	
政治経済学の問題：生活原理と経済原理	大熊信行		日本評論社	1940	
自然経済と意志経済：経済学の根本問題	作田荘一		弘文堂	1931.1	改訂版
経済生活の本質及現象形態	丸谷喜市		宝文館	1935.4	神戸商業大学商業研究所論集、第4冊
Wealth: a brief explanation of the causes of economic welf			S. King	1928	3版
理論経済学	柴田敬		弘文堂書房	1935.8-1936.3	上巻
理論経済学	柴田敬		弘文堂書房	1935.8-1936.3	下巻
自然民族及び半開民族の経済	ハインリヒ・クノー	藤沢保太郎	育生社弘道閣	1941.9	世界経済史大系、1巻
インド・アリアン人旧イタリー人ケルト人及びゲルマン人の経済形体	ハインリヒ・クノー	藤沢保太郎	育生社弘道閣	1941.10	世界経済史大系、2巻
十二世紀より十七世紀に至る間に於けるドイツフランス及びイギリスの経済発展	ハインリヒ・クノー	藤沢保太郎	育生社弘道閣	1941.11	世界経済史大系、3巻
ドイツフランスイギリス及びアメリカ合衆国に於ける資本主義的経済の発達	ハインリヒ・クノー	藤沢保太郎	育生社弘道閣	1941.12	世界経済史大系、4巻
経済史概論	本庄栄治郎		有斐閣	1940.3	改訂版、日本経済史研究所研究叢書、4冊
経済史研究	本位田祥男		三省堂	1935.6	
原始財産	エミール・ド・ラウレー	長野兼一郎	改造社	1931.11	改造文庫、第1部 78篇
財産起源論	レヴィンスキー	貴島克己	改造社	1929.2	改造文庫、第1部 第38篇
財産起源論	レヴィンスキー	貴島克己	改造社	1929.2	改造文庫、第1部 第38篇
資本主義の精髓：全	大日本文明協会編輯		大日本文明協会	1917.1	
資本主義末期の研究	高橋竜吉		改造社	1927.3	
近代資本主義発達史論	ホブソン	住谷悦治、阪本勝、松沢兼人	改造社	1932	改造文庫、上巻
近代資本主義発達史論	ホブソン	住谷悦治、阪本勝、松沢兼人	改造社	1932	改造文庫、下巻
近世資本主義の起源	ルヨ・プレンターノ	田中善治郎	有斐閣	1941.8	
近世資本主義	ゾンバルト	岡崎次郎	生活社	1942.11	第1巻第1冊
高度資本主義	ウェルナー・ゾンバルト	梶山力	有斐閣	1940.12	

資本主義類庫の諸相	高橋亀吉		千倉書房	1929.5	
日本経済文化史	堀江保蔵		日本評論社	1941	経済全書、5巻
日本経済文化史	堀江保蔵		日本評論社	1941	経済全書、5巻
日本経済史概説	中村吉治		日本評論社	1941.12	
我国の戦時経済	波多野鼎		日本評論社	1937.10	
日本経済の諸問題	難波田春夫		朝倉書房	1941.3	
日本資本主義発生史	森喜一		叢文閣	1935.8	
日本資本主義の成立	堀江保蔵		大同書院	1938.8	経済特殊研究叢書、第3編
日本資本主義発達史	高橋亀吉		日本評論社	1928.8	
日本資本主義発達史	ゲ・サファロフ	平館利雄	叢文閣	1935.3	
維新以後の社会経済思想概論	加田哲二		日本評論社	1934.11	新経済全集、32巻
解体過程にある支那の経済と社会：アジア的な大農業社会に対する科学的分析の企图特にその生産諸力・生産・流通過程	ウイットフォーゲル	平野義太郎	中央公論社	1940	7版、上巻
解体過程にある支那の経済と社会：アジア的な大農業社会に対する科学的分析の企图特にその生産諸力・生産・流通過程	ウイットフォーゲル	平野義太郎	中央公論社	1940	7版、下巻
東洋的社会の理論	ウイットフォーゲル	森谷克巳、平野義太郎	日本評論社	1939.6	
欧州経済史	本位田祥男		日本評論社	1930.4	現代経済学全集、5巻
英国経済史要	本位田祥男		日本評論社	1938.6	改訂第1版
近代独逸経済史：1870年-1940年	グスターフ・シュトルパー	大住龍太郎	紀元社	1941.7	世界経済選書、1巻
アメリカ経済史概説	堀江保蔵		有斐閣	1937	日本経済史研究所研究叢書、8冊
The economic history of the United States	Ernest Ludlow Bogart		Longmans、Green	1915	3rd ed. Longmans' commercial text-books、edited by George Mygatt Fisk、Edward D. Jones
アメリカ経済史	E・L・ボカート	細野武男	生活社	1941.12	
経済地理学原論	黒正巖		日本評論社	1941.7	
新経済体制研究	高橋亀吉		千倉書房	1940	
経済史	野村兼太郎		ダイヤモンド社	1940.9	入門経済学、3巻
国民経済の成立	カール・ビュヒアー	權田保之助	栗田書店	1942	増補改訂
国民経済史	ロバート・ウィルブラント	菅野和太郎、四宮義二	内外出版印刷	1928.2	
計画の経済理論：序説	山田雄三		岩波書店	1942.10	
計画経済の根本問題：経済計算の可能性に関する吟味	山本勝市		理想社出版部	1939.3	
計画経済の原理	G.H.コール	八木沢善次、本田悦郎	育生社	1940.8	
法と統制経済	峯村光郎		東洋書館	1940.9	
統制経済講話	波多野鼎		日本評論社	1939.10	
統制経済講話	波多野鼎		日本評論社	1941.6	新版
国防経済総論	赤松要、中山伊知郎、大熊信行		巖松堂	1942	国防経済学大系
戦争経済の理論	中山伊知郎		日本評論社	1941.10	
戦争経済の潮流	永田清		日本評論社	1940	
新体制下の経済	本位田祥男		日本評論社	1940.11	
新体制の経済	高木友三郎		第一書房	1940.9	戦時体制版
戦力増強の理論	難波田春夫		有斐閣	1943.4	
植民政策	加田哲二		ダイヤモンド社	1940.2	入門経済学、12巻
日本会社企業発生史の研究	菅野和太郎		岩波書店	1931.7	
日本中小産業の機構	森喜一		白揚社	1940.4	
企業集中論	高宮晋		有斐閣	1942.4	
日本財閥論	高橋亀吉、青山二郎		春秋社	1938.3	日本コンツェルン全書、1巻
三井コンツェルン読本	和田日出吉		春秋社	1937.2	日本コンツェルン全書、2巻

三菱コンツェルン読本	岩井良太郎		春秋社	1937.4	日本コンツェルン全書、3巻
住友コンツェルン読本	西野喜与作		春秋社	1937.11	日本コンツェルン全書、4巻
会計学	長谷川安兵衛		ダイヤモンド社	1940.11	入門経済学、16巻
貨幣信用学説史	シャルル・リスト	天沼紳一郎	実業之日本社	1943.5	
貨幣と利子の動態：貨幣経済の性格	鬼頭仁三郎		岩波書店	1942.8	
貨幣銀行問題一斑	山崎寛次郎		有斐閣	1940.3	第五版
貨幣価値の研究	傍島省三		日本評論社	1943.3	理論経済学叢書、第17編
ジムメル・貨幣の哲学	Georg Simmel	傍島省三	日本評論社	1940	理論経済学叢書、第12篇
貨幣信用及商業	アルフレッド・マーシャル	松本金次郎	自彙館書店	1927.3	
外国為替論	谷口吉彦		千倉書房	1937.7	
世界再建と物価・景気	高木友三郎		ダイヤモンド社	1941	入門経済学、14巻
景気変動論	高田保馬		日本評論社	1928.11	現代経済学全集、13巻
資本主義と景気循環	桑原晋		日本評論社	1937.9	理論経済学叢書、第6編
景気学説批判	波多野鼎		日本評論社	1937.3	
金融講話	波多野鼎		ダイヤモンド社	1941.3	入門経済学、13巻
財政学	永田清		ダイヤモンド社	1940.9	入門経済学、5巻
財政学原理	土方成美		東洋出版社	1935.6	基礎経済学全集、3巻
財政学入門	井藤半彌		日本評論社	1937.11	
日本税制改革史	勝正善		千倉書房	1938.2	
統計利用に於ける基本問題	藤川虎三		岩波書店	1932.12	
社会存在論	務台理作		弘文堂書房	1939	教養文庫、11巻
The theory of the leisure class : an economic study of institutions	Thorstein Veblen		George Allen & Unwin	1924	
階級及第三史観	高田保馬		改造社	1925.6	
社会学概論	高田保馬		岩波書店	1922.12	改訂版
日本原始社会史	渡部義通		自揚社	1934.9	
日本社会政策史	風早八十二		日本評論社	1937	
社会政策の基本問題	大河内一男		日本評論社	1940.7	
労働問題と労働政策	ゾムハルト	鈴木豊韻	有斐閣	1919.4	
女工哀史	細井和喜蔵		改造社	1929	改造文庫、第1部 第30篇
産業と人間：労働科学の回顧と展望	陣岐義等		理想社	1940	
産業心理学	高垣寅次郎、金子弘		千倉書房	1932.4	商学全集、34巻
国民と教養	木村素衛		弘文堂書房	1939.7	教養文庫、21巻
学生に与ふ	河合栄治郎		日本評論社	1940.6	
学生と読書	河合栄治郎		日本評論社	1938	
ドイツの政治的教育	篠原陽二		弘文堂書房	1940	教養文庫、45巻
学生と科学	河合栄治郎		日本評論社	1939.12	
技術と社会	馬場敬治		日本評論社	1936.12	
日本機械工業の基礎構造	豊崎稔		日本評論社	1941.4	大阪商科大学同経済研究所日本工業調査叢書、15巻
日本農業概論	東浦庄治		岩波書店	1933.12	岩波全書、8巻
ソヴェートロシアに於ける農業政策	ミリュエーション	田中勝太郎	改造社	1932.9	改造文庫、第1部 第103篇
国家生活と農業	大槻正男		岩波書店	1939.11	
米と蘭の経済構造	山田勝次郎		岩波書店	1942	
米	東畑精一		中央公論社	1940.1	
日本農業の基礎構造	栗原百壽		中央公論社	1943.1	
日本農業の展開過程	東畑精一		岩波書店	1936.6	増訂版
近世初期農政史研究	中村吉治		岩波書店	1938.10	

商学研究の葉	東京商科大学一橋新聞部編		日本評論社	1942.8	
日本近世商業資本発達史論	遠藤正男		日本評論社	1936.4	
日本中小商業の構造	竹林庄太郎		有斐閣	1941.10	調査彙報、第17輯
日本商業史	菅野和太郎		日本評論社	1930.8	
貿易政策	岩田 伝		ダイヤモンド	1940	入門経済学、11巻
国防貿易論	油本豊吉、上坂西三、平野常治		巖松堂書店	1942	国防経済学大系

### 第三部 学徒兵という読者の変容

#### 第七章 「遺稿集文化」を描く―太宰治「散華」論―

はじめに

第一部や第二部では、戦場という〈読書空間〉を明らかにするなかで、戦場における複数の読書イメージをとらえることとなった。第三部からは、戦場における読者、とくに「学徒兵という読者」による戦場での読書行為のイメージが、社会的・文化的に受容されていくなかで、戦場が読書の禁じられた空間へと変容し、戦場での読書行為の複数のイメージが、反戦的態度として一面的にとらえられていくことについて考察していく。

本章では、太宰治「散華」から学徒兵の読書行為の一面化に影響を及ぼしてきた大きな要因である遺稿集という出版文化が持っている構造について考えていく。太宰治「散華」が、青年層向け雑誌『新若人』に掲載されたのは、一九四四年三月のアジア・太平洋戦争末期のことである。その後「散華」は、すぐに作品集『佳日』（肇書房、一九四四年八月）にまとめられるが、一九五五年の『太宰治全集第九巻 右大臣実朝』（近代文庫）まで再録されることはない。『佳日』収録作が再刊された際にも、「散華」のみ除く形で、『太宰治創作集 黄村先生言行録』（日本出版、一九四七年）として刊行されている。こうして、層の厚い太宰治研究においても「散華」は、比較的言及の少ない作品となってきた。

また先行研究では、戦争に対する太宰の抵抗／協力という二項対立によって語られ、多くが太宰の戦争に対する抵抗の痕跡を明らかにしてきた。その点で、若松伸哉が「近代(史)のなかの太宰治 戦時下における〈個〉の領域―太宰治「散華」論」において、二元論評価では取りこぼしてしまう問題に光を当てる視点を導入した成果は大きい。若松論文は、太宰の抵抗／協力という問題の評価については保留とし、慎重な姿勢を示したうえで、時代の「ロマンティズム」「青年」「アツツ島玉砕」などの表象に注目することによって、国家の理念的な死ではなく、〈個人〉の死を描きだしている点に、戦時下の太宰の表現行為の独自性を指摘している。だが、「散華」に描かれた「青年」は読むことや書くことを重視する「青年」であり、単なる当時の「青年」像としてはとらえきれないものではないだろうか。

そこで問題としたいのは、「散華」に登場する青年たちの書く行為についてである。太宰は多くのメタフィクションを書いているが、「散華」もまたメタフィクションとなっており、書いたり読んだりすることに意識的な作品である。そこで本章では、太宰治「散華」において描かれてきた文学を志す青年たちの様子を分析することになる。



まずは、「散華」における書く青年を分析したうえで、掲載誌である『新若人』の投稿欄や読書関係記事を分析することによって、「散華」の読者層である青年たちの執筆環境の変化を明らかにする。それはこのテキストが、アジア・太平洋戦争期における遺稿集の刊行をめぐる構造変化を描き出したパロディとなっているからである。戦時下に書くということや遺稿集を編むという行為のはらむ問題を、「散華」から浮かび上がらせていきたい。

### 第一節 「散華」における書く青年

「散華」には、三井君と三田君、戸石君という三者三様の書く青年が登場し、そのうち三井君と三田君の二人の青年の死が描かれる。そして「太宰」と呼ばれる「私」という語り手は、病死した三井君と戦死した三田君の死を「散華」として語りだす。本節では、まず三井君の死の描写から、小説の巧拙に拘ってしまいう「私」の視点を確認していき、三井君と三田君の書いた作品に対する「私」の評価を明らかにしていきたい。

三井君は、「私」に教えを乞う小説を書く青年として「散華」に登場する。彼が持ち込む小説は、「ところどころ澄んで美しかった」が、「背骨を忘れてゐる」と「私」は指摘し、褒めることはない。その上、彼は肺を悪くしていて、まずは病気を治してから、小説を書くべきだと、友人づてに「私」から忠告され、「私」のもとへ通うことを辞めてしまう。だが、病気を治す間もなく、三、四ヶ月後に、三井君は結核で亡くなる。

そして三井君の死は、桜の花や薔薇の花が「おのづから散る」という「散華」の描写に重ね合わされ、さらに「天地の溜息」や「空を飛ぶ神の白絹の御衣」といった荘厳な比喩とともに、「神」の「寵児」であったことが偲ばれ、「人間の最高の栄冠」である「美しい臨終」として描き出される。

こうした三井君の死の描写は、先行研究の争点のひとつとなってきた。三井君の「美しい臨終」というあり方は、木村小夜により、三田君のアツツ島での「玉砕」を称賛するための布石となっている点が批判されている<sup>20</sup>。その一方で、松本健一<sup>21</sup>、鳥居邦朗<sup>22</sup>、北川透<sup>23</sup>、権錫永<sup>24</sup>による各論文では、三井君の病死を三田君の戦死と等価なものとして描き出すことによつて、「玉砕」を相対化する視点が盛り込まれていることが指摘されている。

三井君の病死が重要視されてきたのは、「散華」の中心人物である三田君と似た名前を持ち、多くの共通点が周到にテキストに書き込まれているからである。また、三田君が三田循司という実際の人物をモデルとし、書き込まれたエピソードが、友人の戸石君こと戸石泰一によつて明らかにされていることも、架空の人物である三井君の死のあり方に意味を求める要因のひとつとなっているだろう。

三井君の死を「美しい臨終」として表現する死の場面の分析は数多く行われてきたが、

その次文で「小説の上手下手など、まるで問題にも何もなるものではないと思つた」と語られていることについては、これまであまり注意が払われては来なかつた。「私」は、生前の三井君の作品に、決して高い評価を行っているわけではないが、病死によって、そうした小説の巧拙は人物評価に影響を与えないということがわざわざ明記されている。だがこの表現は、死の描写の直後にも念を押さずにはいられないほど「小説の上手下手」に、どうしても拘ってしまう人物として「私」をとらえることになるだろう。

こうして小説の巧拙に拘る「私」が語る「散華」において、三井君、三田君、戸石君という三人の書く青年はどのように描かれているのだろうか。ここで注意しておきたいのは、作品に対する「私」の評価は、亡くなった青年にのみ向けられているという点である。

三井君、三田君、戸石君の三人は、文学を志し「私」に師事するという共通点を持つ。そして、戸石君は出征後も健在であるのに対し、あとの二人は病氣と戦争によって亡くなる。生者である戸石君には「美男子」で「陽気な」性格という好意的な言及のみで、作品や手紙に対する「私」の評価はない。一方で三井君と三田君は「私」の師弟関係を離れ、死ぬことによつて、自らが書きついできた作品が「私」に再読され、生前の記憶と共にその作品の評価が記されていく。

三井君の作品に対しては、その死に際して小説の巧拙に拘らないという言葉があることを確認して来た。では三田君の作品に対する「私」の評価はどのように描かれているのだろうか。

三田君は、小説ではなく詩を書く青年である。三田君が、「私」から離れて師事した山岸さんは、「私」の「先輩の篤実な文学者で」、「四、五人の学生の小説や詩の勉強を、誠意を以て指導」し、その中から「立派な詩集を出し、世の達識の士の推頌を得てゐる若い詩人が已に二、三人ある」。一方で「私」は、「年少の友」とも年齢を「斟酌せずに交際」し、「手加減せずにかと不満を言つ」ている人物とされ、「私」と山岸さんとは、指導者の資質という点で対立的に描かれている。

そして、両者の三田君の作品に対する評価もまた対立的である。「私」が山岸さんに三田君の作品の評価を問うと、山岸さんは「いちばんいいかも知れない」と答えるが、「私」には理解ができず、三田君の作品に対する評価は食い違っている。さらに、戸石君が「三田さんの詩は傑作」だと述べていても、「私」は次のような評価を下す。

私には、それほどの傑作とも思へなかつた。決して下品な詩ではなかつた。いやしい句ひは、少しも無かつた。けれども私には、不満だつた。

私は、ほめなかつた。

しかし、私には、詩というものがわからないのかも知れない。

このように三田君の作品に対して、戸石君も山岸さんも「傑作」と認めるのに対し、「私」は決して同意することはない。こうしてテキスト内において「私」は唯一三田君の詩の価値を理解することができない人物として描き出されていく。さらに「私」は、自らの文学的な価値観を信用し、周囲の評価との不一致に対して、反抗的な思いを抱いているのである。

本節では、「散華」という作品が、「私」に師事する青年たちと、彼らが書いたものに対する「私」からの評価を描いた作品だという点を確認してきた。とくに、書く青年であり夭折する青年として、三田君と三井君は「私」によって対比的にその評価が描かれていた。そうした対比の描かれる背景を、まず次節では「散華」が掲載された『新若人』における戦時下の読むこと／書くことの変化に着目し、分析していく。

## 第二節 『新若人』における読み／書きの推奨

これまで第一部第三章では、兵士の投稿文に、火野葦平を読み、真似をした作品がみられることなど、雑誌における読み／書く兵士の問題を取り上げてきたように、読むことはそれだけで完結するものではなく、読んだことから受けた影響が書くことにもつながっていく連環関係を持つテキストでもある。書く青年たちが登場する「散華」は、読み／書く青年や兵士を背景に持つテキストでもある。そこで本節では、「散華」掲載誌である『新若人』において学生の読むこと／書くことがどのように変容していったのかについての考察を行うことで、「散華」にその変容が書き込まれていることを明らかにしていく。

先行研究では、李顯周「太宰治の「散華」論——三つの「死」の意味」に、『新若人』への詳しい言及があるが『新若人』を国策プロパガンダ雑誌として論じている点に問題が残る。『新若人』は確かに青少年に対する国策教育を目的としているが、太宰作品のみを異なる位相として取り上げるのではなく、誌面にも同様な分析を加えたうえで検討する必要があるだろう。

『新若人』は単なる国策プロパガンダというよりも、青年が戦時下にいかに書き、いかに読むことが求められていたのかを考察するのに適した雑誌である。先行研究では言論統制の牽引者として知られる陸軍情報局情報官鈴木庫三により青年層向けメディアとして企画された経緯が明らかにされている。また一九四〇年九月の創刊以来、月刊、菊判、五〇銭で、編集者池田次馬のもとに刊行され、一九四四年五月号（六巻五号）までを確認している。現在も教育出版社として営業をつづけている、発行元の欧文社（一九四二年から

旺文社へ変更)は、一九三一年の創業以降、「第二の国家を担当すべき学生、青年層の助成と啓蒙的な仕事をやる事」<sup>10)</sup>を目的とし、通信教育や受験雑誌、辞書、学習参考書の販売に力を入れ、『受験旬報』(一九四一年に『蛍雪時代』と解題)への執筆依頼が、創業者赤尾好夫と鈴木庫三の出会いのきっかけとなった。

『新若人』刊行中の赤尾は「出版新体制と共に業界の表面へ躍出した第一人者」<sup>11)</sup>であり、その躍進に『新若人』が果たした役割は大きく、それは戦後旺文社が戦犯出版社として批判された原因でもある。こうして『新若人』は、学生向けの通信教育から出発し、受験雑誌刊行の編集技術を活かすことで、中等学生、高等学校、大学生を対象にし、「積極的に社会意識を持たせ、国家本来の目的に進ませる」<sup>12)</sup>雑誌と目されていた。

では、具体的に『新若人』における読書に関する記事から、どのような読書行為が読者に求められていたのか考察を行っていきたい。『新若人』における読書関係記事の内容の変遷には、戦時下の学生の読書行為に対する出版統制や時代状況の変化が映し出されている。読むことが学生の書くことや意識に影響を与えるという点で『新若人』において読書は重要なトピックである。創刊から一九四三年ころまでの誌面では、毎号読書に関する随筆や新刊紹介が行われ、統計を用いた読書指導も行われている。

たとえば創刊号には、宇野浩二「文芸三昧」、谷崎潤一郎「文章読本」や「藤村詩集」を挙げながら、読書を行わない学生を「不良学生」と批判する記事(織田正信「読書三昧」)が掲載され、「読者通信」(三号)には「かねど、私等中学生の読書を白眼視する輩に一矢を報いた様な気がしました」といった好意的な感想が寄せられる。巻頭グラビアにも「銀翼下に読書の秋を満喫する勇士」の写真が掲載され(一卷二号)、一卷五号(一九四一年一月一日)では、「学徒の読書態度」(小笠原道生)や木村毅「新若人の書架―新刊良書推薦―」、アンケート「学徒は如何なるものを読む可きか」<sup>13)</sup>が掲載され、読書特集号のような様相を呈している。

このアンケート調査は、学徒(読者)に向けた著名人からの回答をまとめたものである<sup>14)</sup>。大学や高専の教授など教育関係者が多く、回答者数は八七名にのぼる。回答傾向は、教科書を読み込むことが必要だとする考えが最も多く、次点は伝記である。ほとんどの回答者が具体的な書名ではなく日本や西洋、中国の古典と回答する傾向にある。個々の回答では、具体的な書名よりも、読書の方法や心構えなど、読書指導としての側面が強い。

こうした読書指導の傾向は、文部省や日本出版文化協会における推薦図書と連動していると言える。「図書館協会、茗溪会、近くは文部省、それから東京日々新聞で『良書推薦』」が行われていることに端を発し、同号から木村毅や新居格の新刊紹介記事が連載される。この新刊紹介は半年ほど継続したのち<sup>15)</sup>、「従来のもの」と行き方をかへ(二巻四号)部門

別の推薦に変更される。編輯後記でも「国家意識を離れた知識乃至教養はむしろ無きにかず」と述べられるように、その内容からも自由な書物の紹介が困難な状況がうかがえる<sup>30</sup>。

時局の影響が顕著に感じられるのは、二巻一二号（一九四二年三月）「戦時下学徒青年は何を読むべきか（座談会）」<sup>31</sup>である。日本出版文化協会関係者や文部省教学局教学官などを迎えた座談会では、抽象的な読書から具体的な読書への移行が求められ、系統的な読書によって日本に対する深い世界観を養うことが必要だと述べられる。また、この座談会でもアンケート結果と同様に、具体的な書名はほぼ示されず、読書への態度や心構えが重要視されている。

さらに、四巻五号「戦争と教育（座談会）」<sup>32</sup>でも、「纏まった書や原典」を読むことが少なく「五年前十年前とちつとも変らない」<sup>33</sup>読書傾向が指摘され、改善のために「系統的に、高等学校在学中に是非読まなければならん本」を提示していく読書指導の必要性が提案される。

そうした提案を受け、翌月から小沼洋夫による読書指針の連載が開始される<sup>34</sup>。この座談会以降、「文化主義的な教養の概念を吹き飛ばし、真に日本人的な近代の教養及び国を憂へ人を愛する教養人」となる読書が必要であり、日本主義的教養への転換が提唱される<sup>35</sup>。

四巻九号の「教養と読書」（阿部仁三）でも、新たな教養として、「国家の急とするところに就き、身をもつて国民たるものゝ生活のありやうを体得すること」を挙げ、教養の変容が求められる。ただし教養の変容は、戦時下において読書を継続して行うための理由付けでもあり、阿部は「教養に進んでこそわれわれは安んじてこの時局下に読書することもでき、また書籍を书架にもどして軍務にもつき生産の増強に従つて些かの矛盾を感じずにすむのである」と述べる。

このように、『新若人』では、読書の方法や意味を少しずつ変化させることで読書が勧められてきた。そこで理想とされたのは、新たな日本主義的教養としての読書行為であった。しかしながら四巻までは読書記事が継続的に掲載されるものの「散華」掲載の五巻三号（一九四四年三月）には読書を推奨する記事が減少しはじめていってしまう。

それでは日本主義的教養としての読書が推奨されてきた『新若人』において、文学作品を書くという行為はどのような変化を辿ってきたのだろうか。『新若人』には、小論文や短詩型文学、懸賞論文、懸賞小説などの投稿が募られる。なかでも創刊号から開始された懸賞小説を編集部は「才能ある方のための登竜門」と表明し、選者として第一回（二巻五号）を尾崎士郎、第二回（二巻一〇号）を木村毅、第三回〜第六回（三巻一号、三巻四号、四巻一号、四巻七号）を中河與一が担当している。

懸賞小説の内容は、比較的自由で「若い人達の生活を扱ったもの」と指定されている。

ただし注意点として当初は、作品は「社会性と云ふことも考慮する必要があ」るとされていたが、回が進むにつれ「自ら次の時代を担ふべき日本人としての高い自覚や、強い建設的な意欲が動いてゐなければいけない」とより具体的な時局認識が要求されていく。小説の投稿も、読書と同様に、徐々に社会や時局との関係のなかで書くということが求められていると言えよう。また第六回（四巻七号）を境に懸賞小説は終了しており、読書記事の減少と懸賞の減少が同時に進行していく。

そのほか懸賞論文の掲載は、懸賞小説より長く四巻一―一号まで、短詩型文学の投稿は「新若人文芸」として、五巻六号まで継続されている。終刊まで掲載されていたのは「若人の叫び」という読者意見の投稿欄のみである。読者意見を誌面に強く反映させたいとの意向から「若人の叫び」は継続されるものの、小説、論文、短詩型文芸は徐々に投稿が停止され掲載が止められていくのである。

このように、「散華」の掲載時期（五巻三号）は、『新若人』において当初は推奨されていたはずの読むということや書くということが、徐々に減少していく時期にあたっている。その状況下に、太宰は書く青年が登場する「散華」を執筆したのである。

また、「散華」に描かれた二人の青年が小説を書く三井君と詩を書く三田君とに分かれていることは、「散華」掲載時の『新若人』における投稿状況―懸賞小説が消滅し、短詩型文学の懸賞が継続されていた時期―と接続しているとも読める。小説を執筆する三井君は結核で亡くなり、詩を書く三田君は結核から快復するものの戦地にて夭折してしまうのだが、その順序は『新若人』において青年の書くことが困難となっていく内容の順序と符合しているのである。

### 第三節 結核から戦場へ

本節では、夭折した青年の理想的なイメージが結核から戦場へと移り変わっていった状況について論じていく。明治以降、文学青年といえれば結核病患者であるという共通認識が生じていたように、「散華」に登場する二人もまた文学青年としての宿痾を背負っている。結核で夭折する三井君と、結核を克服し戦地で夭折する三田君は、死後三田君のみ遺稿集の刊行が企画されている。なぜ、二人にはこのような差が書き込まれているのだろうか。まずは、結核で夭折した学生の遺稿集との関連を追い、次いで太宰「鷗」における兵士が書くということに関する言及を分析することで明らかにしていきたい。

近代日本における結核のイメージについて論じた福田真人『結核の文化史』は、肺病の作家や結核を描いた小説を分析することによって、明治以降の「創造的精神と病気の相関関係を想定したロマンティックな<sup>36</sup>」結核イメージの形成過程を明らかにしている。しか

し、ロマン的な結核表象に強く感化されていたと考えられる文学青年に対しては、あまり言及がなされていない。文学者と結核が結びつくためには、小説に描かれた結核イメージや作家のイメージとともに、それを目指す若人の間に流通したイメージを考察することも必要となるだろう。

そこで考えていきたいのが、夭折した学生の遺稿集の刊行という問題である。紅野敏郎は、『遺稿集連鎖―近代文学側面誌』<sup>135</sup>のなかで、阿倍能成や阿部次郎などと交流のあった宿南昌吉、井伏鱒二「鯉」の作中に登場する青木南人など、文学関係者と関係深い人物の遺稿集をまとめ、「著名、無名の差を越え、文学、美術、演劇をも同時に眺めわたすもうひとつの文学史、文学誌、文壇史のイメージが、かたちづくられる」と述べている。

そのなかでも、無名であるが重要な遺稿集として取り上げられているのが、塚本亨生という『文章世界』投稿者の遺稿集『亨生全集』<sup>136</sup>である。塚本は、一八九四年に生まれ、一九一七年に二四歳の若さで結核で亡くなる。『文章世界』では、懸賞小説第一等に当選し、「投稿や懸賞小説によって、同時代の代表的な作家と肩を並べ、地方青年の志の一端を中央の文壇に提出し得た力は、十分に認められて然るべき存在だった」と評価されている。

紅野が指摘するように塚本の作品を「文学史上の名作が生れたと明白に断定することは無理かも知れぬ」が、むしろ塚本亨生の遺稿集の評価は、内容ではなく結核で夭折した無名の青年の書き遺した作品が遺稿集として刊行される環境が、大正時代に形成されていた点にみるべきだろう。結核の学生の遺稿が追悼のために出版されるということ、それこそがロマンティックな結核イメージが具体的な書物として形象化される地点であったと言える。

塚本亨生につづくものとして、『渡辺春夫遺稿』<sup>137</sup>（一九三二年）や『白舟遺稿』<sup>138</sup>（一九三五年）また『水野仙子集』<sup>139</sup>（一九二〇年）のように、結核患者の遺稿集が刊行されていることが確認できる。こうした遺稿集は、追悼を主な目的としていることから、非売品であることが多く、流通に乗らず、発行部数も少ないため、全体的な傾向を掴むことは難しい。だが、少なくとも無名の夭折した文学青年の遺稿が死後まとめられるという環境があったのは確かである。

そのなかでも『白舟遺稿』の執筆者曾我進が興味深いのは、彼が「病むまではかつてそんな傾向（創作活動―引用者注）も素養ももたなかった」と回想されている点である。一九一三年に松山に生まれた白舟こと曾我進は、松山中学校時代から競艇選手として活躍、松山高等学校文化乙類に入学後も、競艇をつづけ、一九三二年には京帝大主宰の全国高等学校の競艇大会で優勝するほどの強さを誇っていた。しかし、そのころから身体に変調を来し、一九三五年に肋膜炎にて二三歳で亡くなってしまった。その間に書かれた作品群や日記をまとめたのが『白舟遺稿』であるが、そこへ友人のひとりが「病んでから文芸へ転向？」

と題した追悼文を寄せているように、曾我は肺を病むことによって、初めて創作を開始しているであり、肺病と文学を書くということが強く結びついている様子がうかがえる。

曾我進と新しい文学者として、同年の一九一三年に生まれ、早稲田大学在学中にオリンピックの競艇代表選手となった田中英光が挙げられる。太宰に師事した田中は、結核を患う太宰に憧れ、泥水を飲み身体を痛めつけようとするなど、結核と文学者との結びつきに強い執着を抱いていた。しかし、田中の作品が世に出るきっかけとなったのは、結核によるものではなく太宰の斡旋によるものであったことが知られている。田中を結節点として、ここからは、夭折した青年の死のイメージが、結核による死よりも、戦争での死として前景化されていく流れを追っていくこととしたい。

田中英光によって発表された「鍋鶴」(『若草』、一九三九年五月)は、警備の兵士と「支那人」との相撲の場面を描いたもので、従軍中の田中が山西省の野戦病院から太宰へと送り、紹介を頼んだものである。だが、太宰はのちに執筆した「鷗」(『知性』一九四〇年一月)という作品のなかで、「私」が兵士の書いた小説を紹介したことを批判的に振り返る場面を書き付けている。

私は、兵隊さんの小説を読む。くやしいことには、よくないのだ。ご自分の見たところの物を語らず、ご自分の曾つて読んだ悪文学から教えられた言葉でもつて、戦争を物語つてゐる。戦争を知らぬ人が戦争を語り、そうしてそれが内地でばかな喝采を受けてゐるので、戦争を、ちやんと知つてゐる兵隊さんたちまで、そのスタイルの模倣をしてゐる。

また作品の後半では、「私」と「雑誌社の人」との最近の文学者の作品に関する批評が匿名で描かれている。そこで、「私」は「小説を書くに当つてどんな信条を持つているの」か問われると、次のように答えている。

「あります。悔恨です。」こんどは、打てば響くの快調を以て、即座に応答することができた。「悔恨の無い文学は、屁のかつばです。悔恨、告白、反省、そんなものから、近代文学が、いや、近代精神が生れた筈なんですね。だから、――」また、どもつてしまつた。

「なるほど、」と相手も乗り出して来て、「そんな潮流が、いま文壇に無くなつてしまつたのですね。それじゃ、あなたは梶井基次郎などを好きでしょうね。」

「このごろ、どうしてだか、いよいよ懐かしくなつて来ました。僕は、古いのかも知れ



ませんね。」

梶井基次郎は作中で唯一名前が挙げられている人物である。梶井を懐かしむ「私」は「古い」と自嘲しており、結核で夭折した作家である梶井基次郎と戦地で兵隊さんが書く「戦争文学」が、古いものと新しいものとして対置されている。明治以降、結核による死と文学青年というロマンティックな結びつきが、文学的想像力の契機としての役割を果たしていたとするならば、日中戦争開始以降には戦場にいる兵士の死へとその結びつきが移行していたと言える。

そうした移行の背景には、戦時下の結核に対する社会的な抑圧が強く働いている。戦時下、男性の結核の死亡率は上昇をつづけている<sup>300</sup>。それは重工業の発展と軍隊によって、男性が集団で悪環境のなか過ごす状態が増加し、結核の感染率が高まったことに起因している。とくに徴兵検査で結核患者が多く見つかри、入営後に発病するものも多かったことは大きな問題となっていた。敗戦後の調査では、国立療養所が所管する結核病床のうち半数以上が軍関係の病床であったことも判明している。こうした結核対策のために一九三八年には厚生省が新設され、一九三九年には官民一致の結核予防組織である財団法人結核予防会も設立されていく<sup>300</sup>。

このように結核が戦時下にさらなる流行をみせることで、結核によって兵士になることのできなかつた青年の大部分は、周囲からの冷たい視線を浴び、負い目を感じるなど、結核に対するマイナスイメージが形成されていく。大岡昇平の『野火』で結核に罹患し部隊から放擲される兵士が描かれているように、太宰自身もまた結核を理由とし三種により戦地へ赴くことはなかつたのである。

周知のように、戦地で兵士が書いた作品は、戦死した兵士の遺稿として新聞に掲載され書物として刊行され、プロパガンダとしての役割を果たすこととなった。岩波文庫の収集家として知られた『太田伍長の陣中手記<sup>301</sup>』をはじめ、無名詩人田中清司の戦線詩集『衣裳せる風景<sup>302</sup>』の刊行や、京都帝国大学出身の朝倉豊伍長の遺稿集の刊行など<sup>303</sup>、兵士の遺稿集刊行はこのころ繰返し行われていく。戦地で書くということが、新たな文学的課題としてだけでなく、遺稿集の刊行理由としても機能しているのである。

こうして、戦時下における遺稿集刊行理由の変化―結核から戦場へ―を辿ってみれば、「散華」において、結核で夭折する三井君の遺稿集が企画されず、結核を克服し戦地で夭折した三田君のみ遺稿集が計画された点を、時局的な必然として考えることができるだろう。第二節にて「散華」には、『新若人』における青年の読書や執筆環境の変化が書き込まれていることを確認してきたが、それだけではなく戦時下に青年が書くことが公にされる

ことに対して生じた変化を「散華」は描き出しているのである。

#### 第四節 遺稿を編むことへの違和

では、遺稿集を編む文化的背景の変化のなかで、「散華」における「私」は遺稿集を編むことに対して、どのような反応を示しているのだろうか。

「散華」は、悪化する執筆環境のなかで書きつづけ、夭折してしまった青年たちを「私」が語る物語であるが、それは同時に青年を追悼することでもある。だが、執筆環境の変化を忠実に書き込んでいるのに反して、「私」の青年に対する追悼の表現方法は、同時代的な青年の追悼のあり方とは異なっている。「私」は三田君の遺稿集の掲載作について、次のように語る。

私の家で三人、遺稿集の事に就いて相談した。

「詩を全部、載せますか。」と私は山岸さんに尋ねた。

「まあ、そんな事になるだろうな。」

「初期のは、あんまりよくなかったやうですが。」と私は、まだ少しこだはつてみた。らしいの田五作の剛情である。因業爺の卵である。

「そんな事を言つたつて。」と、山岸さんは苦笑して、それから、すぐに賢明に察したらしく、「こりやどうも、太宰のさきには死なれないね。どんな事を言はれるか、わかりやしない。」

ここで「私」は、遺稿集に掲載すべき作品か否かという問題に拘泥する。その態度に「山岸さんは苦笑して」みせるように、本来ならば三田君のような玉砕した青年の遺稿集において、掲載作品の出来不出来が、遺稿集への掲載を左右することはほとんどないだろう。

遺稿集は、死者が書き遺したものを、必然的に遺されたものたちが〈編集〉することになる。そこでは作品の価値判断は、後者に委ねられる。遺稿集という性格上当たり前のことだが、徹底的に執筆者不在の書であるという点で、数多ある出版物のなかでも、遺稿集は特異な位置を占める。それは遺稿集の多くが非売品として流通することからも明らかだろう。市場に流通しない遺稿集は、出版資本主義から逃れ、消費されないこと、それこそが意味をもっている。いわば、生き遺った人びとのための記念出版事業である。

だからこそ、遺稿集は死者の弔いであると同時に、生者が死者の人となりを行為にもつながら。夭折した青年の遺稿集が編まれていくのも、それは追悼であると同時に稀な出来事として物語化されるからでもある。つまり、遺稿集とはその内容自体が精査され

る読物ではなく、故人の人生を物語とするための仕組みなのである。そのため、作品自体の価値ではなく、その故人の人生が読物としての価値を持つことになる。

戦時下の遺稿集は、単なる夭折した故人の追悼としてだけではなく、プロパガンダの役割を背負わされていたという点で、高度に物語化された産物であった。だが、同時代的に遺稿集の編集背景は、ほとんど可視化されることがない。

「散華」は玉砕した青年の遺稿の〈編集〉という本来ならば、言説化されない部分を可視化した小説であり、また「私」の作品の出来に対する拘泥は、アツツ島で玉砕した青年の人生を理念的に語るための刊行目的とは異なる位相となる。故人の人生ではなく、その人物の書いた作品の価値にどうしても拘ってしまうという「私」の言動は、三井君の死に対しても同様にみられる傾向であることは、第一節でも確認してきた通りである。

小説の出来不出来に拘る「私」の言動は、一見文学を権威化させるもののようにみえる。だが遺稿集の〈編集〉のありようを明らかにするという「私」の態度は小説の〈編集〉にも及んでいる。

玉砕といふ題にするつもりで原稿用紙に、玉砕と書いてみたが、それはあまりに美しい言葉で、私の下手な小説の題などには、もつたない気がして来て、玉砕の文字を消し、題を散華と改めた。

「散華」の冒頭において、語り手は「玉砕」ではなく「散華」という言葉のほうがタイトルに相応しいとして、語り直す。こうして名付けられた「散華」というタイトルもまた、「玉砕」という戦死のあり方を、遺されたものたちが語り直し、〈編集〉した言葉に他ならない。それを冒頭に書き残しておくという行為こそが、この「散華」もまた〈編集〉された作品であるということを示す働きをしている。

「散華」という小説は、戦時下の文学青年たちの書く営みを忠実に描き出しながらも、そこで行われていた戦時下の遺稿集〈編集〉のありようを逆説的に浮かび上がらせていく物語となっているのである。

## おわりに

本章では、戦時下の文学青年の執筆環境や読書環境の悪化や遺稿集の刊行背景の変遷が「散華」においていかに描かれていたのかということを確認してきた。死の語り方ではなく、死を語る言葉がどのように生み出されていたのかを視座とすることは、「散華」に書き込まれていた文学青年をめぐる執筆や読書行為を明らかにすることにつながった。そし

て、「私」という語り手は、書く青年の同時代状況を背景としながらも、作品の評価に拘りつづけるという態度によって遺稿集刊行にまつわる〈編集〉という問題を顕在化しつづける存在となる。遺稿集として刊行することによって個人の人生を〈編集〉し、周囲から望まれた物語を生み出すのではなく、不出来な初期作品を掲載させないことに「私」は拘りつづけていく。

またこのテキストは、戦後の学徒兵遺稿集の刊行とも関わる問題をはらんでいる。「散華」が発表された一九四四年以降、『大学新聞』『帝国大学新聞』『京都帝国大学新聞』の合同新聞)にて、学徒出陣で出征した学徒兵の手記が掲載されていき、それらは戦後の帝国大学学徒兵の遺稿集『はるかなる山河に』刊行へ、そして『きけわだつみのこえ』刊行の契機ともなった。学徒兵の遺稿という同じ書物でも、これらの意味は戦中と戦後で全く異なっている。どちらも死者の追悼として作られた書物だが、戦前はプロパガンダの役割を果していたのに対して、戦後には反戦的な学徒兵の姿を物語る書物へと変容していくのである。これらは遺稿の〈編集〉によって生じた変容であり、戦後多くの読者を獲得することとなった学徒兵の遺稿集は、同時に遺稿の〈編集〉や改竄という問題が現在でも終始つきまといっている。

学徒兵による読書というイメージもまた『きけわだつみのこえ』を始めとする遺稿集による物語化によって生成されてきた。「散華」はイメージの〈編集〉のあり方自体を可視化させ、遺稿集を〈編集〉するということの問題性を問いつづけるテキストとなっているのである。

<sup>1</sup> 若松伸哉「近代(史)のなかの太宰治 戦時下における〈個〉の領域―太宰治「散華」論」『新世紀太宰治』(斎藤理生、松本和也編、双文社出版、二〇〇九年六月)

<sup>2</sup> 木村小夜「散華」『太宰治事典』(東郷克美編、学燈社、一九九四年五月)

<sup>3</sup> 松本健一『太宰治とその時代』(第三文明社、一九八二年六月)

<sup>4</sup> 鳥居邦朗「昭和十九年」『国文学解釈と鑑賞』(至文堂、一九九三年六月)一〇六―一〇九頁。

<sup>5</sup> 北川透「文学の一兵卒―太宰治「散華」について」『日本文学研究 三四』(梅光学院大学、一九九九年一月)

<sup>6</sup> 権錫永「アジア太平洋戦争期における意味をめぐる闘争(3) 太宰治「散華」・「東京だより」」『北海道大学文学研究科紀要 一〇六』(北海道大学文学研究科、二〇〇二年二月)

<sup>7</sup> 李顯周「太宰治の「散華」論―三つの「死」の意味」『文学研究論集 二〇』(筑波大学

比較・理論文学会、二〇〇二年三月)

8 佐藤卓己『言論統制―情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』(中央公論、二〇〇四年八月) 二九八〜三一五頁。

9 『新若人』は、戦時下の雑誌の中でも「散逸がはげしく、なかなか揃いが見られない」雑誌とされてきたが、早稲田大学中央図書館においてその揃いを見ることが可能となっている。曾根博義「犬も歩けば 近代文学史量探索(一一) 雑誌『新若人』」『日本古書通信 九七六号』(日本古書通信社、二〇一〇年一月)。

10 帆刈芳之助『出版人の横顔』(出版亡命新聞社、一九四一年十二月)『出版書籍商人物事典』第一巻(金沢文圃閣、二〇一〇年)を参照。

11 帆刈芳之助『出版人の横顔』前掲注一〇。

12 ライホルト・シュルツェ(独逸青年団駐日代表)、長屋喜一(文部省教学局教学官)、鈴木庫三(陸軍省情報部)、赤尾好夫(六月一〇日夕、帝国ホテル)における座談会の赤尾の発言。「シュルツェ氏を中心に 独逸の教育、学生、青年を語る」(座談会)『新若人 一巻一号』(旺文社、一九四〇年九月)

13 拙論「雑誌『新若人』について 付・「学徒は如何なるものを読む可きか」アンケート結果一覽」『リテラシー史研究 八号』(リテラシー史研究会、二〇一五年一月)では、アンケート結果一覽表を作成している。

14 第四章にて触れた『三田新聞』掲載のアンケート「戦陣に如何なる書を携行すべきか」(一九四三年一月二五日)の回答者も数名含まれている。同一回答者は、竹内時男、尾佐竹猛、吉満義彦、津村秀夫、清沢洌の五名である。

15 木村毅「新春新刊評」『新若人 一巻六号』、木村毅「春窓の文芸書」『新若人 一巻七号』／新居格「欧羅巴の七つの謎」その他『新若人 二巻一号』／新居格「ピリニヤークの「米国観」など」『新若人 二巻二号』

16 土岐善磨「新刊四種」、池田龜鑑「古典と学生」『新若人 二巻四号』／竹内時男科「書について」『新若人 二巻五号』／菅井準一「科学と読書」『新若人 二巻八号』／中村光「歴史の創造と歴史書」『新若人 二巻九号』／藤田徳太郎「国文学書の傾向」『新若人 二巻一〇号』

17 座談会参加者は、池島重信(日本出版文化協会雑誌課長)、来間恭(大日本赤誠会出版局長、評論家)、小山隆(文部省社会教育官兼教学官)、杉森孝二郎(第二早稲田高等学院院長)、中河與一(作家・評論家)、仁科芳雄(理化学研究所員理学博士、日本出版文化協会理事)、松本潤一郎(日本出版文化協会文化局長、東京帝国大学講師文学博士)、赤尾好夫、

池田佐次馬。

<sup>18</sup> 座談会参加者は、土田誠一（成蹊高等学校長）、津田栄（第一高等学校生徒主事）、西崎恵（文部省大学教育課長）、伏見猛弥（国民精神文化研究所員）、前田隆一（文部省教学官）、吉田淳（新若人編集部長）。

<sup>19</sup> 参加者の吉田淳は、北海道帝大新聞での読書調査から、倉田百三「愛と認識の出發」「出家とその弟子」、西田幾多郎「善の研究」阿部次郎「三太郎の日記」、夏目漱石、ゲーテ、トルストイ、ドストエフスキイが読まれていることを指摘している。

<sup>20</sup> 「読書指針（1）学生と読書の問題」「新若人 四卷六号」／「読書指針（2）青年読書の目標」「新若人 四卷七号」／「読書指針（3）哲学・思想書の問題」「新若人 四卷八号」<sup>21</sup> 教養の変容については以下の議論を参考とした。マルクスの教養が戦争により排除されることで、教養主義は人生論や人格主義に回帰していくか、その代替として日本主義的な教養へも変容が起こっている。日本主義的教養は、「国家全体生活への没入を目的とした修練に進」む「国家（忠義）なき人格主義的教養主義を乗り越えるべきもの」として定義されている。「日本主義的教養の時代」（竹内洋、佐藤卓己編、柏書房、二〇〇六年二月）二頁。

<sup>22</sup> 福田真人『結核の文化史 近代日本における病のイメージ』（名古屋大学出版会、一九九五年二月）三頁。

<sup>23</sup> 紅野敏郎『遺稿集連鎖―近代文学側面誌』（雄松堂出版、二〇〇二年九月）

<sup>24</sup> 宮崎節編『亨生全集』（東京堂、一九一七年二月）

<sup>25</sup> 『渡辺春夫遺稿』（広瀬省三郎、一九三二年三月）。一九三一年、結核性腎臓炎にて二二歳で死去。

<sup>26</sup> 曾我鍛編『白舟遺稿』（曾我鍛、一九三五年五月）。本名曾我進、肋膜炎にて二三歳で死去。

<sup>27</sup> 川浪道三編『水野仙子集』（叢文閣、一九二〇年）

<sup>28</sup> 福田真人『結核の文化史 近代日本における病のイメージ』前掲注二二、一七一頁。

<sup>29</sup> 二〇〜二四歳の男性の結核死亡率は、一九三八年から一九四三年の間に一・六倍になっている。青木正和『結核の歴史』（講談社、二〇〇三年二月）一六〇頁。

<sup>30</sup> 青木正和『結核の歴史』前掲注二八、一五九〜一八〇頁。

<sup>31</sup> 太田慶一『太田伍長の陣中手記』（岩波書店、一九四〇年一〇月）

<sup>32</sup> 「戦場綴る詩集 魂の遺稿出版」「読売新聞」（一九三九年四月二二日、朝刊七面）

<sup>33</sup> 「『豊影』の出版 インテリ伍長朝倉君の遺稿集」「東京朝日新聞」（一九三九年七月一

四日、朝刊一〇面)

\*太宰治「散華」の引用はすべて『太宰治全集第七卷』（筑摩書房、一九九八年一〇月）、  
「鷗」は『太宰治全集第四卷』（筑摩書房、一九九八年七月）による。また旧字は新字に  
あらためている。

はじめに

前章では、太宰治「散華」が学徒兵遺稿集の刊行に際して生じる〈編集〉の問題を顕在化させる作品であるとして論じてきた。つづく本章では、戦後に学徒兵遺稿集が〈編集〉して刊行されるなかで、学徒兵の読書行為がどのようなようにして受容されてきたのか、堀辰雄の読者との関係性から考察を行っていく。

敗戦後の焦土のなかで、出版業界が徐々に再興していくときに、堀辰雄ブームとも呼ぶべき現象が静かに長く続いた。この堀辰雄ブームの詳細な研究はなされていないが、しばしば文学者の対談、エッセイ等で言及される問題である。ここでは、「生命」というものから文学を立ち上げていく<sup>30</sup>ことや「生の悦楽」を描<sup>31</sup>いていることが、ブームの理由として挙げられ、作家自身の評価とも結びついてきた<sup>32</sup>。

本章では堀辰雄ブームは、なぜ「生」や「人生」という言葉によって語られることが多いのか、堀辰雄はどのような人々に受容され、いかなる力学によってブームが推進されていったのかという問題点からブームの検証を行うことよって、戦中から戦後の堀辰雄を取り巻く読書行為のあり方を解き明かしていく。戦中から戦後にかけて、一部学徒兵の間で堀辰雄ブームがあったと語られてきた。堀辰雄を読むということについて問うことは、学徒兵の読書行為を問い直していくうえでも有効な問いとなる。

まずは、敗戦後の堀辰雄関連出版物の出版状況の確認を行っていく。堀辰雄ブームと学徒兵遺稿集の刊行時期が軌を一にしていることや堀辰雄の愛読者が学徒兵に多いという言説が、堀辰雄やその周辺に広まっていくことなど、敗戦後の堀辰雄評価と学徒兵の読書行為が結びついていたことを明らかにすることがねらいである。

次に、その堀辰雄評価と学徒兵の読書行為との関係性を具体的に検証していくことになる。堀辰雄ブームは、表面的にみれば学徒兵遺稿集によってその読書行為が戦争への積極的な参加を拒否する行為として意味付けられていく時期にあたり、堀辰雄という作家を読むという行為もまた、学徒兵の勇敢な読書と重なる行為として理解されていく過程でもあった。

だが、学徒兵にとって戦場で堀辰雄を読む行為は、兵士間において自らが優位にあることを示す行為でもあったことが、拙論<sup>33</sup>に新資料を加え新たに分析を行うことで明らかになるだろう。さらに、マチネ・ポエティク<sup>34</sup>の作家たちや堀の友人、知人たちによって行われた堀辰雄の愛読者に対する批判もまた、自らが愛読者よりもより深く堀辰雄という作家を理解しているという特権を示そうとする特徴がある。両者に共通する読書行為の構造を明



らかにすることで、学徒兵の読書イメージが初期遺稿集のなかでそのような読書行為を捨象することで戦争に批判的な態度としてとらえられるなか、文学者たちの批判はその読みの構造を利用することで反戦的な読書主体へと成り代わる意味を持っていたことを指摘したい。

本章ではこのような分析から、堀辰雄ブームにおける読書行為は学徒兵の読書行為へと重ね合わされることで、文学者が自らの戦争責任から目をそらす行為ともなり得たこと、そして、堀辰雄評価において用いられてきた「生」や「人生」という普遍的レトリックもまた、本来は学徒兵との関係性とのなかで語られてきたということを明らかにしていく。

### 第一節 堀辰雄ブーム下の出版

堀辰雄ブームは具体的にはいつ頃から始まったのだろうか。本節では敗戦後における堀辰雄の出版活動を概観していく。堀辰雄の書簡や当時の回想、出版状況から敗戦後の堀辰雄評価を明らかにしていく、学徒兵遺稿集との関係を示したい。

ブームの時期については、一九四六年三月一八日付、神西清の堀辰雄宛書簡が参考となる。

先日中村光夫君から聞いたが、今度の戦没学生の手紙を集めてみたら殆どみんなが君の愛読者だったといふ。同じ話はその後異ふ方面の人達からも聞いた。もちろん結構なこ  
とには違ひないが、恐るべきはそのジャーナリズム的影響だ。最近堀先生の引張風のな  
人気ともすると永井荷風老をさへ凌ぐものあり、先生以て如何となす——といった次第さ

50

この書簡から、一九四六年ごろに神西が堀辰雄ブームを感じていたこと、また戦時下の学徒兵の堀辰雄受容と関連させて考えていたことが分かり、一九四六年ごろを堀辰雄ブームの開始期と考えることができる。

なぜ中村光夫が予備学生の手紙の整理をしていたのか、その事情は明らかにはなっていない。しかし、神西の書簡が一九四六年三月であることから、次のような仮説が立てられる。保阪正康の調査によると東京大学戦没学徒兵の手記集『はるかなる山河に。』の刊行準備が開始されたのは、一九四五年秋頃のことである。帰還した学徒兵や在学生らが自発的に集まって結成された学生自治会有志によって、編集委員会が設けられ、遺稿の収集が開始されたのである。

一九三五年に東京大学文学部仏文科を卒業している中村光夫が、その動きに賛同し、学徒兵の遺稿を整理する機会を持った可能性は十分に考えられるだろう。また、編集委員顧

タイトル	形態	刊行	出版社
「雪の上の足跡」	雑誌『新潮』	1946年3月	新潮社
『花あしび』	単行本	1946年3月15日	青磁社
『燃ゆる頬』〈青春の書〉	文庫本	1946年5月25日	鎌倉文庫
「さらにふたたび」(リルケ訳)	雑誌『胡桃』	1946年7月	不明
『曠野抄』〈養徳叢書〉	文庫本	1946年7月15日	養徳社
『堀辰雄小品集・絵はがき』	単行本	1946年7月20日	角川書店
「ドゥイノ悲歌についての手紙」(リルケ訳)	雑誌『四季』	1946年8月	角川書店
「旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌」(リルケ訳)	雑誌『高原』	1946年8月	鳳文書林
「若い人達」(リルケ訳)	雑誌『高原』	1946年8月	鳳文書林
「小曲集」	雑誌『高原』	1946年9月	鳳文書林
『菜穂子』〈現代文庫選〉	文庫本	1946年10月1日	鎌倉文庫
『堀辰雄作品集第三・風立ちぬ』	単行本	1946年11月20日	角川書店
【図一】 一九四六年堀辰雄出版年表 (参考: 谷田昌平編「訂補 堀辰雄年譜」(竹内清己編『堀辰雄事典』勉誠出版、2001.11))			

間に仏文科教授の辰野隆が就任していることも、遺稿閲覧のきっかけとなったのではないか。『はるかなる山河に』の準備期間と神西清の書簡との時期的な関係からも、『はるかなる山河に』所収の遺稿を中村が見た確率は高い。

戦後、遺稿集の刊行準備と堀辰雄ブームが進行していくなか、出版状況も大きく変化している。出版社は政府による一九四二年「官庁関係出版物整備要綱」に伴う出版社の統廃合によって、終戦時にはその数を約三〇〇社にまで減少させた。資材や機械が不足するなかで、一九四五年の書籍の新刊点数は六五六点しかない。だが、一九四六年の書籍出版数は約五倍の三四七〇点となり、四八年には四四九九点にまで上昇する。さらに、四九年には二六〇六二点と大幅な増加がみられる。出版点数の変化から分かるように、出版界の本格的な再建は四九年のことである。特に四六年半ばごろまでは、印刷所や活字が本格的に復興するまでの繋ぎとして、以前用いた紙型を

再利用することしか出版方法がないような状況でもあった。

だが、復興が万全ではない一九四六年に堀辰雄は活発な出版活動を行っている。新たな執筆作品こそ三月に『新潮』に掲載された「雪の上の足跡」だけだが、単行本を六冊、さらに自らが編集を行う雑誌『四季』『高原』の刊行、リルケの翻訳も盛んに発表している。

ここで、単著として刊行された六冊について見てみよう。【図一】の、青磁社と養徳社は戦中に他出版社を統合して残った出版社であり、櫻本富雄の作成した「企業整備による新事業体版元一覧」の中にその名を見ることができる。

青磁社の『花あしび』は、一九四四年二月二八日付の葛巻義敏宛に「大和路」(青磁社から小さい本で出す)の校正を行っているという近況を伝えていることから、戦中に企画されたものだと判明する。しかしながら、実際には空襲による製本の焼失によって出版企画は頓挫している。だが、「さいはひに紙型が残」っていたため、そのまま紙型を利用することで、「もう一

度印刷<sup>三</sup>」することができたのである。また、同様に養徳社も一九四四年九月に『曠野』を刊行しているが、その時の紙型を利用することで、抄録作品集として『曠野抄』が作成されたと考えられる。戦中から続く出版社は紙型が保管されていたために早期の刊行が可能となったのである。

戦中からつづく出版社とは異なり、新興出版社である鎌倉文庫や角川書店では、そのような厳しい状況下にも関わらず、なぜ堀辰雄作品の出版が行われたのか。鎌倉文庫からは、『燃ゆる頬』と『菜穂子』の二冊が出版されている。刊行までの詳細は不明だが、川端康成の強い要望によって『菜穂子』の中に「姥捨」が収録されたことが分かっている<sup>12</sup>。また、堀は養徳社に勤める庄野誠一と、一九四五年一〇月頃から書簡で出版社の統廃合、戦後の分離によって生じた著作権問題について頻繁にやりとりを行っている。これら書簡からは出版社ができる限り多くの作品を刊行しようとしたため、堀が著作権の所在確認、出版社の選択に苦心しているさまがうかがえる。この時期、紙型があつたという理由だけではなく、文学者や出版社の要望から堀辰雄の作品は刊行されていたのである。

作品の刊行が続くなか、堀が特に力を入れていたのが角川書店から刊行された『堀辰雄小品集・絵はがき』と『堀辰雄作品集第三・風立ちぬ』という実質上初の堀辰雄全集である。これら作品集は角川書店創業者の角川源義によって、「終戦直後、私は出版を志したとき、真先きに堀辰雄全集の出版を考えた<sup>13</sup>」という肝いり企画であつた。角川が堀の『花あしび』を出版した青磁社の顧問をしていたことがきっかけで二人は知り合いとなる。国学院で折口の門下生として学んでいた角川は、戦時中折口に傾倒した堀に対して並々ならぬ思いを抱いていたようだ。そのため作品集の判型は堀の希望で「小脇に抱えて歩けるようなもの」を目指し、本来ならば「仙花紙とか、せいぜいザラ紙しかな<sup>14</sup>」い時代に、「巴川製紙の特別な計らいで」本文を証券用紙で印刷し、表紙には「宮内省納入の予定であつたものの一部が終戦とともに払い下げになつたという」「福井の鳥ノ子紙」を使った「最高の美本<sup>15</sup>」を作ることになつた。

堀は作品集打合せのための上京によって体調を悪化させ、寝たきりとなつてしまふが、この時期に初の全集が企画されたことに注意しておきたい。作品集は、全七巻で一九五一年まで刊行され、一九五〇年には毎日出版文化賞企画部門を受賞している。敗戦を境に急速に関係を密にしていくなかに角川源義とのやりとりからは、「飛鳥新書」といふのはまあ創元選書のやうなもので、もうすこし堀辰雄的なもの（これは角川君の言葉）にしたい（傍点ママ）<sup>16</sup>」というように、具体的な経営方針に相談役のような形で参加していることもわかつている。その後、この「飛鳥新書」は、数冊刊行された後に一九四九年に角川文庫と名前を変え、A6判文庫のさきがけとなつていく。

ここで角川の意図する「堀辰雄的なもの」という言葉の意味を探ってみよう。角川は出版業を志した理由を「出版を通して美しい日本、なつかしい日本というものを人々に語りかけたい」と思ったからだと言っている。また、「出版を志したとき、真先きに堀辰雄全集の出版を考えた<sup>15)</sup>」ということから、堀辰雄を「美しい日本、なつかしい日本」を表す作家としてとらえていたと考えられよう。折口信夫との接点を重視し、『大和路・信濃路』や『かげろふの日記』などの王朝物を評価していたことからそれがうかがえる<sup>16)</sup>。戦後堀辰雄ブームの開始期に堀辰雄は「美しい日本」を表象する存在として全集という形を伴って立ち上がって行くのである。

このような反応を示しているのは、角川だけではない。堀辰雄は、一九四六年に『新潮』から何度も小説の執筆依頼があったが、随筆「雪の上の足跡」しか執筆ができないままであった。さらに、小林秀雄からは『創元』への執筆を依頼されている<sup>17)</sup>。また中野重治から新日本文学会への参加を求められもする。いずれも執筆や参加を断ってしまうが、戦争に協力せず抵抗した文学者のみ新日本文学会に参加する資格があるということから、中野は堀に強く参加を促していた<sup>18)</sup>。このように、戦後の堀辰雄は文学者の側から、戦争協力を行わなかった抵抗者として捉えられていくのである。

堀辰雄のブームは、文壇内ではおそらく神西のいう一九四六年頃から脈々と続いていたと考えられるが、実質的に出版環境が揃わない状況下で大部数を確保することは難しい。それを受けるかのように、出版環境が整った一九四九年からは、旧作の再刊が活発になっていく<sup>19)</sup>。つまり、堀辰雄ブームは具体的には一九四六年から文壇内での評価が高まり、一九四九年から再刊を通して一般的なブームへと広がったと考えられる。

そして、この堀辰雄ブームの開始時期はちょうど一九四七年の『はるかなる山河に』刊行開始期に符合する。さらに、『はるかなる山河に』の好評を受け、全国に規模を広げて企画された一九四九年の『きけわだつみのこえ』の刊行、その映画化といった学徒兵遺稿集の隆盛期間とほぼ一致している。その学徒兵のなかに堀辰雄の愛読者がいたことが多く指摘されているのである。

## 第二節 特権的読者としての学徒兵

前節に挙げた書簡のなかで神西清が堀辰雄に、学徒兵という愛読者の存在と同時に堀辰雄ブームについて語っていたように、堀辰雄ブームについて述べるとき、学徒兵が愛読していたことが同時並行して語られていく。では、学徒兵は堀辰雄をどのように読んでいたのだろうか。まずは、文学者の発言から学徒兵によく読まれていたことが堀辰雄の評価軸となっていくことを明らかにしつつ、それにより堀辰雄が戦争に対する抵抗者であるとい

うイメージとより強く結びついていったことを示したい。

だが、学徒兵にとって堀辰雄を読むという行為には、一方で知的階級としての矜持や特権性を明らかにするための手段としての意味も持っていたことが、次の検証から明らかになるだろう。一九五三年五月二八日に堀辰雄が没すると、中村光夫はすぐさま自ら連載中であつた「文芸時評」に追悼文を寄せる。

戦争中に戦死した海軍予備学生たちの手紙を整理したとき、彼等がほとんど全部堀辰雄の愛読者なのにおどろいたことがあつたが、実際戦争の少し前から戦時中にかけて、堀は青年たちには絶対の偶像だつた。堀の作品は、濁つてゆく時勢のなかで彼等が切ない純血を託す象徴だつたのだ<sup>21</sup>。

また、丸岡明は中野重治らとの対談のなかで、「戦争中に非常によく読まれた。僕の弟で北支で戦死したが北支でたまたま読んだのが、奈良に行つた時の日記「大和路信濃路」で、それに非常に感動し<sup>22</sup>」ていたと、弟が堀辰雄読者であつたことに言及する。さらに堀田善衛も「早く出征した友人たちから、堀さんの新しい本が出たらしいが、送つてくれないか、という手紙を三通ほど受け取つた記憶」を語り、「中国の奥地、ビルマ」などの戦場における学徒兵の姿を伝える<sup>23</sup>。さらに矢内原伊作も、中村光夫の発言に触発されるかたちで、次のように海軍時代の読書の様子を語る。

昭和十六年の戦争勃発と同時に卒業し、すぐに予備学生として海軍に入ったばかりは、横須賀海兵団での過酷な訓練の日々、ひそかに『菜穂子』をひもとくことによつて慰められた。戦地ラバウルにおもむくぼくの雑囊のなかには、河出書房版『雉子日記』がしばせてあつた<sup>24</sup>。

そして、「潇洒な装幀の書物を宝物のように大事にし」「闇の底から一条の光に憧れるよう<sup>25</sup>」であつたと堀辰雄を評価する。

このように、中村の追悼をきっかけとして、学徒兵に読まれていたことが一般的に知られるようになり、そして「学徒兵によく読まれていた」ことが堀辰雄評価の評価軸となるのである<sup>26</sup>。「学徒兵に読まれていた」ことを是とする評価が下される背景には、学徒兵の読書行為が、『きけわだつみのこえ』によつて、戦場において戦うことを義務付けられながらも、ぎりぎりまで読書を行うことで勉強や思考を絶たず戦争の意義に悩み続けたという点で、反戦や抵抗を意味する行為としてとらえられていたからである。だが、『きけわだつ

みのこえ』が占領の影響から、日本主義的な言説を削除したうえで成立した書物であることを合わせて考えるならば、学徒兵の読書行為がただ反戦的行動であったと受け取るのは早計であろう。学徒兵が戦場で堀辰雄を読むという行為は、戦争への忌避感の表明でもあるが、その一方で自らを特権的な位置に置く行為であったことにも注意しておかねばならないだろう。

学徒兵の堀辰雄受容について、拙論では以下のように論じてきた<sup>290</sup>。はじめに学徒兵の遺稿や手記、回想記を調査し、堀辰雄について言及のあった学徒兵の言説の分析を行った<sup>291</sup>。長門良知<sup>292</sup>、後藤裕文<sup>293</sup>の言説からは、堀辰雄という作家と自分自身を同一視する傾向が見いだせる。その後、拙論では堀辰雄『燃ゆる頬』に戦場と学校空間の相似という観点からテキスト分析を行い、「夭折することで永遠に愛され」、「自己愛によって相手に同一化しようとする少年」といった表象が立ち上げられていくことを指摘してきた。そして、さらに二人の学徒兵林尹夫と松永竜樹による言説を分析し、戦場において堀辰雄を読む行為が学徒兵の心の支えとして機能していたこと明らかにした。しかしながら、こうした学徒兵の読書行為は『燃ゆる頬』においてのみ見られるわけではない。彼らの読書行為について再度取り上げつつ、教養主義的な読書行為という側面からの分析も加え、本章の分析の中に位置づけていきたい。

昭和一〇年代の旧制高校文化における教養主義について、高田里恵子は当時のドイツ文学者の言説を分析することによって、教養主義が教養主義批判と表裏一体の存在であること、さらに「真の」エリートとは何かを問う考え方のことであったと定義している。そのうえで、高田は昭和一〇年に大衆化の進行とともに、教養主義は旧制高校生などの「知的大衆としての読者」とドイツ文学者などの「知的大衆としての書き手」や「翻訳者や解説者という中間（搾取）的人物」の誕生をうながし、さらにその両者の間で相互批判がなされることによって発展してきたと指摘する<sup>310</sup>。

つまり、昭和一〇年代の知的エリートの大衆化によって誕生した教養主義的な読書行為は、教養主義自体を批判し、他の教養主義者との差異を明らかにすることで、自らの優位性や特権性を確保していたのである。高田はドイツ文学関係を主に論じているが、堀辰雄を読む学徒兵という読者もまた、「真の」知的エリートであることを求めるという意味で、高田の指摘する教養主義的な読書行為と同様のものだと考えることができる。そのような視点から、林尹夫と松永龍樹という学徒兵による堀辰雄に関する記述を考えてみよう。

林尹夫は、京都第三高等学校時代の一九四三年に、『聖家族』や『菜穂子』を読み、一九四五年の第八〇一航空隊時代に「回想」という詩のなかで、戦場という「いまの暗い生活」を、「病気」によって離脱することで「新しい雰囲気の中で生活を組み立て直」し、「か

つて私をはげしくひきつけた」強い「意思でもって生き」る生き方を夢想する<sup>33</sup>。この詩における「病氣」を堀辰雄の代名詞であり、小説におけるキーワードでもあった「結核」ととらえることはたやすい。

福田真人は、日本近代における「佳人薄命」といった結核表象を分析するなかで、堀辰雄の詩を論じ、「病氣の美化とロマン化は、絶望から自分の身や心を守る非常に得難い道具であったのかも知れない」と結論づけている<sup>34</sup>。こういった堀辰雄の詩における結核表象は、病氣によって新しい生活を得るという林の描き出した病氣表象とも重なっている。戦争という過酷な状況の中で、詩を書き、堀辰雄を読むという行為は、戦場からの逃避、心の支えとなっている。さらに、大井海軍航空隊時代の一九四四年には『風立ちぬ』のエピグラフに関する想い出を綴る。徴兵前の林の過去の生活を「風立ちぬ、いざ生きめやも！」という言葉に集約した林は、過去への「センチメンタリズムは捨て去るべし、と誰かは言うであろう」が、むしろ「捨てる人は捨てよ」と述べる。林は、過去を学生時代の堀辰雄の読書行為と結びつけ、戦場にいる現在も未だにそれにこだわってみせることで、他人との差別化を図るのだ。

この側面をより強固に示すのが、一九三八年に国学院大学文学部に入学した松永龍樹である<sup>35</sup>。松永は「インテリは活字を恋しがる」と述べながらも、インテリの教養は「三文小説か映画雑誌」を読む程度で、より堅い書物を読む自らの特別さを主張する。そして、「真の」インテリとしての松永が読むべき書物として挙げるのはポアンカレ、堀辰雄、『改造』であって、戦場では敬遠される書物だと指摘する。このような態度はまさに高田の述べる教養主義的な読書行為である。松永は教養にこだわり、堀辰雄を読む行為によって、同じインテリという枠のなかでの自らが特別な存在であることを明らかにしようとするのである。

本節で取り上げた堀辰雄を読む学徒兵の読書行為は、戦場において読みたいと学徒兵が「望んでいた書物」と実際に「読める書物」が偶然にも合致したケースであるといえよう。そうした条件が合致したときに、堀辰雄を読むという行為は、単に心の支えとなるだけではなく、戦場という場所において、自らが真のインテリという特別な存在であることを明らかにするための手段の一つとなったのである。

### 第三節 堀辰雄愛読者に対する批判力学

前節までに、堀辰雄評価と学徒兵の読書行為の関係を分析することで、学徒兵自らの特権性を示す読書行為が見出せること、そして戦後の言説空間のなかではその特権的な読書行為を捨象することで、学徒兵の戦場での読書が反戦的な読書行為として意味付けられて

きたことを確認してきた。

本節では、堀辰雄の友人、知人たちによって盛んに行われた堀辰雄愛読者に対する批判が学徒兵の読書行為の構造を援用することで、自らの特権性を示すための行為となっていることを明らかにしていく。この文学者たちの堀辰雄の良好理解者としてのふるまいは、戦争に対する自身の抵抗や反抗を証するような役割を担っていった。そして文学者たちは、堀辰雄の普遍性を保証するという行為によって、同時代的な読書行為の意味や文学者自らの戦争責任を問いがたくしてきたことを指摘したい。

先に挙げた神西清の書簡によって堀辰雄自身に学徒兵という愛読者の存在が伝えられる一方で、加藤周一は戦時下の学生たちを星莖派と称して強い批判を下し、脚光を浴びることとなる。堀辰雄愛読者に関する文学者の発言を管見した限りでは、これら愛読者に好意的な発言をしている文学者は極僅かだ。マチネ・ポエティクの作家や堀の友人、知人たちは口々に愛読者に対する批判を繰り返すのである。以下、その発言を引用しながら具体的にその批判の力学を検証していく。

加藤の行った星莖派批判は、ヘッセ、リルケ、カロツサ、ゲーテといったドイツ作家達を読む知的階級の学生批判として展開される。だが、堀は同月にリルケ「さらさら」にふたたび、「翌月に「ドゥイノ悲歌」訳を発表するように、加藤が掲げた作家からの影響によって多くの作品を執筆しているにも関わらず、星莖派のみが批判される。それは知的階級の学生によって作品が「徹底的に誤解され」て読まれ、「好奇心と知識人の自尊心とに媚びる好都合な「苦惱」を見出す」<sup>235</sup>していたに過ぎないからである。星莖派批判は、読書方法批判でもあり、このような読書方法批判は、堀辰雄を語る際に何度も浮上する。

丸岡明は戦場で堀の作品を読んだ弟が、「どうしてそんなに強く打たれたのか、不思議に思」うと続け、「なにかを愛するということの、ほんとうのところまでわからない人が、盛んに読むんじゃないですか。堀辰雄のちよつと使うある意味で妙な言葉が、堀辰雄ファンを作っているのじゃないか」と、「ほんとうのところ」を理解出できない愛読者を描き出す。さらに、中野重治も、「堀辰雄および堀辰雄の文学にあるきびしさ<sup>236</sup>というのがわからなくて、そういうものをコンファタブルに感じ<sup>237</sup>」ていると、その誤解の理由を語る。このような誤解を指摘する声は、読者だけではなく堀辰雄を取り巻く諸現象にまで波及する。

一時、(戦争初期の頃)同人雑誌などに散見した、堀辰雄の垂流の作品を思い出し給え。

あれが、堀辰雄を読んだ感動が、再び言葉にされた時の、生ぬるい感傷性<sup>238</sup>の見本だ。彼等は、堀辰雄体験から、下手な作品を書いた。恐らく、そうした作品に最も不快感を抱く堀辰雄は、現実体験から、独自の作品を作り上げた<sup>239</sup>。



堀辰雄の垂流の出現のために、福永武彦は「自分が気質的にも、また文学の質に於ても、堀辰雄に似ているように感じる度に、垂流とみなされてはかなわないと思って、堀辰雄の弟子だなどと呼ばれないようになるべく非堀辰雄的な小説を書こうと努め<sup>88</sup>」ることになるのだ。

さらに、愛読者の理解が不十分であるという批判は、作品だけではなく堀辰雄イメージにまでも及ぶ。神保光太郎は、堀が誤訳を指摘された雑誌を破り捨てたという事実について、「心の底から堀辰雄の文学に傾倒し切っているような」「若い人達」が「描きあげている堀辰雄の世界」には「こうした挿話を容れる椅子は用意されていない<sup>89</sup>」と述べる。「本当の」堀辰雄が愛読者に理解されていないという言説は枚挙に暇がなく、「何ものか」とか「漠然と」とかいう堀辰雄の常套句<sup>90</sup>に「世間の人―ことに文壇人はだまされ続けて来た<sup>91</sup>」とまで語られる。さらに加藤周一は「真の」「堀辰雄の条件」として、「内には肺結核、外には軍国日本」を有し、「権力におもねる才子ではな<sup>92</sup>」いことだと語り、中野重治は「きびしさ<sup>93</sup>」を持つことだと評すのである。

このような愛読者に対する批判言説は、学徒兵になって堀辰雄を読むことで自分を特別視する行為と同じ構造をもっている。教養主義が教養主義批判と分かち難く結びついていたように、堀辰雄を愛読するという行為もまた、その愛読者批判と結びついている。つまり、愛読者に対する批判は、自分達こそが堀辰雄を真に理解している、という特権的な位置に身を置くという行為にほかならない。それは、文学者たちが文壇という共同体で自分の特別さを強調するための言説なのだ。

こういった批判の根拠となっていたのは、彼ら文学者が実際に堀辰雄の知人であったという事実である。そのため、堀辰雄と同年代の神西や丸山、マチネ・ポエティクの三者といたった堀に近い文学者たちが特に強く批判する構造をとることとなる。だが、「真の」堀辰雄を知っていると自認しても、実際には知人としての一側面しか知り得ない。そのため、中村真一郎は堀多恵子との対談のなかで、「世間で今若い読者が、堀辰雄について抱いている幻影と、奥さんがご一緒に生活していらして感じたことと、違うところがあったらおっしゃっていただくといいと思う」や、「若い読者の思っているものと同じじゃないと思うんです、奥さんの中にある堀辰雄像というのは<sup>94</sup>」といった質問を繰り返す。結局、回答ははぐらかされてしまうが、それはより近い妻・多恵子から「真の」堀辰雄を探ろうとする質問に他ならない。

このように学徒兵と愛読者を批判する文学者の両者には、堀辰雄を読む行為によって、他の読者よりも優れている特別な存在であることを明らかにするという共通項が見出せる。

二節で明らかにしたように、学徒兵にとって堀辰雄を読むことは、反戦的な意識からだけではなく、戦場での立場を保持するために行われていた。それは文学者にとっても同様で、自分たちが読者として一番優れていることを示すことで、戦後における文壇内での立場を保つための行為であった。さらに、戦後民主化の進む状況下において、堀辰雄の「真の」読者であると主張することは、反戦的で勇敢な読者としての地位を獲得しようとする行為でもあった。学徒兵の特権的な読書行為は、初期の遺稿集から除かれることとむしろ反戦的な読者としての地位を獲得したが、反対に文学者たちはその読書行為の構造を愛読者に対する批判に援用することで、戦争に非協力的であったことを示したのである。

そのような行いは、彼ら文学者たちが実際に戦時下にいかなる言動を行っていたのかに関わらず、堀辰雄の最良の読者として学徒兵の反戦的な読書行為イメージの主体に成り代わることによって、戦時下の言動の精査を不問に付してしまっただけではないか。堀辰雄を読むという行為それ自体に焦点が置かれることで、その具体的な内実は遠景においてやられ、文学者が自らの戦争責任という問題から目をそらすための行為となっていたのである。

## おわりに

本章では、学徒兵の遺稿集刊行とパレルに進行していった堀辰雄ブームの成立力学を明らかにしてきた。

堀辰雄を読む学徒兵の感想は、読みたいと「望んでいた書物」と「読める書物」が偶然にも合致したケースであった。希望通りの書物を選択することができた場合、その感想は学生という立場が強調され、読書行為は矜持として認識される。だが、戦後の学徒兵遺稿集を編集する際には、戦場という読書空間は、「望んでいた書物」は読むことが不可能な場所であったということが殊更に強調されたことで、学徒兵の読書行為は「生命を賭した」神聖化されたイメージとして定着していくこととなった。

そして堀辰雄ブームは、戦争に対して批判的な態度を保っていたと語られる学徒兵イメージに導かれて進行していく。そのようなブームによって立ち上げられた堀辰雄イメージは、学徒兵の「生命を賭した」読書行為との関連のなかで語られたがゆえに、「生」や「人生」という普遍的な言葉で語られてきたのだとも言えよう。そして、そのようなレトリックは文学者たちによって、徐々に学徒兵という愛読者の存在を示すことなく文学者による堀辰雄評価に使用されていった。「人間という悲しくも頼もしい生き物の静謐な抒情の根にふかくつながるところに、堀辰雄の文学のもつ真の意味での植物的な強靱さがあり、明るい普遍性もある（傍点引用者）」というように、学徒兵の語った言葉やイメージを借用することで堀辰雄評価もまた作り上げられていくのである。

文学者たちは、学徒兵という読者の存在を示すことなく作家やテキストの普遍性を称賛することで、「文学」という自分たちの足場を固めることに貢献し、その地盤を突き崩しかねない読書行為の意味を問いがたくしてきた。学徒兵の読書行為が神聖なものと典型化されていくのは、「文学」の普遍性を権威づける行為と関わる問題であったのである。

「竹内清己・池内輝雄「対談堀辰雄とモダニズム」『国文学解釈と鑑賞別冊』（至文堂、二〇〇四年二月）

「堀田善衛「乱世文学者」『文学界』（文藝春秋社、一九五三年八月号）、『堀辰雄全集 別巻二』（筑摩書房、一九九七年五月）を参照。

「小久保実は、「堀文学は、戦争のために忘れていた人生の味わいを、心に染み透るように、静かに歓喜し」（『堀文学と私』『堀辰雄事典』勉誠出版、二〇〇一年一月）たと語り、伊藤整は「死の認識、または死の近くからの生の認識という点において、戦時下の生活者たちの中に、深い意味で共感を呼び起こ」（『堀辰雄』日本文学研究資料刊行会編『堀辰雄』有精堂出版、一九七一年八月）したと述べる。

「拙論「戦場で（堀辰雄）を読む―戦没学生の読書体験と学校小説『燃ゆる類』論」『近代文学 研究と資料 第二次第四集』（早稲田大学大学院教育学研究科、二〇一〇年三月）

「一九四六年三月一八日付堀辰雄宛神西清書簡『堀辰雄全集 別巻一』（筑摩書房、一九七七年五月）。また一九四六年のベストセラーに、永井荷風『腕くらべ』（新生社）がある。

（『新版 出版データブック』出版ニュース社、一九九二年二月）

「『はるかなる山河に 東大戦没学生の手記』（東大戦没学生手記編集委員会編集、東大協同組合出版部、一九四七年二月）

「保阪正康『きけわだつみのこえ』の戦後史』（文芸春秋、二〇〇二年二月）

「『はるかなる山河に』には堀辰雄を愛読する学徒兵の姿は見つけることはできないが、保阪正康『きけわだつみのこえ』の戦後史』によれば、『はるかなる山河に』に収められた書簡は一〇〇編収集したうちの三九編であることから、不掲載となったと予測できる。

「出版状況については、山口邦子『戦中戦後の出版と桜井書店』『慧文社、二〇〇七年五月）、日本出版学会編「出版の検証」（文化通信社、一九九六年二月）を参考とした。

「櫻本富雄『本が弾丸だったころ』（青木書店、一九九六年七月）

「一九四五年十月二六日付折口信夫宛堀辰雄書簡『堀辰雄全集 第八巻』（筑摩書房、一九七八年八月）

「一九四五年十二月七日付庄野誠一宛堀辰雄書簡『堀辰雄全集第八巻』（筑摩書房、一九

七八年八月)

<sup>13</sup> 角川源義「月報」『昭和文学全集一八 堀辰雄集』（角川書店、一九五八年七月）

<sup>14</sup> 角川源義「月報」前掲注一三。

<sup>15</sup> 一九四六年五月二五日付小山正孝宛堀辰雄書簡『堀辰雄全集第八卷』（筑摩書房、一九七八年八月）

<sup>16</sup> 角川源義「講演記録 戦後の出版界 一九六〇年十一月一日」『角川書店と私』（角川書店創立五十周年記念出版編纂委員会、角川書店、一九九五年一〇月）

<sup>17</sup> 角川源義「ある夕暮の対話」『日本文学論究』（國學院大學文学会、一九六一年三月）

<sup>18</sup> 一九四六年三月八日付神西清宛堀辰雄書簡『堀辰雄全集 第八卷』（筑摩書房、一九七八年八月）

<sup>19</sup> 一九四〇年十二月二一日堀辰雄宛中野重治書簡『堀辰雄全集 第八卷』（筑摩書房、一九七八年八月）

<sup>20</sup> 谷田昌平編「訂補 堀辰雄年譜」『堀辰雄事典』（勉誠出版、二〇〇一年十一月）を参照。

<sup>21</sup> 中村光夫「小説案内」『毎日新聞』（一九五三年六月四日朝刊四面、五日朝刊四面）、「文芸時評 昭和二十八年六月号」『中村光夫全集 第六卷』（筑摩書房、一九七二年一二月）参照。

<sup>22</sup> 中野重治、丸岡明、中村真一郎、吉田精一（司会）「座談会 堀辰雄の人と文学」『解釈と鑑賞』（至文堂、一九六一年三月）

<sup>23</sup> 堀田善衛「乱世文学者」前掲注二。

<sup>24</sup> 矢内原伊作「病床の堀辰雄」（『太陽』一九七三年七月号）、『堀辰雄全集 別巻二』（筑摩書房、一九九七年五月）を参照。

<sup>25</sup> 矢内原伊作「病床の堀辰雄」前掲注二四。

<sup>26</sup> 学徒兵に読まれていたことを評価軸とはするが、それを是とるか否ととるかという選択肢は残されている。だが、中村や矢内原を除くほとんどの言説が「学徒兵に読まれていたこと」を否としている。詳しくは三節で論ずる。

<sup>27</sup> 拙論「戦場で（堀辰雄）を読む―戦没学生の読書体験と学校小説『燃ゆる類』論」前掲注四。

<sup>28</sup> 管見の限りでは堀辰雄に関する記述のあった学徒兵は四名であった。全てではないが、以下に調べたものを列記しておく。海軍飛行予備学生第一四期会『あゝ同期の桜』（毎日新聞社、一九六六年九月）、永井建児『一六歳の太平洋戦争』（集団形星、一九六八年八月）、毎日新聞社編『青春の遺書』（毎日新聞社、一九六八年六月）、田辺利宏『春の春雷』（未来

社、一九六八年六月)、岩手県農村文化懇談会『戦没農民兵の手紙』(岩波書店、一九六八年七月)など。

<sup>29</sup> 長門良知『一戦没学生の手記 遺稿魔の海峡に消ゆ』(大光社、一九六八年六月)

<sup>30</sup> 後藤裕文「おくれ征もの」『昭和一八年一月一日―戦中派の再証言』(「学徒出陣」25周年記念手記出版会編、若樹書房、一九六九年八月)

<sup>31</sup> 高田里恵子『文学部をめぐる病』(松籟社、二〇〇一年六月)

<sup>32</sup> 林尹夫『わがいのち月明に燃ゆ』(筑摩書房、一九六七年二月)

<sup>33</sup> 福田真人『結核という文化史 病の比較文化史』(中央公論新社、二〇〇一年十一月)

<sup>34</sup> 松永龍樹・松永茂雄『戦争・文学・愛 学徒兵兄弟の遺稿』(三省堂、一九六八年一月)

<sup>35</sup> 加藤周一「新しき星莖派に就いて」(『世代』目黒書店、一九四六年七月)、加藤周一『加藤周一自選集 一』(岩波書店、二〇〇九年九月)を参照。

<sup>36</sup> 「座談会 堀辰雄の人と文学」前掲注二二。

<sup>37</sup> 中村真一郎「堀辰雄―一つの感謝」(『人間』一九五〇年六月号)、『堀辰雄全集 別巻二』(筑摩書房、一九九七年五月)を参照。

<sup>38</sup> 福永武彦「私にとつての堀辰雄」(『国文学』一九七七年七月号)、『堀辰雄全集 別巻二』(筑摩書房、一九九七年五月)を参照。

<sup>39</sup> 神保光太郎「ひとつの挿話」(『文芸』一九五三年八月号)、『堀辰雄全集 別巻二』(筑摩書房、一九九七年五月)を参照。

<sup>40</sup> 神西清「静かな強さ」(『文学界』一九五三年八月号)、『堀辰雄全集 別巻二』(筑摩書房、一九九七年五月)を参照。

<sup>41</sup> 加藤周一「堀辰雄愛読の弁」堀辰雄全集推薦文 筑摩書房版(『堀辰雄全集 別巻二』筑摩書房、一九八〇年一〇月)

<sup>42</sup> 「座談会 堀辰雄の人と文学」前掲注二二。

<sup>43</sup> 堀多恵子・中村真一郎「思い出すことなど(対談)」(『国文学』一九七七年七月号)、『堀辰雄全集 別巻二』(筑摩書房、一九九七年五月)を参照。

<sup>44</sup> 神西清「堀辰雄文学入門」解説『堀辰雄集』(新潮社、一九五〇年六月、「文芸・臨時増刊」にて補削、一九五七年二月)

はじめに

前章では堀辰雄ブームが学徒兵の反戦的な読書イメージに牽引されるかたちで開始されていたことを明らかにしてきた。この堀辰雄ブームは、戦後の大きな読書ブームのひとつであり、戦後の読書ブームの一要因として、反戦、平和のために読書が行われてきたと言いうことができるだろう。つづく本章では、学徒兵の読書行為を描いた作品として阿川弘之『雲の墓標』（『新潮』一九五五年一月号〜二月号）を取り上げる。そして、戦後の読書ブームのなかで、反戦的態度としてとらえられてきた学徒兵による戦場での読書行為から逸脱した、「リアリティ」ある戦場での読書行為を描き出した作品として評価していきたい。

一九四九年に刊行された『きけわだつみのこえ』の学徒兵イメージに対する反発として、戦没飛行予備学生遺稿集『雲ながるる果てに』（一九五二年）が刊行される。『雲ながるる果てに』の「発刊の言葉」には、反戦的な学徒兵の存在を認めつつも、『きけわだつみのこえ』が「当時の日本の青年の気持の全部であつたかのやうな感じで迎へられ」、「それが一つの時代の風潮におもねるが如き一面からのみの戦争観、人物観のみを画き、そしてまた思想的に或は政治的に利用され」ている状況に対する危惧が述べられる。

一九五六年に発表された『雲の墓標』もまた『きけわだつみのこえ』を契機として流通した反戦の象徴としての学徒兵イメージに対する反発から構想された作品である。そのため、戦後民主主義の趨勢のなかで、学徒兵の反戦イメージのみが賞揚され、内的な苦悩が捨象されていく状況に飽き足らない思いを抱いていた人々に高く評価され、映画『空ゆかば』やテレビドラマ、ラジオドラマへとメディア展開が繰り広げられた。『雲の墓標』は、先行研究でも次のように評価されている。

この戦没学徒の日記（『雲の墓標』のこと……引用者注）を読めば、『きけわだつみの声』の編集の意図や思惑が、いかにも空疎なことか歴然としてくる、遺族や同級生ならずとも反感を覚えるのは当然だろう。もとより阿川弘之もその一人であったから、この青年とその仲間たちに共感し、万感の思いを込めて「雲の墓標」を執筆したのである。

戦後の戦争文学も、三十年以後の、阿川弘之「雲の墓標」、遠藤周作「海と毒薬」にいたってようやく戦争体験の内面化した深みのある作品が出現しはじめたように思う。敗戦直後の戦後派を中軸とした戦争文学は、戦争を外部の悪としてそこからの離脱をはか

る個人のエゴイズムを前面に押し出す傾向が、よく、戦争という条件のなかでの内的苦悩が完全に描かれているとは義理にもいえない。

このように『雲の墓標』は、『きけわだつみのこえ』の学徒兵イメージとの差異において語られ評価されてきた。だが一九五二年の『雲ながるる果てに』発表時や翌年の映画化に際して、学徒兵の日本主義的な傾向に対して特攻賛美を危惧する批判が生じている<sup>33</sup>。だが、こうした批判は四年後の『雲の墓標』発表時には見られない。つまり同じ枠組みにも関わらず、『雲ながるる果てに』は特攻賛美として批判され、『雲の墓標』は好意的に受け止められていたのである。

福間良明は両者の社会的な受容の違いについて、次のような分析を行っている。一九五二年の『雲ながるる果てに』刊行時には、一九五〇年からの朝鮮戦争や再軍備への不安から特攻体験を追悼することに対する社会的な反発が大きく、戦争賛美を危惧する「正」の声が多く挙げられていた。一方で、一九五六年の『雲の墓標』刊行時には、朝鮮戦争が終わり、冷戦に対する不安が払拭され、「特攻隊員の「真情」「殉国」の「美」に浸ることができるようにな」ったという分析である<sup>34</sup>。

たしかに社会的な受容として、こうした政治状況は多大な影響を与えていると考えられるが、『雲の墓標』を「特攻隊員の「真情」「殉国」」を表した小説とのみとらえることはできないだろう。安岡章太郎による、新潮文庫の次のような解説を参照しておきたい。

文学として受けとろうとする前に、あるどうしようもないものが僕を引きずって行ってしまう。思うまいとしても、あのころのこと（つまり僕一個人の狭い視野からながめた戦争の記憶）がよみがえってきて、それが圧倒的に強くのしかかったまま、うごかせないのである<sup>35</sup>。

阿川や安岡ら戦中派の人々にとって、『雲の墓標』は非常に「リアリティ」のある作品として戸惑いを感じさせるものであり、「美」に酔うことはできないものであった。それは、「この小説のモデルとなったと思われる青年の日記も非常に良質のものだ<sup>36</sup>」と言われるように、吉井巖という実在の人物の日記を下敷きに行っていることも一因だと考えられよう。『雲の墓標』には阿川自身の言葉によれば学徒兵という「作者のうしろの作者たち<sup>37</sup>」がいた。安岡による『雲の墓標』を文学として受けとることが困難だという評価も、安岡が阿川と同年に生まれ、同じ学徒兵としての記憶を共有していたことにある。

ここで注意しておきたいのは、政治情勢の変化とともに学徒兵イメージの社会的な受容

が変化しているときにおいても、その学徒兵イメージがよって立つところに、一貫して戦地での学徒兵の読書行為が描き出されており、『雲の墓標』においても数多くの読書が行われていることである。そして阿川自身も、戦地において数多くの読書経験を持つ人物であった<sup>11)</sup>。

そこで本章では、学徒兵の読書行為という観点から『雲の墓標』を分析し、その「リアリティ」とはどのようなものか考察を行っていく。

まず第一節、第二節では、『きけわだつみのこえ』『雲ながるる果てに』を中心とした学徒兵遺稿集における読書について量的、質的な分析を行うことで、初期の学徒兵遺稿集に掲載されている読書の傾向を析出していく。そのうえで、第三、四節では『雲の墓標』に描かれた日本主義的な傾向をもつ学徒兵の読書行為が、『雲ながるる果てに』における学徒兵の読書行為イメージと連続性を持ちつつも逸脱していることを明らかにしていく。つづいて第五節では、反戦的な学徒兵によつて『きけわだつみのこえ』や『雲ながるる果てに』とも異なる読書行為が行われていくことを指摘することとなる。こうして、同時代的な学徒兵遺稿集における読書行為から逸脱していく読書行為を描く『雲の墓標』の意味を、戦後の読書ブームのなかに位置づけていくこととしたい。

### 第一節 学徒兵遺稿集の読書統計―敗戦後から五〇年代まで―

本節と次節では、敗戦後に学徒兵による読書行為が、学徒兵遺稿集のなかで、どのように編集され、意味づけられたのか分析を行っていく。まずは、『ドイツ戦没学生の手紙』から『雲ながるる果てに』にいたるまでの学徒兵遺稿集において、読書がどのように扱われていたのか、量的な分析を行いたい。

扱う学徒兵遺稿集は、『雲の墓標』の発表前に刊行された四冊、高橋健二編『ドイツ戦没学生の手紙』（岩波書店、一九三八年）、『はるかなる山河に』（東京大学消費生活協同組合出版部、一九四七年）、『きけわだつみのこえ』（岩波書店、一九四九年）、飛行科予備学生一三期遺稿集『雲ながるる果てに』（日本出版協同株式会社、一九五二年）である。

『ドイツ戦没学生の手紙』は岩波新書の第一巻目として刊行された第一次世界大戦時のドイツ学生の遺書を収録したもので、戦後に学徒兵遺稿集をまとめる発端となったものである。また『はるかなる山河に』は帝国大学の学徒兵遺稿集であり、この好評を受け全国区での学徒兵遺稿集『きけわだつみのこえ』が制作されることとなった。その後、はじめに述べたように『きけわだつみのこえ』の反発として『雲ながるる果てに』（一九五二年）が刊行されている。

【図一】の表は四つの遺稿集に収録されている学徒兵数、収録された学徒兵のうち戦地



	収録学徒兵数(人)	読書言及学徒兵数(人)	読書言及数(箇所)	戦地の書物数(冊)
ドイツ戦没学生の手紙	60	4	12	6
はるかなる山河に	38	6	45	38
きけわだつみのこえ	75	14	65	45
雲ながるる果てに	62	10	26	12

【図一】学徒兵遺稿集の読書

で読書を行っていることが記されている人数、書物への言及数、戦場で読まれていたことが確認できる書物の数を表したものである。

この表からは遺稿集における学徒兵の読書に関して、いくつかの傾向を読み取ることができる。まず一点目は、『きけわだつみのこえ』の原型となった『ドイツ戦没学生の手記』には読書への言及が少ないという点である。二点目としては、『はるかなる山河に』『きけわだつみのこえ』『雲ながるる果てに』では、収録学徒兵のうち戦地での読書に言及している学徒兵の割合はおおよそ一五〜一八%（刊行順に一五%、一八・六%、一六・一%）であり、それほど差が認められないことがあげられる。つまり、戦中の『ドイツ戦没学生の手記』には戦場での読書への言及は少なかったが、戦後の学徒兵遺稿集になると数多く収録されていることがわかる。

次に、『きけわだつみのこえ』と『雲ながるる果てに』のふたつに絞って比較していきたい。実際に戦地にあると考えられる書物数や全体における読書に対する言及数は『きけわだつみのこえ』が六五箇所と高い数値を示しているのに対し、『雲ながるる果てに』は二六箇所とそれほど高いものではない。さらに『きけわだつみのこえ』と『雲ながるる果てに』においては、収録学徒兵数が七五人と六二人でそれほど差がないにも関わらず、戦場にあると考えられる書物数が四五冊と一二冊と三倍以上の差が生じている。このように、『きけわだつみのこえ』では、読書への言及が全体的に多く、『雲ながるる果てに』は『きけわだつみのこえ』ほどではない。

以上の点から考えられることをまとめておきたい。『ドイツ戦没学生の手紙』には、「戦時中ドイツ文学は塹壕の中で最も真剣に読まれた」という高橋健二による「まえがき」によって、実際には少ないにもかかわらず、学徒兵が読書を行っていたという内容が強く読み取られていた側面がある。ドイツでも序文によって遺稿集の内容の読み方を変更させることで、第二次世界大戦開始以降も刊行が継続されていたということからも、『ドイツ戦没学生の手記』の受容と実際の読書への言及数に差があることも肯げよう。

そして、高橋健二の「まえがき」に影響される形で、戦後の学徒兵遺稿集は戦場での読書をクローズアップすることとなった。その結果『きけわだつみのこえ』では、小田切秀雄が「学生らしく、書物へのほとんど生理的と言つていいような渴きがしばしば語られている」と「あとがき」で語っているように、読書の場面が重点的に採用されていたと言える。

つぎに、『きけわだつみのこえ』と『雲ながるる果てに』において読書への言及数に差が生じているのは、学徒兵一人あたりの読書への言及数の違いが考えられよう。『きけわだつみのこえ』には一人あたりの読書への言及数が多い学徒兵が数多く収録されているのに対し、『雲ながるる果てに』では平均して一人あたり一冊程度の読書への言及となっている。だがこうした調査だけでは読書傾向の違いを見出すことはできないため、次節では『きけわだつみのこえ』と『雲ながるる果てに』に絞って、その読書傾向を分類していくこととする。

## 第二節 遺稿集に記された読書―『きけわだつみのこえ』と『雲ながるる果てに』―

『きけわだつみのこえ』とその反発として刊行された『雲ながるる果てに』には、読書内容にも相違があるのだろうか。反戦としての学徒兵イメージと、日本主義的な傾向のなかで苦悩する学徒兵イメージは、そもそもどのような読書によって成立しているのか考察していきたい。

結論を先取りすれば、両者とも文化的書物を希求する学徒兵の姿が描かれ、その書物の教養的な役割が共有されている。だが『雲ながるる果てに』には、『きけわだつみのこえ』にはない日本主義的かつ大衆的な読書傾向がみられる。さらに『きけわだつみのこえ』は学生時代など過去と連続した読書行為であるが、『雲ながるる果てに』は過去の読書との違和感が表明され、戦争に勝つための考えが読書行為から導き出されていく。

まずは、両者に共通する戦場での文化的な読書を希求する様子を見ていきたい。

『きけわだつみのこえ』刊行の中心人物となった中村克郎の兄・徳郎は、『ドイツ戦没学生の手紙』を読み、戦時下に真摯に読書を行うことに対する憧憬や共感を次のように語っている<sup>130</sup>。

何回繰返して読むも良い。此処に居て読むと殊に感銘が深い。彼等は真摯だ。塹壕の中で蠟燭の灯の下で、バイブルを読み、ゲーテを読み、ヘルダーリンの詩を称し、ワグナーに想ひを寄せる彼等は幸福である。

ほかに『きけわだつみのこえ』には、「単なる書物、それもきわめて温和な、いわゆる文化的書籍に対する生理的欲求などは早くなくなってくれた方が、気持も楽になつてよい」（竹田喜義）というように、読めないがゆえに読書への思いを断ち切ろうとする言葉も記されている。同様に『雲ながるる果てに』でも「軍人生活中、軍務用の本ばかり読んでみると、情緒豊かな本が読みたくて仕方のないものである」（池尾俊夫）と、文化的な書物の希求が

語られていく。

ただし『きけわだつみのこえ』と『雲ながるる果てに』には、書物に対する考え方や感想に、共通性を持ちつつもいくつもの異なる傾向が見出せる。

『きけわだつみのこえ』に登場する書物や読書行為は、学術書や文学書を読み、自らの人格を反省的に振り返る教養的なものである。詳しくは章末の【図二】『きけわだつみのこえ』書物リストを参照してほしいが、『ゲーテ・シルレル往復書簡集』『文学と文化』『ころ』『関数論』など、学術書や教養書が多くみられる。またこれらの書物は、「岩波全書の広告ランを眺めて俺の魂の慰安とせねばならぬのであらうか」（中村勇）と言われるように、岩波文庫や全書が数多く含まれている。リストには吉川英治『宮本武蔵』も見られるが、これは書物を手でできる状況にあるにもかかわらず、読む必要のない書物として登場したものである。

たとえば「戦地で日本人がゲーテを読んで心の支えにした」と言われるゲーテ『若きウエルテルの悩み』はどのように読まれているのだろうか。中村徳郎は自殺するウエルテルに「鮮鋭な、潔癖な正義感」をみる。そして「近頃私は自己を伴っていることがないであろうか」と問い直し、「恐ろしいことだ。恐ろしいことだ。生かされているのではない。生きるのだ。飼われているのであってはならない」と戦争に迎合してしまうことを危惧している。ウエルテルに見出された純粹さは、戦争への抵抗的精神を鼓舞するものとして読み取られる。

このように『きけわだつみのこえ』にみられる読書行為は、その編集方針からも明らかのように、学生時代からつづく教養的な書物に彩られ、その読書行為は戦争への抵抗へと接続していく。

つぎに、『雲ながるる果てに』の読書の特徴から、『きけわだつみのこえ』との違いを明らかにしていきたい。【図三】（後掲）にて、『雲ながるる果てに』の書物リストを示しているが、『きけわだつみのこえ』に比べ、書物自体の名前は少ないことがわかるだろう。書物リストからは、さきに挙げたゲーテなどの教養書が僅かながらみられるが、『きけわだつみのこえ』にはなかった、坪田譲治「山国」のような大衆小説や「天翔ける学徒」という「海軍飛行予備学生を対象として取扱った」翼賛小説とおぼしき小説、「葉隠」への言及が記されている。さらに、『雲ながるる果てに』では、過去の学問からの隔絶が示されている。

情緒と知識の隔絶されたる学窓時代、学者（真に学者たりうるもの）は必ず己れが専攻する学問に対し情緒と云ふか、リズム、否、なんと云ふか、常にその専攻せる学問と生活、その学問のはく「イキ」を感じ、それと離れることの出来ぬ関係にある、俺が学生

時代、学校の教科書で、この本の呼吸を感じたことは一度もなかった。(池尾俊夫)

池尾にとっては戦場での読書の方が、学生時代の読書体験よりも生きたものとしてとらえられており、以前の読書との齟齬が語られる。

さらにこの池尾は、『きけわだつみのこえ』と同じく、ゲーテ『若きウエルテルの悩み』を読んでもいる。池尾は、ウエルテルに「本当に純な清い魂」と「純な、真に人間たり得るもの」をみている。しかし先の中村とは、純粋なものに対する社会へのまなざしが異なるために、「日本に、このエルテル(ウエルテル―引用者注)が少なれば少ないほど、戦にも弱くなる。官位も金銭も屈服せしむることの出来ぬこの清純な魂こそ、我等の矜持とせねばならぬものである」と、全く正反対な結論にいたるのである。

また林憲正はアンデルセンの童話集を読み、その平和で空想的な童話の世界に自分が王子様として生まれ変わることを夢想するが、その童謡の良い世界は未来の大日本帝国の姿としてとらえられてもいる。

このように『雲ながるる果てに』での読書は、教養的な側面を持ちつつも、過去の読書との齟齬が語られ、そして最終的には戦争へ参加していく契機となる読書となっているといえる。

『きけわだつみのこえ』ではまさに教養書による反戦的な読書行為が示され、一方で『雲ながるる果てに』では、日本主義的な傾向は読書の質の変化として示されている。日本主義的な傾向は、翼賛的な小説だけではなく、過去の読書との齟齬という形をとって提示されており、読書行為自体の否定という形では表れることはない。

戦場における読書行為は、隔絶された場所であるために、新しい書物であっても、戦場にいたるまでの書物の記憶が呼び覚まされる形で行われていく。書物を理解するために、過去の読書が参照されるのである。そうした意味において、戦場で読書を行うことは、これまでの読書の記憶を呼び覚ます行為でもある。『きけわだつみのこえ』と『雲ながるる果てに』における読書傾向の違いは、読書の記憶に対する接続／逸脱が反映されたものであると考えられよう。

### 第三節 吉野次郎と『雲ながるる果てに』の読書の共通点

本節以降は、これまでに検証してきた学徒兵遺稿集における読書イメージの地平において、『雲の墓標』がいかなる読書を描き出していたのかを明らかにしていく。

初期の学徒兵遺稿集が多数の手記の寄せ集めという形式によって、戦場での読書を断片的に提示するのみであったのに対し、『雲の墓標』の主人公吉野次郎の日記形式は、戦時下

の読書による精神の変遷を追い、戦場での読書行為の内実を補完するものとなる。本節では、まず吉野次郎の読書が『雲ながるる果てに』とほぼ同様の類型を持つことを指摘する。

まずは作品の構成を確認しておきたい。『雲の墓標』は吉野次郎の日記形式のなかに、友人の藤倉晶の手紙が三度挿入され、最後の場面にもう一人の友人である鹿島の手紙と詩が配される構成となっている。京都帝国大学に通う万葉集学徒として学生時代を過ごし、学徒召集された吉野、藤倉、坂井、鹿島のなかでも、とくに日本主義へと傾倒する吉野と反戦を唱えつづける藤倉という対立によって物語は進行していく。両者は対話を継続的に言い、互いにある一定の理解を示しつつも決裂する。そして、吉野は特攻に向かい、藤倉は脱走を計画しながらも訓練中に事故死することになる。こうした吉野と藤倉の対立構造は、前節までの学徒兵遺稿集の傾向に照らし合わせれば、日本主義へ傾倒していく吉野や坂井が『雲ながるる果てに』のような読書傾向を持ち、藤倉が反戦を訴える『きけわだつみのこえ』と同じ読書傾向を持つと、仮に位置づけることができよう。

こうした腑分けを検証するため、まずは『雲の墓標』における〈読書空間〉の検討を行う。吉野、藤倉、坂井、鹿島の四人が大竹海兵団へ海軍予備学生として入団した一九四三年一月二日から日記はつづられる。早くも二日後には、分隊長の精神講話の時間に「読書新聞」を読んでいた藤倉が咎められる場面が登場するが、単なる注意であり厳しい処罰が行われることはない。その後一月七日には、吉野が「土屋文明『万葉紀行』、萩原朔太郎全集、マツチ、メンソレータム、腹痛の薬」を手紙で両親に送るように頼んでいる。

このように吉野が所属した兵学校では、その後も一貫して読書を厳しく咎める場面が描かれることはない。僅かにNへの慰問品として届いた『週刊朝日』が取り上げられる描写があるものの、軍事機密が記される極秘図書の本の出し忘れが、唯一書物を介して罰される場面として描かれる。吉野が所属する海兵団は、書物が比較的許容された〈読書空間〉として設定されている。

つぎからは、吉野の読書内容を思想の変遷とともに確認していきたい。吉野次郎は、先の腑分けによるように、『雲ながるる果てに』と同様の日本主義的な傾向のなかで揺れ動く青年として描き出され、教養主義的な読書傾向を持ちながらも、過去の齟齬を見出す読書行為を行っている。

吉野には、土屋文明『万葉紀行』や萩原朔太郎全集を読もうとするなど、万葉習学徒としての自己を継続させていく読書傾向がみられる。七月三十一日の日記には、実家から斎藤茂吉の『寒雲』と岩波文庫のチェホフの短篇集を受けとり、茂吉のいくさの歌にいくつかの感銘を受けたことが描かれる。また外出中に訪れた深井家に古い郷土の文人の随筆や、蘆北郡誌、俗謡、民謡、伝説のたぐいが集められていることを知り、学術的興味から俗謡

などの記録を取ろうとしたことなど、学問を継続させようとする試みもうかがえる。このように、吉野には『きけわだつみのこえ』のような学生時代の読書行為を反復するような読書傾向がみられる。

こうした過去との接続が読書との関係の中で表される一方で、吉野の読書とその思想に日本主義的な変化が見られるのは、入営から三ヶ月目の三月二六日、外出時に町の古本屋に未刊国文学注釈大系の揃いを発見するも「縁の遠くなったもののような感じでただ見て過ぎる」という場面である。国文学徒としての吉野の勉学に不可欠な文化的書物から疎外された吉野の実感が述べられている。『きけわだつみのこえ』で学術的書物を古書店で購入する学徒兵像とは異なり、みずから書物を手入するということから吉野は遠ざかり、『雲ながるる果てに』の読書傾向へと近づいていく。

それを象徴する出来事が、吉野が操縦要員として決定した五月五日の日記に登場する。その日の夜、吉野は魂が遊離し大阪の自室の本棚の二段目の右はしから『勤皇詩集』を出し、乃木希典將軍親子を歌った「三典歌」を読んで戻ってくるといふ夢を見る。入団前に購入したその書を吉野は読まずに置いて来ていたのだが、若月という予備学生が『勤皇詩集』を持っていたため比べてみると、不思議なことに夢の中の記憶と一字一句同じであったという、迷信めいた夢日記の場面である。

学徒兵の読書行為が学生時代の読書行為の記憶を参照しつつ行われる行為である以上、学徒兵と書物との関係性において、自室に遺された蔵書は、学生時代の教養的な読書体験を司るこれまでの読書の蓄積として特別な意味を持っている。前節でも『きけわだつみのこえ』に登場する読書の描写において過去との連続性が重要視され、『雲ながるる果てに』では過去との齟齬が語られる傾向を持つことを指摘してきた。

だがここで問題となるのは、吉野の自室の書物の場面が、現実に想像されたものではなく、お告げのような夢として描かれていることである。この場面からは吉野が、すでに現実にある自室の書物を自分の意志で想像することができなくなっていることがわかる。つまり、吉野はすでに過去の読書体験の蓄積とは隔絶された世界にいたっており、夢のなかで自室の書物を想起するしかなく、さらにその書物は万葉習字としての書物ではなく、殉死した乃木希典を詠った『勤王詩集』となっている。そのために吉野はこの夢を分水嶺として、日本主義的な思想への接近を強くしていくのである。

その後も吉野の読書には、『雲ながるる果てに』と共通する点が描かれていく。夜の温習時に、本を読みたくなった吉野は、万葉集を読む気持ちにはなれず、次のように語る。

アンデルセンの童話か、チェホフの短篇か、ふっくらしたやさしい短い物語が読みたい。

ものを食っていて無我の境に入るといふことは、自分にはちよつと出来ないが、いい本を読んでいると、其のあいだはすべてを忘れて、不思議な安定した世界にさそいこまれる。家に葉書で二、三冊注文を出そうとおもう。

このように吉野は、読書行為によって平和な世界を夢想している。読書によって安定した平和な世界を夢想することは、アンデルセン童話集を読み、その平和な世界を未来の大日本帝国へとなぞらせる前節の『雲ながるる果てに』の学徒兵の感想に似かよつていよう。さらに、一〇月一三日には丹羽文雄の『海戦』のような時局的な作品を読み、「ながれるように自然にこころのうちに充実してくるものこそ、ほんとうの覚悟なのだ」とつづられ、戦争参加への覚悟を強めているのである。

このように本節では、吉野の読書行為が『雲ながるる果てに』における読書行為と共通点を持つていることを明らかにしてきた。吉野の読書行為には、教養書の読書や学生時代の学問とのつながりを持続させようとしつとも、過去の書物への接続が叶わなくなると、日本主義的な傾向を帯び始め、両者の間で揺れ動きながらも読書を継続させていくという特徴がある。次節では、こうした『雲ながるる果てに』と共通する吉野の読書行為が、そこから逸脱していく点について考察していく。

#### 第四節 吉野次郎の荒廃した読書

本節では、『雲ながるる果てに』と共通点を持っていた吉野の読書行為が、『きけわだつみのこえ』とも『雲ながるる果てに』とも異なる読書へと逸脱していく様子を考察していく。まずは、書物の入手方法から吉野の書物受容の特徴を明らかにし、特攻が近づくにつれて、読書行為自体が荒廃していくことを明らかにしていく。

前節での『雲ながるる果てに』と共通する吉野の読書行為には、その書物の入手方法に一つの特徴を指摘することができる。第一章において戦地で書物入手するための多様なルートを明らかにしてきたが、書物が許容される戦場という（読書空間）のなかで、吉野の日記には外出時の古本屋や慰問品としての雑誌、家族からの軍事郵便での書物送付や仲間内での交換など、いくつかの方法によって書物入手する様子が描き出されている。

吉野は古本屋での学術書の購入を躊躇する一方で、家族に対し書物の注文を行い軍事郵便等で受けとっているのだが、吉野自身が読みたいと欲した書物の感想がつづられることはない。一番はじめに注文をした土屋文明『万葉紀行』や萩原朔太郎全集は届いたという記述もなく、吉野が作中の日記で語るのは、お告げとして夢のなかに登場する『勤皇詩集』であり、「アンデルセンの童話か、チェホフの短篇か、ふつくらしたやさしい短い物語が読

みたい」と家に注文した結果届いた、注文とは異なる斎藤茂吉の歌集『寒雲』であり、入手先が明示されない、おそらくは宇佐海軍航空隊にて偶然手に入れた『海戦』についてである。

こうした入手経路からわかる吉野の読書行為は戦地で「読める書物」を手当たり次第読んでいくようにみえ、読みたいと「望んでいた書物」にたどり着くことはない。吉野の日記には、読書を契機として様々な思考の逡巡が吐露されているが、それは吉野自身が読みたいと欲し能動的に入手したのではなく、受動的に受けとった書物に啓発される形で描かれているのである。

吉野の受動的な読書行為は、宇野海軍航空隊へ移動し、特攻が間近に迫ってくることによって、さらなる変容を遂げていく。第一章にて論じたように、戦場での読書体験は、読みたいと思う書物の入手までの苦労や偶然性という要素が重視され、読書にいたるまでの経緯が、過剰に物語化されて兵士の日記につづられていく傾向があることを指摘してきた。こうした側面に照らし合わせてみると、吉野はみずからが欲しいという書物入手することとはなく、ただ届いた書物やそこにある書物を手にするだけである。そのために、吉野は戦場での書物との出会いを、重要なものとして意味づけ物語化してつづることはできず、さらには読みたいと「望んでいた書物」がわからなくなるという状態に陥っていく。作中では、九月末に吉野や藤倉が出水から大分の宇佐海軍航空隊へと移動し、士官からの徹底的な暴力に曝されるようになっていく。『海戦』を読み、特攻への「ほんとうの覚悟」を決めるのは、こうして宇佐へと移動した直後につづられた日記であった。そこから吉野の読書は、日本主義的な『雲ながるる果てに』とも異なる傾向を帯びていく。

飛行作業なし。うつらうつらと時が経つ。食って、気休めの自転車による編隊地上演習をやって、食って、小説本を読んで寝るだけの生活だ。(二月三〇日)

此のごろ物忘れの甚しいこと。根本的な記憶の喪失が来ているようだ。(略) 飛行作業がなくなっただけからというものは、本は実によく読むが、それも片っ端から忘れてしまう。ひとつには本当にいい本にぶつからないのだ。歌集は見ず、小説類が多い。しかし小説はよほど立派なものではないと、読んでもマイナスだ。(二月七日)

吉野と藤倉は艦上攻撃機乗りとしての訓練のために宇佐へと移動を行うが、海軍予備学生は、ガソリン量が逼迫し、割当燃料が減らされたことよって、飛行訓練が中止されてしまう。特攻の訓練もできず、急に生じた無為の時間に行われたのが、先に引用した怠惰で



退屈な読書行為である。

吉野は読んだ書物を記録することはなく、ただ小説を読んだとのみつづる。それは「根本的な記憶の喪失」が開始されているからであった。記憶を参照しながら読書行為が行われるならば、吉野の記憶の喪失は、戦場での読書が困難になっていくことを表している。吉野は既に過去の読書を参照することができず、もはや過去との読書の齟齬を感じることもない。

ここにおいて吉野の読書行為は、単なる空白の時間を埋めるための空疎なものとなり、そこには知的な探究も娯楽としての役割も果すことはない。かえって「読んでもマイナス」といいつつも、吉野は小説を読みつづけるだけになるのである。

最終的に、吉野は数少ない「いい本」であったと考えられる茂吉『寒雲』すらB29の爆撃によって失う。いい本がないと嘆きながらも、読むことを辞めることもできず、ただそれを記録する吉野の読書行為は、戦場での読書行為の荒廃した姿を映し出している。そしてこのような読書行為の荒廃のなか、吉野は特攻隊員として死地へと向かっていくこととなる。

## 第五節 藤倉晶の「反戦的」な読書

では、吉野と対立する人物として描き出されてきた藤倉は、どのような読書行為を行っているのだろうか。戦争への反発を吉野に対し隠すことなく表してきた藤倉は、戦後の学徒兵遺稿集の系譜に位置づければ『きけわだつみのこえ』の読書傾向に近づくと思われ。だが、藤倉の三通の手紙において、『きけわだつみのこえ』に顕著な教養主義的な書物の名前はひとつも見当たらない。むしろ藤倉の読書は、同時代の学徒兵遺稿集のなかに記されている読書のいずれとも類似点を持たないところに特徴がある。

まずは、藤倉が出した手紙を整理しておきたい。一通目の手紙は、一九四四年五月、土浦海軍航空隊から京都帝国大学のE先生宛に送られる。二通目は一九四四年一〇月五日、大分県宇佐海軍航空隊から長崎県川棚町臨時魚雷艇訓練所の友人鹿島芳彦宛、三通目は一九四五年一月二三日、大分県宇佐海軍航空隊から京都市北白川の先のE先生宛である。手紙の発送時期は、基本的には藤倉の駐屯地が移動する時にあたり、一通目は土浦から鹿児島への出水の練習航空隊への移動時、二通目は出水から大分の宇佐海軍航空隊への移動時である。三通目は一通目へのE先生の反応から、便りを出すことを取りやめていた藤倉が、KによってE先生の藤倉への思いを聞いたことをきっかけとして投函される。とくにこの三通目では、E先生に向って戦場から脱出するための、具体的な計画案を知らせる重要な手紙となっている。

藤倉は終始一貫して、戦争への反発心を露わにしている。だがその行動のはしばしには直情的な反抗とは異なる要素が見られる。たとえば「葉隠」の四誓願は「一、餓鬼道に於ておくれ取り申すまじき事」「二、自分の御用に立つべきこと」「三、親に孝行仕るは死なざる事とみつけたり」などのように茶化して言い変えられていく。このように藤倉の反戦的な態度は、戦後民主化のなかで反戦的態度としてとらえられてきた学徒兵による真摯な読書行為イメージとは異なり、みずからの反戦的な態度自体を客観視するようなものとなっている。藤倉の持つこうした傾向を、読書の方面から見ていきたい。一通目の手紙の中で、藤倉はこれまでの書物環境との隔絶、違和感を露わにしている。

私はいま、ここで、まったくの孤独をあげわって暮らしております。(略)それは、寒夜、百万遍の下宿の二階の四畳半で、ひとり書物をひらいて、自分の仕事がひろい世界につながっているというほこりを持ちながら、火鉢に手をかざして勉強していたときのひとりぼっちとは、まったく性質のちがったひとりぼっちでございます。

入営後、早々に藤倉は学生時代の書物との連続性が断ち切られたことを感じている。それは万葉集の勉強をつづけようとする吉野とも異なる。鹿島宛の手紙には、「このはげしいながれのなかに立って、世界のうごきを政治的に経済的に冷静にみつめるためには、万葉学はあまり都合のいい学問ではなかった。(一〇月五日)」ことが記され、学術的興味から俗謡などの記録を取ろうとする吉野や坂井に対して、「そんな感傷的なつまらない自慰行為はよせ(七月八日)」と、勉強とのつながりを自ら絶つていくのである。

藤倉のこうした学生時代の読書との隔絶は、教養的で学術的な書物を求めていった『きけわだつみのこえ』が示した反戦的な学徒兵による読書行為のイメージとは大きく隔たっていると言える。

そして、最後の手紙において藤倉はE先生へと、特攻隊へ志願させられたことを告げ、同時に「自分だけの非常の手段を考えて」いることを知らせる。それは、戦地からどうかして生還するための方法であった。藤倉はまず事故をおこして、ふたたび飛行機に乗れない程度に負傷してしまうことを考える。だが、死の確率が高いことから断念され、そして次のような手段が提示される。

土浦航空隊であえて操縦を志願したときから、漠然と頭にあったことを私は具体化し、特攻出撃のさい、途中の島に不時着してしまうことを考えているのです。今後われわれが出撃するときは、琉球列島から台湾方面に向って飛ぶ場合がいちばん多い筈で、御存

じのようにその途中には手頃な―というのは、住民も少く守備隊も僅かで、内地との連絡もなかなかつかないという風な島がたくさんございます。また場合によっては、いっそ無人島でもかまわないとおもって、私は琉球列島の地誌と、ロビンソン・クルーソーのような漂流記をあつめて、役に立ちそうな部分を熟読したりしております。

藤倉による生還計画のなかで読まれた書物は、「琉球列島の地誌と、ロビンソン・クルーソーのような漂流記」であった。書物は通読するものではなくっており、物語として享受されることはない。藤倉にとって書物は、ただ生還のために「役に立ちそうな」断片のみが熟読されるものとなっている。

本節で確認してきた藤倉による読書行為には、学術的なものも、教養主義を体现するものも含まれてはならず、むしろ読書行為自体が生還するためには、必要ないものとして描かれていく。そして書物が読まれたとしても、その断片のみが読まれ、通読して物語として読まれることはない。こうした藤倉の読書行為は、戦後の学徒兵遺稿集のなかで、学生であることに拘泥し考え抜く学徒兵の読書行為の姿が、戦争に対する反戦的態度としてとらえられてきたことへのアイロニーとしてとらえられるだろう。

## おわりに

本章では『雲の墓標』において、吉野の読書行為が特攻へと突き進むなかで決意のきっかけとなる行為として描かれ、最終的にそうした読書の持つ意味自体さえ失われてしまう荒涼とした読書行為が描かれていることを明らかにしてきた。また、反戦的な学徒兵である藤倉によって示されたのは、生き残るために読書行為自体が不要とされ、断片的に読まれるという読書行為であった。このように、『雲の墓標』は、『きけわだつみのこえ』や『雲ながるる果てに』のような学徒兵遺稿集からとらえられる読書行為とは、異なる読書のありかたを描き出していたと言えることができる。

第五章において、戦時下において戦場での学徒兵の読書行為が血を流さない武器としての意味をはらんでいたことを明らかにし、その他にも戦場での読書が、軍隊教育的な役割や娯楽としての読書など、多様な読書が行われる可能性があったことを示唆してきた。だが、戦後は読書ブームのなかでそうした戦場での読書行為が、反戦的態度として一面的にとらえられていく過程となっている。

読書ブームのなか読書する大衆の姿は、戦場で生死の境目にあって文化的な書物を希求する兵士の姿と重なり合う。戦場での読書行為は、戦後の大衆的な読者の映し鏡であり、学徒兵の読書行為が反戦的態度として一面化されていく理由も、敗戦によって平和のため

にどのように生きていくべきなのかという問いに導かれた大衆の読書行為を映し出したものだととらえることができるだろう。

『雲の墓標』はこうした読書ブームのなかで、戦時下に行われていた戦場での読書行為の多様な側面を描き出すことで、反戦的態度としての戦場での読書行為イメージに対するアイロニーとして機能しており、それが安岡の述べる「リアリティ」を担保していると考えられる。阿川は『雲の墓標』の執筆動機を、戦後民主化運動のなかで学徒兵が理想化されていくことに対する反発として語っているが、これまでそれは吉野次郎の造形として理解されてきた。だがこうした読書ブームという時代背景のなかで、『雲の墓標』に描かれた読書行為は、戦中に行われた学徒兵の読書行為が反戦的態度としてのみ一面化されていく状況に対する反発としてもとらえることができるのである。

学徒兵名	書籍名	著者名	執筆年月日	ページ(初版)
石神高明	「社会政策原理」	河合栄治郎	昭和13年10月7日	4
石神高明	「防共と我が宗教」	—	昭和13年10月7日	4
石神高明	「幼年時代」	ゴオリキ一	昭和13年12月30日	5
吉村友男	「クオオチエ」	羽仁五郎	—	5
大井栄光	支那語の聖書	—	—	13
上村元太	「ラフウスト」	ゲーテ	昭和18年7月5日	51
渡辺辰夫	「軍事典範令」	—	—	54
渡邊辰夫	「砲兵操典」	—	—	56
浅原有一	「虐げられた人々」	ドストエフスキ一	昭和17年10月13日	74
筒井厚	「旅愁」第二篇	(横光利一)	—	80
筒井厚	「母は叫び泣く」	(H.G.カプラーイユル)	—	80
大島欣二	「祖国愛と科学愛」	緒方富雄	昭和17年9月6日	82
大島欣二	「宮本武蔵」	吉川英治	昭和17年9月6日	82
大島欣二	「医学と生物学」	(医学生物学速報会編)	昭和17年9月6日	83
岡本馨	「宣言」	(有島武郎)	—	87
岡本馨	「楳娘」	(デュマ)	—	87
武井修	「自由を吾等に」	ルネ・ヴレール	—	97
佐々木八郎	「資本論」第二巻	カール・マルクス	昭和18年2月9日	119
佐々木八郎	「列強現勢史ロシヤ」	(大類伸)	昭和18年2月9日	119
佐々木八郎	「鳥の北斗七星」	宮沢賢治	昭和18年11月10日	123
松岡欣平	「理性と自然」	モリス・コーエン	昭和19年8月27日	130
中村徳郎	「詩と友情」	稲垣浩監督	昭和19年8月27日	132
中村徳郎	「巷塵抄」	(片山敏彦)	昭和18年3月14日	151
中村徳郎	「思索と体験」	(安倍能成)	昭和18年5月9日	153
中村徳郎	「文芸時評」	(西田幾多郎)	昭和18年5月9日	153
中村徳郎	「方法序説」	吹田順助	昭和18年5月9日	153
中村徳郎	「福田兄の追悼録」	—	昭和18年6月20日	157
中村徳郎	「複素関数論」	—	昭和18年8月5日	157
中村徳郎	「仙蘭西語四週間」	(徳尾俊彦)	昭和18年8月5日	157
中村徳郎	「白桃」	(斎藤茂吉)	昭和18年9月12日	158
中村徳郎	「高山(出)国吟行」	(斎藤茂吉)	昭和18年9月12日	158
中村徳郎	「確率論」	朱綱恕一	昭和18年9月20日	158
中村徳郎	「ドイツ戦没学生の手紙」	(高橋健二)	昭和18年2月14日	160
中村徳郎	「バイブル」	—	昭和18年2月14日	160
中村徳郎	「文化地理学」	(辻村太郎)	昭和18年2月18日	161
中村徳郎	「ペーター・カマツツェント」	(ハルソン・ハッセ)	昭和18年3月1日	162
中村徳郎	「ジヤン・クリストフ」	(ロマン・ロラン)	昭和18年3月1日	162
中村徳郎	「アルト・バイデルベルク」	(ライネーフェルスター)	昭和18年5月12日	166
中村徳郎	「若いヴァリエラルの悩み」	(ゲーテ)	昭和18年5月13日	166
中村徳郎	「ゲーテ、シラルレル往復書簡集」	菊地栄一訳	—	172
中村徳郎	「文学と文化」	高橋健二	—	173
中村徳郎	「形成的自覚」	木村素衛	—	173
中村徳郎	「最新世界史年表」	—	—	173
長谷川信	「バイブル」	—	昭和19年4月26日	184
長谷川信	(網島梁川集)	(網島梁川)	昭和19年5月23日	185
長谷川信	「基督教の本質」	ハルナツツ	昭和19年5月23日	185
竹田喜義	「敦異抄」	—	昭和19年2月6日	191
竹田喜義	「葉隠」	(和辻哲郎・古川哲史)	昭和19年7月21日	196
和田稔	「こころ」	夏目漱石	昭和20年2月1日	246
和田稔	「人生劇場」	尾崎士郎	昭和20年2月1日	246
和田稔	「転落の詩集」	石川達三	昭和20年4月18日	249
和田稔	「人生劇場」	尾崎士郎	昭和20年6月20日	252
綱干陽平	「若き日の手紙」	フレイツァ	昭和20年5月8日	254
住吉胡之吉	『夜明け前』第二部	(島崎藤村)	昭和20年5月16日	273
住吉胡之吉	『ドイツ戦没学生の手紙』	(高橋健二)	昭和20年5月17日	274
住吉胡之吉	『夜明け前』	(島崎藤村)	昭和20年5月17日	274
住吉胡之吉	『雲と草原』	(尾崎喜八)	昭和20年5月17日	274
木村久夫	『哲学通論』	田邊元	昭和21年4月22日	282
木村久夫	『天分と愛情の問題』	塩尻公明	昭和21年4月22日	299

【図二】『きけわたつみのこえ』書物リスト

学徒兵名	書籍名	著者名	執筆年月日	ページ
緒方徹	詩集「轉輪羅針儀」	—	昭和17年10月15日	15
緒方徹	詩集「千島より」より	—	昭和19年6月	19
林憲正	「天翔る学徒」	—	昭和19年7月22日	36
林憲正	アンデルセン童話集	アンデルセン	昭和20年5月27日	40
林憲正	アンデルセン童話集	アンデルセン	昭和20年7月31日	41
古川正崇	必死の詩	高村光太郎	昭和20年4月か5月	59
宅島徳光	唐詩選	—	昭和20年4月27日	77
宅島徳光	「牝虎」	H・バイコフ	昭和20年7月18日	87
池尾俊夫	「若いエルテルの悲しみ」	ゲーテ	昭和19年5月以降	107
若麻績隆	「智恵子抄」	高村光太郎	昭和20年	120
眞鍋信次郎	「燕の詩」	白楽天	昭和20年	151
古橋雅夫	「山国」	坪田譲治	昭和20年	176
千原達郎	「軌道を巡る星」	デーンズ	昭和20年2月21日	215
千原達郎	南州遺訓	—	昭和20年3月2日	216
千原達郎	葉隠	—	昭和20年4月2日	218
千原達郎	葉隠	—	昭和20年4月3日	219
千原達郎	葉隠	—	昭和20年4月5日	221
本川壤治	聖書	—	昭和20年4月7日	240

【図三】「雲ながるる果てに」の書物リスト

「杉曉夫「発刊の言葉」白鷗遺族会編『雲ながるる果てに』（日本出版協同、一九五二年六月）

「阿川弘之「真相箱」に反発」『読売新聞』（一九六三年九月一七日、夕刊）『私のなかの海軍予備学生』（昭和出版、一九七一年二月）を参照。

「都築久義「阿川弘之論 戦争体験と戦争文学」『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科編 第二六号』（愛知淑徳大学文学部、二〇〇一年）

「大久保典夫「戦後の戦争文学 「日の果て」から「雲の墓標」へ」『国文学 解釈と教材の研究 一〇（一三）』（學燈社、一九六五年一月）

「I・T「今週のダイジェスト 『雲ながるる果てに』」『図書新聞』（図書新聞社、一九五二年六月二三日）

「福岡良明「第一章 「正」と「美」の二項対立」『殉国と反逆「特攻」の語りの戦後史』（青弓社、二〇〇七年七月）

「安岡章太郎「解説」『雲の墓標』（新潮社、一九五八年七月）

<sup>8</sup> 「特攻隊員の心理と行動をつつましく追う 阿川弘之著『雲の墓標』『朝日新聞』(朝日新聞社、一九五六年五月一三日、朝刊八面)

<sup>9</sup> 阿川は、一般兵科予備学生二期として、一九四二年九月三〇日に海軍佐世保海兵団へと入隊している。一九五四年、京都大学国文科で万葉集の研究を行っていた吉井巖の日記(大学ノート四、五冊分)が、吉井から大浜巖比古へ託され、最終的に阿川へと届けられた。大浜が阿川の旧制広島高等学校時代の文芸部仲間であった縁からのものである。また、その他に予備学生であった清水淳(一九七七年没)や加藤光彦(一九八二年没)へも調査が行われているほか、『雲の墓標』最後の展墓の詩は、大浜が水上特攻で死んだ旧友を悼んで作歌したものである。画文集『雲の墓標』の別冊「刻」には、実際のノートの表紙が掲載されている。『画文集雲の墓標 別冊 刻』(アート・プロデュース、一九八四年四月)間瀬侃司「雲の墓標」とあの仲間たち』『画文集雲の墓標 別冊 刻』(アート・プロデュース、一九八四年四月)

<sup>10</sup> 阿川弘之「作者のうしろの作者たち」『画文集 雲の墓標』(アート・プロデュース、一九八四年四月)

<sup>11</sup> 阿川弘之は「戦地で読んだ岩波文庫」『凶書 四三』(岩波書店、一九五三年)のなかで、読書経験を語っている。一部のみ紹介する。

「読みたいものを選ぶといふ程の贅沢は出来ないが、仲間の持つてゐる何冊かを、自分の持つてゐる何冊かと交換して、手あたり次第に読むのである。内容自体の面白さもさる事ながら、教官の眼と限られた時間とを盗んで、かくれて読む楽しさが中々に強かった。オー・ヘンリーの短篇集とか、クライストの「壊れ甕」とか、一寸記憶が不確かだが、ドストエフスキの「カラマーゾフの兄弟」なども其の頃読んだかも知れない。(略)何しろ「葉隠」と「歎異抄」と「万葉集」と、これだけは自分で持つてゐたのは確かである。当時軍隊へ入る時、「葉隠」三巻を携えて行くのは一種の流行であった。時々身の廻り品の検査がある。「葉隠」や「明治天皇御集」は、そんな時、一種の証明書のやうな役割を演じてくれた。あまり愛読はしなかったから、いつも綺麗であった。」

<sup>12</sup> 高田里恵子「編集と誤読 戦没学徒兵の手記をめぐって」『桃山学院大学人間科学(三三)』(桃山学院大学、二〇〇七年六月)

<sup>13</sup> 『はるかなる山河に』でも『ドイツ戦没学生の手紙』を読み、「再読し感銘非常なり。理想と現実とのギャップ。苦しみつつ若き生命を散らし行く人々」(住吉胡之吉)といった感想が記されている。

<sup>14</sup> 『寒雲』は阿川自身が戦地で読んだ岩波文庫として挙げているものでもある。阿川弘之

「戦地で読んだ岩波文庫」『図書 四三』（岩波書店、一九五三年）

\*阿川弘之『雲の墓標』の引用はすべて『阿川弘之全集 第二卷』（新潮社、二〇〇五年九月）による。



## 終章 本研究の成果と課題

本研究では、第三部にわたって、将兵（とくに学徒兵）という読者を設定することによって、アジア・太平洋戦争を中心とした戦場という〈読書空間〉のありようを明らかにすることを目指してきた。戦場という〈読書空間〉における書物の流通状況や兵士へ向けて制作された慰問雑誌や書籍の調査・分析から、戦場での読書行為の多様なあり方を示し、またなぜ戦場での読書行為のイメージが一面的にとらえられてきたのか、戦後の読書ブームとの関連から考察を行ってきた。こうした考察から、戦中戦後における読書の歴史的な変容をとらえ直すこととなった。

戦場という未知の場所での読書行為は、戦場にいる将校や兵士に限定された、内地の人々が知ることのできない行為である。だが、慰問として戦地へ書物を送る試みによって、銃後の人々は、戦場という〈読書空間〉を認識し、間接的ではあるが、戦地での読書を共有していた。こうした戦場での読書行為が広まることによって、読書行為に対する飢餓感や欲求が生み出されていき、戦後の静かに長くつづく読書ブームへと接続していったのである。とくに戦後すぐの読書ブームを牽引した要因となったのが、学徒兵遺稿集等によって作り出された学徒兵による戦場での読書行為の反戦的なイメージであり、文学はそうしたイメージの形成とも関わっていたのである。

戦場における学徒兵という読者を、まずは実証的に明らかにし、その読者たちによる読書行為自体が、戦後に一つのイメージとして受容されていく過程を問い直していくことによって、戦中戦後の連続性のなかで読書行為の変遷をとらえていくこと。本研究でのねらいのひとつは、このような枠組みとして将兵という新たな読者を設定し、読書・読者研究の分野において、戦中戦後を連続性のなかで分析する視点を提示することであった。

第一部では、まず戦場が〈読書空間〉としてどのように成立し、どのような書物が読まれていたのか、そして戦場という〈読書空間〉がいかなる構造を持っていたのかについて考察を行った。将校や兵士が、戦場で読書を行うことを可能とした文化背景について明らかにした部分となる。

第一章では、まず戦場への書物の流通経路と戦場での書物の入手状況を明らかにした。読書が行われるためには、その書物が読者に届くルートが確立されていることが不可欠である。書物の流通に関しては、取次を通じた通常の配給ルートだけではなく、そこから逸脱した個別の入手方法についても考えていく必要がある。そこでは、一一通りの戦場での書物の入手経路を明らかにすることとなった。そして、入手経路の違いは、将兵の書物のとらえ方と深く関わっていることを指摘してきた。

戦地での書物の入手方法のなかでも重要なものとして、慰問用書物の戦地での流通があげられよう。そこで、内地において慰問用に書物を送る試みが定着し、実際に戦場で読まれるための書物として、慰問用の書籍や雑誌が制作されていく様子を明らかにしたのが第二章となっている。つづく第三章では、慰問雑誌の兵士による受容の一例として、陸軍によって発行された兵士向け雑誌『兵隊』を取り上げた。こうした分析からは、兵士の教育のために戦場での読書行為が推奨され、それにより慰問雑誌が強制的ではないかたちで、兵士、とくに高度なリテラシーを持つ兵士の意識を、戦争へと緩やかに動員していくメディアとして機能していたことを明らかにすることとなった。

また慰問用として書物を送ったり、戦場で書物を読んだりすることを推奨する試みは、第一次世界大戦期における、アメリカやイギリスをはじめとした諸外国の兵士への書物供給を参照した取組みでもある。とくに第二次世界大戦においても、戦地で書物を読むという行為や書物を移動させるという行動は、兵士のために行われる個人的な行動ではなく、ヒトラーによる焚書に対抗した国際的な情報戦争の一端を担うものであった。日本における兵士への書物の慰問活動や、読書の推奨という行為も、こうした国際的な政治的闘争と連動した活動であったととらえることができよう。

では、こうした戦場での〈読書行為〉を支える読者とは、どのような特徴をもつ存在であったのか、その受容能力や読書環境を明らかにしたのが第二章にあたる。第四章・第五章では、国内における出版統制による出版流通の変化と推薦図書制度という〈緩やかな統制〉によって、戦場と読書行為が結びついていったことを明らかにした。

戦時下の言論統制は、執筆者や出版社に対する検閲が注目されてきたが、そうした統制だけではなく、出版流通や読書行為に対する統制もまた、一種の統制として機能していく。そうした統制の仕組みは、強制的ではなく、ある程度の自由を保障するかたちでおこなわれ、学徒兵という読者による戦場での読書行為と結びついていたのである。

こうして明らかにしてきた出版統制下の読書行為の変容について、ひとりの学徒兵の実際の読書体験から、検証を行っていったのが第六章にあたる。そこからは、地方にいることによる書物流通の不均衡の問題など、所属する読者層の時代的な枠組みは共有しつつも、場所の特性によって読書傾向が微妙に異なっていく、そうした状況を明らかにすることとなった。

第一部や第二部においては、戦場という〈読書空間〉を形作る書物や書物の流通、そして将兵という読者について明らかにしてきたが、つづく第三部では、「学徒兵という読者」自体が、ひとまとまりのイメージとして受容されていく背景について考察を行った部分となる。

戦場という〈読書空間〉を明らかにするなかで、軍隊教育のための読書や兵隊作家となるための読書、血を流さない武器としての戦争協力的な読書など、戦場での読書行為のいくつかの役割をとらえることとなった。だが戦後には戦場が読書の禁じられた空間として変容し、戦場での学徒兵の読書行為のイメージが、反戦的態度として一面的にとらえられてきた。そうしたきっかけとなったのが、第七章にて取り上げた遺稿集の〈編集〉という問題であろう。太宰治「散華」は、戦時下の遺稿集を編むという文化の変容を描き出したものとなっていたが、それは戦後の学徒兵遺稿集の〈編集〉の問題を照射するものとなっていた。学徒兵による読書というイメージは、『きけわだつみのこえ』を始めとする遺稿集による物語化によって生成されてきたものであり、「散華」はイメージの〈編集〉のあり方自体を可視化させ、遺稿集を〈編集〉するということの問題性を問いつづけるテキストとなっている。

学徒兵遺稿集の〈編集〉によって、学徒兵による反戦のための読書行為というイメージが形成されていく。そうした反戦を示すためのパフォーマンスとしての戦場での読書行為イメージを利用することで成立していたのが、第八章にて論じた戦後の堀辰雄ブームであった。とくにこの堀辰雄ブームは、その反戦的態度としての読書イメージに、文学者たちが同一化することによって、みずからも戦時下に反戦的な態度をとっていたことを示し、「文学」という制度を保證する働きをしてきたことを明らかにすることとなった。

ただし、文学作品のなかには、反戦的な態度として一元化された学徒兵の読書行為イメージから、逸脱していく読書イメージを描き出すことに成功したものもあった。第九章にて取り上げた阿川弘之『雲の墓標』は、逸脱した戦場での読書行為を描き出すことによって、学徒兵の読書行為を反戦的態度としてとらえる戦後のイメージに対するアイロニーとなっていたのである。

本研究のもうひとつのねらいとして、将兵という読者を足がかりとすることで、歴史的・空間的に変容していく読書行為のありかたを視座とした、文学研究の方法を模索することがある。読者に読まれるものとしての文学作品が、特定の読者層による読書行為それ自体をパフォーマンスとしてどのように受容されていたのかを明らかにするために、第三部では具体的に作家や文学作品との関わりから、学徒兵という読者をとらえていく試みを行った。

戦場という場所は、閉ざされた空間であり、読書に適さない場所と考えられてきた。確かに、読書が困難な場所や兵士がいたことは間違いない。だが、実際には戦地へと書物が送り届けられ、そこで読んだという声が銃後へと伝わっている。戦場で行われる読書には、戦争に協力する意識を養うための役割であったり、兵士の教育のためであったり、また対

戦国へと兵士の強さを示す宣伝の役割など、いくつかの役割があった。ただし、戦場での読書の記憶は、戦後の読書ブームにおいて、「読書」の枠組みが平和のために行われるものとして変容することによって失われてしまった。こうした平和のための読書を形作ってきたのが、人格を成長させるために行われる教養的な読書行為であり、また遺稿の〈編集〉であり、そして「文学」という制度を保証しようとする文学者たちの働きでもあった。

だが本研究では、戦場という〈読書空間〉を学徒兵という読者を中心に考察したものであり、その他の将兵の読書行為については、その可能性を指摘するにとどまっている。そのため、異なる読者階層が兵士として一同に介する場所という戦場という〈読書空間〉において、学徒兵の読書行為がどのように位置づけられるのかまで考察が及ばず、学徒兵による読書行為の特異性が強調されてみえる。注意しなければならぬことは、戦後学徒兵の読書行為が反戦的態度としてとらえられていく背景を明らかにする研究を進めることによつて、かえつて学徒兵のみが戦場で多様な読書行為を行っていたかのような、新たな典型を生み出してしまう可能性である。今後の研究において、明らかにしていかなければいけないのは、本研究にて明らかにしてきた学徒兵の読書行為を、その他の兵士や将校などの読書行為との関連のなかで描き出していくことであろう。

そのためには、まず学徒兵という読者のなかの差異にも目を向ける必要がある。本研究にてその示唆の一つとなったのが、第六章で論じた木村久夫の存在である。実際に高知大学に行き、木村久夫や木村文庫に関わる様々な人々を辿りながら、木村が行った読書の足跡を明らかにしていく行為は、研究の手法において強く印象に残るものとなった。読者・読書研究は、読者をまとまりとしてとらえ、その社会的な意義や出版文化との関わりを考察するものである。こうした学問的枠組みのなかで、個人の読書の歴史を木村文庫という蔵書として実際に目にするには、そこから逸脱していく個人的な読書体験の数々を自覚するきっかけともなった。読者研究においては、ある程度まで個人の読書行為を、読者層の共通性を抽出するためのものとして扱う必要がある。だがその逸脱をただ捨象するのではなく、その逸脱がなぜ生じているのかその構造も考え、意味づけていくことも重要な課題となろう。

そうした点で、本研究で扱った木村久夫以外の学徒兵の読書行為については、公刊された日記資料から論じたものであるという資料的な限界がある。現在、女性の日記から学会などの日記研究会に参加をおこない、個々の学徒兵や兵士の公刊されていない日記資料の調査を進めている。こうした日記資料を読者研究のなかで、どのように使用していくべきなのかも含め、今後検討していくこととしたい。

そして、将兵の読書を考えていくうえで、教科書を読むということや講談や詩歌といっ

た娯楽的な読物など、よりその内容を細分化して考えていく必要もある。たとえば、大西巨人による大著『神聖喜劇』において描かれた兵士の読書行為は、軍隊教育としての読書について考える端緒となる作品であろう。『神聖喜劇』には多種多様な書物名が刻まれている。そのなかで注目しておきたいのは、兵士が『軍隊内務書』や『砲兵操典』などの軍用図書を読み、暗記していく様子が描かれていることである。東堂太郎は、こうした兵士の教育のための操典類を驚異的な記憶力で隅々まで暗記することで、軍隊の論理を内破していく読者となっている。そしてそこには、教育者として読書を行う将校の姿も見えてくる。

また、林泉「戦地の読書」（『書物展望』一九三九年一月）のなかでは、「兵隊の読んでゐる本、そして読みたがつてゐるのは「キング」、「現代」、「日の出」、「講談倶楽部」をはじめ所謂娯楽雑誌の類」であり、「インテリ特務兵たちも、やはり通俗雑誌に喰ひつきたがる」と戦地の娯楽的な書物の読書状況が伝えられてもいる。

こうした戦場での兵士や将校による読書行為を明らかにしていくためには、第二章にてその一端を示してきた『陣中倶楽部』や『戦線文庫』に掲載された作品の分析や、「銃後の」と名付けられた慰問雑誌シリーズなどの戦時下の慰問用書物の収集を継続していかなくてはならない。そして、将兵による戦場での読書についてより広く考察を行つたうえで、再度改めて、戦後において戦場での読書がどのように描かれ、そして語られてきたのかという問題に立ち返らなくてはいけないだろう。

残されている問題は多々あるが、今後は学徒兵だけではなく、将兵という読者へと枠組みを広げ、戦中から戦後にかけての「読書」の枠組みを再考していくことを、今後の課題としていきたい。

## 初出一覧

序章 書き下ろし

第一章 書き下ろし

第二章 「慰問雑誌にみる戦場の読書空間―『陣中倶楽部』と『兵隊』を中心に」『出版研究 四五』（日本出版学会、二〇一四年）↓加筆修正

第三章 「緩やかな動員のためのメディア―陸軍発行慰問雑誌『兵隊』をめぐる」『教育学研究紀要別冊二四号―』（早稲田大学教育学研究科、二〇一六年）↓加筆修正

第四章 「柔らかな統制」としての推薦図書制度―文部省及び日本出版文化協会における読書統制をめぐる」『Intelligence (15)』（早稲田大学20世紀メディア研究所インテリジエンス編集委員会、二〇一五年三月）↓加筆修正

第五章 「戦時下学生の読書行為―戦場と読書が結びつくとき」『日本文学六（一一）』（日本文学協会、二〇一二年一月）、「学徒兵への読書推薦―「戦陣に如何なる書を携行すべきか」『三田新聞』アンケート一覧」『リテラシー史研究 六』（リテラシー史研究会、二〇一三年）↓一本化し加筆修正

第六章 「戦時下学生の読書法―木村久夫を例として 付・高知大学所蔵「木村文庫」総目録、及び解題」『リテラシー史研究 七』（リテラシー史研究会、二〇一四年）↓加筆修正

第七章 書き下ろし

第八章 「堀辰雄ブームの検証―学徒兵の読書行為と愛読者批判の構造」『日本文学 六二（一一）』（日本文学協会、二〇一三年一月）↓加筆修正

第九章 書き下ろし

終章 書き下ろし

## 謝辞

本研究に関して終始ご指導ご鞭撻を頂きました和田敦彦教授に心より感謝致します。アメリカ、ヨーロッパ、アジアへと移動し、研究を進める姿は、本研究の枠組みを構想するきっかけとなりました。またなによりもその姿からは、研究を行うこと、それ自体の楽しさと厳しさを教えていただきました。博士課程の五年間は、終始私自身の至らなさを実感するものでもありましたが、今後の糧となるものと思います。

また、千葉俊二教授には、学部生時代から多大なご指導をいただき、文学研究に興味をいだくきっかけを与えてくださいました。石原千秋教授には、研究に対し、時には厳しく、そして温かいコメントをいただきました。そして金井景子教授には、修士時代にゼミに参加させていただき、雑誌研究の面白さを実感するきっかけを与えてくださいました。そして、日本大学文学部紅野謙介教授には、日本学術振興会特別研究員として受け入れていただき、広くご指導いただきました。ここに記することで、感謝申し上げます。

そのほか、教育学研究科国語教育専攻の方々には、終始温かく見守りいただき、ご指導いただきました。そして、修士課程、博士課程での研究室で研究に対し、さまざまなコメントをくださった先輩、後輩には深く感謝いたします。

本研究は多くの資料を整理、保管する人々の活動に支えられたものであります。講談社、横浜市立大学学術情報センター、高知大学総合情報センターの関係者の方々、吉岡義一氏、今戸道子氏には大変お世話になりました。この研究がそうした資料保存の労に幾分か報いることができれば幸いです。

本研究は、日本学術振興会特別研究員(DC2)、日本学術振興会特別研究員(PD)の特別研究員科学奨励費の補助によるものである。